
IS <インフィニット・ストラトス>を改変して別の物語を作ってみた。【第一部】

渉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS <インフィニット・ストラトス>を改変して別の物語を作ってみた。【第一部】

【Nコード】

N9584Q

【作者名】

渉

【あらすじ】

この物語は、「織斑 一夏」とオリジナル主人公である「葵 春樹」の二人の主人公で展開していきます。この二人は家族のような存在。この二人は女性しか動かせないはずのIS>インフィニット・ストラトス<を動かしてしまう。この事によって、この二人はIS操縦者を育成する『IS学園』に入学することになってしまいが…。原作とは違ったシリアスなISをお楽しみいただけたらと思います。【第一部が完結。第二部に続きます】

序 章『全ての始まりという名の原因 — Trigger —』(前書き)

この小説はオリジナル主人公である「葵 春樹」を登場させます。
織斑 一夏と葵 春樹のダブル主人公で展開していこうと思います。
再構成ということで、今後全く違う展開になっていくと思いますが、
最初は原作と大体同じです。後半になるにつれて色々と変わってくるはずです。

伏線の方も自己解釈で書いていくと思います。

さて、受け付けない人はこのページを閉じましょう。

ちなみに入試はアニメ版の描写を使用しています。

では、IS <インフィニット・ストラトス>を改変して別の物語を作ってみました。

スタートです。

序 章『全ての始まりという名の原因 — Trigger —』

とあるところに男の子が二人。名前は織斑一夏と葵春樹。

この二人は家族同然の関係である。

どういふことかと言うと、春樹は両親を亡くしているのに加えて親戚という人物は居らず、完全に一人になってしまった春樹。

そこに救いの手を差し伸べてくれたのが織斑家の二人だった。年上の織斑千冬に、同い年の織斑一夏。この二人も両親がおらず、姉弟で暮らしていた。同じような境遇の葵春樹を家族に向かえ入れてくれたのだ。

それからというものの、同い年である一夏と春樹はとても仲がよく小学校・中学校ともにずっと一緒だった。何をするにしても二人で笑い、悲しみ、怒り、そして悔しがることだっていつも一緒だった……という記憶がある。

そして、今日は高校受験の日……彼らの運命は変わった。これから高校へ入って一緒にバカやって、テスト勉強して、色んな友達を作る気でいた……。

そんな彼らは今、高校受験の会場に来ていた。

しかし……迷ったのだ。

自分達の受験場所がまるで分からなくなった。いつも頭がぎれる春樹も今日に限ってなんか頼りない。やはり高校受験ということで緊張しているのか。それとも迷った事で気が動転してしまったのかは分からないが、人に場所を聞いてもよくわからず二人揃って迷ってしまった。

「おい、春樹……こっちでいいんだよね？」

「……………わからないな。すまない、一夏………本当にわからん」

「………本気と書いてマジかよ？ どうすんだよ俺ら、戻る道もよくわからなくなったしよ……」

「おちつけ一夏。ここは冷静にだな……」

そう言いながら、どことなくそわそわしていた。一夏はいつもの春樹じゃない、と内心焦っていた。こういうときに役に立つのが春樹なのに、今回に限ってその頼みの綱のその春樹が調子が悪い。本当に春樹らしくない。

春樹はいつも冷静で頭の切れる奴だったはずなのに、その冷静さが欠けていた様な気がする一夏。それは気のせいなのかどうなのか分かるはずがなく、とりあえず二人で試験会場を彷徨っていた。

そして、ドアを見つけた。

関係者以外立ち入り禁止と書いているが、二人はとりあえず道を聞くだけ、ということと誰かがいることを願ってそのドアを開けた。しかし二人の願いは叶わなかった。人がいなかったのだ。ただそこには中世の鎧のようなものが忠誠を誓うようにひざまずいているだけだった。それが何なのか二人はよく知っていた。

『インフィニット・ストラトス』通称『IS』と呼ばれるパワー・スーツといったところか。

最初は宇宙活動を目的として作られたものだが、それを軍事目的で使うことが始まり、後にアラスカ条約により軍事利用は禁止されたのだが、裏ではどうなっているかはわからない。

そして今日では、ISは競技種目、スポーツとして活用されている。

しかしこのISには不可思議な部分が多いのも事実。ISのコアと呼ばれる動力部の情報は一部を除いて開示されていないし、なにしろこのISは何故だか女性しか動かせない。

そして春樹はそのISに近づいてこう言った。

「おい、一夏、これ……」

一夏もISを確認して頷く。

「ああ、ISだな……」

「一夏……ちょっと見てみようか？」

「っておい春樹、それは不味いんじゃないのか？ 一応ここ関係者以外立ち入り禁止だし」

「大丈夫だろちょっとぐらい。もし人が来ても迷ったって言えば誤魔化せるだろうし」

「……………春樹、お前そんな奴だっけか？」

「……さあね」

春樹はそのISに手で触れた。その瞬間、手で触れた部分が光りだす。

「……………動く」

その時、春樹は呟いた。何か意味ありげに……………だ。

「え？ 春樹、どういうことだ？」

その時、関係者であろう女性が数人部屋に入ってきた。

「君達、ここで何してるの！？ ここは——」

その女性達無断でこの部屋に入った男子受験生を怒ろうとしたものの、それはやがて驚きが変わった。それもそのはずである。

ISは女性しか使えない。

ISを知っていれば、誰もがわかる常識だ。

しかし、その常識を無視してISを反応させている人物が目の前にいる。何が起こっているのかここにいる人は誰もが理解する事が出来なかった。

「まさか……………反応してる!?!」

「そんなバカな、ISを男が動かすだなんて!」

そこにいた関係者らしき女性たちは驚きの声をあげていた。勿論一夏も例外ではなく、驚きの声をあげていた。

「春樹……………おまえ……………女だったのか!?!」

突拍子も無いことを言い出した一夏に春樹は大声でそんなわけあるか、と否定し、ISから離れた。

「えっと……………あの、ちょっといいかな君たち？」

その女性は一夏と春樹のことを呼びかけた。それに一夏が答える。

「えっと、なんでしょう？」

「あのね、ちょっとお話聞かせてもらってもいいかな？ あと、一

応……………君もISに触れてみてくれる？」

「え、は、はい。分かりました」

その女性は一夏にもISに触れるよう要求した。目の前にISに触れて反応させた人物が一人いるのだ。一緒にいたその男の子も試してもらった方がいいだろう。

もしかするとこのもう一人の彼もISを起動させてしまったりするのだろうかとか期待せざるをえないからだ。

一夏がISに触れる。そしてその女性達の期待は裏切られる事は無かった。一夏が触れるとISが反応した。まぎれもなく男性がISを起動させている。これは一大事であった。

「嘘、マジで!?! まさか俺……女だったのかあ!?!」

わけのわからないことを言い出す一夏。女性達は呆れ顔になり、春樹は少し笑っていた。今までのシリアスな雰囲気台海無しである。

「そんなわけあるか一夏。ほら、自分の下半身を確認しろ」

「はっ、そうか!」

と言って一夏は自分の下半身にある男の象徴の有無を確認した。

よし、しっかりある、とほっとした一夏はため息を吐いた。

そして、呆れた顔で男二人を見る女性達だが、この二人がISを起動させたのは事実であり、これは放っておける問題ではない。しっかりとした確認を取って手続きを行わないといけない。

一夏は自分達の問題を思い出した。自分達は早く試験を受ける教室を見つけないといけないことに。ちょうど関係者もいるので場所を聞くことにした。一夏は試験会場の場所が記された紙を用意し、「あの、すみません……俺達、この教室で試験受けなくちゃいけないんですけど、何処にありますか?」

すると、その女性達は真剣な顔でこう言った。

「君たちは、ISを動かす事のできた現在唯一の男ですから、ただ事ではありません。その学校の入試どころではないでしょう。IS学園の入試を受けてもらう事になります。というのが、上からの決定だそうです」

「「はあああああああああ!?!」」

この短時間でこんな決定を下すのは少し不自然なのだが、そんなことも含めてと二人の男は叫び声をあげた。

どうやら、二人がつまらないショートコントをしている内に外に連絡していたのあだろう。

そして、これから始まるIS学園においての生活は、二人を様々な出来事に巻き込む事になる。

織斑一夏と葵春樹。

何故ISを二人は動かす事が出来たのか、それについてはまだ謎のままだが……………。

これから始まるのは男がたった二人だけのIS学園での生活。

第一章『世界で二人だけの特別な男 — Special —』

1

織斑一夏と葵春樹はI S学園に入学していた。

しかし、周りの人は当たり前なのだが、女の子に、女の子に、女の子であった。

織斑一夏と葵春樹は同じクラスだ。安心できる人が近くにいないだけでも違った。もし、これが自分ひとりだけなら周りの女子からの視線で押しつぶされ、プレッシャーに負けていただろう。

周りが女の子だらけで、男がたった二人だけ。そんな状況、話を聞く限りではこの幸せ者め！　と言いたくなるだろうが、話を聞いて想像するのと実際にその場で経験するのでは全然感覚が違う。まずは理性の問題。

これだろう。二人も健全な一六歳の男子であり、これからの生活が耐えられるのかと不安になってくる。

そしてこれが一番重要なことだ。人間関係である。やはり男子が考える事と女子が考える事では色々と変わってくる。クラスの人と仲良くなれるかどうか不安になるし、下手をすればクラスの女子から嫌われ、クラスで一人ぼっちになることも考えられる。

しかし、一夏には春樹が。春樹には一夏がいるので何かと安心できるのが正直な感想である。

すると教員が教室に入ってきた。教卓の近くに移動するなり自己紹介を始めた。

「みなさん入学おめでとう！　私は副担任の山田真耶です！」

と後ろのモニタに自分の名前を映し出してビシッと決めたが、生徒からの反応は今ひとつであった。生徒の反応が無いものだから不安になる山田先生。

「えっと……今日から皆さんはこのI S学園の生徒です。この学園

は全寮制。学校でも放課後でも一緒です。仲良く助け合って、楽しい学園生活にしましょうね！」

後ろのモニタに写真を映しながら丁寧に教えるのだが、クラスの生徒からの反応は皆無で、山田先生も焦りを表に出してしまう。

「ああと……では自己紹介をお願いします。では出席番号一番、葵春樹君！」

出席番号は男女絡めてあいいうえお順だ。最初の文字が『あ』である葵春樹が一番最初に自己紹介することになった。

「えー、葵春樹です。俺は見ての通り男ですが、ISを動かす事が出来る男、ということでのこの学園に入学する事になりました。皆さんと仲良くやっていければと思っています。これからよろしくお願いします」

クラスのみんなから拍手が起こる。一夏も拍手をして緊張しながら自分の番を待っていた。プレッシャーに負けそうになっている一夏は春樹に助けを視線で求めたが、春樹は笑っているだけで、どうもこの状況を春樹は楽しんでいられるらしい。

（春樹の奴、覚えてろお……あ、えっと……ほ、箒い……）

一夏はこのクラスにいた幼馴染の篠ノ之箒にまでも視線で助けを求めたが、彼女はそっぽ向いて彼のことを無視した。

（それが六年ぶりに再会した幼馴染に対する態度か……？俺、嫌われているんじゃない……）

篠ノ之箒は一夏と春樹の幼馴染で小学校の頃は共に剣道に明け暮れていたのだが、その箒も小学校四年生のときに引っ越していった。その原因は箒の姉である篠ノ之束にある。

なにしろISを開発したのはその篠ノ之束本人なのだから、その危険性も束自身のみならずその親族にまで及ぶ可能性もあるとして、保護を兼ねてどこかへ行ってしまった。

春樹はそんな箒の態度を見て鼻で笑っていた。春樹は知っていたのだ、篠ノ之箒が織斑一夏に対して恋心を抱いている事を。

小学校の頃に幼いながらも春樹にちょっとした相談をしていた。

春樹はどうしたのか、もう一夏のことはどうでもよくなってしまったのかとちょっと心配していた。

そして、一夏がその雰囲気飲み込まれそうになっていたとき、ついに一夏の番が回ってきたのだが、その事に気づかなかった一夏に山田先生は声をかける。

「織斑君？ 織斑一夏君！？」

「は、はい！」

今までぼーとしてしまっていたからか、すぐに先生の言葉が耳に入らなかった一夏は驚きの声をあげた。

「大声出してごめんなさい。でも『あ』から始まって今『お』なんだよね。自己紹介してくれるかな？ 駄目かな？」

「え、いや、その……そんなに謝らなくても……」

一夏は立ち上がり自己紹介を始めた。

「え、えーと……織斑一夏です。よろしくお願いします」

しかし、クラスの人たちは黙ったまま。箒の方を見るもまたもやそっぽを向いた。次に春樹の方を見たが、彼は黙ってドヤ顔をしていた。

（く、くそ……このままだと、暗いやつのレッテルを貼られてしまう……！）

すると一夏はスーハーと深呼吸をする。クラスみんなが「お！」「？」と思い、一夏に注目する。しかし、一夏が言った言葉は………。

「以上です！！」

こんな言葉だった。クラスみんながお笑い芸人顔負けのズッコケをやり、春樹はクスクスと笑っている。そんなみんなの反応に一夏は戸惑った。

（あ、あれ？ 駄目でした！？）

すると一夏の頭に飛んできたのはとある女性の拳骨であった。一夏はその拳を受けて痛みがり、顔を確認するなりこう言った。

「ん？ げえ！ 千冬姉！？」

そう言った一夏にまた拳骨をお見舞いした。

その女性。もといその教員は織斑千冬その人だった。一夏と春樹の面倒を見てくれた人であり、一夏と春樹のもっとも尊敬する人物である。

「学校では織斑先生だ」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶を押し付けてすみません……」
（なんで千冬姉がここにいるんだ？ 職業不詳で月一、二回しか家に帰ってこない俺の実の姉が）

千冬は勢い良く生徒に向かってこう言った。

「諸君！ 私が担任の織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物にするのが私の仕事だ」

その瞬間、クラスの女子がいきなり騒ぎ出した。キャーキャーキヤーキャー正直うるさい。一夏と春樹はそんなクラスの女子達に対して凄く驚いていた。

「毎年よくもこれだけばか者が集まるものだ。私のクラスにだけ集中させているのか？」

さらにクラスの女子の騒ぎは加速した。

春樹はその女子達が騒いでる中、一夏の下へ行った。

「お、おい一夏……」

「ああ、春樹。どうも、俺達の姉が俺らの担任らしいな……」
すると千冬が一夏の方を向いて拳を握っている。

「ところで、挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「い、いやあ……千冬姉、俺は……」

また千冬姉と言ってしまった一夏の頭を机の方へ押し付けてこう言った。

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生……」

するとクラスの女子達がコソコソと話を始めていた。

「え……じゃあ織斑君ってあの千冬様の弟？」

「じゃあ、男でISが使えることもそれが関係しているのかな？」

「でも、じゃあ葵君の事は……」

「静かに!!」

千冬はザワザワしているクラスを沈めて、

「諸君には、これからISに関する知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか？ いなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ！」

はい！ と、クラスの女子は一斉に言ったが、一夏と春樹だけは少しばかり戸惑っていたようだ

織斑千冬。

一夏の実の姉であり、春樹にとっては義理の姉のような存在だ。

春樹は両親を亡くしてから織斑千冬の世話になっていた。

彼女は第一世代IS操縦者の元日本代表であるが、ある日突然引退して姿を眩ましていた。

だが、この場でようやく今現在その千冬が何をやっていたのかが分かった。彼女はIS学園の教師をしていた。心配していた一夏はなんだ……心配するほどでもなかったじゃないか、と思っていた。

そして山田先生によるISの授業が始まった。

「皆さんも知っている通り、ISの正式名称はインフィニット・ストラトス。日本で開発された、マルチ・フォームドスーツです——」

そのISは一〇年前に開発され、元々は宇宙空間での活動を目的として開発されたが、その研究は現在停滞中。さらにアラスカ条約というもので軍事利用も禁止されており、今現在では競技に使用されている。

そして、今一夏と春樹たちが入学したこのIS学園は世界で唯一のIS操縦者を育成する教育機関であり、世界中からIS操縦者になるために人がやってきている。

「——では、今日から三年間。しっかり勉強しましょうね！」

クラスの女子達はいと元気よく答えたが、一夏は改めて自分の置かれている状況に疑問を抱いていた。

(今更だけど……改めて思う……なんで、なんで男である俺がここに
いるんだよ!?)

すると、チャイムが鳴った。これで授業は終わりである。

「はい、ではここまで。では起立、礼」

クラスの皆が礼をすると、山田先生はこの教室から出て行った。
そして、休み時間となった今、クラスの中のみならずクラスの外
からも女子が集まってきている。目的は世界でISを動かせる世界
に二人だけの男子である一夏と春樹だろう。

皆が一夏と春樹に注目してなにやらワイワイガヤガヤと話してい
るが、そんなことを気にもかけずに一夏と春樹は話していた。否、
そうやってこの雰囲気にも飲まれることを回避していたのだ。する
と、一人の女子生徒が二人の前に現れた。篠ノ之箒である。

「ちょっといいか、一夏」

「あ、ああ。じゃあ、春樹。また後で」

「ああ、分かった」

そして、春樹は箒を手招きして側に越させると彼女の耳元でこう
囁いた。

「久しぶりに会ったんだ。しっかりやれよ？」

箒は顔が赤くなった後、恥かしがりながら一夏と共にどっかへ行
ってしまった。

しかしここで春樹は重大な事に気がついた。一夏がいなくなって
しまったら、俺一人になってしまう。どうにかして、クラスのみ
んと親交を深めなくてはいけないと思っていた。

(早く、クラスに馴染みたいものだ……)

と、春樹はしみじみと思っていた。

一夏と箒は屋上へと来ていた。

この二人は小学校の頃分かれてから六年の歳月の末再会を果たしたのだ。この再会は言わば奇跡とも言えよう。

「六年ぶりだし、何か話すことでもあるんだろう？」

と一夏が聞くと、箒はなにやら恥かしがりながら、

「え、ああ、うん。しかし、よく覚えていたものだ……私の事を」
その喋り方はまるで話すのに慣れていない人の様で、それを見た一夏は少し微笑んでしまう。何故なら、その六年前にも同じような事があったからだ。

「ははは。そりゃあ、忘れないだろう、幼馴染のことぐらい。髪型変わってないし、雰囲気も昔から変わってないよな」

「そうか……うん。ありがとう」

箒はいきなり明るくなり、軽く頬を赤く染めていた。彼女は実のところ、一夏の事を六年もの間、好きでい続けていたのだ。男からしたらこれほど嬉しい事はないだろう。

「その……一夏は、私に再会できて嬉しいか？」

「そりゃあ……嬉しいよ」

その一夏の言葉にとても幸せそうな顔をする箒。

「ふふ。でも、一夏がテレビで出たときは驚いたものだ。自分の家のテレビを何度も見返してしまった」

「ああ、あれは……その……成り行きでな……」

笑いながら誤魔化す一夏。特に誤魔化す必要性など無いのにだ。

「テレビで見たとき……、もしかしたら、IS学園で会えるかもしれないと思ったんだ。そして今ここで二人で話している。春樹にも再会できた。この運命には感謝せねばなるまい」

「そうだな。じゃあ、再会した記念として握手でもするか」

そう言って一夏は箒に手を差し出す。箒は恥かしそうにその手を握り、握手を交わす。

一夏はニッコリと笑顔で箒を見るが、箒は恥かしくて一夏の目を見ることが出来なかった。

「これからよろしくな、箒。昔みたいに仲良くやろうぜ、春樹と三人とでさ」

「そうだな……皆で……うん」

するとチャイムが鳴った。これは予鈴であるから、この五分後が授業開始の時間となる。

しかし、次の授業は千冬のものである。遅れたらどんな罰を受けるかもわからないので、ここは万全を期して早めに戻るのが吉というものだ。

「箒。次は千冬姉ちふゆねえの授業だし、遅れるとどうなるかもわからない。だから早く戻らないとな」

「ああ、そうだな」

一夏と箒は屋上から教室へと戻っていった。

一方、春樹はクラスで黙ったまま、特に何もせずに休み時間を過ごしていたのであった。

後ろの方でコソコソと話していた女子生徒が何か覚悟を決めたように春樹に迫ってくる。

「ねえねえ、葵君!!」

とある女子生徒が春樹に話しかける。

「えっと、何かな? あと、俺の事は名前でも構わないから。早く皆と仲良くなりたいし」

春樹の目的は一刻も早くクラスの人々と仲良くなる事である。

それでもしないと、後々に面倒くさいことになるからだ。

だから、話しかけてきてくれたのは春樹にしても嬉しかった。

「えっと、じゃあ、春樹君。あのさ、織斑君と篠ノ之さんって、どういう関係なのか知ってるかな?」

その質問を春樹に投げかけた瞬間に、クラスの皆が春樹の下に押しかける。どうやら皆は一夏のことについて興味深々ようだ。

「えっと、そうだな。あの二人は幼馴染だな。小学生からの」

女子生徒たちは、真剣に春樹の話を聞く。

「なるほどねえ。じゃあさ、春樹君は——」

その瞬間にチャイムが鳴る。それと同時に一夏と箒も戻ってくる。皆は急いで席に着き終わると、数秒後に山田先生が現れて授業が開始された。

この時間は山田先生によるISの座学の授業だ。

とりあえず、一通りのISについて解説が終わったが、織斑一夏はまったくもって分かったような顔をしていなかった。というよりは全然分からなくて焦っている。

（このアクティブなんたらとか広域うんちゃらとか、どういう意味なんだ……全く持ってわからん……まさか、全部覚えなくちゃいけないのか！？）

「織斑君なにかありますか？ 質問があったら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

山田先生は笑顔で一夏に接した。しかし、一夏は全く持ってわかっていない。一夏はゆっくりと小さく手を上げた。

「はい、織斑君！」

山田先生はまた笑顔で一夏を当てた。

「ほとんど全部わかりません……」

そんな一夏に驚く山田先生。焦りながら他に分からない生徒はいますかと尋ねるが、誰一人と分からない人がいなかった。それもそのはずである。彼女達はISの操縦者になりたいからこの学園に来ているのだ。必読として配られたISについての基本知識の本の内容は当たり前のように頭に入っているだろう。

千冬はそんな一夏にある確認を取る。

「織斑……入学前の参考書は読んだか？」

「えっと……あの分厚いやつですか？」

「そうだ、必読と書いてあっただろう？」

「あゝ、すみません、まったくもって読んでいません……」

その瞬間一夏の頬に千冬の持っていた出席名簿で殴った。とても痛そうである。

だが、一夏も元々こんな学校には入学するつもりは無かったので、しょうがない、といったらしょうがないだろう。ただ、郷に入らば郷に従え、という言葉もあるように、この学園に入ってしまったからには一夏はこの必読の参考書を覚えなくてはならない。

「今からその参考書をもう一冊渡す。今すぐに読んで一週間以内に覚えろ、この馬鹿者が！」

「いや！ 一週間であの厚さはちよっと……」

「やれと言っている！」

と千冬は一夏を一夏を睨んだ。とても良い目力を持っている。ちよつと怖い。

「あ……………は、はい」

そんな一夏を春樹は笑いながら見ていた。あいかわらずだな。とそう思っていた。

そして授業は再開し、山田先生が教科書を開くよう指示したのだが、その瞬間チャイムが鳴り、授業の終了を示した。

「ふ……………じゃあ今回はここまでだ。では織斑」

「はい！ わかっております！」

一夏はわざとらしく大げさに返事を返す。千冬は少し微笑んだかと思うと千冬と山田先生は教室から出ていった。

授業は終わり休み時間。春樹は一夏に話しかけた。

「お前あの参考書、読んでなかったのかよ……………」

「ああ、急にこんな学校に入学することになったから、すっかり忘れてたよ……………」

「仕方が無いな……………俺が少し教えてやるよ」

「本当か？ ありがとうな、春樹」

するとある女子生徒が話しかけてきた。縦ロールのある長い金髪に透き通った碧眼。いかにもお嬢様、といった態度。さしずめ、ヨーロッパの方の人だろう。

「ちよつとよろしくて？」

「「ん？」」

一夏と春樹は二人揃ってその女子生徒の声に同時に反応した。

「まあ！ なんですよそのお返事！ 私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

春樹はその女子の顔を見て誰なのかとようやく分かった。しかし、一夏その女子を見てもいまいちピンと来ていないようだった。

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし……………」

春樹は驚いた顔をする。流石にそれは無いだろうと、テレビを見

ていればちよつとぐらい見る事があるだろうし、知っているはずだ。何せ彼女はイギリスの代表候補生。ちよつとぐらいは知っていてもおかしくないはずではあるが……。

「私を知らない？ セシリア・オルコットを！？ イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を！？」

すると一夏はセシリアの前に手を置き「待った」のポーズを取った。

「えっと、質問いいか？」

「下々の要求に答えるのも貴族の勤めですわ、よろしくてよ」

「……………代表候補生ってなに？」

その瞬間、教室中の生徒がズッコけた。春樹も一夏が何も知らない過ぎるので呆れていた。セシリア・オルコットの事は知らなくても「代表候補生」という言葉ぐらいは知ってほしかった、というのが春樹の気持ちだった。

しかも、単語からでも十分その意味は分かるはずなのに……。

「おい一夏！ いくらなんでも代表候補生を知らないなんて……お前ニュース見てるか？ 新聞読んでるか！？」

「な、なんだよ……春樹……」

「いいか一夏、代表候補生っていうのはな。国家を代表するその候補として挙げられた人たちのことだ。単語そのままの意味だろうが……」

「うっ……言われてみればそうだな……」

するとセシリアは大声でこう言った。

「そう！ エリートなのですわ！ 本来なら、私のような選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡！ 幸運なのよ！ その現実をもう少し理解してただける？」

とセシリアは男二人に顔を少し近づけ睨みつけてきた。しかしその男子二人は臆することなく、言葉を返す。

「そうだな。そんな人がクラスにいてくれるだけで、皆の士気が上がるだろう。そんなお前に頼みたいんだが、俺と一緒にISについ

てコイツにティーチングしてくれないかな？」

春樹は純粹な気持ちで、クラスの人と少しでも近づきたいな、と思っ
て言った言葉なのだが、どうやらセシリアとしては気に食わな
かったらしく、

「なんで、私がそんなことを……馬鹿にしていますの？」

いきなりイラつき始めたセシリアに戸惑いを隠せない。失礼なこ
とを行ったつもりは無かったのだが、プライドの高いセシリアにし
たら十分失礼なことだったらしい。

「いや。オルコットさんと、仲良くしたいな、と思って頼んだだけ
なんだけど……。なんか、とても失礼なこと言ってしまったようだ
ね、ごめん。」

「分かればよろしいのよ。次からは気をつけてもらえます？ この
私は入試試験の実技で試験官を倒した唯一の生徒だというのに……」

春樹からすれば、今のセシリアの態度は物凄く気に食わなかった。
自分は何様だよ、とも思えてくる。これから、一緒に過ごしていく
クラスメイトだということは同じだというのに。

「それなら俺も倒したんだけど。一夏は？」

「ああ、俺も、一応な………」

実際のところ、一夏は始まって早々に教官が突っ込んできたところ
をかわしただけであるが、春樹は違った。それなりの強さを見せ
て入試試験の教官を倒していた。

しかし、一夏もその教官がそんなミスをしなかったとしても勝っ
ていた事だろう。いままで一夏と春樹は同じ体を鍛える訓練を続け
てきたからだ。実力では春樹と大差は無いはずであり、後はISの
熟練度の違いだけだろう。

しかし、ISを起動させてまもないというのに春樹は教官を圧倒
できるほどの実力を持っていたことはなんとも不思議な事である。
天性の才能なんだろうか？

そしてセシリアはその事実を突きつけられて驚愕していた。

「なんですって!？」 私だけと聞きましたのに……」

「女子では。ってことじゃないのか？」

春樹はいやらしくセシリアにそう言った。先ほどの態度が気に食わなかったからだ。

するとセシリアはそこにいる男子二名の目の前でこう叫んだ。

「あなた、あなた達も教官を倒したっていうの!？」

「顔が近い。とりあえず落ち着け……」

と春樹が言ったがセシリアは興奮状態でそんな言葉を聞くわけもなく……。

「こ、これが落ち着いていられますか!!」

そのときチャイムが鳴った。そのチャイムの音で頭に血が上って興奮状態だったセシリアも落ち着きを若干だが取り戻し、こう言った。

「話の続きはこの後で、よろしいですわね!？」

そう言い捨てて自分の席に戻っていった。

一日の授業が終わり、放課後。

春樹はセシリアに絡まれそうになると逃げていたのだが、ついに逃げ切れなくなってしまい、放課後の教室で問い詰められていた。何故、教官を倒せたのかについてである。

一夏についてはとてもアホらしい理由だったので、それは置いておくとして、問題は葵春樹についてである。彼は、試験官のアホらしいミスとかではなく、実力で試験官に勝って見せたのだ。「葵さん。貴方、ISの操縦のご経験は？」

「えっと……試験会場が最初だな」

「それなのに試験官を倒したと……、これはどういうことなのでしょうね？」

「それは……天性の才能……ってやつじゃないかな？」

このとき、春樹は内心焦っていた。セシリアの態度が気に食わなかったからといって、余計な事を口走ってしまったと、後悔しているのだ。

「なるほど、才能ですか。まあ良いでしょう。ですが、実力では私の方が断然上でしょうけど」

「ふーん、そうか。そうだな、きっと」

口先ではこう言っているが、やはりセシリアの態度はどうも気に食わなかった。正直言うと、彼女のようなタイプは嫌いな方なのである。いや、一般人からしたらこのような人間は誰でも嫌いになってしまうのだろうか……。

だが、どうかして仲良くはないたいと思っている春樹であった。「葵さん、聞いていますの？」

「あ、ごめんなオルコットさん。それと、俺のことは名前で呼んで

くれて構わないんだぞ？」

「え？　そうですか、そういうことなら名前で呼びましょうか。では、春樹さん。また明日、色々とお話しましょうか、聞きたいことは沢山ありますけど、もうそろそろ寮に戻らないと行けませんからね」

「わかった。じゃあ、寮に戻るか」

二人は寮へと戻っていく。だが、この寮までの道のりで二人の間に会話はなく、ただ黙って寮へと戻るだけであった。

寮へと戻ってきた春樹は、一夏と同じ部屋である。男が二人だけしかいなくて、それでもって寮生活となれば一夏と春樹が一緒の部屋にならないわけではない。

部屋に春樹はその落ち着いた雰囲気ビジネスホテルをもう少し豪華にした感じの部屋に感動していた。

「一夏、凄いな」

「ああ、いいだろ、これ。奥のベッドは俺だからな」

そう言って一夏は奥の方のベッドに腰掛ける。すると、春樹は何か思い立ったように、

「あ、ああ。そうだ、シャワーはもう入ったのか？」

「いや、まだだけど」

「先に入っていいからな」

「いいのか？」

「ああ、一夏が使い終われば次の人のことを気にせずゆったり出来るからな」

「そういうことか……春樹らしいよ。お前結構長風呂だもんな、シヤワーでも無駄に長いし」

「そう言うなよ……。じゃ、改めて。これから同じ部屋。よろしくな一夏」

「ああ、こちらこそ春樹」

そして二人は右手で拳を作りお互いに拳の先をぶつけ合った。これは小さい頃からの二人の友情の証のようなものである。これが二

人の「家族」の証であつた。

一夏は着替え等を持ってシャワールームへと向かい、中へと入っていった。

そして春樹は一夏が完全にシャワールームに入つたことを確認すると、入り口側のベッドに腰掛けて、疲れが溜まつたようにため息を吐いた。

（なんだかんだで疲れたな……。何とか一日を終えることができた。さて、これから色んな事が起きるだろう。そのときは、頑張らなくちやな）

そう思った春樹は携帯電話を取り出してメールを打ち始めた。そのメールの相手は――。

次の日、一夏と春樹が食堂へ行くと、そこには見慣れた女性である篠ノ之箒がいた。箒は一夏の顔を見るなり少し顔を赤くして目を逸らしていた。

それを見た春樹は今後この二人が上手くいくことを願っていた。空いている席を見つけて三人が座る。配置は一番左が箒でその横が一夏、そしてその横が春樹である。この配置も春樹が自然とこうなるように仕向けたものであり、ここまでの行動が極自然で狙ってやったなど誰も気づかなかった。

三人が朝食を取っていると、女子が三人隣いいかな？ と尋ねてきた。

「葵君、隣いいかな？」

特に断る理由がないので春樹はいいよと言った。するとその女子三人はよし、と言って座った。正直春樹はなにがよし、なのか正確には理解していなかった。

ただ、少し惜しかったが……さしずめ「お近づきになっておこう」位だと春樹は思っていたが、実際のところ、それほど頃ではなく、もっとその先のことを考えて春樹の隣の席を確保していた。

女子三人の内、すこしだばだばな着ぐるみちっくなパジャマ姿の女の子が一夏と春樹の朝食の量を見てすごいたべるんだー、と言った。しかし、食べ盛りの男子であるから当たり前であるのだが。

「つか、女子はそんなんしか食べなくて昼までもつの？」

春樹が疑問に思ったことを言ったが、彼女達は誤魔化すように少し笑っている。それを見て春樹は理解した。

（なるほど、ダイエット中ってやつですかい？）

と思った矢先、着ぐるみパジャマの女子がお菓子よく食べるし、

と言い出した。春樹はダイエット中だと取ったが凄い勢いで間違っていた。ダイエット中って訳じゃないみたいだ。ダイエット中ならお菓子を食べるだなんてそんなことをしてはいけない事である。

すると、一夏と箒は席を立て、

「じゃあ、春樹。俺は先行ってるぞ」

「私もだ。後でな春樹」

「ああ、一夏、箒。後でな」

と言って頑張れよ、と箒にウインクをした春樹。それを正確に受け取った箒は赤面して一夏の方へ駆け寄っていった。

二人がいなくなり、春樹一人だけになったところに隣に座った女子から質問が来た。

「葵君って織斑君と仲いいの？」

「ああ、一夏とは家族みたいなものだよ」

「「「家族？」」」

その場にいる女子三人はよくわからない、理解できない、といった顔をしている。だって一夏と春樹は苗字が違う。

「ま、詳しいこと話すと長くなるから割愛させてくれ」

「う、うん。そういえば、織斑君と篠ノ之さんってなんか仲良いけど、どんな関係なの？」

なんだか、複雑な事情があるのかと受け取った女子三人は急いで違う話題に切り替える。

「まあ、アレだ。幼馴染ってやつだよ」

「「「え！？ 幼馴染！？」」」

急に三人の声が重なり、大きな声がより大きくなっていった。しかも食いつきが良い。やはり女子はこういった色恋沙汰に関係あることには興味津々なんだろうか？

「ああ。小学校一年のときに一夏と剣道場に通うようになってから、四年生まで一緒のクラスだったんだよ」

その時、パンパンと手が叩かれる音が食堂に響き渡る。なにかと後ろを見るとそこにはジャージ姿の千冬が立っていた。

「いつまで食べてる？ 食事は効率よく迅速に取れ！」

その瞬間周りの女子の食べるスピードが凄くあがった。とても早い。そして千冬は言葉を続けた。

「私は一年の寮長だ。遅刻したらグラウンド十周させるぞ？」

その時春樹は理解した。千冬が中々家に帰ってこない理由を。寮長を務めていたりとすごく忙しい先生なのだ。さすが織斑千冬。現役時代のカリスマ性を持ってすれば人を惹きつけるなんて容易い事であり、教師としてもそれなりの立場になるだろう。

春樹は急いで朝食を食べ、食堂を後にした。

教室では来週行われるクラス対抗戦の代表者を決める事になっている。このクラス代表に選ばれば、これから行われるクラス対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など、クラス長のよきな仕事をすることになる。

「自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

その事が織斑千冬の口から発せられると。クラスの女子は……。

「はい！ 織斑君を推薦します」

「え……はい！ じゃあ、私は葵君を……」

「私も葵君に一票！」

「私は織斑君！」

そんな言葉が飛び交っていた。そんなクラスの女子達に正直戸惑っている一夏と春樹。

すると千冬が他に誰かいないのか、と言った。このままだこの二人で決選投票になると。

「納得がいきませんわ！！」

セシリア・オルコットは机を叩き、立ち上がる。そして言葉を続ける。

「そのような選出は認められません。男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！」

「またお前はそんなこと言うのかよ、オルコットさん」と口を挟む春樹。

しかしセシリアは、そんな春樹に向って一言言って話を続けた。
「何ですって！？ ……このセシリア・オルコットに一年間そのよきな屈辱を味わえとでもおっしゃるのですか？ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、私にとっては耐

え難い苦痛で……」

その瞬間、一夏はあちゃあ……、といった感じに顔を掌でで覆った。

その時だった、今までの春樹のキャラが一気に崩れ去った。クラス中に春樹の怒号が響いた。春樹は自分の住んでいる日本という国が大好きであり、それを侮辱され、更に自分達をそこまで否定した事が彼をついに怒らせてしまった。

「いい加減にしろよ……！！ お前はどれだけ偉い人なんだよ？

代表候補生で専用機持ちだからって調子に乗るんじゃないよ。イギリス人のお前にこの日本を侮辱して欲しくねえな……。第一、世界的にも日本の技術というものは最高レベルなんだぞ？ お前の持っているISだって日本の技術がなけりゃあただのガラクタになりうるんだからな」

「な、なんですってえ！？ イギリスがあなたの国に劣っているのも？」

「少なくとも、日本の技術は一位二位を争うものだという事は言い張れるな」

「あ、あなたイギリスを馬鹿にしますの！？」

「さあね、どう取ってもらっても構わないけどな」

「ふざけるのも大概にしていただけ！？」

とセシリアが言った瞬間、クラスは一気に静かになり、しばらくの沈黙を破ったのはセシリアだった。

「決闘ですわ！」

「……………」

春樹は黙り込んでしまう。何か、不都合な事でもあるのだろうか？ それとも、セシリアに対して怖気付いてしまったのだろうか？ 「どうしました？ まさか、怖気付いてしまった、とでも言いますの？」

「……わかった。その勝負、受けようか」

春樹は何か考え事をしたようなポーズを取ったかと思うと、セシ

リアから提案してきた勝負を受けた。いったい春樹は何を考えたのだろうか、それは春樹本人しかわからない。

「いいですね、負けて後悔しても知りませんわよ？」

そして千冬が少しニヤツと笑い話を進めた。

「よし、話は済んだな。勝負は次の月曜日。第三アリーナで行う。織斑と葵、オルコットは勝ち抜き戦を行ってもらい、勝った者にクラス代表になってもらう。それでいいな？ では三人はそれまでに準備をしておくように」

一夏は春樹の久し振りにキレたところを見た。そんな春樹を見ていると話が勝手に進み、自分もクラス代表の選抜試合に出る事になってしまった。

正直あんまり気が乗らないが、もうクラス代表になる事を拒否できる空気ではなくなってしまった。だから、やれるだけやってみる事にした一夏。

春樹には変な違和感があった。あんなことを言われて、春樹が黙り込むことが不思議と違和感があったのだ。いつもだったらもっと言っても良いというのに、何も言わないのだから。

とりあえず、一夏はこんなことになってしまったことを受けとめ、どうしようかと悩んでいた。体は今まで鍛えてきたものの、ISについてはド素人当然だったのだから。

第二章『男達の力』 — Force —

1

一夏や春樹たちが居る一年一組の教室では、昨日のクラス代表を決定する事についてで盛り上がっていた。

しかも、一夏と春樹に専用機を授けるという話が出てきてからずっとそればかりだ。

千冬の話によれば、一夏と春樹のISの準備には時間がかかるので、専用機の到着はギリギリになりそうだ、という事だった。それがクラスみんなに更なる期待をあげてしまったものだから、クラスの盛り上がりは半端なかった。

何故代表候補生でもない一夏たちが専用機をもらえるのか。それはとても簡単な理由だ。その二人は「男」だからである。

世界的に見てもこのISを動かせる 男というのは大変希少で、現在ISを動かす事のできる男は織斑一夏と葵春樹だけである。

世界中を隅々まで探せば他にもISを動かせる男が見つかるのかもしれないが、現在分かっているのは一夏と春樹の二人だけというのは揺ぎ無い事実である。

しかも、この二人を調べないわけにもいかない、というのが正直なところだろう。二人はISを動かせる男の貴重なデータを収集するためだけに専用機が渡されるのだ。

ちなみに一夏は専用機を持っていることがどれだけ凄い事なのかはわかっていなかった。そもそも専用機は国家もしくは企業に所属している人物にしか与えられない。

つまり、その人たちがこの人物なら専用機を渡してもいいだろう、と思える人物に与えられるものだろうから、ISの操縦が上手いのは当然だろう。

しかし、この専用機を渡すのは結局のところ、ISを扱える人な

ら誰でもいいのが事実である。ISには第一形態移行から卒業までに第二形態移行さらには単一仕様能力の発現まで持っていてこれれば良いのだ。ISを研究・開発している人からしたらそれがゴールであるから。

「あの、篠ノ之さんって、篠ノ之博士の関係者なんですか？」
とある生徒が、一夏と春樹のISについての話をしているところ
でこう言った。

その発言に対し、千冬は肯定した。篠ノ之束はここにいる篠ノ之
箒の姉だという事を。

すると、クラスの女子が騒ぎ出す。当然だろう。ここにいるみんなはISの操縦者を目指すもの達の集まりであり、その開発者の妹がここに居るとなると驚かないはずがはいはずだ。

しかし、箒はいきなりは怒ったような感じでこう言った。

「あの人は関係ない！」

すると教室が静寂に包まれ、箒は言葉を続ける。

「私はあの人じゃない。教えられることなど何もない……」

突如教室は嫌な空気に包まれた。その空気を壊すように千冬が山田先生に授業を始めるように言った。

一夏はわかっていなかった。箒がここまで束を嫌う理由が。
理由を知っていた春樹は誰よりも暗い雰囲気になっていた。

実を言うと、箒が剣道の大会に出る事になり、優勝したら一夏に告白する、と春樹にそう話していた。春樹はそんな箒を応援していた。

しかし、箒の姉である束がISを開発し、複雑な事情がたくさん絡み合って……引越しする事になってしまった。もちろん、剣道大会だなんて言ってる暇は無く、気がつけば箒は引越しをしていた。誰にも分からないように、静かにその家から立ち去った。

だから、あのときの箒の気持ちがどんな感じだったのか、ちょっとだけなら分かる春樹。だからこそ、この再会は本当に運命的なものを春樹は感じた。だから、春樹は全力で一夏と箒の事を応援する

事にした。

ISの座学が始まり、山田先生はISのことについての解説を行っていた。

インフィニット・ストラトスは操縦者の周りを特殊なエネルギーバリアで包んでいる……等、山田先生は解説していく。

「ISには意識に似たようなものがあって、お互いの対話、一緒に過ごした時間で分かり合うというか、操縦していた時間に比例してIS側も操縦者の特性を理解しようとしています」

春樹は黙ってその話を聞いていたが、一夏は相変わらず理解が上手く出来ていないようだった。

「ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください。ここまですで質問がある人は？」

「いつもーん！ パートナーって彼氏彼女のような感じですか？」

という質問に山田先生は照れてモジモジし始めた。ちなみに山田先生は男性とそういう関係を持ったことが無いらしい。

凄く良いプロポーションを持ちながら 今まで彼氏を持ったことが無いとは不思議である。どういう要因でそうなったのかはちょっと気になるが、それは一先ず置いておこうと思う。

（所謂女子高のノリって奴だよな、これ……）

と一夏は思ったが、残念ながらその考えはハズレである。こんなノリは女子高でなくとも普通にあるだろうから。

そして、一夏は箒の方を見た。ずっと外ばかり見ているし、なんだか不機嫌そうである。一夏はこのあとの昼食でもいっしょに誘ってみようかなと思った。

授業が終わり、昼休み。相変わらず外を眺めていた箒に一夏は話しかけた。

「箒、おーい箒。飯食いに行こうぜ。春樹、お前もどうだ？」

「あ、ああ……いいな。よし行こう」

「ほら、春樹も行くってよ。ほら箒も行くぞ」

しかし、箒はちよつと低めの声で不機嫌そうに言った。

「私はいいい」

「そういうなって、ほら立てよ」

と言つて箒の腕首辺りを掴んで無理やり立ち上がらせようとする。箒は慌ててながら言った。

「な、わ、私は行かないと……」

「はあ……いつまでそう不機嫌なんだよ。そんな箒は嫌いだぞ、俺は」

そう一夏が言った瞬間、箒は焦った。一夏を不機嫌にさせてしまったからだ。自分が変な意地を張ったせいで。箒は慌ててさっき言ったことを訂正した。

「あ……すまん一夏。じゃあ、行くとするか……」

箒は顔を赤くしながら言った。しかも一夏は箒の腕首から手を離し、今度は箒の手を握り、手を繋いで食堂へ向かおうとした。箒はこの状況に訳がわからなくなっている。舞い上がって我を失いかけていた。

「春樹行くぞ」

「ああ、一夏……」

春樹は思っていた。その手を繋ぐという行動が無意識での行動とというのが箒にとって良いのか悪いのか。

春樹は笑顔になりながら箒を引っ張っていく一夏の後ろについていく春樹であった。

そして一夏たちは食堂へと向かう。一年生の教室からは食堂は少々遠い。それも仕方が無いと妥協して、少しばかり長い距離を歩いた三人は食堂へと着く。

食券を買って、食堂のおばちゃんにそれを渡す。そして、自分の頼んだメニューが来るのを待ちながら、一夏はさっきの箒の態度についてちよつとした説教をしていた。

「あんなに意地張らなくていいのに、やっぱり素直な方が可愛いと思うぞ？」

突然そんなことを言い出す一夏に顔を赤くしながら箒は言葉を返した。

「そ、そ、そうか。素直なほうが良いのか……」

「ああ。なあ春樹？」

すると春樹は何故俺に振る？ と考えながらも一夏の言葉を肯定した。

「あ。そうだな」

このとき春樹は思った。また一夏の無意識でのその行いか、と……。恐らく、一夏と箒の間ではちよつとした意味合いのすれ違いがあった。

一夏は「どんなやつでも素直なほうが良い」という意味で言っており、箒は「素直なほうが自分は一夏に可愛く見られる」という純粹な気持ちで受け取っていた。箒の受け取り方も間違っているではないが、微妙な意味合いのすれ違いは見て感じてむず痒い。

箒は幸せな感情に包まれていたところ、現実に戻る声が耳に響いた。

「はい、日替わりお待ち！」

そこには一夏と春樹、箒の分の日替わりランチが並んでいた。箒はその声を聞いて現実に戻される。どうしようもない事なのにちよつと不機嫌になる箒。自分の分の日替わりランチを取るなり一人で

さっさで行ってしまった。

一夏は不安そうに春樹を見ながら言う。

「俺、なんかしたか？」

「いや、お前は恐らく悪くないよ。たぶん……」

一夏の質問にちよつと自信なさげに答える春樹であった。すると、食堂のおばちゃんが話しかけてきた。

「ちよつとアンタたち！」

一夏と春樹は声が聞こえた方を振り返ると、そこには人が良さそうな食堂のおばちゃんが立っていた。

「なんででしょうか？」

春樹はそう返すと、食堂のおばちゃんは笑いながら調理場から出てきて一夏と春樹の前に立ち、おもいつきり二人の背中をビシビシと叩いた。

二人はいきなりの事でビックリして日替わりランチを落としそうになったが、持ち前のバランス力で体勢を元に戻す。

「うん、身体は鍛えてるようだね。あんた達が噂のISに乗れる男なんだろう？」

「まあ、そうなりますね」

今度は一夏が質問を返答すると、

「アンタ達結構イイ顔してるねえ。モテるだろう？」

「うーん……モテてる感じを味わうより、まずは周りと馴染む事が何より優先することだと今は考えていますがね……やっぱりそこから始めないと」

春樹は今の悩みを感じていた。やはり、何をするにしても回りに馴染むのがなにより優先しなくちゃいけない。でないと、やりたいこともやれないからだ。

しかも先日、セシリア・オルコットなる女子と言い合いになってしまうわ、決闘することいんなくなってしまいうわで、どうしようかと悩んでいるのだから。

「でも、専用機持ちと決闘する男子生徒がいるって話があるんだけ

ど、どっちが戦うんだい？」

春樹は今現在の悩みの一つをさらっと言われてしまい、言葉を失ってしまふ。それを見た一夏はフォローするかのようによいコイツです、と言って春樹の方を指差した。

すると、食堂のおばちゃんは春樹をまじまじと見つめ、

「アンタかい……………。まあ、アンタ強そうだからねえ、問題ないと思うけど……。男としてのプライドを忘れちゃいけないよ。男ってやつは女を守ってやるのが生きがいだろう？」

確かに、昔はそうだった。男は女を守ってやる。そういったテーマの作品は沢山あった。漫画にアニメ、実写映画にドラマなど、そういうものが人気を博したときもあった。

しかし、今の時代ISの登場によって女の方が強いものである、といった考えが浸透していおり、女尊男卑の世の中になってしまっている。

「今の時代、男は生きにくい世の中になっちゃったけど、アンタ達はその女性しか使えないって言われているISってやつを動かせるんだろ？　なら、その力の使い方を誤ることなく、皆を守ってやることに使うんだよ。アンタ達は立派な男だろ？」

一夏と春樹は、この食堂のおばちゃんの言葉には感動してしまった。この女尊男卑の考えが世間に広まっている中、昔ながらのその考えを持っていることは男として嬉しかった。

「そうだ、おばちゃんの名前、教えてもらえますか？」

と、春樹が聞くと、

「私かい？　私は皆藤っていうんだ。まあ、皆藤のおばちゃんって呼んでくれれば私はいつでも話し相手になってあげるよ」

と言ってくれた。とても良い人だ、と物凄く思った二人。もし、悩んで悩んでしょうがなくなったときには皆藤のおばちゃんに相談しに行こうと思った。この人なら、良い答えを貰えそうだから。

「すっかり長話になっちゃったね。ほら、女の子待たせてるんだろ？　早く言ってあげな。悪かったね、長い話して」

「いえいえ、じゃあ、毎日この食堂にはお世話になると思うので。これからよろしく願います。皆藤のおばちゃん」

春樹は微笑みながら軽い礼をすると、続けて一夏も軽く礼をする。そして、箒の待つ席へと向かった。

二人は箒が確保してくれた席に座る。箒は「遅い」と言ったが、二人は笑って誤魔化し、三人は昼食を食べ始めた。少し立ったところで一夏が二人に話しかけた。

「なあ、春樹、箒、ISのこと教えてくれないか？ このままじゃ、セシリアと春樹にストレート負けしちまう。対戦相手に頼むのもちよっとおかしい話だけど、どうだ？ 教えてくれないか？」

「別に、一夏はクラス代表になる気は無いのだろう？」

「そんなわけに行くか！ やる前からやっぱ俺はいいです。ってそんなかつこ悪いこと出来るわけないだろう」

「むっ……」

箒は自分の失言に自分で自分を怒っていた。そこに上級生らしき人物が近づいてきて一夏と春樹に話しかけた。

「ねえ、君達ウワサの子でしょ？ 代表候補生の人と戦うって聞いたけど、でも君達素人だよね？ 私が教えてあげようか、ISについて」

と、その先輩の女子生徒が言った瞬間、春樹と箒は凄い勢いで……。

「結構です！！」

と叫んだ。これには一夏もビックリした。まさかこの二人がこのようなアクションを起こすとは思わなかったからだ。

春樹は一夏と箒の間に変な虫が入り込まないように。箒は一夏の近くに上級生の女子が一夏にものを教える。というシチュレーションが恐ろしくて必死に言ったのだ。

「俺が——」

「私が——」

ほぼ同時に春樹と箒は自分のことを一人称で呼び、そして同時に

こう言った。

「「教える事になっていきますので!!」」

あまりに息が合っていたので一夏は微妙に引いた。上級生の先輩も負けじと言葉を紡ぐ。

「君達も一年生でしょ? 私三年生。私の方が上手く教えられると思うなあ」

しかし、こちらも負けない。すぐさま次の言葉を繰り出す。

「私は篠ノ之束の妹ですから」

「俺は織斑千冬の弟分ですから」

実にこの二人、言い放題である。箒はさっきまで束に対してはイライラしていた原因だというのにこの有様である。使える、自分が有利になる言葉は遠慮無く使う。今の二人は何が駄目で何が良いのか。その線引きなど気にしていなかった。

「「ですので結構です!!」」

またもや春樹と箒の言葉は同時に発せられていた。

「教えて……くれるのか?」

一夏は大丈夫なのかと不安になりながら二人に尋ねた。すると二人は力強く首を縦に振り肯定した。一夏は変な不安に駆られながらも放課後になるまで待っていた。

食堂の一件で一夏の特訓のコーチをすることになった春樹と箒。

そして現在放課後になり、ISについて教える事になる。座学が春樹、実技が箒担当ということに決まった。

放課後の教室には一夏と春樹と箒しかいない。いや、正確には教室の外、つまり廊下には人がいる。どういふことかというとお察しください。

ともかく、教室の外で覗いている女子達は無視して春樹によるIS解説が始まった。

「では一夏、ISの戦闘について教えるが、これは頭で考えることじゃないということだけまず教えておこう。戦闘中は考えている暇なんて無いからな」

「まあ、多分そうなんだろうけど……で、何に気をつければいいんだ？」

「まずは動き続けろ、ということだ。動かないISなど射撃訓練の的のようなものだ。そして空を飛ぶときはとりあえずイメージしろ。深く考えるな。ISは自分が行きたいところへ飛んで行ってくれる自分の翼だと思って、自分が華麗に空を飛んでいることをイメージするんだ」

「はあ、イメージ……動き続ける……」

一夏はなんとなく分かった。という風な感じだった。そんな一夏を見て春樹は補足した。

「まあ、まだISは起動したのは入試のときの一回だけだしな……。しかも一夏はほとんど動かしていなかったようだし」

「ああ……知ってた？」

実は入試試験の一夏の相手は山田先生であった。しかし、開始早

々訳もわからず一直線に突っ込んできた山田先生を避けるとそのまま山田先生は壁に激突。ノックダウンしたらしい。おそらく、山田先生は世界的に有名になったISを動かせる男子の一人である一夏と戦うことになってあがってしまったのだろう。あの先生は元代表候補生だし、IS学園の教師をしている時点でISの操縦は凄く上手いはずだが……。

「まあな……。で、話は戻るがISは――」

そして一時間後、春樹による座学は終わった。

話したことはIS最低限のことである。ひとまずセシリア・オルコットのISである『ブルー・ティアーズ』についての情報などだ。セシリア・オルコットが操る『ブルー・ティアーズ』は未だ開発・実験途中である第三世代ISである。第三世代ISの特徴は操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器にある。

例えばセシリア・オルコットの『ブルー・ティアーズ』の場合、特殊兵器としてこの機体名の由来である『ブルー・ティアーズ』がある。これはビット兵器であり遠隔操作でビットを飛ばし、相手を狙撃する事ができるものだ。六機中四機がレーザービットでその名の通りレーザーを発射することができる。そして残りの二機はミサイルビット。ミサイルを発射する事ができる。

等々、特殊な装備を持っているのが第三世代ISの特徴だが、実験・開発中ということもあってか燃費が悪いという問題が残っている。

とりあえず、未だ自分達に贈られるという専用機が到着してない以上、そのISのスペックも分からないし、どんな装備があるのかも分からないのでそこからの対策は不可能だ。したがって、授業でやった事を分かりやすく、要約して一夏に教えた。そして春樹は一夏に「あとは感覚だ。実際にISを動かしてどうすれば良いのか直感でやるしかない」と言った。

これも手元に自分達が使ええるISがあればもっと別な事が出来たのだが……。

そしてこの次は箒による実技である。とは言っても訓練機のISの使用許可も貰っていないのでISを使用してでの訓練は不可能だ。ということで、現在三人は道場へ来ている。一夏と箒は竹刀を持っていた。そして箒は言った

「よし、一夏。今はISが使えない。だから今日は剣を握って戦闘の感覚をなんとなくいいから掴もう。ということだが、良いか？」
「ああ、わかった。じゃあやろう」

と一夏は言い、箒と剣を交じる。

実は今日の特訓の全ては二人で考えている。二人に分野を分けたからといって別にそれぞれが勝手に考えた事ではない。ということ
を補足しておく。

一夏は現役の剣道部である箒と対等にやりあっている。まさに防戦一方で、譲らない戦いであつた。

この一夏は中学校では帰宅部だったのだが、何故これだけの動きが出来るのかというと、春樹と一夏は二人で体を鍛え続けていた。そう、あの『事件』がきっかけで……。

そのとき春樹は思った。「大切な人を守るだけの力が欲しい」と……。そして一夏は「大切なものを守る力が欲しい」と……。その事件があつてから考えるようになった。そして彼らは強くなるためにひたすら体を鍛えていった。

その『事件』を語るのはまた後ほど、ということにして欲しい。

「一夏、やはり強いなお前は……」

息を若干切らせながら言う箒。しかし一夏はまったく息は切れておらず、まだまだ余裕の表情である。

「なあに、まだまだだよ俺なんて。春樹はもっと凄いからな……」。

しかし箒、もう息がきれてるのか？　ちょっと早いんじゃないか？
もっと体力をつけた方がいいと思うぞ？」

箒はその言葉に凄く反論したくてしようがなかった。実際、箒も剣道という運動は続けてきたし、体力にもそれなりの自身があった。しかし自分の目の前に居る男。一夏は考えられないほどの持久力があった。普通の人ならどんなに運動していてもこれぐらい動けば息切れくらいする

しかし一夏はこれだけ動いても息切れしない。まだまだ余裕の表情をしている。ようするに一夏はとんでもないほどの体力と持久力を持っていた。

（一夏……何があった？　なんでそんなにも強い……？　しかも春樹はもっと凄いだと……。あいつらは一体何のためにそこまで強くなる？）

箒の頭の中は疑問でいっぱいだった。ちょっとした混乱が起こっている箒の状態を一夏が見逃すわけも無く……。

「箒、試合中に考え事とはな……」

と小さく呟き、大声で、

「隙あり!!」

と竹刀を振った。箒は驚き、一夏の握られた竹刀は箒の頭の上一センチぐらいで止まっていた。

「あ………、すまない一夏……気を乱してしまった……」

「いや、いいさ。おい春樹、久し振りにやらないか？　試合」

そう言っで一夏は春樹に竹刀を投げて渡した。パシッという竹刀の音が鳴り、春樹は強くその竹刀を握りしめた。

「ああ、いいぞ。本気でいこう」

「そのつもりだよ!」

一夏と春樹は素早い。箒が最初に感じたことがそれだった。この二人はいい意味でどこかおかしい。そう思った。

この二人は剣道の動きではない。どちらかというと剣術の動きである。ようするに敵を殺しに行く動きである。そこにスポーツマン

精神というものはない。相手を殺す。それに特化させた動きを二人はしていた。箒は一夏と春樹の二人をしっかりと見ながら思った。

（一夏……春樹……お前達は誰だ……？）

少なくとも箒の目には戦っている二人は別人のように見えた。まるで、本気で相手を殺しに行く侍のように。

（お前達は……なんでそこまで……私はどうすれば……？）

正直、箒は戸惑っていた。今の彼らは彼女の知っている二人ではない。そのことが彼女の胸がもやもやする感じに襲われていた。

箒が変な感じに襲われながらも、二人の方の決着がついた。春樹の竹刀の先が一夏の顔の前に突き立てている。

「はあ、やっぱり強いよ春樹は」

「いや、一夏も強いよ、結構危なかったし……」

二人は笑っていた。それを見て箒は少し安心できた。何故ならば箒自身が良く知っている二人の顔になっていたからだ。

箒はこの場で起きた事を、この二人の戦っているときの表情を忘れることはなかった。否、忘れる事などできなかった。

春樹は一夏とのトレーニングを終えて一回校舎の方へと戻ろうとしたときに、セシリア・オルコットとばったり出会ってしまった。

「春樹さん。偶然ですが先ほどの練習、見せてもらいました」

「あ、そうなんだ。で、どうだったかな、見てみて」

「ええ、とても剣術が達者のようですね。ですが、あれは剣道とは言えませんよね？」

「あははは……確かに、あれは剣道ではないな」

春樹は笑って誤魔化す。

先ほどまでやっていた剣道、もとい剣術は春樹が過去にやってきたことが関係する。それに一夏も一緒に鍛えることになり、あそこまで強くなった……というのが真実だ。

なぜ、あそこまで強くなるとはいけないのか……。それは、彼らにも何かしら理由があるのは確かだ。強くなればできないのだ。

「まあ、貴方が何故試験官を倒してしまったのかが分かった気がします。何故あそこまでの剣術を身に着けたのかはわかりませんが……」

「ま、こっちにも事情があるんだよ……」

何かしら意味ありげに語る彼。それを見たセシリアは何かを悟ったのか、急に申し訳なさそうにしました。

「あの……何か気の障ることがありましたのなら、謝ります」

「あはは、そんな態度もちゃんと取れんじゃん。俺、オルコットさんのこと誤解してたかな」

「あ……、すみません。でも、こちらにもプライドというものが……」

「……そうだな。ゴメン、オルコットさん。でも、プライドがあるからって、自分とは違うものを貶すことは違うと思うんだ」

「はい……。そのことは謝ります」

プライド……。その英単語の意味は『誇り』という意味がある中、『自尊心』、『自惚れ』という意味も持っている。

今回、セシリアの場合、自分が『代表候補生』であること自体が彼女の『誇り』であるが、それと同時に高すぎる『自尊心』があったのだろう。だから、彼女は他国をも貶して『代表候補生』である自分をその中で最高にした。傲慢……という言い方もある。

高すぎるプライドは、決して他人にいい思いはさせないものなのだ。

「じゃあ、代表候補生決定戦を楽しみにしているよ」

「ええ、私も楽しみにしています」

「俺は校舎に戻るよ。じゃあな、オルコットさん」

「はい、ではまた明日お会いしましょう」

春樹とセシリアはお互いに逆の道へと進んでいく。セシリアは宿舍に行くの道へ、春樹は校舎に向かう道へと向かっていく。

校舎に戻る理由としては、春樹は教室に忘れ物をしてしまった為、それを取りに教室へと向かっている。

（セシリア・オルコットか……。案外、根は良い奴なんだな……。これなら早く仲良くできそうだな……）

春樹は何故だか急に駆け出して校舎へ向かった。

第三章『クラス代表決定戦　―Duel―』

1

ついに、クラス代表を決める日が来た。

一夏と春樹、そしてセシリアの三人はアリーナに集まり、戦う相手の組み合わせを決めるためのクジを引いていた。

その結果、一戦目に春樹とセシリアが戦い、そしてその戦いに勝った方が一夏と戦うことになる。

「あら、私は春樹さんですね。よろしくお願いしますわ」

「そうだな。正々堂々、よろしく頼むよ」

「当然ですわ、では後程」

そう言って、セシリアはこことは向い側のピットへと歩いていった。

このとき、一夏、春樹、セシリアが着ていたタンクトップとスパッツをくつつけたような服は『ISスーツ』と言われる……いわばISを装着するときに着けるものだ。別に着なくても一応ISは装着できるのだが、ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行うことができる。また、耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができるものだ。

そして、未だ解決していない問題があった。

一夏と春樹に届くはずだった専用機がまだ届いていないのだ。

「織斑先生、俺たちの専用機はまだなのかよ。もうすぐで試合開始予定の時間だっていうのに」

「慌てるなよ、一夏。大丈夫だ、もし来なくても量産機を使えばいい。勝てる自信は一気になくなっちまうけどな」

春樹が一夏をなだめたその時だった、山田先生がISを運び入れ

るときに使う専用エレベーターから姿を現した。二つのISとともに。

色は二つとも白く、一つは今まで見てきたようなデザインであったが、もう片方は今まで見たこともないようなISだった。

本来、ISは重量を感じるような、ある程度ごついボディをしているのだが、そのISは違った。ISと言うにはとてもスリムで、マルチ・フォームド・スーツとはかけ離れていた。

「織斑先生、これってISなのか？」

一夏は、そのスリムなISを指さして言った。

「あ、ああ。IS……の様だな。私も、こういうISを見るのは初めてだ」

あのISに関しては世界的に有名は織斑千冬でさえ、この特殊なISには戸惑ってしまった。今までISと関わってきて、このような薄っぺらい装甲をしたISがあっただろうか？ いや、ない。あるわけがなかった。

元々、宇宙開発を目的として作られたIS。そして、現在は競技として確立したこのIS。だからパイロットの安全を確保するためにもある程度の装甲の厚さはあるはずなのだ。

しかし、そのISにはそれがない。パイロットを守る機能は一応あるものの、万が一の事を考えた場合、これでは危険なのではないか、と疑問をも抱く。

「えっと、こっちのちよつと特殊なISはですね……、葵君のISとなります。名前は『熾天使』^{セラフィム}。すごく変わったISですけど、これから葵君のパートナーとなる機体です。大切にしてくださいね」

「はい」

春樹は『熾天使』の方へと近よる。

その『熾天使』と呼ばれるISは、装甲がとても薄く、背中には少し大きめのスラスタがついている程度。装甲が異常に薄い以外は何の変哲もないISだった。

そして、山田先生は続けてもう片方のISの説明に入った。

「それと、こっちの方が織斑君のISです。名前は『白式』^{びやくしき}。こちら織斑君のパートナーとなる機体です。大切にしてくださいね」

「はい」

一夏の専用機となるIS『白式』は、春樹の『熾天使』と違ってこれといった見た目的な特徴はなかった。いや、春樹のISが異端すぎるだけで、この『白式』の形こそが本来のISだ。

「では葵、さっそく準備をするぞ。だが、フォーマットとフィッティングをしている暇はないな。仕方がないから、それは試合をしなから何とかしてくれ」

と、冬が何やら無茶な欲求をしてくる。

フォーマットとはその名の通り、^{イニシャライズ}初期化だ。まずは初期化して、そのパイロットに合わせるための準備をしなくてはいけない。

そして、フィッティングというのは、その操縦者を正規の所持者^{ソフトウェア}として登録させることだ。それに従い、操縦者に合わせて中身と外見を一斉に書き換えて、表面装甲を変化、成形させること。

それをせずに、イギリスの代表候補生と戦ってこい、と千冬は言っているのだ。思わず春樹は溜息を吐いてしまう。

「はあ……、わかりました。なんとかやってみます」

それでもやらなければならぬのが、なんとも痛まれない。

「ISの装着の仕方はわかるな？」

「はは、わかってますよ、それくらい」

「ふ……、そうだな」

二人は笑い、そして春樹はISを装着する。

胴の部分が裂けているので、そこに体を合わせる。すると、自動的に裂けていた部分がキツチリと閉まり、春樹の体はISに包まれた。

『Access.』

というISから音声が再生されると、目の前に様々な画面が表示される。春樹はとりあえず機体のスペックデータを閲覧した。

ISを装着すると、ISが捉えた視界をそのまま網膜投影させる。このことによって、ISの操縦者は視界をズームイン・ズームアウト等が可能だ。

さらに、ISのデータ情報も合わせて網膜投影されているので、特に別紙の解説書を見る必要もないし、難しい操作を行う必要もなかった。頭で何を見たいかをイメージするだけで、データの閲覧は可能なのだ。

春樹は『熾天使』のスペックデータを見ると、様々なことが明らかになっていった。

（武器がたくさんあるし、いろんな距離に対応できるのはいいけど……、このシールドエネルギーの少なさは……）

普通に攻撃を一撃食らっただけで撃墜されるほどのシールドエネルギーが少なかったが、それを補うかのようにこのISのトップスピードと加速力は全ISでナンバーワンと言ってもいいほどのものだった。

もしかすると、いや、もしかしなくても、これは攻撃が当たらないことを前提にして作られたISなのだろう。

「フォーマットとフィッティングはISの方で自動的にやってもらうとして……、よし、準備OKです。いつでも出れますよ」

「わかった。では、そのままアリーナへ出ろ、オルコットが待っているぞ」

「はい！」

春樹はそのままアリーナの方へと歩く。するとそこに一夏が駆け寄り、

「春樹、負けんなよ！」

「安心しろ一夏。俺は負けねえよ」

春樹は外へと飛び出すと、そこにいたのは青いIS。

そのISの名は『ブルー・ティアーズ』。ビーム兵器を複数装備した遠距離特化型ISで、六七口径特殊ビームライフル、『スターライト mk?』が主力武器である。

そして、このISの一番の特徴と言えば、空中を舞うビーム砲：
…自立機動兵器であるビットの装備、このISの名と同じ名をして
いる『ブルー・ティアーズ』を装着していることだ。

現在のISではこういったビット装備を使用しているものはごく
僅かだ。その理由としては、中々安定したものが作れないことな
だ。もっと単純に言えば、開発・研究中であるということ。

つまり、セシリアの『ブルー・ティアーズ』はビット兵器の試験
も兼ねている機体だということだ。IS学園にて、こういった改良
をすればいいのか研究し、より良いものにするのが目的。

「あら、あまりにも遅いので逃げたのかと思いましたわ」

「失礼な奴だな。お前はそういうところ直した方がいいじゃない
かな。俺、君のそういうところだけは嫌いなんだよね……」

「失礼なのはどちらなのでしょうね。春樹さん、貴方も女性に対し
てそういうことははっきり言うものではありませんわよ？」

「ま、お互い様だな。無駄話もこの辺にして……いくか」

「お互い全力でぶつかりましょう」

試合のゴングが鳴り響き、その瞬間に二人は動き出した。

セシリアは春樹との距離を置き、射撃の体勢に入る。セシリアの
ISは遠距離特化型で、距離を取らなければ射角が制限されてしま
うのだ。

だからセシリアは素早く距離をおいた。

しかし、春樹はそんなことは読んでいた。セシリアのISの情報
を聞けば、こうなることは簡単に予想できる。ただ、この春樹のI
Sはまだフォーマットとフィッティングが終わっていない機体だ。
思うように動いてくれないし、動きが多少ではあるものの危うく感
じることもある。

「あら、フラフラじゃありませんの。それでこれは避けることがで
きます!？」

セシリアは『スターライト mk?』で春樹の事を撃つ。六七口
径の銃口から発射されたビームは物凄いスピードで春樹に迫ってい

く。それをスラスターを吹かせることで間一髪で回避し、そのままセシリアに接近。『ブレイドガン』という、銃に刃がついている武器を展開し、斬りつけようとする。

セシリアの『ブルー・ティアーズ』のような遠距離に特化しているISは、接近されてしまうと攻撃も防御も難しく、その対処が難しい。

よって、一気に優位に立ちことができる。それを狙っての接近だ。しかし、流石代表候補生だけあって、そのような簡単な戦術には引っ掛かるわけがなく、彼女は巧みに後方へとブーストして攻撃をかわすと同時に、春樹から距離を置いた。

セシリアはこのタイミングでビット兵器である『ブルー・ティアーズ』を展開。四機のビットが春樹の方に向っていく。

四つのビットはどれだけ動こうと春樹の事を囲むように動き、そこからビームを発射する。

これまた発射の瞬間にスラスターを吹かして急激な加速でかわすが、これがいつまでも成功するわけがない。

その証拠に、ビットの射線上から外れることができたかと思えば、目の前には『スターライト mk?』を構えたセシリアがいたのだ。彼女は容赦なくビームを発射。この攻撃は回避したくても、フォーマットすら終わっていないISにはこのタイミングで違う方向に動くことは難しかったが、無理やりにもスラスターを動かして回避する春樹。

（ははは……冗談じゃねえぞ……こっちはフォーマットもフィッティングも終わってないんだ。こんな状態で専用機とマトモに戦えるわけねえだろうが……くそっ、千冬姉ちゃんめ!!）

そんな春樹に当然のことながら休む暇などはやってこない。セシリアのビットがすぐに春樹の事を追尾してくる。

春樹はそれから逃げることで精いっぱいだった。無数のビームがビットから発射される。それをマトモに動かない『熾天使』でかわしていく。これはもう奇跡と言ってもおかしくなかった。

「ふふふ……、春樹さん。そんな動きでここまで耐えられるとは、褒めて差し上げますわ。でも、もうこの遊びも終わりにしましょう」
ビットの動きが変わる。春樹を囲むような動きから、追い込むような動きに変わった。

春樹にとってはランダムな射撃。だが、それは着実に春樹を追い詰めるものであり、ビームをかわす度に春樹は逃げ場を失っていく。ビットの攻撃をかわしたと思えば、もう一つのビットの攻撃。それをかわしてもさらにもう一つのビットからの攻撃。それによって、春樹はアリーナの壁際へと追い込まれていく。

「さて、そろそろフィニッシュですわ!!」
ついに春樹が壁際まで追い込まれた。

そして、セシリアが持っている『スターライト mk?』からビームが放たれた。

そのビームが春樹に向って直進する。春樹は周りのビットからの攻撃も回避しなくてはならないし、セシリアから放たれた正面のビームも対処しなくてはならない。まさに絶体絶命。

そして……、着弾。土煙が巻き上げられる。

セシリアが放ったビームは、間違いなく春樹にヒットした……かと思われた。

しかし、ビームが当たったと思われた場所に春樹はいなかった。下を見ても春樹は見当たらず、墜落したわけではなさそうだ。

では、どこに……?

セシリアはそう思ったその瞬間である。

「あぶねえ……勝負はこれからだ、オルコットさんよオ!!」

その声は、セシリアの後方から聞こえた。

セシリアは振り返ると、そこには先ほどとは形が違うISに乗っている春樹の姿があった。

「まさか、第一形態移行!?
ファースト・シフト 貴方はまさか……、初期状態で戦っていたらというの!？」

「ああ、時間がなかったしな。でも、フォーマットとフィッティン

グが少しでも遅れたらそのまま負けてたよ。さて、これからが本番だ！」

春樹のIS『熾天使』はちょっとしたカラーリングの変化があり、さらに装甲の線がスツキリし、より直線的なボディへと変化していた。

それと同時に発動したものがあある。それが『ワンオフ・アビリティ単一能力仕様』である。

これは、ISとその操縦者の相性が最高になった時に発生する特殊能力で、その能力はあらかじめISに記憶させて、それを発動させる場合と、未知の能力を発動する場合と二パターンある。

春樹の単一能力仕様は『天使ノ翼』。

それは、常に発動する単一能力仕様で、移動速度が1.5倍になるというものだ。

それだけでは地味だ、と思ってしまうかもしれないが、このアリナに来ていた生徒、及び教師は春樹のISに見とれてしまった。

そう、この単一能力仕様の名の通り、純白の翼が春樹のISから生えており、それは金属とも思えない程のしなやかさを持っていたのだ。

「とても綺麗……」

現に対戦しているセシリアでさえ、そうつぶやいてしまうほどの美しさだった。

しかし、そうしている間に春樹は接近し、『ブレイドガン』でセシリアの事を射撃した。

「惚けている場合じゃないぞオルコットさん。今は試合中だ」

多少だが、ダメージを負ってしまったセシリアは、目の前の春樹にこう言われてしまって少なからず悔しかった。ぼー、としてしまった自分がだ。

「すみません。ですが、そちらの準備もできたようですし……、お互い本気でやりましょう！」

「ああ、そのつもりだ!!」

二人はお互いに宙を舞う。

セシリアが春樹を狙撃しようとするが、予想より春樹のスピードが速く、標準を定めるのに戸惑いができてしまう。

(は、速すぎますわ……なんですよ、あのスピードは……)

セシリアは偏差射撃を試みようとするが、中々春樹には当たらない。ビームが飛んできた瞬間に更に春樹は加速しているのだ。だから、春樹には中々当たらない。春樹のISがどこまでのポテンシャルを秘めているのか、まだ不確定なのだ。

だから、セシリアは戸惑った。これまでスピードの速いISとは戦ったことがない。いや、これだけのスピードを出せるのは全ISの中でもナンバー1なのではないかと思うほど。

そのセシリアの予想は見事的中している。もう一度言うことになるが、確かに春樹のISである『熾天使』は全IS中ナンバー1の加速力と最高速度を持っている。

これももう一度言うことになるが、弱点はもちろんある。それは『熾天使』のシールドエネルギーは言わば「紙」同然で、少し強い攻撃を受けただけでシールドエネルギーがなくなってしまう程の装甲の薄さなのである。

だからこの試合は、春樹はいかにセシリアの攻撃を避けながらシールドエネルギーを削りきるか、セシリアが強力な一発を春樹に与えられるか、という勝負だ。

(このままじゃジリ貧だ……。かわしているだけじゃ駄目だ。攻撃に移行しないと……。武器は……。他に武器はないのか!?)

春樹は網膜投影されている画面を見渡す。このISのスペックデータの欄から、武器のデータを引っ張り出す。

そこに表示されていた武器の種類は、まずは現在春樹が使っている拳銃に剣がついた『ブレイドガン』。

次に、近距離用の武器はシンプルなもの二つと大型のものが一つある。短刀が一本に、実体剣として、さらにビームブレードにも

なれる『シャープネス・ブレード』。そして、複数の敵に囲まれたときに『ビーム・サイズ』という鎌が用意されている。

最後に、遠距離用武器である大型のビームライフルである『バスター・ライフル』の五つの武器からなる。

この五つの武器はすべて量子化しており、IS本体には取り付けていない。これは加速力をできる限り高めたいことからくるものだろう。できるだけ軽量化して、スピードアップを図る。それがこのISの特徴だ。

熾天使にはそれぞれ、近距離・中距離・遠距離とバランスの良い武器があり、五つの武器を器用に使い、距離を選ばない戦闘をするというのがこのISの使い方だろう。

春樹は接近戦を仕掛けるために、一度『ブレイドガン』を量子化し、『シャープネス・ブレード』を展開する。

ビームを展開させ、実体剣からビームブレードに変更。セシリアの射線から外れるように接近し、セシリアに斬りかかろうとする。

セシリアも春樹を接近させまいとビット攻撃で対抗しようとするが、春樹はその攻撃を縫うように避けていく。

(少しキツイけど……これなら……!!)

少々苦戦しながらも、ついにビームブレードが当たる距離まで詰めた春樹はセシリアを斬ろうとした。だが、ここでセシリアは緊急時の短刀である『インター・セプター』を取り出した。

「ここで負けるわけにはいきませんわ!!」

セシリアは春樹の斬撃を避け、『インター・セプター』で反撃に出る。

しかし、『インター・セプター』は所詮緊急用の短刀でしかない。リーチの長さでは長刀である春樹の方が勝っているのです、距離さえ気を付けてしまえば断然春樹の方が有利なのである。

よって、ここまで接近させてしまった時点で彼女の負けはほとんど決まったようなものだ。

春樹は短刀の攻撃を避けると、詰め寄りすぎた身体を少し後退さ

せ、ちょうど良い距離を取り、『シャープネス・ブレード』でセシリアを斬る。

彼女も短刀で自分の身を守ろうとするが、長刀の重い一撃には耐えることができなかった。『インター・セプター』は虚しくも弾き飛ばされてしまったのだ。

今のセシリアには身を守るものは一切ない。後は春樹の斬撃をどれだけ避けることができるのかが勝負だ。

春樹の速さと重さがある斬撃がセシリアを襲う。

最初の内は避けることが出来たのだが、避ければ避けるほど春樹の斬撃はより激しくなっていく。

その激しさに追いつけなくなったセシリアは、ついに春樹の重い斬撃を真正面から諸に受けてしまい、大量に削れていくシールドエネルギー。

さらにも一撃、またさらにもう一撃『シャープネス・ブレード』の斬撃をくらってしまふ。しかもビーム系の攻撃なので、その威力は絶大だ。

彼女はこの斬撃から逃げるために全力でスラスターを吹かし後退。だが、スピードで圧倒的な差を見せつける春樹の『熾天使』がすぐに迫ってくる。

この攻撃から逃れることが出来ない。やはり、一対一のドッグファイトにおいて、接近させてしまった時点で彼女の敗北は決まっていたようだ。

何も出来ないまま『ブルー・ティアーズ』のシールドエネルギーがゼロになり、勝敗は決した。

試合終了のゴングが鳴る。

春樹対セシリアは、春樹の勝利で決着がついたのであった。

葵春樹はセシリアとの試合が終わり、一夏の下へ戻ると、一夏と
箒が出迎えてくれた。

一夏と箒の二人は、喜びの声を上げているのと同時に、少しばかり春樹という存在を疑っていた。ISを動かすことについて初心者のはずの春樹があそこまでの動きが出来て、イギリスの代表候補生に勝ってしまうことに。

しかし、ここは一先ず勝ったことを喜ぼうと、一夏は春樹に声をかける。

「春樹、お前すげーえな！ 何処で覚えたんだよ？」

一夏はそういった質問を吹きかけてきたが、そのときある女性からも同じ質問が帰ってきた。

「そうですね……、葵君は何故あれだけのISの操縦ができるんですか？」

そこにいたのは山田真耶先生だった。彼女もそこについてはやはり疑問に思うようだ。

だがしかし、ISの起動が二回目だというのにアレだけの操縦を見せつけ、さらに代表候補生に勝ってしまうほどだから、先生だつて気になるのは仕方が無いことだろう。

「まあ、それは……イメージ……ですかね？」

春樹は自信がなさそうにそう言った。

「イメージ……ですか？」

山田先生は正直よくわからなかった。彼はイメージというのがどんな意味なのか。なんらかのイメージトレーニングかなんかなのか、と疑問に思っていた。

「はい、何故だか分かりませんが、色んな雑念が消えて鮮明にイメ

Ｉジできたんです。どういった動きをすればいいのか。その動きをするにはどうすればいいのか、とか」

山田先生はなるほど、と思っていた。彼のいうイメージはそういうことだったのかと。

春樹の言っている事は、常に状況が変わっていく戦闘中のやるべき事を無意識のうちにすぐに理解し、行動に移れる。という一種のスキルを持っていた。

しかし、それとＩＳを動かせることとは結びつかない。何故自分のイメージする動きをまだ操縦も慣れていないだろうＩＳで出来るのか。謎は深まるばかりだ。

「そうですか……なるほど……。では、次は葵君と織斑君の試合ですね。織斑君、準備をしてください。そして葵君、連続で戦ってもらう事になりますが、大丈夫ですか？」

「はい、問題ありません」

「はい、では織斑の準備が終わり次第試合を開始します」

山田先生のその声で一夏も自分のＩＳのところへ行き、ＩＳの装着を始めだした。一夏のＩＳである「白式」びやくしきは試合前に見たものは変わっていた。恐らく、事前に初期化とフィットフィットィングを終わらせて第一形態移行させたのだろう。

あの大型のスラスタを見る限り一夏のＩＳも超高速型なのだろう。

春樹はＩＳの近くでのスペックを確認し、武装の特性を見ていた一夏に話しかけた。

「一夏、今度は俺相手だ。本気で来いよ？」

「おうよ、ＩＳでの勝負は今回が初めてだからな。今回は負けねぞ！」

「ああ、こちらこそ……。じゃあ、俺もＩＳの確認に行ってくる」
春樹は一夏の下を去り、逆のアーリーナの操縦者控え室に向かった。ちなみに、一夏と春樹の二人は小さい事からなんにしても勝負してきた。下校時間、どちらが先に家に着くか勝負し、テストではど

ちらが良い点数を取れるか、夏休みの宿題はどちらが先に終えるか。など、どうでもいいことを含め、勝負してきたのだ。

一方箒は、これからの戦う一夏と春樹が一体どうなってしまふのか不安だった。もしかしたらどっちかが死んでしまふんじゃないか、とも思えてしまったからだ。

今日、この日まで結局 I S による練習が出来なかった為、訓練は剣道によるイメージトレーニングを続けていたが、あの二人が戦うとそこにスポーツという概念がなくなる。本当に人を殺すという殺気しか箒には感じられなかった。

「一夏……」

「ん？　なんだ、箒？」

「い、いや………春樹とはその……」

「ああ、アイツとは小さい頃からくだらないこととかで勝負してきたからな、今回もその一環だよ。どちらが上手く I S 使えるか、つていったところか？」

一夏は笑顔で答えたが、箒にはその笑顔が何を示しているのか……それがわからなかった。なにより、剣道での勝負時の殺気。それは今の一夏の言葉では到底説明しきれないようなものだった。

（一夏と春樹……。あんな二人だったろうか……？）

結局のところ、二人に何があったのかは聞けなかった箒であった。

春樹は一夏とは逆側の操縦者控え室に来ていた。

そこにはセシリア・オルコットが居り、何やら向こう側、一夏の居るところをずっと見つめていた。

「なんだ、まだ居たのかオルコットさん」

春樹がセシリアに話しかける。するとセシリアは驚いたように春樹の方を見た。

「え、春樹さん!？」

「なんだよ、そんなに驚いて……当たり前だろ、今度は一夏と戦うんだから、どっちかがこっちに来るのは」

春樹はため息をついて自分のISのデータを閲覧した。先ほどの試合は十分に武器の特性を知らないまま戦っていたのだから、しっかりと頭に叩きこ込むために。

しかも今度の相手は一夏である。小さい頃から一緒にいた一夏は春樹の特性・性格・癖等、あらゆる点を知っている。今まで争ってきた人だし、人間観察は彼の方が得意だ。なんでも色んなところにすぐに気づく。

「あの……春樹さん」

「なんだい、オルコットさん」

「あ、私のことはセシリアでいいですわ」

「そうかい、で、セシリア。何の用だい？」

するとセシリアは申し訳なさそうに春樹の顔を見て言った。

「あの……何故あんなにも強いのですか？ 春樹さんはISの起動が僅か二回目と聞きました。なのにあれだけの動き……、いくら身体能力が高いといっても……」

セシリアの疑問は当然だろう。なにせ代表候補生として選ばれた

自分のISの操縦技術は当然ながら自信があった。少なくとも、これから少しずつ覚えていく一般の生徒よりは上手くISを動かせる自信ぐらいはあった。

しかし、ついこの間の入試試験の実技で初めて操縦し、今回の二回目という春樹。

彼の操縦はどう考えても物凄い長い間練習し続けた様なベテランの動き。とても二回目の起動とは思えない。春樹を少し不審に思ってしまうのはしょうがないだろう。

「それはな、俺には守りたい人がいるんだ。その為に強くなったんだよ。まあ、ISは動かしてみるまで自分に動かせるかどうか心配だったけどね……。でも、そんな心配は要らなかったよ。ISは自分の思うとおりに動いてくれた」

「守りたい……人？」

「ま、色々とな。過去に辛い思いをしてきたんですよ、俺は」

春樹は少し微笑んで彼女にそう言った。

「そうなんですか……」

セシリアは少々焦った。もしかしたらあんまり触れて欲しくない話をしてしまったのではないかと、セシリアは慌てて謝る。

「あ、あんまり触れて欲しくない事でしたのなら謝ります。すみません……」

頭を下げたセシリア。春樹はいままでセシリアとはまったく違う態度を取っている事に驚きながらも、セシリアのその行動をやめさせた。

「セシリア、頭上げて。そんな気にするほどの重い話でもないから「ですが！」

「あー、セシリア。そんなことより、俺はセシリアと仲良くしたいんだけどな……」

「え？」

彼女は少々焦った。急に春樹がそんなことを言い出すものだから、セシリアも驚いてしまったのだ。

「俺、クラスのみんなと仲良くしたいんだ。成り行きでIS学園に入学することになったけど、それでもこうなっちゃったからには、うまくやっていかないとね」

「はい……それは嬉しいのですけれど……、もう許してくれたのですか？ 春樹さん、あんなに怒っていらしたのに……」

そう。このクラス代表を決めるきっかけになったのは、セシリアが春樹や一夏の事を侮辱してしまったことだ。そのときに春樹がもの凄く怒っていたことを、セシリアは気にしているのだ。

「ああ、そのことはもういいよ、気にしてないから。もう終わったことだしね。」

春樹は無理やりそのことについての話を終わらせ、しんみりしてしまっているこの場の空気を変えようとした。

「あの、ありがとうございます」

「気にすんなよ。それほどでもないじゃん」

するとアナウンスが入った。一夏との対戦の時間だ。

「そういうことで、行ってくるよ」

「あ、はい。春樹さん、頑張ってくださいね？」

「分かったよ」

そして春樹はISを起動させる。全身が白い装甲に包まれ、背中には大きな翼が広がる。本当に金属で出来ているのかと疑問に思うほどのしなやかで美しかった。

そして春樹はアリーナの方へと飛び出した。

目の前には白い装甲で大型のスラスターが印象的なIS『白式』がそこにあった。

すると、一夏の方から話しかけられた。

「よう、春樹。全力でお相手するぜ」

「オッケー、油断せずに行こう」

「ふふ、お互いにな」

そして試合開始の合図を待つ。目の前に数字がカウントダウンされていき……その数字がゼロとなった瞬間、一斉に二人は動き出す。

観客は何がなんだか 分からなくなっている。モニタールームにいる千冬と山田先生もなにが起こっているのか、肉眼で確認するのも人苦労なぐらいの高速戦闘が行われていた。

一夏は長剣『雪片式型』を何回も何回も春樹に切りつける。だが、間一髪で春樹はそれを避けている。

やはり一夏の白式は超高速型だ。しかも装甲が凄く薄く、一撃攻撃を受けただけでやられそうなくらい脆い。

そういう点では春樹の熾天使も同じような仕様だが、速さで言えば白式の方が少々速かった。

しかも、その速さをものになっている一夏もその次に速いISを扱っている春樹も、正直言ってこの二人を止められるものはいらのかと問いたい位である。一人上げるとすれば彼らの姉である織斑千冬だろう。ただ、春樹にとっては「姉のような存在」ではあるが……。

春樹も目には目をとという風に、一夏の剣に剣で挑んでいる。装備が『雪片式型』しかない白式は『熾天使』と違って接近戦特化型であり、オールマイティに対応できる熾天使とでは接近戦になったときの対応力は断然違う。こうなれば、近距離攻撃の威力が高い白式が断然有利になる。

しかし、春樹のプライドが遠距離戦に持ち込むなんていうつまりらない事はしなかった。春樹は一夏に剣で勝負を挑みたいのだ。

一夏はそんな春樹に答えるように今まで剣道で鍛え上げられた太刀筋がものをいった。もちろん、春樹もそれに遅れを取っていない太刀筋だ。

（春樹、中々やるじゃねえか。でも、これは俺の距離だ！）

一夏は白式の必殺技である『零落白夜』を出すタイミングを窺っている。

『零落白夜』とは、自分の稼動エネルギーを雪片式型に集中させ、相手のシールドバリアーを切り裂き、相手に直接のダメージを与えることができる。

すると、ISの機能である『絶対防御』なるものが発動する。こ

これは操縦者の身の安全を守るための機能で、これが発動するとIS中のシールドエネルギーをあるだけ使い操縦者を守る。というものである。つまり、決まれば勝利といったような能力であるのだが、あくまで「決まれば」というものなのである。

そしてこの零落白夜は、先ほども言ったとおり稼動エネルギーを大量に消費して使う能力。つまり使えば使うほどISの燃料がなくなっていく。限界を超えると白式は動かなくなり、使用不可になる。使うにしても三、四回が限度といった非常に使いにくい能力であるが、白式は装甲・シールドエネルギーを犠牲にした超高速型。使いなせば相手が気がつかないうちに仕留めるというのも可能なのである。

一夏は切り札である零落白夜の出どころをずっと窺っていた。春樹と一夏は互いに斬りかかるも互いの剣で弾くのみであり、致命的な攻撃は一度も入っていない。

高速戦闘が続く中、一夏は秘匿回線を使って春樹に話しかけた。

「おい春樹、そんなもんかよ。こっちはまだまだ加速するぜ？」

「こっちは使える武器がまだまだあるんだよ、油断すんな！」

一夏の武器は『雪片式型』しかないが、春樹にも近接戦闘用の武器はまだある。今使っている日本刀を模した『シャープネス・ブレード』に加え、鎌の『ビーム・サイズ』もある。更には近距離から中距離に対応できる『ブレイドガン』もあるので、戦闘の柔軟性で言えば熾天使の方が上なのである。

が、それをしようとしないうちに春樹は、最後まで剣で戦うということを守る気であるようだ。

（でも、キツイな……速さなら一夏の方が上……。なら、やるしかないか……あれを）

春樹の言う「あれ」とは相手の死角に入った瞬間に急加速をし、一気に相手との距離を詰めて一撃必殺を決める事である。これは織斑千冬も使っていた攻撃であり、名を『瞬間加速』イクニッション・ブーストという。

そして、春樹はチャンスを掴む。一夏の死角を取ったのだ。

（今だ！）

と思うばかりに急加速をし、一夏に向かって刃を向けた。春樹は正直勝ったと思ったのだが、一夏が少し微笑んだように見えた。一転して春樹は正直ヤバイと思った。

（春樹、甘いぜ……その攻撃は俺には通用しない！）

一夏はやはり千冬の実の弟だからなのだろうか、春樹の『瞬間加速』イグニッション・ブは完全に見切られていた。

（クソッ！！ 仕方がない……）

春樹は一夏の能力を見誤っていた。思った以上の力を見せてくれたのだ。

春樹を仕留めた『雪片・弑型』は実体剣からエネルギーの刃へと変化していた。

零落白夜。

それこそが相手を仕留める一撃必殺の攻撃、切り札である。

「これで終わりだ！」

一夏は春樹の攻撃をかわした瞬間、春樹の後ろに零落白夜を斬りつけた。元々耐久力のない熾天使ならばこの攻撃でシールドエネルギーは0になり、一夏の勝ちになる……はずだった。

「最後まで油断すんなよ！」

一夏は春樹のその一言を聞いた瞬間、目の前にはエネルギー弾があった。いきなりの攻撃に一夏はかわせなかった。

一夏の攻撃を受けた春樹はシールドエネルギーが完全に0になる前にバスターライフルを展開して一夏に放ったのだ。

（ふはは……、一夏はやっぱり強ええな……、剣だけで倒すはずだったのにな）

そして、ほぼ同時に両者のシールドエネルギーが0になった。

結果は僅かなさで春樹のシールドエネルギーが0になったが、誰も一夏を勝者とも取らなかったし、春樹が勝者とも思わなかった。あれは完全なる引き分けだと、観客や先生方々はそういう判断を下したのだった。

「――ということで、織斑君クラス代表おめでとー！」

次の日学校の食堂にて、とある女子生徒が言うと言りの女子生徒も一斉に「おめでとう！」と言ってきた。

現在、クラス代表が決定したということで小さいパーティーをしているのだ。

「って……なんで俺？」

一夏は疑問に思っていた。確かにあの勝負は僅かな差で自分の勝ちだが、他の皆はあれは引き分けだよ。って言うてくれていたのに。何故、クラス代表が自分になってしまうのか。

「しょうがないだろ？ 僅かな差で俺が負けてしまったんだから」

春樹のその言葉は「僅かな差」を強調して言った。しかも春樹は悪い微笑みをしている。一夏はこの微笑を見るといつも諦めることにしている。こうなった春樹には言葉で勝てないからである。

そして一夏は、横を見ると春樹がなにやらセシリアと仲良くしていた。いや、セシリアが春樹にべったりなのだ。

「お前ら、いつそんなに仲良くなった？」

春樹は一夏の方に振り向くなり、とぼけた顔でこう言った。

「え、そんな風に見える？」

「ああ、見える」

するとセシリアは顔が真っ赤になり、小さくなっていった。

一夏はそんなセシリアを見て、春樹の事が気になっている、もしくは好きになったんじゃないかと悟った。

するとそこへカメラを持った女子が一夏たちの前に現れた。

「はい、新聞部ですが、お話聞かせてもらえますか？」

どうやら新聞部のようだ、やはりISを使える男、そしてクラス

代表になったのはその男なのだ。しかも先日の一夏と春樹の試合は学園内で一夜にして有名になった。目にも留まらぬ速さでISを動かしていた、あれほどの試合は見たことがない、と。これを取材しなかったら新聞部は何をやっているんだ、とツツコミが入るだろう。

「では、クラス代表の織斑一夏さん。なにかコメントをよろしくお願いします！」

「え……えっとお……」

一夏はいきなり的事で言葉を失う。とりあえず何か言っておかないと、間違った印象を皆に植え付けてしまう可能性があると思い、深呼吸をして話し出す。

「俺は……今までコイツ、春樹といつもくだらない勝負で争ってたんです。だから、今回の試合もその一環というか……そんな感じではISで勝負していました。でも正直、今の俺は春樹より実力的には負けていると思っています。でもクラス代表となったからには今度のクラス対抗戦は必ず勝ちたいと思います！」

思った以上の若干シリアスがかった感じで話し出す一夏、周りの雰囲気も何故だかシーンとしてしまう。

「あ、あれ？ 俺変なこと言った？」

焦る一夏。新聞部の女の子は困った表情をする一夏をこちららも慌てながらもフォローした。

「い、いえ。思ったより、重めの話だったから……。こちらとしては軽い感じでよかったんだけど。まあ、大丈夫。ありがとうごさいます。では、今度は代表候補生のセシリア・オルコットさんにお話を伺いたい。今回、男性のIS乗りと戦ってどうでしたか？」

セシリアは先日の試合を思い出していた。あの葵春樹の事を。

確かにいい勝負だった。自分だって本気を出して全力で相手になったというのに、それでも彼に負けてしまったのだ。こうなってしまう自分が腹立たしかったし、自分の練習不足を悔やんでいた。

だが、そこには清々しさも僅かながらあった。

昨日の試合を思い出したセシリアはカッと体が熱くなった。この感じは昨日シャワーを浴びていたときに感じたのと同じであった。彼女はこの感じは一体何なのか、それに悩まされていた。

「ど、どうしたのかな？ オルコットさん？」

新聞部の人の言葉でハッと我に返ったセシリアは慌てて言葉を出す。

「春樹さんは、とてもお強い方です。恐らくとてつもない努力を続けてきたのでしょう。私なんかより、ずっと、ずっと。だから、今回の負けを糧にして、自分をより上のステージへと登ることが出来るように精進しようと思っています」

「ふんふん、なるほど！ ありがとうございます！ では最後に一年生の期待の星！ 葵春樹君にお話をお聞きしたい！」

春樹は落ち着いた雰囲気でこう言った。

「昨日の試合はまだISを起動させて二回目なのですが、思ったより上手く動かせてよかったです。一夏との試合は負けてしまいましたが、今度戦う事があれば次は必ず勝ちたいと、そう思っています」

「はい、ありがとうございます！ では最後に、三人で写真でも取ろうか！」

はい、並んで」

するとセシリアがパアと明るい表情になり……。

「写真ですか？ その写真は私にも貰えますか？」

「え？ ああ、いいですよ、もちろん」

セシリアはよしと言った感じに小さくガッツポーズをした。そしてセシリアは春樹の腕を引っ張って春樹と横になるようにした。

一夏は春樹の横に行き、並び準は右から一夏、春樹、セシリアと言った感じになる。

「じゃあ、いきますよ、ハイ、3246+4454 は？」

「え！？」

一夏はビックリした、ぱっと聞いて答えられるような問題ではない、っと思うが、しっかりと聞いていれば実に簡単な問題だ。

「7700」

「正解！」

春樹がさらっと答えを言ってパシャッとカメラのシャッターが押される。だが気がつくのと周りにはクラスの皆がいた。どうやら取る瞬間にカメラに写るように入り込んだらしい。

それでもって箒はキッチンと一夏の隣のポジションをゲットしていた。

（ナイスだ、箒！）

春樹は箒の方を見て微笑みながらそう思った。

一方、箒自身はこの皆の流れに身を任せて一夏の隣をゲットしようと思死になっていたのだ。

案の定一夏の隣をゲットした箒は微妙に一夏の制服を掴んでいた。一夏も気がつかない程度もしているつもりでいるようだが、一夏は流石に気づいてしまう。

チラッと横を見ると箒が自分の袖をちょこっと握って恥かしそうにしているところを。

そんな箒を見て、ドキッとしてしまう一夏。今までこんな感じになる事はなかったのに、なんか意識してしまう。

（ほ、箒……？ えっと……なんで顔を赤くしているんだ！？）

一夏がそんなことを考えながら箒を見ていたものだからそれに気づいた箒は恥かしくなりパッと手を離れた。周りの女の子達はその様子を見て篠ノ之箒は織斑一夏を狙っている。幼馴染ってずるい。と思っていた。

第四章『クラス代表対抗戦 ― Match ―』

1

クラス代表決定パーティーを終え、部屋に戻ってきた一夏と春樹の二人はある意味疲れ切っていた。二人とも部屋に帰ってくるなりそれぞれのベットにダイブした。

「今日はお疲れ、一夏……」

「ああ、疲れたな……」

「そうだな……早く寝ようぜ……」

「ああ、そうだな……」

二人は、制服を脱いで、シャワーをどちらが先に使うか、じゃんけんをした。結果は一夏の勝利。一夏は先にシャワーを使い、最初に眠る事ができる権利を得た。

「じゃあ、先使わせてもらおうぞ」

「ああ、早くしろよ？」

「分かってるよ」

一夏は自分の着替えを持ってシャワールームに入ってしまった。

そして春樹は、今後の事を考える。

「……さて、どうしたものか……一夏、まさか本当にお前がな……今頃だけど……」

春樹は一人呟いていた。なにやら意味深な事みたいだが……、今の現状では何も分からないのが現実だ。

すると、春樹は携帯電話を手に取り誰かに電話をかけた。プルプルと電話のコール音が春樹の耳元で響く。三コールほど鳴ったところで相手が電話に出た。

「もしもし、束さん？」

その電話の相手の束とは、かのISの開発者であり、篠ノ之箒の姉である篠ノ之束のことである。『もしもし春にゃん？ どうし

たの〜?』

電話からは陽気な軽い感じな声が聞こえてくる。その声は可愛らしく、束と箒、どちらが姉なのか声だけでは分からないぐらいの幼さを感じる。

「……その春にゃんって呼び方よしてくださいよ……で、一夏の事なんですけど」

『はいはい、分かってるよ、春にゃんの聞きたい事はね……。一夏は恐らく春にゃんと同じだろうね。昨日の戦闘映像見せてもらったけど、IS起動が二回目であれだけの動き、そうじゃないと理解できないよ』

急に言葉が軽い感じから重い感じにシフトする。それに合わせたように春樹もいつもより声が低めになる。

「やっぱりですか……で、箒の方は?」

『箒ちゃんは、そうだね……とりあえず、IS自体は完成してるんだけど……』

「対応するコアが見つからない……」

『うんそう、一夏のコアは分かりやすかったんだけどね』

「そうですね……で、俺の機体って……」

そう。春樹のIS『熾天使^{セラフイム}』は他のISと比べて極めて異端なデザインだった。装甲はとても薄く、とてもスマートなボディ。まるでISではないものを見ている様だった。

『ああ、ビックリしてくれた〜? 春にゃんのは今までにないくらいにスマートなデザイン。今までにないような感じにしてみました〜、どう、気に入った?』

「はい、気に入りました。最高の機体ですよ」

『気に入ってくれて何より〜! 結構あれ作るのに苦労したんだよ〜』

「それはそれは、ありがとうございます、束さん」
すると一夏がシャワールームから出てきた。

「ふう〜、いいぞ、春樹」

「おう。じゃあこれで……はい」

そう言って通話を切る春樹。そして立ち上がってシャワールームに入ろうとした。

「って、春樹、誰に電話してたんだ？」

「ああ、ちよつとな……」

春樹は誤魔化すように颯爽とシャワールームに入っていった。

一夏は、そんな春樹を見て首を傾げた。気になった一夏はシャワールームに侵入し、春樹の携帯電話の履歴を確認しようと企んだ。

一夏は、そつとシャワールームのドアを開けた。そこは洗面所で、さらに奥にシャワーがある。洗面所には春樹が脱いだ制服がある。

一夏はそつと春樹の制服を広げ、春樹の携帯電話を探した。横からはシャワーの流れる音が続いている。どうやら春樹は一夏に気付いていないらしい。一夏はそのチャンス逃さないように素早く携帯電話の履歴を確認した。そこには篠ノ之束の表示。それを確認した一夏。するとシャワーの音が止む。一夏は慌てて携帯電話を元に戻し、最初となんら変わらない状態に手早く戻し、シャワールームから去った。

（一夏……そんなに気にならなくても……恐らく近いうちに分かる
ときが来るだろうよ……）

春樹はシャワーの蛇口を握りながらそう思っていた。

次の日、クラスにて一夏と春樹は女子達と話していた。最近はそれなりにクラスの女子と仲良くなってきた二人は、ある意味安堵していた。

話の内容は近日に行われるクラス対抗戦についてだ。

現在、専用機持ち生徒がいるクラスは一組と四組であり、一夏たちのいるクラスは一夏と春樹とセシリアの三人。四組には四人いるらしい。

そして、中国人の編入生がやってきたという話も出ている。学校が始まってまだ数日しか経っていないのに編入生とは、どんな事情があるのだろうか……。

「ま、クラス対抗戦は私達のクラスと四組だけだから余裕だよ」

とある生徒がそう言うのと、教室の入り口の方からなにやら聞き覚えがあるような声が聞こえてきた。

「その情報、古いよ!」

そこにいたのは少々小柄でツインテールの女の子が右手を腰に当てて立っていた。

「二組もクラス代表が専用機持ちになったの、そう簡単には優勝できないから!」

一夏と春樹がそこにいる女の子をじっと見つめる。その人が自分達の知っているあの人だということをよく確認して、一夏と春樹は一斉に声をかけた。

「「鈴! 鈴じゃないか!」」

そう、彼らが小学校五年生の初めに転校してきた中国人の女の子、ファン・リンイン鳳鈴音その人だった。

鈴音は彼らが中学校二年生のとくに突然転校してしまったが、な

んでめぐり合わせだろうか。

この学園では箒といい鈴音といい、一回別れてしまった人たちとよく再会する。

「そう、中国の代表候補生の鳳鈴音！ 今日には宣戦布告に来たってわけ！」

その鈴音の発言にクラスがざわめく。そして一夏は微笑みながら言った。

「鈴、何カッコつけてるんだ？ すっげー似合わないぞ」

そして春樹も一夏の隣に立って。

「そうだな、似合わないぞ鈴。相変わらずちっこいなあ」

そんな二人の言葉に怒ったのか、鈴音はこう言った。

「な、なんて事いうのよ、アンタ達は！」

と叫んだその瞬間、黒いスーツに身を包んだ美しい女性が鈴音の後ろに現れた。その女性は鈴音の頭に拳骨をする。

ゴンッ！！ という鈍い音が教室に響く。とてもじゃないが痛そうだ。

「いったー……。って、何を――」

鈴音は振り向き、拳骨をした人物を確認するなり言葉を失った。

何故なら振り返ってそう言おうとした相手は織斑千冬だったからだ。

「もうショートホームルームの時間だぞ……」

鈴音はまずいといった感じの顔をした。そして何故だか言葉が硬くなる。いや、身体も強張っていた。

「あ、ち……千冬さん……」

「学校では織斑先生と呼べ。さっさと自分のクラスに戻れ、邪魔だ」

「す、すみません……」

鈴音は小学生の頃から千冬のことを苦手だった。彼女が言うには絡みづらいついかなんとか。

「また後で来るからね、逃げないでよ、二人とも！」
と言って鈴音は自分のクラスに帰っていった。

そして昼食時、一夏たち皆で食堂の方へ来ていた。

鈴音は相変わらずラーメンを頼んでいた。昔から彼女はラーメンが好きだったのだ。

「相変わらずラーメンが好きだなあ、鈴」

春樹は鈴音に向かってそう言うと、彼女は頼んだラーメンを持ち帰り、いいじゃない、とそっぱを向いてさっさと行ってしまう。

一夏の昼食が完成するなり、自分の日替わりランチを持って鈴音のことを追いかける。次に春樹も自分の昼食を持って一夏の事を追いかけた。

開いている席に座る一夏たち。何故か知らないが、一夏と春樹と鈴音が使っているテーブルの周りにはその他に誰もいない。何故か一緒に席に座ろうとしないのだ。

そんな光景を見るなり、春樹は箒に向かって、大丈夫だからこっちに来い、と手招きした。

彼女は言われるままにこっちの方へ近寄り一夏の隣に座る。すると何故だかセシリアもついてきて彼女は春樹の横に座った。

「一夏、とりあえず鈴の事教えたら？」

春樹は彼女達の疑問に答えるべく、一夏に鈴音の事を説明するよう促した。

「あ、そうだ。箒は鈴の事知らなかったもんな。えっと、箒が引越してしまった次の年に鈴が転校してきたんだ。まあ、彼女とは良くも悪くも小中学校時代を共に過ごした親友ってところかな……」

鳳鈴音は一夏と春樹にとって、よく一緒に遊んだ良き女友達だった。

日本にいた頃はそこで中華料理店を営んでおり、良く一夏と春樹

はその中華料理店に食事に行ったものだった。そのときには鈴音が凄く歓迎してくれていたものだ。

「そうねえ……あの頃は楽しかったわね」

と彼女が言うと、一夏はとある疑問をぶつけてみた。

「ってか、いつ代表候補生になったんだ？」

という疑問に答える鈴音。

「まあ、中国に帰ってから、色々あってね。てかアンタ達こそニュースで見たときビックリしたじゃない！」

一夏と春樹はあの入試試験の時にISを動かしてしまった。

あの時はメディアに大きく取り上げられ、全国ネットでそのことがニュースになっていた。ISを動かす事ができる男現る。みたいな感じで放映されていたのだ。

「まあ、俺らもまさかこんな事になるとは思わなかったよ。ISを動かせるだなんて、自分でもビックリだよ」

春樹は鈴音に入試試験当時の事を言い聞かせる。

その一方一夏は昨日の春樹の電話相手が篠ノ之東だったことについて気になっていた。

何故、春樹は東と連絡を取っているのか。正直、春樹は彼女とはあんまり仲良くなかったし、今になって電話するなんてどういうことだろうか。

そもそも箒の姉は行方不明ではなかったのか。彼女と自分の知らないところで何かしらの交流があったのか。色んな考えが頭の中で渦巻いている。

「って一夏、聞いてる！？」

鈴音が考え事をしていた一夏に声をかけた。一夏は焦りながらそれに応答する。

その際、春樹の方をチラッと見るが、特に気にしていないようなので変に焦った自分が馬鹿だったと思う一夏であった。

「で、何だって？」

一夏は何の話だったか鈴音に尋ねた。

「はあ……だからあんた達の入試のときの話よ」

だが、一夏は慌てた様子を隠し切れないまま応答してしまった。

「ああ、あのときか。あの時は春樹の様子も変だったよな。いつもの春樹じゃないってかさ………」

一夏はあの時、あの入試の日の春樹がいつもと違う雰囲気だったのを思い出した。

そうだ、あの時IS学園の試験会場らしき所に行ってしまったのが、春樹が意図的にやった事だとしたら……。しかし、何のために？ 一夏はまた頭が混乱してしまう。

「一夏、一体どうしたというのだ、今日の一夏はなんか変だぞ？」
箒が一夏の事を心配していた。彼女は今日の今このときまで一夏の異変に気付いた彼女は一夏の事を観察していた。

しかし、妙に春樹の事を気にかけてそわそわしている様子だったのを箒は覚えていた。いったい一夏に何があったのか。箒は本気で一夏の事を心配していた。

そしてセシリアも、言葉を出さないが、一夏が少し変だということに流石に気付いていた。何か春樹さんの事を気にしている。いたい彼らに何があったのか。気になるセシリアであった。

「い、いや。なんでもない。じゃあ、先戻ってるわ」

一夏は食器を持って、先に戻ってしまった。

（やべーよ俺。もしかしたら大した事でもないかもしれないのに。なんか焦ってるよ俺、動揺しまくりじゃねえか……。とりあえず落ち着かなくちな）

一夏はゆっくりと深い深呼吸をして、教室に戻っていった。

放課後、一夏と春樹は箒と共にISの特訓をするべく、アリーナの方へ来ていた。

更には、クラス代表選出戦で戦い仲良くなったセシリア・オルコットも同席する事になった。

「一夏、お前の装備はその雪片式型しかない。じゃあ、接近戦しか出来ないわけだよな。だから、今回はセシリアと戦ってみろ。遠距離特化型の『ブルー・ティアーズ』となら、そういった戦闘に慣れることが出来るだろうしな。とりあえず今日はセシリアの全方位攻撃をひたすら避ける練習だな」

一夏の『白式』びやくしきには近距離戦闘用の長刀である『雪片式型』しか装備がない。

しかも、本来ISは後付で装備を増やす事ができる領域が存在しているが、白式にはそれが無く、完全なる近距離戦闘特化型ISであり、近距離戦闘を有利に行うための大型のスラスタによる高速移動。そして一瞬で最高速度近くまでスピードを出す高等技術である『瞬間加速』イクニッシン・ブーストがある。

これらを使いこなせれば、相手がどんな装備だろうと懷に潜り込む事が可能だろう。

しかし、あくまで「使いこなせれば」なのである。

『白式』びやくしきはIS中でナンバーワンの加速力・最高速度を誇るISだが、耐久力の低さもナンバーワンであり、その次に低いのが春樹の『熾天使』セラフィムである。

こういった機体特性故に、攻撃を受ける事は許されない。正に当たらない事を前提に作られていると言わんばかりである。

「わかりましたわ、では一夏さん。お相手願います」

「おう、よろしくな」

一夏とセシリアは空へ飛び上がり戦闘を始めた。

セシリアも一夏も、春樹との戦闘のときとは比べ物にならない位進化していた。セシリアに至っては相手の動きを予測しながらの射撃をし、一夏を苦しめている。

一方一夏は、そのセシリアの的確ないやらしい射撃をかわしている。

しかも、迷いがなくスムーズに『ブルー・ティアーズ』の全方位ビット攻撃を細かい動きでかわしているが、春樹の目には無駄な動きが多く写っていた。

もう少し動きを小さくして、最小の動きで相手の攻撃をかわす。それまで突き詰める事が出来れば合格ラインだと思っている。

そして春樹は箒の方を見て。

「じゃあ箒、こっちも練習しようか」

「ああ、よろしくな春樹」

「とりあえず箒はその『打鉄』^{うちがね}を使いこなせるようにならないとな。土台作りが完成すれば、応用が利くようになるし、下手すれば専用機持ちをも倒せるようになる」

『打鉄』^{うちがね}純国産の第二世代ISで、性能面では非常に安定しており、練習機としては最高のISである。

しかしながら、この『打鉄』^{うちがね}でも突き詰めていけば実戦でも十分戦えるISである。「箒はさ……強くなりたい？」

春樹は急にそんな質問を箒にした。すると箒は困ったように、

「強くなりたいか……。そうだな、出来るなら強くなりたいな」

「そうか、じゃあ、強くなりたい理由って聞いても大丈夫か？」

と、追加の質問を箒にするが、更に困ったような顔をして、

「理由か……私は……まだ強くなりたい理由を持っていないな」

箒の顔は少し自信を失ったようなものだった。それを見た春樹は微笑んでこう返す。

「じゃあ箒、宿題な。自分が強くなりたいのなら、その理由を考え

ておく事。強くなりたいたならその理由をはっきりさせないとな。人間はな、目標があれば努力できるんだ。それを覚えておけよ」

「わかった。簡潔でいい言葉だな……。考えておくよ」

箒は目を閉じてゆっくりと頷いた。そして目を瞑ったまま数秒。なにやら意思が決まったようにさつきとは目の色が違っていた。

そんな箒を見た春樹は勢いよく、

「じゃあ、訓練始めようか！」

「ああ、よろしく頼む。春樹」

春樹は白い翼を広げ飛び立つ。箒もそれに続き、日本の武將の鎧を連想させるグレーの機体『打鉄』うちがねが空へと舞った。

鳳鈴音はその四人の訓練をアリーナの観客席から見ていた。特に一夏と春樹を中心に。

見れば見るほど、ちょっとした絶望を感じる。

なんせ、彼らはISの操縦がとても上手かったのだ。一夏は無数に飛んで来るエネルギー弾を華麗に避けている。ビット攻撃による全方位攻撃だというのに当たる気配がまるでないのだ。

そして、春樹はなにやら基礎的なことをやっている。恐らく操縦が全然慣れていない人に教えているのだろう。

しかし、そういう基礎的なことは、その人の実力がすぐ分かってしまうものだ。そういう土台作りがキチンと出来ている人ほど、ISの操縦は上手い。

特に春樹は非常に上手だった。地上に立っている状態からの上昇。上手な人ほど、安定していて、真っ直ぐに飛ぶし、初速が速い。そして加速、上昇し、そこから急降下。それから完全停止する。

つまり、地面に着く直前でホバリングし、安全に地面に足をつく方法であり、それは地面に近ければ近いほど、隙が小さくなる。

ただ、上手い人でも床上十センチ位であるが、春樹は床上一センチと言ったところでホバリングしていた。正直、狂気の沙汰である。それに驚愕する鈴音。

（はぁ！？ 何なのよ、アイツ。頭のネジが二三個吹っ飛んでる！？）

そして練習している篠ノ之箒はやはり地面からまだ距離があり、随分と高い位置で止まっている。普通はそうだ。まだ慣れない内は恐怖との戦いである。その恐怖と戦い、自分の技術を信じる事で初めて地面ギリギリまで寄れるのだ。

しかし、春樹はまだISを操縦してまだ何日も絶っていないはずなのに、あれだけのことをやっている。彼のISの操縦テクニクは異常だ。

（あいつ、本当にISに触れて数日しか経っていないの？　もしかしたら、皆が気付かないところでずっと前からISの操縦の特訓してたりして……ってないか）

鈴音がそうこう考えているとみんなの特訓が終わった様で、その場からいなくなっている。すっかり周りは暗くなってしまい、今頃皆は夕食を食べている時間だろう。

鈴音は、とりあえず夕食を取るためにアリーナから立ち去って行った。

そして彼女は考える。

クラス対抗戦は本当に勝てるのか。今回戦うことになるアイツ……一夏という天性の才能を持っていると言わんばかりの彼らに自分は勝てるのか、と不安になっていた。

数日後、ついにクラス代表対抗戦が行われる事になった。これは新一年生のクラスから代表者を出し、競う行事であり、更に優勝者にはIS学園付近にある洋菓子店のデザート食べ放題券が渡されるため、クラスの女子は代表者者である一夏に絶対優勝するように、と言われていた。

一夏はこの日の為に今まで特訓を続けていた。最初は回避行動を突き詰め、さらにそこから反撃できるように、主にセシリアを相手にして頑張ってきた。

現在、一夏たちはトーナメント表の前に来ている。もちろん対戦相手を確認するためだ。

しかし、まだ対戦相手はわからない状態にある。緊張する中、トーナメント表をじっと見つめる一夏と春樹。

そしてついにトーナメント表に対戦相手の情報が表示された。

一夏は自分は誰と戦うのか確認すると、なんと一回戦の一番最初であり、一夏の横に書かれていた名前は鳳鈴音その人だった。

いきなり鈴音と戦う事になり、一夏は少し楽しみに感じていた。

「初戦から鈴とか……頑張れよ、一夏」

春樹はトーナメント表を見るなりそう言った。

「ああ、鈴か……どんな機体なんだろうな？」

「まあ、それは山田先生に聞いてみるか」

彼らは、その場から立ち去り山田先生の事を探す。とりあえず職員室に向かった彼ら。

しかし、そこには山田先生がいなかった。恐らくこういった大きな大会だからアリーナのピットにいるのだろう。

一夏と春樹はアリーナの方へ向かい、職員がいるであろうアリー

ナのモニタールームの前に立つ。「失礼します」

そう言って一夏と春樹の二人は入室した。そこには山田先生と千冬がいた。一回戦の最初の試合が一夏の試合の為、既にスタンバイしているのだろう。

やっぱりここか、という風な顔をする二人。

「聞きたいことがあります。鳳鈴音の機体ってどんな感じなんですか？」

一夏は山田先生に聞くと、すぐに山田先生が説明してくれた。

鳳鈴音が扱うIS名前は『シエンロン甲龍』という。甲龍の装備は『そうてんが双天牙月』は大型の二本の青龍刀であり、それらを連結させると投擲武器として使用できる。

そして、甲龍最大の特徴である『りゅうほう龍砲』は空間自体に圧力をかけ、砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲。砲弾だけではなく、砲身すら目に見えないのが特徴。砲身の稼動限界角度はないらしい。以上が甲龍の装備であり、特に目立ったものはない。しかし言葉は悪いが、こういう地味なものほど実戦向きで扱いやすい。

聞く以上に注意していないといけない相手である。

「なるほど、鈴はそういう機体か……コイツは厄介だな一夏」

「ああ、みたいだな」

今まで一夏は回避を中心に特訓はしてきたものの、見えない砲弾となると少々つらいものがあるし、『びやくしき白式』は装甲が薄い為、当たる事すら許されない。

だから、この勝負に勝つには最初の龍砲の攻撃をいかに対処し、見極めるかが勝負のカギとなるだろう。

「——だから一夏、鈴と相手するときは迂闊に近寄らない方が良さそうだな。上手い具合に龍砲の発射を誘って、それを見極めるしかない。龍砲の発射後が零落白夜のチャンスになるだろうよ」

「みたいだな……、上手くやるよ。絶対に勝つ！」

「おう、頑張れよ！」

しかし、一夏の成長速度は異常だった。それは代表候補生である

セシリアをも凌ぐ成長で、彼女の放つ何発ものビーム攻撃を余裕を持って華麗に避けられるようになっていた。

もちろん、セシリアも成長していないわけではない。彼女も流石代表候補生だけあって、一夏との練習で、色々なものに気づき、それを自分のものにしていった。それによって、セシリアはさらに強くなったはずなのである。

なのに、一夏はそれを凌いでいた。

これが天性の才能……というものなのだろうか……？

一夏は自分のISのチェックをしている。

試合まで後三十分。

なんだかんだでクラス代表になったが、代表になり、ここまで頑張ってきたからには優勝したいし、クラスの皆に食べ放題券をあげて喜んでもらいたいと、そう思った一夏。

やはり彼はどこまでも優しい。そんな風に他人を思いやることを普通にやろうとする。

それが一夏の良い所である。箒が彼に惚れたのはそこにあるのかもしれない。

彼女は剣道をやっていたからか力が強く、そのことから「おとしおんな男女」と呼ばれ、小学生の頃いじめを受けていたことがあった。それを自らやめさせたのは一夏であった。正直、男の春樹から見てもあの行動はカッコいいと思ったのだ。そして助けられた箒はこれをカッコいいと思わないはずも無く、結果一夏に惚れたのだ。

現状では地味にアピールを続けている箒。ISのチェックをしている今でも箒は一夏の隣で話し相手になっている。

一夏がこの程度で気になる女性になる事は難しいだろう。特にお互いに色んなことを知ってしまったっている幼馴染は。

しかし、まだ希望はある。もしこれが小学生のころから今まで一緒、ということになれば確実に彼女彼氏という関係になる事は難しかっただろう。

何故なら、今まで一緒に仲良くやってきた「篠ノ之箒」という認

識にしかないのだ。今まで楽しく仲良くやってきたことが当然で、そういう関係になるなんて考えられないからだ。

だが、彼女は一回離れ離れになったということが逆に恋愛の発展に貢献しているといっても過言ではなかった。

しかも六年ぶりという長い期間であることが、一夏を振り向かせるには十分なアドバンテージになりうる。

春樹は遠くで二人を見ていた。

その雰囲気についてニヤニヤしてしまっている。彼にとってこの二人の幸せは、間接的にはあるが、自分の幸せになりうるのだ。

何故なら、一夏と箒は昔からの親友で、大切な『仲間』でもあるから。理由はそれだけだ。とても簡単な理由。だが、それで十分だ。

「お前は、何ニヤニヤしてるんだ？」

すると千冬が春樹に向かって話しかけてきた。

「いや、あの二人を見てるとつい……あはは……」

「……そうか、確かに仲良くしているあの二人は微笑ましいな」

「俺はあの二人を応援してるんですよ。くっついたらいいな〜って」

「そうか……、それそろ時間だ。葵、織斑に声をかけてやってくれ」

「わかりました」

春樹は一夏の方へ近づいて、そろそろ試合の時間だとい事を伝えた。

しかし、春樹は気になっていた。さっきの千冬の雰囲気である。

なんだか残念そうというか哀愁漂うというか……。

（あいかわらず千冬姉ちゃんは一夏に依存してるよな）

春樹はそう思っていた。

千冬は昔からそうだ、一夏のことを大好きなんだろう。それは当然恋愛対象として、ということではない。家族として、弟として一夏の事が好きなのだ。

それを世間ではブラコンというのだろうか……。

ついに試合のときがやって来た。今、ピットには一夏が『白式』びやくしきを身に纏い、試合のコールを待っている。

春樹や箒、セシリアは千冬、山田先生とモニタールームでモニタを見つめて一夏の事を見守っている。今まで共に特訓してきた仲だ。是非勝って欲しい。

そして、ついに第一回戦の開始を宣言された。

一夏と鈴音は共にピットからアリーナの方へ飛び出す。

「一夏、手加減はしないわよ！」

「こっちこそ、お前には負けないからな」

目の前にはホログラムで一夏と鈴音の名前が投射されていた。

そして、試合開始のカウントダウンが行われる。

一〇から九、段々と数字が小さくなっていき……ついにその数字は〇となった。

その瞬間、試合開始の音が大きく鳴り、両者一斉に動き出す。

最初は両者共々様子見の動き、そして最初に動き出したのは鈴音だった。彼女は『双天牙月』そうてんがげつを一夏に叩きつけるように攻撃した。その重い攻撃はまともに喰らったら致命傷を負ってしまうだろう。しかし一夏はスピードがあまりないその攻撃を軽くかわす。

そう、鈴音の『甲龍』シエンロンの弱点はスピードだ。超高速型の『白式』びやくしきが高速移動を利用しだすと、鈴音は非常につらくなる。

一夏は決して動きが止まる事はない。止まってしまうえばたちまち『龍砲』の餌食になってしまう。

しかし、無闇に鈴音に攻撃をしようとしても『龍砲』の餌食になってしまう。

試合は防戦一方の膠着状態。一夏はずっと動き回り、鈴音の『双』そ
うてんがげつ

天牙月』の攻撃をかわし続けている。

痺れを切らした鈴音はついに『龍砲』を使い出す。

しかし、動き回る一夏に当たる事はなかった。

その瞬間、一夏が動き出す。一直線に鈴音に向かう一夏、彼が手に握っている長刀『雪片・弑型』は実体験からエネルギーの刃になる。

『零落白夜』

一夏はそれを起動させ、鈴音に切りかかろうとするが、それは中止せざるをおえなかった。

鈴音が『龍砲』を発射したのだ。

「なっ……!？」

一夏は龍砲の銃口が光っているのに気がつき、緊急回避を行った。無理やり身体を右に動かし、間一髪で龍砲の攻撃をかわす。

「ふん、連射は出来ないと思ったの？ でも私の龍砲は二門あるのよ？」

そう、鈴音の『龍砲』は背中 of 左右に一門ずつ、合計で二門あるのだ。右で一発撃ち、そして左で続けて撃てば二連射できるのだ。

それに気がつかなかった一夏は自分で自分を責めていた。

（くそっ!! なんでそれに気がつかなかった!？ 連射は不可能と踏んでいたが、これだと上手くやればずっと龍砲を撃ち続けられる……）

もし、片方の龍砲を撃ったときに、次の発射までのタイムラグがほとんどなければ右の龍砲を撃ち、そして左を撃つ。そして今度は右の龍砲を……とできるかもしれないのだ。

（こればかりは、試してみないと分からないな……）

一夏は覚悟を決めて鈴音に突っ込む。

勿論、鈴音はそんな直線的な接近は許すはずもなく、龍砲を撃ち込む。しかしそれはかわされる。次に先ほど撃たなかったほうの龍砲で一夏を追撃、しかしそれもかわされる。

（なんで……砲弾は見えないはずなのに……なんでそんなに悠々と

かわせるの!?)

鈴音は一夏が軽々と龍砲の攻撃をかわしていることに驚いていた。あまりにも余裕な表情でかわしているものだから、鈴音が驚くのも無理はない。

しかし、現実とは違った。一夏もいっぱいいっぱいだった。見えな
い砲弾・砲身というのをかわすのは精神をすり減らしていく。

しかし、龍砲は発射する際、『龍砲』自体が僅かに発光する。それを見た一夏は砲弾を撃ち出すタイミングを感覚だが見計らってその瞬間にかわしているだけだった。いつ被弾してもおかしくはない。そんな状態が続いていた。

(やっぱり、発射した後のタイムラグはほとんどない……)

それはつまり連射が可能だということが分かったのだ。

(そうなれば、瞬間加速イグニッション・ブーストしかないか……)

そう思った一夏は作戦を変更。死角を突くような動きに変わる。

鈴音も一夏の動きが変わったのは分かっていたが、作戦までは分からなかった。

一夏は、龍砲を動き回ってかわす。そして上手い具合に鈴音の死角になるような位置に来る。

一夏を見失った鈴音は、センサーを頼りに一夏をもう一回視界に入れる為、後ろに目をやろうとしたとき、一夏は一瞬で最高速度になり鈴音に切りかかる。

「しまっ……」

その瞬間だった。鈴音の後ろにエネルギー弾が飛んできた。しかもアリーナ全体を覆っているエネルギーバリアをも壊すほどの攻撃力。一夏は急遽、零落白夜の起動をやめて鈴音を庇う姿勢に入る。

「鈴!~!」

一夏は叫んで鈴音の事を抱えた。そのときの『白式』びやくしきは最高速度をマーク。一体なにが起こったかわからないまま鈴音のことを助けた。

さっきの奴は地面にぶつかったのか大爆発がおき、そこにはクレ

Ｉターが出来ていた。

そして、そこから現れたのは全身黒く、腕が地面まであった。全身がＩＳの装甲で包まれたのフルアーマーのＩＳだった。

「なんだよ、これ……」

一夏はつぶやく。

『試合中止！ 織斑！ 鳳！^{ファン} 直ちに退避しろ！』

一夏と鈴音のＩＳには千冬が放ったその言葉が響いていた。

モニタールームにいた山田先生、織斑千冬、篠ノ之箒、セシリア・オルコットはたった今不法侵入してきたISを確認していた。

山田先生はすぐさま一夏と鈴音にこれから先生達による制圧部隊を送るから、すぐさま逃げるように言ったが、一夏はまるで言う事を聞こうとはしなかった。アリーナに取り残されている生徒達が逃げるか、その制圧部隊が来るまでは持ちこたえろと言っている。

山田先生はその一夏の答えに猛反撃、駄目だと強く言う。もしかしたら命か危険に晒されるかもしれないこの事態。そんなものを生徒に任せるわけにはいかない、と。

しかし、千冬はその一夏の申請を渋々許可した。本人達がやると言っているなら、やらせる。どの道、このままでは戦おうが戦わなからうが、一夏たちに頑張ってもらわなければ、IS学園が最悪な状態になる可能性が高いからだ。

あの黒い謎のIS。

学校のアリーナのエネルギーバリアをも壊すほどの威力を持っているエネルギー弾に謎の頭から足まで装甲を身につけたフルアーマーのIS。

異常事態。

その場にいた四人はそう思っていたのだ。

しかし、この場で表情を一切変えない人物がいた。

葵春樹だ。

彼はモニタをじっと見つめ、表情一つ変えずに真剣な表情で何かを考えていた。

そして、これだけの異常事態に動じない春樹を他四人の女性達是不審に思ったのだ。普通はこれだけの大騒ぎになれば、少しでもパ

ニツクになってもいいだろう。

あの謎のISが現れたとき、箒やセシリアは当然の如く驚き、山田先生、千冬までもが焦りを見出していた。

いままで先生をやってきて、色んな事を経験してきた先生二人でも、こんな事態は初めてなのだ。普通は焦る。しかも千冬は大事な弟がその謎のISを目の前にしているのだ。

「先生、何故動かないのです！　こうなったら私が出ますわ、先生、ISの使用許可を！」

「却下する！」

セシリアの申し出を、すぐさま却下した千冬。

これには訳がある。セシリアと一夏は今まで特訓してきたものの、連携訓練はしてきていないし、そもそもセシリアの『ブルー・ティアーズ』はビットを使った全包围攻撃が一番の特徴である。

しかし、この武器は複数の敵と戦う場合非常に有用であるが、一体の敵に対し、複数で相手にする場合、セシリアの『ブルー・ティアーズ』の武装はむしろ足を引っ張ってしまうからだ。

千冬はそう説明すると、セシリアはおとなしく引き下がった。今は自分の出番ではないことを理解したのだろう。そして千冬は話を続けた。

「それに、この通りだ」

モニタを指差し、

「これでは救援も送れない。しかも通信も繋がりにくくなっている。恐らく電波のジャックをしているのだろうな」

モニタには『LEVEL 4』と書いてある。これはIS学園が何らかの緊急事態に陥ったときの防災機能である。しかし、アリーナの観客席を守る為の遮断シールドが完全ロック。さらに全ての扉にロックがかかっていた。

この状況下において、ふさわしくない対応。

それは何者かが、外からこのIS学園をハッキングして、この防災機能を発動させたのだろう。しかも『LEVEL 4』防災機能

の最高レベルであるが、これだけのレベルははっきり言って、よっぽどの事がない限りこれだけのレベルになる事はない。『LEVE L 4』は最終手段。外からの操作はおろか、内側からの操作でさえ解除する事が不可能になる。最後の砦だ。これを発動するとなればIS学園の一大事であろう。

これを解除するには特別な措置が必要である。専用の解除ソフトが入ったディスクが必要なのだが、そのディスクもそれを操作する装置も、今は使うことが出来ない。今は全員身動きが取れない状態にあるため、何もする事ができないのだ。

「そんな……」

セシリアはそう呟く。

外への連絡もできない。先生達はこの防災機能のせいでアリーナ内へ入れない。となれば、一夏たちに任せるしかなくなる。

すると、春樹は携帯電話を取り出した。なにやら電話をかけている。電波はジャックされていて通話は出来ないはずなのに何故……？
そして春樹は電話の相手と繋がったようだ。

「もしもし、束さん？」

その春樹の言葉にそこにいた他四人が一斉に春樹の方を向いた。

一夏と鈴音の二人は謎のISと戦っている。

一夏は『白式』のスピードを生かして謎のISの攻撃をかわし、攻撃のタイミングを見計らっていた。

零落白夜で攻撃する為に、あまり動き続けるのはよくない。『白式』は短期決着型であり、長期戦になれば稼動エネルギーの問題でISが停止してしまう危険があるのだ。

だからこそ、ここぞというときに零落白夜を温存して戦うしかない。一秒でも長く零落白夜を使っていたい為、稼動エネルギーの管理を忘れなかった。

「一夏、どうすんのよあれ！」

鈴音は焦っていた。正体不明のISは声をかけても全く反応しない。ただ私達を襲うだけ。しかも奴の攻撃は遅いながらも重さを持っていたためにこれこそ当たったら最後だろう。もしかしたら命の保障はないかもしれない。

「どうするも、アイツを停止させるしかないだろ！」

謎のISは地面まである腕には超高出力ビーム砲を装備しており、その重量のあるボディで格闘攻撃をしてくる。

格闘攻撃をしてくるときは、素早く回転しながら殴ってくる。まるでコマのように高速回転しながらこちらに向かってくる攻撃は絶対に当たるわけにはいかない。

それを受けたならば『絶対防御』なんてものはお構いなしに叩きつけられるだろう。ISの機能も絶対ではない。そのISの耐える限界を超えたならば命の保障はできなくなる。

鈴音は『龍砲』を発射するが、たとえ当たっても何事もなかったように接近してくる。相手はのけぞるというものを知らないのか、

というぐらい硬かった。

そして一夏は思う。零落白夜でも切り裂けなかったりするのだろうか、と。

「なんなのよアイツ！ あんなの倒せるの！？」

「わからない、でもやるしかないだろ！」

一夏と鈴音はこの絶望的状况に対し少しイラついていた。それは不安というものからできたものであり、それはこの二人を衝突させてしまう。

「ちょっと、何してんのよ！」

一夏は零落白夜を起動させ、無理やり謎のISに近づこうとするが、

謎のISはその大きな腕で強烈なパンチを放ってきた。

一夏はそれを回避するが、追撃としてビームが飛んでくる。

「っ！？」

一夏はそれ避けるが、無理な軌道でISの動きを乱してしまう。そこに更にビームを打ち込まれる一夏。彼は正直もう駄目だと思った。

しかし鈴音が一夏を庇い、体当たりで一夏を吹き飛ばす。

一夏を吹き飛ばした矢先、鈴音の目の前にはビームが向かってくる。なにか考える暇もなく、鈴音にそのビームが直撃。

鈴音はシールドエネルギーが0になってしまった。鈴音の『シエンロン甲龍』はまだシールドエネルギーに余裕があったはずだ。なのにあのビームをくらった瞬間、鈴音のシールドエネルギーが0になった。

「！？ ……うわあああああああああああ！！」

一夏は叫んだ。こうこれ以上は出ないぐらいに。

鈴音が、やられてしまった。自分を庇って、あの高威力のビームをくらってしまったのだ。

彼は絶望する。自分の無能さに。

（なんだよ……アイツ……化け物かよ……）

一夏の顔には本当に絶望しか感じられなくなっていた。

鈴音が撃墜されてしまう数分前、春樹は束に電話をかけていた。そう、あの現在行方不明でどこにいるかも分からず、連絡がつかない状態になっていたはずのISの生みの親、篠ノ之束その人だ。しかし、今確かに春樹は「束」と確かに電話相手の名前をそう呼んだのだ。

「今、こっちに黒くてでかい腕のISが襲ってきたんですが、何かわかります？」

千冬は春樹の電話を黙って聞いていた。

千冬と束は昔からの仲であり、彼女はIS開発を束と共にしていた。そしてIS第一号『白騎士』のパイロットが織斑千冬だというのは有名な話である。

「はい、なるほど……じゃあ、ぶっ壊しても大丈夫なんですね？」

……あはは、そこまではしませんから。……はい、分かりました。では早急に対処します」

春樹は電話を切り、それをしまい込むと制服を脱ぎ始めた。もちろん、ISを装着する用のISスーツになる為である。

そして、誰の許可を取るわけでもなく、胸元の十字架の形をしたペンダントを握る。それは待機状態の『熾天使^{セラフィム}』であり、それ起動させてその身をISで包み込む。モニタームには美しくしなやかな白い美しい翼が広がる。

突然の春樹の行動に戸惑いながらも千冬は今の行動の意味と問う。

「何をしている！ 葵、説明してくれるんだろうな？」

「Need not to know.」とでも言っておきましょう。悪いですが、こういうことは言えません。私にはその権限がありませんから。ただ言えることは、詳しい事は篠ノ之束にお聞き

ください。ということですかね」

と言って熾^{セラフ}天使の武器の中で一番威力がある『バスターライフル』を取り出した。強力なビームライフルを握りしめて……………。

するとモニタールームはスピーカーから流れてきた一夏の叫び声で包まれた。鳳鈴音の名前をこれ以上とないぐらいの大声で。

「一夏!？」

箒はずっとこの雰囲気押しつぶされ、黙り込んでいたが、一夏の叫び声を聞くなりモニタに駆け寄った。そこには鳳鈴音が撃墜され落下している光景だった。

「鳳^{ファン}……鈴音^{リンイン}……？」

箒は信じられなかった。鈴音は左腕の辺りが血まみれになったように見える。出血しているのだろうか、ISはここまで危険なものになってしまふのだろうか……。そう思った箒は束のことが頭に浮かんだ。

姉がインフィニット・ストラトスなど作らなければ、こんな事になるなんてことはなかったのではないのか。もうどうしようもない現実を否定したがる箒だった。

「……………みんな、離れてろ」

春樹はいつもより低く、ドスの利いた声でそう言った。

しかし、突然の事で誰も動けなかった。

「離れろって言うてるだろォ!!」

怒り狂った声で四人を脅した。山田先生はモニタの前でビクツと身体を強張らせ、箒とセシリアは黙ってゆっくりと後ろに下がった。そして千冬は内心どうなのか分からないが、外見はいつも通りのクールな彼女だった。

そして、『バスターライフル』の引き金が引かれた。その瞬間ビームが発射され、開かなくなっていたドアを丸ごと吹き飛ばした。そして、彼はモニタールームから出て行った。

(Need not to know. あなたは知る必要はない……………か。春樹、お前は今何をしているんだ?)

千冬は春樹が破壊した扉の向こう側をずっと見つめていた。

一夏は、撃墜され気を失って落下している鈴音を受け止める。

そして鈴音を見ると彼女の左腕が血まみれになっていた。

「う、うわあああああああああああああああ！！」

さつきよりも大きな声で一夏は叫ぶ。さつきの自分の何も考えていない行動で鈴音を大怪我させてしまった。自分のせいで、自分のせいで、自分のせいで………、一夏の頭の中ではもうそれしか考えられなかった。

小学校三年生から中学校二年生までずっと仲がよかった彼女。

そして、ここで再会できて、大いに喜んでいた彼女。一夏の頭の中にいままでの鈴音との思い出が蘇ってくる。そしてついに一夏は泣き出してしまった。

しかし、目の前にはまだ謎のISがいる。悲しんでいる暇などなかった。そのISは右手を一夏の方に向けてビームを撃とうとしていたのだ。

チャージしているのか、銃口に光が集まっているように見える。

そして……発射された。

一夏は鈴音を抱きかかえながら、ボロボロに泣きながら、それに気付きビームを回避した。

（そうだよ、こ………ここで………負けるわけには………いけないんだよ！ 鈴が俺を庇ってこんな大怪我を負ったってなら、絶対にアイツをぶち殺す！）

一夏の目は涙は流しているものの、目の色が違った。目の前にいる敵をぶち殺す。そういった殺気が溢れていたのだ。

ビーム攻撃をかわしている一夏。しかし、鈴音を抱きながら戦闘を行えるはずもなく、ただかわすだけしか出来なかった。

敵は接近して格闘攻撃をしてくるが、『白式』の持ち前のスピードで距離を取る。

（くっ、これじゃあ攻撃も出来ない……でも鈴を適当なところに置いてくるわけにもいかないし……どうすればいいんだよ！）

このままじゃジリ貧だ。いつまでもかわし続けるなんてことは出来るはずもない。

一夏も今まで鍛えてきたとはいえ、限界はあるし、ISにだって稼動エネルギーを失えば動かなくなる。

正直、一夏は気を張る戦闘が続いて集中力が失いかけてきているのがわかる。

このままじゃ、死ぬ。

そう思った矢先の事だ、何度距離を取ろうが接近して格闘戦に持ち込もうとする謎のIS。そしてちょっとした気の緩みで奴のパンチを食らいそうになった。とてもごつく、大きな拳。それをくろうという事は……。

一夏は目の前に巨大な拳が見えた時点で、一夏は覚悟した。俺はここで死ぬのだと。

その瞬間、一夏の目の前にオレンジ色の一閃が上から下へと貫いた。そして、目の前の謎のISの腕が若干砕けていた。

「すまん、一夏。遅くなった」

一夏の頭上には葵春樹が白い翼を広げてそこにいた。彼の手には『バスターライフル』が握られていた。

「じゃあ一夏、お前は休んでろ。鈴のことよろしくな。で、出来ればでもいいが、俺の戦い、よく見てろよ？」

春樹は『バスターライフル』を量子化し、剣である『シャープネス・ブレード』を取り出した。そして一夏の武器も長刀である。

（ま、まさか、良く見てろって……そういうことなのか？）

春樹が『シャープネス・ブレード』を取り出した理由。それは一夏には近接戦闘のやり方を見ていろということだ。

春樹は謎のISに『シャープネス・ブレード』を握り締めて向か

っていった。

敵は大きな拳で反撃に出ようとするが、その拳のところにはもう春樹は居なかった。どこにいるのかといえば敵ISの下にいたのだ。パンチが当たる瞬間、推進剤の噴射をやめて翼をたたみこむ。そうする事で自身の身体は急降下。その行動で敵ISの攻撃を回避して、下から敵ISを切りつけた。

しかし、その攻撃は大したものにはならなかった。

やはり実体剣というのが駄目だったのか？　と思った。実体剣・実弾の武器はあまり効かないのではないか、と思った春樹は『シャーン・ブレード』のビームを展開し、ビームブレード化した。これにより、切り裂けなかった謎のISのボディも切り裂けるはずだ。「よし……じゃあ、お前を地獄の底に突き落としてやるよ！」

謎のISはビーム攻撃を右、左へとかわし、敵ISに近づく。そして接近戦闘をする。という同じパターンが続いているのだ。

しかし、それは全く持って無駄がなく、強いのは確かな事であるが、そこからチャンスは廻ってくる。

もう春樹は何をするべきなのか、もう分かっていた。

右腕のパンチを最小限の動きでかわし、剣を勢いよく振り、右腕を切断した。

（なんだよ、あれ……シールドは？　ISって操縦者の安全は確保されるんじゃないのかよ……！　何なんだよ、この状況は……！？）
一夏は鈴音の事を地面に下ろして鈴音の事を見守りながら、同時に春樹のことも見ていた。

そして、また一旦距離を置き、さっきと同じ動きで左腕も切断した。

この謎のISは同じ事にひっかかっていた。全く同じ事をされて左腕を切断されたのだ。何かがおかしい。一夏はそう思っていた。
（もしかしたらあれ、人が乗ってない？　いや、それはありえない。AIで動いているISだなんて聞いた事がない。でもあのIS……どうということなんだ！？）

そして、春樹はついに敵ISの両足を切断したのだ。また、同じ事に引かかる敵IS。そして最後の仕上げに敵ISのスラスターなど、推進剤を噴射するものを全て破壊していき、敵ISは全く動けなくなってしまった。

（流石、試験段階のことはある、弱い……）

春樹はそう思っていた。

一夏は春樹を見て、あいつはやっぱり何かを隠している。そしてあのISのことも。今では両足、両腕、そして推進剤噴射口が全て破壊され、身動きが取れないあの黒い謎のISのことも春樹は知っているんじゃないか。

そう思ったが、もう体力の限界に来てしまったのか、一夏の視界がぼやけ始めた。

（あ、あれ……もう……だめだ……）

そして一夏は眠ってしまった。

終章『葵春樹と篠ノ之束 —Huddle—』

織斑一夏は目を覚ました。自分はベットで寝ている、と理解する。そして目に映った天井は見たことがないものだった。

「一夏……目を覚ましたのか」

一夏がその声に反応して横を見てみるとそこにいたのは織斑千冬だった。彼女は凄く安心したようで、今までにないような微笑みを見せている。

「ちふ……織斑先生……」

一夏は呼び慣れた「千冬姉ちふゆねえ」と呼びそうになったが、慌てて訂正したが、千冬はこの学園でいつも見るような表情はそこになく、昔家で一緒に過ごしていたときにいつも見ていた極上の微笑みで、

「今は……千冬姉ちふゆねえでもいいぞ。私だってお前を名前で呼んでるしな」と言った。

「千冬姉、ここはどこだ？」

「ここは保健室だ。一夏はここに来るのは初めてか？ まあ、お前ならISで怪我なんてことは滅多にないだろうしな」

一夏は理解する。自分はおの後、気を失って保健室に運ばれたのだろう、と。

そして彼は重大な事を思い出す。

鳳鈴音は無事なのかどうなのか、この保健室にはいないようだし、やはりあの出血ではこんなところでは対処しきれないのだろう。

「千冬姉！ 鈴は！？」

「彼女は病院の方へ運ばれたよ。腕が折れているようだが、今後のISの操縦に支障はないそうだ。ISの絶対防御が彼女を守ってくれたな」

「でも、骨折って……。あの黒いISはなんだったんだ？」

千冬は目を閉じ、俯いた。

「すまないな、一夏。それはお前には教えられない」

「そうか……じゃあ春樹は？ あいつはどうしたんだ？」

一夏は気になっていた。今まで見せなかった強さ。そしてあの I S を圧倒する I S。彼の『熾天使^{セラフィム}』は一体何なのか。

「あいつは今――」

葵春樹は篠ノ之束と会っていた。

その場所は窓もなく、エアコン等で温度調整されているような感じだ。どこかの施設のような感じであるが、どこかの地下なのだろうか？

しかし、それが何処にあるのか分からないし、普通の人には分かんなかった。

春樹と束は紅い I S を目の前にしていた。

「コイツが『紅椿』ですか……、うん、良い感じですね」

「でしよ、春ちゃんの希望していた機能とデザインを実現しました！ どう？ 偉いでしょ？」

「はい、偉いですね」

春樹は若干の棒読みで束の頭を撫でた。こんなノリは今に始まった訳じゃなく。束と会うと大体こんなノリになっている。

「えへへ、春ちゃんに褒めてもらっちゃった」

「はあ……。で、コアの方は？」

春樹はため息を吐き、そして極真面目な表情になり、会話を続けた。

「まだ。中々見つからないんだ」

そして、束も真面目な表情になって言葉を返す。

「そうですね、地道に探すしかありませんよね、こればかりは……」

「うん、全部で四六七個のコアから箒ちゃんと同調するものを探すのは、骨が折れる作業だよ」

「仕方が無いですよ、こればかりは」

この世に存在するISの動力部分である四六七個のコア。何故、四六七個なのか、その理由はこの探し物にあるのかもしれない。箒と同調する。

これはどういうことなのか、今のこの二人の会話だけでは何も見えてこない。

「そうだよね、頑張るよ束は！」

「ああ、よろしく頼みます」

「うん、で、あの黒いISは……春にゃんが倒したと。どうだった？」

「あのISは物自体は超高性能でしたが、AIはまだ試作段階といったところでしょうか。動きが単調でしたし、恐らくはテスト感覚で送り込んだのかと……」

あのIS学園を襲った謎の黒いISは人が乗っていなかったのだ。全て機械仕掛けの自動起立型、AIで動くISだったのだ。

ISは人が乗らないと動かない、そういうものだったのだ。

しかし、動かせたということは……

「やっぱりAIか……私が作ったコアとは全く違うものを使っているのかもね」

「その通り、あれは今存在するコアの情報とまったく一致しないものでした。恐らくは連中が独自に作ったものでしょうね」

「心配だね、あいつらにとってIS学園というパイロット育成学校というものは、万が一のときのために潰しておきたいしね。変に強い奴が出てきても厄介なだけだし」

「まあ、滅多に現れないでしょう。普通の人には因子がないんですから」

「そうだけど、万が一って事もあるでしょ？」

「それは、そうですね。でも大丈夫。あそこには俺と一夏、そして箒がいます。これから三年間はIS学園は無事ですよ」

「あはは、心強いね」

そして時計を見る春樹、時計は昼の十二時半を過ぎていた。ちょ

うどお昼時、おなかもすいてきたので、東と一緒に食べに行こうと思った。

「そうだ、一緒にお昼ごはんでもどうです？」

「え、春にゃんにご飯！？ はいはいはーい！ 行きます！ 絶対に行きます！ どんなお店だってOK！ よし食べに行こう！ 春にゃん行くよー！」

（俺が誘ったっていうのに指導権は東さんに握られているみたいだな……）

すると、東は春樹と腕にぎゅっと抱きつく。しかも、自分の自慢の豊満な胸を押し付けてアピールしているようだった。

「ほら、行こうよー」

「はいはい、分かりましたよー」

春樹はとくに嫌がるわけでも、恥かしがるわけでもなく、その場から歩き出した。

もしかしたら、まんざらでもないのかもしれない。

今、保健室には一夏と箒の二人である。もしこの状況を春樹が見たら、箒にニヤニヤしながら、今だ、押し倒せ。見たいな事を言われかねないだろう。

そして一夏は保健室で箒が持ってきてくれた昼食を食べている。

箒はいつも一夏が注文する日替わりランチを頼んでいた。今日は鯖の味噌煮定食だった。

「一夏、その……大丈夫だったか？」

箒は一夏を見て心配そうな顔をしていた。しかし、保健室で寝ている割には包帯とか、治療したわけではないので、特に痛むところはなかった。それならば、鈴音の方が一夏の数十倍、数百倍も危険な状態になっていたのだ。正直、自分の事より箒には鈴音のことを心配して欲しかった。

「俺は特に怪我とかしていないし、大丈夫だよ。この俺を心配するくらいなら鈴のことを心配してやってくれよ」

「ああ、そうだな……」

モニタ越しだったが鈴音の左腕に赤いものが写っていた。アレはあの時思った通り鈴音の血だった。しかも骨折までしていると聞く。

「そうだ、春樹は………束さんに会っているみたいだぞ？」

その時、箒の身体が僅かにビクツと反応していた。

行方不明にして、ISの開発者、そして自分の姉である束と春樹が会っていると聞いて、なんであの二人が会っているのか、理由が分からない。何故、各国が血眼になって探している自分の姉と何故春樹は会えるのか。いったい姉は何処にいるのか。とても気になっていたのである。

「なんか、千冬姉ちふゆねえによると、あの黒いISの事と何か関係があるとかどうか……春樹が言ってたって」

「黒いISと姉さんが……関係あるというのか……？」

「ああ、でもそれ以上のことはなにも教えてくれなかったみたいだけど」

一夏は定食を食べながら話す。

「どういことなんだろうな、春樹の奴。箒、なんか聞いてないのか？」

「え、いや……私も姉さんの連絡先を知らないからな」

「そうか……謎は深まるばかりってか……」

一旦会話は止まってしまい、一夏は定食をガツガツと食べている。箒も、自分の定食を食べているが、何を話したらいいのかまるで思いつかない。どうにかしてこのシーンとした状況を何とかしたかった。

「い、一夏」

「なんだ、箒？」

「あの……だな……今度一緒に出かけないか？」

箒は焦りながら、随分と早口でそう言った。

「ああ、いいぜ。何処に行く？」

「えっと……鈴音のお見舞いだったり、色々だな」

「そうか、そりゃいいな。よし、明日は休みだし、明日にでも行くか？」

「ああ、分かった！」

箒は本当に嬉しそうに笑顔で言った。そして鈴音のことも正直気になっている。お見舞いに行つて、調子を聞くのもいいだろう。そう思った。

春樹と束は今いる謎の施設にある食堂にきていた。そこで働く人たちが何人かいた。そこに居た人は「春樹さん、こんにちは」「束さん、こんにちは」と、次々と人とすれ違うたびに挨拶をしてくる。春樹と束はそれぞれ日替わりランチを頼んでいた。今日のメニューはからあげ定食である。からあげと野菜。ご飯に味噌汁と一般的な定食のセットである。

二人は頼んだものを受け取るなり開いている席に座る。

「じゃあ、いただきます！」

束は笑顔でそう言った。続けて春樹も「いただきます」と挨拶をする。

何個かからあげを食べて、ご飯と味噌汁を食べる。

そして、束の手が止まった。そして、何秒か動きを止めてた後、束は箸でからあげをつまむなり……。

「ねえねえ、春にゃん！」

「ん？」

「はい、あゝん！」

束がからあげを春樹の口元に持っていく。

春樹は流石に恥かしくなり、顔を赤くしてしまう。

「た、束さん……それはちょっと……」

「えゝ、食べてくれないの？ うえゝん、東さんはショックなのだゝ」

春樹は、こういった女性にだけ許される行為に弱かった。しかも、束のように可愛げのある人がやると、春樹は困ってしまう。

「え、あ、えっと……束さん……別に、いいよ？ あはは……」

「なんだよ、それなら最初に言って欲しかったなゝ、じゃあ、はい、あゝん」

春樹は口を開けてからあげを食べる。

特に束が食べさせてくれたからといって、味が変わるわけではない。しかも、食べているものは二人ともまったく同じものなのだ。それはもう気持ちの関係である。どう思ってそれをやるのか……考えればすぐ分かる事だ。

「じゃあ、次は春にゃんね！」

「え……」

「えゝ、私にも食べさせてよゝ」

今度は束による上目遣い攻撃。春樹はやはりこういう行為に弱かった。気になる人にされてしまうと特に断れなくなる。

春樹は自分のからあげを箸でつまみ、束の口元まで持っていく。

「は、はい、あゝん」

「あゝん！」

束はとても嬉しそうに、そして自分で食べるよりもおいしそうにそのからあげを食べていた。同じものだから味は変わらないはずなのだが……やはり気持ちの問題なのだろうか？

「お、おいしい……ですか？」

「うん！ 自分で食べるよりずっとおいしいよゝ！」

「そ、そうか……」

その光景を見ていた他の人たちは「春樹と束はバカップル」という風に見られていた。二人は付き合っていないのだが……。

そして、真面目な話に入る。やはり、束と春樹の間にはシリアスな雰囲気は付き物なのだろうか？

「今度、ドイツのラウラ・ボーデヴィツヒがIS学園に来るそうだよ」

束のその言葉に驚く春樹。

「え、ラウラが……これも、奴らのシナリオってやつですか？」

「どうだろうね、でも彼女の事を考えると……ありえない話だと思うよ」

「ですね、わかりました。何かあったときは自分が対処しても？」

「うん、構わないよ。そのために春にゃんはいるんだからね」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女は春樹が中学校一年生のとき、自分の身体を鍛える為、ドイツ軍の教官になることになった織斑千冬についていき、ドイツの軍に体験入隊をしたことがあった。

体験といっても、それは他の軍人となんら変わらないことをさせられていたのだ。

そのときに出会ったのが「ラウラ・ボーデヴィツヒ」であった。彼女とは「仲間」という意識が高い。軍で共に汗をかきながら自身を鍛えていたのだ。

同じ部隊にいと、自分が足を引っ張ると、それは部隊全員のせいだとして連帯責任をくらってしまう。だからこそ、自分の部隊の人間には迷惑をかけたくない。そういう気持ちと同じ部隊の人間を「仲間」という意識が大きくなっていったのだ。

「ま、なんにせよ、俺の友人が来るんだ。歓迎してやらないとな」
春樹と束の二人は昼食を続けた。

春樹、束は今何をしているのか。

一夏と束はどう関係してくるのか。

そして、謎のISはどこから来たものなのか。

それは、いずれ分かる事になるだろう。

そして一夏と箒も、春樹と同じ責務を負うことになる。

終章『葵春樹と篠ノ之束 ―Huddle―』（後書き）

以上、エピソード1でした。

若干修正をかけましたが……どうでしたでしょうか？

無駄なシーンを省いたので読みやすさは上がったと思いますが……。でも、ボリュームダウンはしてしまいました。すみません。

これが私の限界でした……。

追加されたシーンは春樹とセシリアの話し合いのシーンですね。もう少しこの二人を親密にしてみました。あれだけのことが起こるのですから、これぐらいしておかないと……と思ひまして……。

削除したシーンの主は、何が言いたかったのかわからないシーンですね。

あの頃は適当に思いついたシーンをポンポン書いていくだけでしたから、意味なんてものはあまり考えていませんでした。

「このシーンでは○○などところを書きたい」というのが無かったんですね……。

あと、春樹と一夏の視点以外はほとんど無くすことにしました。それでないと、視点移動が多すぎて読みにくいかな、と思ったからです。

以上です。

では、エピソード2でお会いしましょう。
では。

序 章『戦後 —The before Day—』

あのクラス代表対抗戦から一週間が経った。春樹が壊した扉等は気がつけば元に戻っており、IS学園は何事も無かったかのように毎日が過ぎていく。

そして、一夏と春樹、箒の三人は鈴音が入院している病室の前に来ていた。

ガラガラとドアを開けて、鈴音がいることを確認して声をかけた。

「やあ、鈴。久しいな」

箒が鈴音に向かってそう言った。

鈴音と箒は一夏と二人でお見舞いに来たときにとっても仲がよくなつたそうで、鈴音は箒と呼んでいるし、箒は彼女を鈴と呼んでいる。

二人で話すときは、一夏の話で笑いあっているそうだ。だが、この話を一夏は知らない。これは鈴が春樹にそういう話をしているんだと聞いてわかったことである。

「あ、箒に一夏、春樹も来てるんだ。久しぶり、元気してた？」

鈴音はベットから起き上がりながらそう言った。その言葉に一夏はツツコミを入れた。

「それはこっちの台詞だろ。で、鈴は元気にしてたか？」

「うん、元気だけど、正直暇でしょうがないよ。こうやって皆が来てくれると嬉しいな。早く学園に戻りたいよ」

それを聞いて一夏は軽く笑って、

「しょうがないだろ、自分の身体を最優先しろよな」

「そうだね一夏」

春樹は手に持っていたビニール袋をアピールするなり。

「一夏、箒、せっかく差し入れ持ってきたのにそのことについてはスルーなのかい？」

春樹たちが持ってきた差し入れとは良くある果物の詰め合わせで

ある。メロンに林檎、バナナなどの果物が入っているものだ。

一夏と箒は「すまん」と謝って差し入れをビニール袋から取り出した。とりあえず、メロンを食べる事にした四人。ナイフを取り出し、春樹は手馴れたようにメロンをカットする。

春樹は昔から一夏と共に料理を作ってきたので、こういった調理器具の使い方はもう慣れてしまっている。

「へえ、上手いもんじゃない春樹」

「まあ、昔からこういうことしてきたからな。料理だってできるし、一夏だって料理くらい出来るよ」

「へえ、一夏も料理とか出来るの？」

「まあな。^{ちふゆねえ}千冬姉はいつも俺たちのために働いてくれてたから、俺たちが料理ぐらいしてあげないと思って」

「ふーん、そうなんだ」

春樹がカットしたメロンを皆で食べ始める。そのメロンは果汁たっぷりでとても甘く、おいしかった。

「あ、これおいしい」

鈴音は素直な感想を述べた。

「まあ、メロンが取れる時期だしなあ」

と、春樹は答える。

メロンは収穫時期が五月から九月の間であり、さらに春樹がおいしいと思っている農家で作ったメロンをチョイスしている。おいしくないわけが無い。

その後も、果物を食べながらの雑談は続いた。ここ一週間で起こったこととか、学園の笑い話など様々だ。

「ところで、あの黒い謎のISについて何か分かった？」

鈴音は純粹に気になったのでその事を聞いた。前に一夏と箒が来たときには何も分からなかったのだが、一週間も経った今なら何かしらの情報が入っているかもしれない。そう思った彼女は改めてその事を尋ねた。

彼女がああ謎のISに襲われ、一夏を庇ってそのまま撃墜された。

その後大怪我をして気を失っていた彼女は、気を失う直前までの事しか覚えていなかった。

すると春樹は鈴音の顔を真っ直ぐに見つめて申し訳なさそうに言った。

「ごめんな、そのことは俺たちからは言えない事になってるんだ……。そんなことよりももう少し楽しい事話そうぜ」

春樹は表情を明るくして話の流れを変えようとした。周りの反応は「そうだな」と春樹の意見に賛成して皆は明るい表情を作る。

「そういえば――」

一夏は何かを思い出したように話し出した。

その話を楽しそうに聞く鈴音。同じように一夏と春樹、箒の三人も楽しそうにしている。四人が話している光景はとても微笑ましかった。

第一章『新しい仲間 ―Choice―』

1

鈴音のお見舞いをした次の日、IS学園。朝のショートホームルームにて突然の報告を受けた。なんと、編入生がこの一年一組に二人も来るという言葉を山田先生は言った。

編入生が同じクラスに二人来るという時点で不自然気回りのないのだが、恐らく裏で何かがあるのだろう。

「では編入生を紹介します。二人とも、教室に入ってきてください」

山田先生は教室の外で待っている編入生二人を呼んだ。

入ってきた生徒二人は、片方は銀髪で眼帯をつけている。何か堅苦しい雰囲気が漂っているのに対し、もう片方の人物。その人は男子用の制服をつけていたのだ。という事はどういうことなのか。ただならぬ男という事だろう。彼は金髪で可愛らしい感じがあった。とても高貴な感じがあり、第一印象から好感が持てるような人だった。

最初に金髪の男子生徒が自己紹介を始めた。

「シャルル・デュノアです。こちらに僕と同じような境遇の人が居ると聞いて編入してきました。どうぞよろしくお願いします」

彼が挨拶をするなり教室の女子達が騒ぎ出す。このノリはなんだか懐かしい感じがする一夏と春樹だった。これは自分達が自己紹介したときと同じだった。客観的にみるとこういう感じなのか、と落ち着いた雰囲気では二人はその光景を眺めていた。

「静かにしろ！ まだ紹介は終わっていない！」

千冬の一喝でその場が沈められる。一夏は自分達の入学当時を見ているようでなんか不思議な気持ちだった。

あのときは千冬の登場に女子達が騒いでいたのを覚えている。

そして春樹は、目の前のISを動かせるという男子に注目してい

る。しかも観察するようにその男とやらをする。本当に男なのかどうかを疑問を持ったからだ。

確かに、ここにISを動かせる男は存在している。篠ノ之束が言うには男がISを動かせる要因は特別なDNAの情報があるかどうかで決まるそうだ。その『因子』と呼ばれるDNAの情報は何故かISのコアに強く反応して共鳴し合う。その結果として普通の人よりISを上手く動かせる様になる。

何故その『因子』を春樹たちが持っているのかは分からない。だが、何かがあるはずなのだ。その『因子』とやらの宿命を春樹たちに押し付けた何かが。

（アイツ……本当に男なのか？ まさか、因子を持っている？ とりあえず束さんに連絡してみようかな。あの人のネットワークなら何か分かるかもしれない）

そして、もう一人。銀髪で眼帯をつけている女の子。

「自己紹介をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

彼女は千冬のことを教官と呼んだ。つまり、千冬がドイツで教官をしていたときに関わった人物という事になる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「あ、あの……以上ですか？」

山田先生はあまりの短さに戸惑いながら聞いてみるが……。

「以上だ」

きっぱりと言われてしまった。

そして彼女は一夏の方を見るなり歩み寄り……右手を一度左に持っていていき、勢いよく一夏の事を叩いた。^{はた}

周りの生徒は突然の行動に驚きを隠せなかった。

一夏もいきなりの事でなにが起こったのか理解できなかった。何故自分は叩かれたのか、理由が見当たらない。自分は目の前のラウラという人物とは今初めて会うはずだ。何かうらまれるような事はしていないはずだが……。

そしてラウラはこんな事を言った。

「私は、お前を許さない」

「何が許さないんだ？」

ラウラはサツと声が聞こえてきた後ろを向くと、彼女には馴染み深い人物がそこに居た。

葵春樹である。

実は春樹は中学校一年生のときに千冬がドイツの教官をする事になったのだ。その時に春樹は自分を鍛える為にドイツの軍に体験入隊する事になった。その時に出会ったのがこのラウラ・ボーデヴィツヒである。

「春樹……か？」

「……ああ、そうだよ、葵春樹だ。で、何が許さないんだよ？」

「そ、それは……後でちゃんと理由を話す」

ぎこちなく返事を返すラウラ。すると春樹は微笑んで、

「そうか、わかったよ」

と返す。

すると、織斑千冬の鉄拳が春樹とラウラに飛んできた。いきなりの事で何が起こったのか理解するのにはそれなりの時間が必要だった。

「感動の再会中悪いが、まだショートホームルーム中だ。席に戻れ葵。それからラウラ・ボーデヴィツヒ！」

千冬に名前を呼ばれたラウラはビシツと姿勢を正し、敬礼をしながら、

「はっ。何でありましょうか、教官」

「今は先生だ。それより……いきなり教師の目の前で暴力行為とは……勇氣あるな。だが、まあいい。今の拳骨が指導の変わりだ。今後、教師の目の前で暴力行為は慎むように」

「はっ。了解いたしました」

またもラウラは敬礼をしながら席に着く。

一夏は今の言葉を思い返してみると、あることに気付く。

（教師の目の前以外なら暴力はいいのかよ！？）

朝のショートホームルーム後、一夏は箒に彼女とはどういう関係だったか聞かれていた。

「それがわからないんだよ。今日初めて会ったのに、わけわかんねえ」

「もしかしたら、一夏さんが知らないだけで、実はもう会っていたりってことはないのですか？」

セシリアは一夏にそう聞いてみた。だが……。

「いや、あいつはドイツの人らしいし、俺と会っていたってのは無いと思うぞ」

「そうですか……」

自分の推測が外れてちょっと残念そうな顔になるセシリア。

「そういえば、春樹があのラウラってやつと知り合いだったみたいだが、どういう関係なんだ、一夏？」

箒はさっきのショートホームルームの事を思い出していた。あの親しそうな感じ、どう見たって初対面じゃない。なにかあるはずだとそう踏んだ。

「ああ、アイツは千冬姉ちふゆねえがドイツ軍の教官をする事になったときに一緒についていったんだよ。自分を鍛える為にな。たぶんそこで出会ったんじゃないのか？」

それは初耳だった。春樹が軍隊の訓練を受けていたとは知らなかったのだ。あの剣道でのトレーニングのときに見せた異常な体力と身体能力はそこにあったのか。と納得した。しかし、一夏もそれに追いついているのには凄く気になった。

軍を体験した春樹とトレーニングをしたからといってそう簡単に対等な力を手に入れられるものなのだろうか、と気になった。

「春樹さんって、軍隊に入っていたことがありましたの？」

「ああ。正式な入隊ではないんだけどな。なんか心身共に鍛え上げられた感じで帰ってきたぞ？ あの時は大ビックリしたなあ、すげー筋肉だったし、随分と逞しくなっていたなあ」

「そ、そうなんですか……」

なんかセシリアは自分の世界に入ってしまったっている。なにやら変な妄……いや、想像をしているのだろう。なんか顔が惚けている。

邪魔したらいけないと思い、一夏と箒は二人で会話を再開する。

「で、一夏も春樹が帰ってきた後、春樹と共に身体を鍛えたのか？」

「ああ、最初の頃は凄くきつかったぞ。でも、それでも軍の訓練に比べたら三分の一の量だぞって言われたときは驚いたよ。春樹はどんな訓練を受けてきたんだよって思ってた……」

「でも、やってく内に軍となんら変わらない訓練でも大丈夫になったのだろう？」

「そうだな、慣れるまで随分と時間がかかったけど……」

要するに、一夏は春樹に追いついたという事である。これで一夏の強さもはっきりした。これを二年間続けてきたのだ。恐らく早朝にでも走りこみをしているのだろう。

「いまでも、なんかしているのか？ そういったトレーニングは」

「そうだな、毎朝春樹と走りこみをして、その後の筋力トレーニングも欠かさず毎日やってるよ。いまじゃこれは習慣になっちゃまって、やらないと逆に不安なんだ」

一夏と春樹は毎朝のトレーニングは欠かさなかった。皆がまだ寝ているだろう時間にランドまで出て走っていたのだ。

すると、今日編入してきた、フランスの代表候補生であり、ISを動かせるという三人目の男らしい男が話しかけてきた。

「なにになに？ どういう話をしてたの？」

「ああ、あのラウラ・ボーデヴィツヒってやつの話と春樹の話だよ……えっと……」

一夏はなんて呼んだらいいか迷ったが、シャルルはすかさずフォ

ローを入れた。

「ああ、僕の事はシャルルって呼んでもらって構わないよ。だから君の事も一夏って呼んでもいいかな？」

「ああ、いいぜ、シャルル。えっと、こっちは俺の幼馴染で篠ノ之箒っていうんだ」

「篠ノ之箒だ、よろしく」

「うん、よろしく、篠ノ之さん」

箒とシャルルは握手を交わした。そんな光景を見た女子達はクラス的女子達は箒を見つめてこう思った。

（箒は織斑君のことが好きなんじゃないの……これって浮気じゃない!?!）

全く持って勝手な思い込みであった。

屋上に来ていたラウラと春樹は会話を交わす。

「とりあえず、久し振りだなラウラ。二年ぶりか？」

「そうだな」

「で、何で一夏を叩いたんだ？」

「それは……」

急に口ごもるラウラ。春樹が知っているのはキリツとしているラウラだったが、こうなってしまうという事は、教えたくないか、教える事が恥かしいことなのだろうと春樹は思った。

「わかったよ、言えないならそれでもいい。でも、これだけは忘れないで欲しい。お前にとって俺は訓練を共にした仲間だ。だからなんかなかったらいつでも頼っていい」

「ああ、ありがとう春樹。……それより聞きたいことがある。春樹、お前はあの後何処に行っていた？」

ラウラは急に表情を変えて睨みつけるかのように春樹の事を見が、春樹は決して戸惑う事も無く、ラウラのその睨み付けにもびびることなく話す。

「それは……言う事は出来ない」

「納得がいかない！　だって私は……」

ここで予鈴のチャイムが鳴った。今日は一時間目から二時間目までは座学で三時間目から放課後までずっと実技である。

そのチャイムによってこの二人の間には変な空気が流れている。お互いに何かを隠しているのは一目瞭然だ。互いに詮索する事を避け、そして春樹は言葉を出す。

「一時間目は座学だ、教室へ戻るぞラウラ」

「ああ……」

ラウラはこの緊張感で声が出てくれなかったが、それでも力を振り絞って返事を返した。

そして、春樹とラウラはクラスへと戻っていった。

そこには編入生がどんなものか見たい女子が沢山いた。ここで女子に捕まったら確実に授業に遅れてしまう。それだけは避けたかった一夏と春樹はあの女子の集団をかわしていくしかない。

「突っ切るのみだ、いくぞ春樹！」

「え、う……うん」

一夏はシャルルとはぐれない様に強く手を繋いでいる。万が一の場合を考えてその後ろにつく春樹。そして、ここはあえて、このままそこに居ると危ないぞ。と警告するようにスピードを落とすことなくそのままスピードを上げて真っ直ぐに突っ走る。

「って一夏、速い！速いって！」

「頑張れシャルル、もう少しだ！
どけええええええええええ！」

一夏はそう叫んで女子の群れに突っ込む。女子達は突っ込んでくる一夏にびびってしまい、反射的に避けてしまう。一夏の作戦勝ちであった。

そのまま体育館まで走り、更衣室に入る。

「よし、ここまでくれば安心……じゃあ、急いで着替えなくちゃな」
一夏は制服のボタンを外して、急いで脱ぐ。続けて春樹も制服のボタンを外した。

しかし、シャルルは一向に着替えようとはしなかった。このままでは授業に遅れてしまう。春樹は速く着替えるようにシャルルに言った。

「おい、シャルル。速く着替えないと授業に遅れる」

「え、ああ、うん。えっと……お願いだからあっち向いて」

「え？ ……わかった、おい一夏」

「ああ、わかった」

一夏と春樹はシャルルとは逆の方向を向いて着替えを始めた。

春樹は基本ISスーツの上に制服を来ていたので、制服を脱ぐだけで準備完了するが、一夏は一日中ISスーツを着ているのは変な感じがして嫌らしいので、実習のときに着替える様になっている。

そして、何故シャルルは着替えを見られたくないのか、恐らく何か深い訳があるだろうから、あまり触れないことにした二人。

「い、いいよ」

「「つて、早っ！」」

一夏と春樹はシャルルのあまりの着替えの早さに驚愕するが、今は驚いている暇はない。急がないと授業に遅れ、千冬からのキツイお言葉を貰う羽目になる。それだけは避けたかった。

実習の授業に何とか間に合った一夏と春樹とシャルルの三人。

そして今日から実戦を演習してもらいたい、ということで専用機持ちであるセシリアとラウラが呼ばれた。

呼ばれた二人は「はい」と返事をした。前に出た二人は早速ISを起動させる。

「ボーデヴィツヒさん、よろしくお願いします」

「……………」

セシリアの挨拶を無視するラウラ。そしてラウラは千冬に質問する。

「教官、私の相手はコイツのですか？」

「いや、お前達はチームになって山田先生と戦ってもらう」

すると山田先生が空中から颯爽と現れた。そして地面すれすれでホバリングしている。地面から五センチといったところだろう。これを見るだけで山田先生は凄い乗り手というのが分かる。基本を突き詰めて出来る人ほど上手いからだ。

「二人で……ですの？」

セシリアは純粋な疑問を述べた。何せ、自分のパートナーは専用機を持っているラウラ・ボーデヴィツヒがいる。そして相手は山田先生一人。これではいくら先生でもキツイものがあるのではないのか、というのがセシリアの正直な感想だった。

「そうだ、だが大丈夫だ。今のお前達なら圧敗する」

セシリアは理解した。自分は相手のISの特性を知らないし、どういった連携を取ればいいのか、全く分からなかった。

「ボーデヴィツヒさん、ここはちゃんとお互いのISの特性を理解したうえで——」

「必要ない」

セシリアの言葉はラウラの言葉によって遮られた。

「ふん……では始めろ！」

千冬の声で三人は一斉に空へと飛び立った。

山田先生が扱うISはデュノア社製の『ラファール・リヴァイヴ』IS第二世代の最後期の機体ではあるが、最後期の機体だけあって完成度は非常に高く、それは初期の第三世代のISに引きを取らない性能である。

そして現在配備されている量産型ISの中では最後期の機体ながら世界シェア第三位である。

『ラファール・リヴァイヴ』の一番の特徴はその応用の利くところだろう。装備によって遠距離から近距離まで、攻撃型から防御型まで満遍なく対応でき、バランスが良いというのがその特徴である。ラウラが話も聞かずに戦い始めるので、セシリアはもうどうにでもなれと、『ブルー・ティアーズ』のビット攻撃を仕掛けるが、それは簡単に避けられてしまう。しかしそれは仕方が無い。今の攻撃は様子見の射撃。先生の機動特性を掴む為の攻撃だった。

（なるほど、山田教諭の動きは大体分かりましたわ……中々、いや、非常にISを扱うのが上手ですね、流石は先生といったところでしょうか）

セシリアはもう一回『ブルー・ティアーズ』を飛ばして山田先生の動きを制限させる。当たらずとも相手の動きを制限させる事は非常に意味がある。

そして一回『ブルー・ティアーズ』の動きを止めて大型のビームライフルである『スターライトmk?』を放とうとするが、狙いの先に突然ラウラが現れる。彼女はセシリアの事も考えずに山田先生に『プラズマ手刀』で攻撃を仕掛けた。

もし、今の攻撃が出来ていれば、かわされたとしても、そこからパートナーによる追撃が可能だったはずであった。しかし、事実現状の確認もせずに一人で突っ込んでいるラウラがいた。チームワー

クという言葉のかけらもない。

「ちよっと、ボーデヴィツヒさん！？ 何を考えていらっしやるの！？」

「ふん、あのビットは邪魔だ。非常に動きにくいから元に戻してくれないか？」

「なっ！？」

完全にラウラは一人で戦っている。セシリアと協力するという姿勢が見られない。

ラウラは『ワイヤーブレード』を展開、これはワイヤーで相手を攻撃したり、拘束したりする為の武器である。『ワイヤーブレード』は伸びていき、山田先生を捕らえようとするが、中々つかまらない。「ちいっ」

ラウラは舌打ちをする。今度は『レールカノン』で砲弾を発射し、攻撃を試みるが、やはりこれも当たらない。

セシリアはその光景をみて、もう見てられなくなり、『ブルー・ティアーズ』を展開、ラウラの事を無理やりサポートする事にした。するとどうだろう、ラウラがなんとセシリアのビットを『プラズマ手刀』で切り裂いた。

「な、何をしてらっしやるの、あなたは！？」

流石にこの行為にキレルセシリア、今は協力関係にある仲間の支援砲撃を邪魔者呼ばわりする彼女。セシリアはトサカに来ていた。

「邪魔だと言っただろ、何故私の邪魔をする！」

と、その時だった。山田先生が戦闘態勢に入る。『グレネードランチャー』を取り出してラウラに向かって発射する。ラウラはそれを避けるがそれは牽制に過ぎなかった。

山田先生は素早くラウラの目の前に移動。今度は『ガトリングガン』に装備を変更。無数の弾をラウラの至近距離で放った。放った弾は当然の如く全て直撃、ラウラは撃墜、さらにセシリアに近づいて『パイルバンカー』で強力な一突きを放った。

『パイルバンカー』は攻撃速度の遅さ、そしてリーチの短さから

使いにくいというイメージがあるが、山田先生のように基礎が完全に出来上がっており、一瞬の隙も見逃さない、そのチャンスをもにやる力があればこの攻撃もワンチャンスある。

今回のこの試合もその一瞬のチャンスをもにした山田先生の力であった。

撃墜されたラウラはこう思っていた。

（くそっ、アイツの邪魔さえなければ、私は……）

そして千冬は鼻で笑い、

「これで貴様らも山田先生の力がわかっただろう。今後は敬意を持って接するようにな」

クラスの皆は「はい」と返事をした。この後は班に分かれて戦闘の基礎訓練になった。

放課後、部屋割りの方をどうするかで、山田先生と話している一夏とシャルルと春樹の三人。部屋は二人部屋なので、必然的に一人取り残されてしまうのだ。

一応、開いていないこともないのだが、そうになると一部屋に男と女が一緒になってしまうのでそれは非常にまずかった。

すると、ある女子生徒が職員室に入ってきて山田先生に泣きついた。

どうやら、ラウラと同じ部屋になった人らしい。彼女と話することは出来ないし、ラウラには誰も寄せ付けない威圧感があったのだ。部屋を一緒にするのはキツイものがあるのだろう。

「先生、俺がラウラのところへ行きますか？」

春樹の突然すぎる発言。流石の山田先生も驚いてしまう。

しかしこれには理由があった。春樹が軍に体験入隊していたころ、ラウラと同じ部隊になったのだが、そこに個室というものはなかった。大部屋で部隊の人と全員で夜を過ごすのだ。こういうことから自分がラウラのところへ行くのはそういう事もあって、他の人に任せるのはキツイものがあるだろう。だから自分が行く事にしたのだ。「なるほど……それなら……織斑君、デュノア君、それでいいかな？」

「俺は大丈夫ですよ、先生」

「僕も大丈夫です」

一夏とシャルルは春樹の案を肯定。

「わかりました、では葵君、準備の方をお願いします」

そして春樹は部屋の方へ向かった。すぐさま引越しの準備をする。衣類等の少ない荷物をバッグの一つにまとめる。

そして、次にこの部屋に残る一夏とこの部屋の住人となるシャルルもちよつとした別れの挨拶をした。

「じゃあ、一夏。シャルルと仲良くやれよ？」

「そっちこそ、ラウラって奴と上手くやれよ？ 今日の授業の事を考える限りあまりいい奴とは思えないんだ」

「あいつ、ドイツに居た頃はあんな奴じゃなかったんだけど……まあ、話を聞いてみるよ」

春樹は部屋を後にして、ラウラの部屋の方へ歩き出した。すると、廊下である人物と出会う。

織斑千冬だ。

「ちよつといいか、葵」

「……はい、なんでしよう」

「とりあえず、私の部屋まで来てくれるか？」

「……わかりました」

春樹は千冬に言われるままについていく。いったい何なのかは分からないが、とりあえず千冬は真剣な眼差しで尋ねてきた。それだけ重要な話なのだろう。

千冬の部屋前まで一切会話をせずに来た春樹。そして部屋の中へ入った。そこは生徒の部屋と比べ物にならないほど豪華だった。山田先生と同じ部屋らしいが、今はいなかった。恐らく、千冬が席を外すよう頼んだのだろう。

「で、なんの用ですか？」

春樹は前置きも何もしにまずはそのことを聞いた。

「お前、何を隠している？」

千冬は今までの疑問も含めてその一言で質問した。

「だから、そのことを言える立場じゃないんですって」

「なら、束と連絡を取ってくれ、私が直々に話をする」

「……………わかりました」

少し考えて、その要求を許可する春樹。そして携帯電話を取り出して束に電話をかけた。電話のコールが静かな部屋に響く。そして、

電話が繋がった。千冬は束のものらしき声を確認する。

「束さん、今ここに千冬姉ちゃんがいるんですけどね、話したがっているんですよ……はい……はい……わかりました。では――」
春樹は携帯電話を千冬に渡して……。

「大丈夫だそうです。思う存分に話してください」

千冬は春樹の携帯電話を手に取り、耳元まで持っていく。

「束か？ 色々と積もる話もあるが、まずは一番気になる事言うかな……束、何を隠している？」

織斑一夏は何かがおかしいと思っていた。その何かとは「シャルル・デュノア」のことである。彼女は何かを隠している。そう感じていた。その隠している事は分からないが、隠し事をしているように見えるのだ。

先ほど、春樹が部屋を出て行ってシャルルがこの部屋に来たが、なんかシャルルは必死に落ち着こうとしている様子があった。逆に落ち着きないように見える。

男子同士、なにも恥かしがる事などないはずだ、なら身体的な問題でも抱えているのだろうか、あまり人には見せたくない傷跡みたいなものがあるのだろうか和一夏は考える。

今日の着替えのときもそうだ、着替えを必死に見られたくないように、後ろを向くよう言われたし、やはり身体的な問題を抱えているのだろうか？

「なあ、シャルル」

「え、何？ 一夏」

二人はそれぞれのベットに座り込み話している。

「いや、なんか悩み事があれば相談に乗るからな」

「え、なんで？」

「いや……せっかく一緒に部屋になったんだし、もう俺たち友達だろ？ 友達ならお互いに助け合っていると思うって」

「ああ、そういうこと。ありがと、一夏」

シャルルは笑顔を見せる。その笑顔はとても可愛らしいといえば、本人に対して失礼に当たるのだろうか、本当に可愛らしかったのだ。クラスの女子が言っていた、「守ってあげたくなる系の男子」ってというのが男子の自分でもよくわかった。

「お前って、笑顔素敵だな」

「え!？」

シャルルは驚く。まさか、自覚がないのだろうか……？

「笑顔が素敵な人って羨ましいよ。人を惹きつける力を持っているように感じるからさ……」

「そ、そう？」

「ああ、シャルルは笑顔が素敵だよ」

恥かしそうに笑うシャルル。あまりこのようなことは言われたことがないのだろうか？ 一夏はそう思ってシャルルと話を続けた。

一夏は何か飲もうと思い、緑茶を注いだ。やはりお茶というものはおいしいものである。飲むと何か落ちつくのだ。

「あ、それ僕も飲んでいいかな？」

一夏が緑茶を飲もうとするなり、シャルルも飲みたいといってきた。一夏はシャルルに緑茶のおいしさを知ってもらうのもいいかなと思ってシャルルの分も注いであげることにした。

「はい、シャルル。熱いから火傷に注意な」

一夏は入れたての緑茶をシャルルに渡した。そして緑茶を飲む二人。

「おいしいね、緑茶って。紅茶とは随分違う感じ……」

「でも、紅茶と同じ茶の葉なんだぜ？ 知ってたか？」

「え、そうなの!？」

その事実を知らなかったのか、驚くシャルル。

「ああ、お茶の葉を飲めるようにする時に炒るだろ？ その炒り方によって変わってくるみたいだ」

「へーそうなんだ……あ、そうだ一夏。一夏って放課後よくISの練習をしてるんでしょ？ 良かったら僕もその練習に付き合ってもいいかな？」

「ああ、いいぜ。じゃあ、明日から一緒に練習しようか」

「うん」

シャルルは嬉しいというか、一安心したような表情を見せた。ど

ういう思いでそういう態度を取ったのか、一夏には分からなかった。

ラウラ・ボーデヴィツヒは自室に一人でいた。先ほど同室だった生徒が居なくなってしまったからだ。だからと言ってどうということはないが、ただ、少しモヤモヤ感があるだけだった。彼女を変な感情にさせる何かが少なからずある。

するとこの部屋のドアがノックされた。一体誰なのだろうかと思いい、ドアを開けるラウラ、するとそこには山田教諭と織斑千冬、そして……葵春樹が立っていた。

山田先生が、春樹がこの部屋に来る事を伝える。

「ボーデヴィツヒさん、実はですね、シャルル・デュノアさんが編入したことで部屋割りの変更がありました。今日から葵君と同じ部屋で過ごす事になります」

「な……どういことです、教官」

ラウラは驚いた、まさか男と同室になるとは思わなかったからだ。確かに、軍に居た頃は春樹と一緒にの大部屋で過ごしていたが、それとこれとは話は別である。こんな狭い部屋で二人きりになる事は……正直言って、キツイものがある。色んな意味でだが……。

「どうもこうも、お前達は共に軍で鍛えぬいた者同士だからな。いくら抵抗というのもしないと思っただが……なんだ？　そういう羞恥心を未だに持っているとは、貴様は軍で何をしてきたんだ？」
「う……いえ、そういうわけでは……わかりました。春樹、よろしく頼む」

「ああ……」

ラウラは千冬には弱いらしく、大人しく引き下がった。だが、相手が葵春樹というのも大人しく引き下がった要因の一つでもある。確かに、過去に仲良くしていた春樹が同じ部屋なら、いくらか話し

相手にもなるだろう。気が楽なのだ。

先生達はその場から立ち去り、部屋にはラウラと春樹の二人だけになるが、二人とも黙り込んでいる。特に黙っている理由もないのだが、二人とも話し出すきっかけが欲しかった。部屋は静寂に包まれる。そして、何処となく、名前を呼ぶ二人。

「ラウラ」

「春樹」

被った。見事に二人の言葉は被ってしまった。そのせいでまた黙り込んでしまう二人。そして、そちらからどうぞ、と譲り合う二人。その言い合いの結果、まずは春樹から言う事になった。

「じゃあ、ラウラ。まずは……今日の授業の事だ。お前はなんであんな動きを？ 何故セシリアと共闘しなかった？」

「それは……」

「やはり何も言えないのか……一夏の時だってそうだったよな。どうしたんだよ、ドイツに居た頃は少なからずそういう奴じゃなかったと思ってたんだが」

ラウラは何も言えなかった。きっと自分がしたいことを言えば春樹の事だから全力で自分を邪魔しに来るだろう。昔からあいつはそういう奴だった。だからこそラウラは今回の一夏への攻撃についてのことは言えない。

事実、彼女はこの気持ちが高なのかも理解していなかった。一夏に対するこの気持ちは何なのだろう、何故自分は一夏を許せないのだろうか、それが分からない。

もしかしたら、春樹になら……このことを話したら何か答えが見つかるのかもしれない、という考えもあり、本当にどうしたらいいのか自分で分かっていなかった。

「春樹……あの……だな。私は……」

ラウラはここまで言葉を出しておいてまだ悩んでいた。でも、今日の屋上での出来事を思い出す。春樹は悩みがあればいつでも聞いてやる。仲間だから、と言ってきた。だから、今回の事は正直に話

せば春樹は何か答えを出してくれるのかもしれない。

「私が、織斑一夏を許せない理由……聞いてくれるか？」

「ああ、いいよ」

ラウラは春樹のその優しい声に安心した。彼は何かとこういうことになれば優しくかった。黙って話を聞いてくれて、そして正しき道を示してくれる。必ずしも正しいというのは少し語弊があるが、でも、本人が正しいと思うのだから、それは他人がどう思おうとも「正しい」ということになるのだろう。

「私は……織斑教官を……逞しく、凛々しく、そして強いあの方を、あのような顔にしてしまう織斑一夏を許せないのだ」

あのような、と言われると少し分かりにくいのが、春樹にはすぐに分かった。小さい頃からあの二人を見てきたが、千冬が一夏の事を思うときの顔はなんだか優しさを感じるのだ。やはり、大事な家族、ということなのだろう。両親に捨てられたあの二人にとっては「家族」という固い絆で結ばれている。春樹自身もその「家族」という絆の中に途中からだが入れてもらっている。やはりそこには「温かさ」があった。

「なるほどね、だいたいわかった」

春樹はそこまで聞いてラウラがどんな気持ちでいるのか、それが予測ではあるが、わかったのだ。ラウラが抱いている感情、それは「嫉妬」である。

ラウラも辛い過去がある故、織斑千冬という存在は憧れというものにあわせて尊敬していた。ラウラを見捨てずに面倒を見てくれた彼女を尊敬していた。

だけど、千冬が弟の話をするときには自分と関わっているときには見せない表情をしていたのだ。何故自分と話すときはあんな風な表情になってくれないのか、何故千冬は一夏の話をする時にそのように嬉しそうに微笑んで話しているのか。

もうそれは完全な「嫉妬」である。

しかし、ラウラはその感情に気がついていない。まず、嫉妬というものがどういふものなのか、そこからの説明をしなくてはいい。だが、ラウラにはそのような心理論を話してもあまり理解してもらえないだろう。そういう風に育てられたのだから。

「わかって……くれたのか？」

「ああ、お前のその気持ち、よくわかった……多分な」

「そうか、なら、私はどうすればいい？」

「それは……自分で見つけ出さないと意味がない。だから、俺からは一つだけ……自分が正しいと思うことをやるんだ。でも、安易に行動するな。じっくり考えて、そして正しいと思うことを実行するんだ」

「正しい事……」

ラウラは考える。自分がやるべきことは、正しきことはなんなのか。

次の日の事だ。放課後、一夏と箒とセシリアとでISの練習をする為にアリーナまでやってきている。その場に春樹の姿はなかった。とりあえず一夏は春樹に毎日やるよう言われた練習を始める。

セシリアが射撃を本気で当てに行き、そして一夏はそれを十五分間避け続けるというものである。

セシリアは素早く動く標的をいかに狙い撃つか、そして一夏はその射撃を避ける。そうすることで、お互いに確実にレベルアップさせる。という魂胆である。

「いきますわよ、一夏さん」

「おう、いつでも来い！」

セシリアは早速ビットを展開し、全方位射撃を繰り出す。一夏の周りからビーム攻撃が飛んでくる。そしてそれを縫うようにかわす。

そして肩慣らしを終わらせたセシリアは『スターライトmk?』の攻撃も織り交ぜて攻撃する。自分で自分の攻撃リズムを崩す事で、相手のリズムを乱してバランスを崩させるという攻撃。そしてこれがもっと上達したならば、全ての攻撃において一定のリズムというものが消滅する。相手はリズム感を感じることができず、戦いにくくするのだ。セシリアはまだそこまで到達はしていないが、相手のリズムを乱すという事はできる様になっている。

一夏もその攻撃には戸惑い、違和感を感じるし、危うく攻撃に当たりそうにもなる。このセシリアの攻撃には悩まされている。しかもセシリアは本気で当てに来ているので、それもまた厄介だ。

「へえ、一夏もオルコットさんもやるね。あの相手のリズムを乱してやる攻撃は中々のものだよ。そしてそれを避けている一夏も凄いいね、普通だったら何回も続けて避けれるものじゃないよ、あれは」

箒はシャルルに今行っている練習について補足する。

「あの練習方法は春樹が考えたんだ。一夏のISは近距離武器しかないから、ああいうセシリアの全方位射撃をかわし続けるのは良い練習になると」

「確かに一夏はその装備しかないなら、こういった弾幕をはられるような相手を相手にしていれば、自然と突破口を自分で見つけられるようになるし、オルコットさんもあの高速機動を相手にしているから、自然に射撃能力が上がっていく……。なるほど、お互いに競いあう事で、気付かないうちに上達していくんだ」

そして十五分間の時間が経った。結果は一夏の逃げ切り。要するに一夏の勝利である。そして二人は地上へ降りてきた。

「はあ……また一夏さんの勝ちですわね……」

「いや、セシリアも十分な強さだよ、正直危ないところもあったしな」

「でも、負けは負けですわ」

落ち込むセシリアにシャルルは励ましの言葉を送った。

「でも、今回はオルコットさんが負けたけども、勝てないってことは無いと思う。だから、もっともつと頑張れば一夏に勝てるよ！」

なんだか、励ましの言葉なのか怪しい感じではあるが、シャルル本人は励ましているつもりである。ただ、セシリアがどう思っているのかは分からないが……。

「そうだ、一夏。僕と模擬戦でもしない？」

「お、いいぜ。色んな奴と戦えればそれだけでいい経験になるからな。しかもシャルルのそのISはもちろん専用機なんだろ？」

「うん、そうなんだ。僕の機体は——」

シャルルのオレンジ色に塗装されたそのISは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』である。

この機体は名の通り、第二世代量産型ISの『ラファール・リヴァイヴ』のカスタム機であり、基本性能を限りなくチューンし、追加武装を行う為の『拡張領域^{バースロット}』を二倍に増やしている。このことで

装備できる武装の数は二十を超える。

「なるほど、その大量の武装で距離を選ばない攻撃が可能なんだな。でも、それだけの武器を入れ替えて戦うって、ちょっと難しいんじゃないのか？」

「それは大丈夫だよ、僕の得意技は一瞬で武装を変えられることなんだから」

「そうなのか、特技があるっていいよね」

「一夏だって得意な事あるじゃん、その剣術とか。ま、とりあえず模擬戦やってみようよ」

「おう、そうだな。じゃ、いくぞー」

一夏とシャルルの二人は飛び立ち、二人は向き合っている。筈の合図で二人は一斉に動き出す。

一夏はシャルルの攻撃方法がわからないから変に攻撃ができなかった。しかし、シャルルも攻撃を出さない。下手な動きをすれば一気に距離を縮められる可能性があるため、相手の動きを待っている。(シャルル、そっちが動かないならこっちから攻撃させてもらうぜ) 一夏はこの動かない試合を何とかする為に自分から攻撃を仕掛ける事にした。『白式』^{びやくしき}の加速力を利用して一気に距離を詰める一夏。するとシャルルは先ほど得意と言っていた素早い武器変更を行った。これは『高速切替』^{ラピット・スイッチ}といい、大容量の拡張領域^{バスロット}を利用して、事前によく使う武器をISに記憶させておく。そうする事でその武器をいちいち操縦者がイメージして呼び出すことなくその武器をすぐさま展開できるようにしている。

だから、この機能は使用頻度が低い武器には対応しておらず、『ラピット・スイッチ』^{ラピット・スイッチ}には対応していない。そこだけが弱点であった。

シャルルは『ビームライフル』を取り出し、一夏へ放つ。一夏はそれを避けるが、すぐに的確な射撃が一夏を襲う。しかしそれも持ち前の高速機動でかわす。

一夏はシャルルの目の前に到達できたので、練習用低出力の『零落白夜』で一撃必殺を決めようとするが、シャルルはそれを最小限

の動きでかわした。

「一夏、動きが単調すぎるよ。そんな直線的な動きじゃ当たらない」シャルルはかわした後、『ビームライフル』を構えて一夏の後ろを撃とうとするが、かわされた後の一夏の対応がシャルルの予想より早かった。シャルルの射線上からは一夏の姿が消えており、一夏は気がつけばシャルルの真上にいた。

一夏はかわされた後、上昇して反るような形で動き、シャルルの上を体が逆さの状態で取る。そこから降下して斬りつけようとする一夏であったが、そこでシャルルの『高速切替』ラビット・スイッチが発動。素早く弾速が早い実弾系の武器である『ショットガン』を装備して一夏に発射。撃った先は高速でこちらに向かってくる一夏。これは当たったとシャルルが思った瞬間、一夏はシャルルの目の前に居た。

(な、なに？ 何が起こったの？)

シャルルは驚いていた。あのタイミングは普通はかわせない。しかし、一夏はそのタイミングで回避ができるほどの力があった。『イグニッション・ブースト瞬間加速』である。瞬間的に最高速度まで到達するこの技はこの高速型ISに非常に有効だった。

「へえ、一瞬でそこまで……やるね一夏」

「ふう……今のは正直やばかった。お前の状況把握の能力はすごいな」

するとそこに、とある女性の声が聞こえてきた。

「ふん、その程度か？ 織斑一夏」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

彼女がそこにいたのだ。彼女は漆黒のISに身を包んでいる。

彼女のISは第三世代『シュヴァルツェア・レーゲン』右肩の大型の砲撃砲『レールカノン』が印象的である。

「織斑一夏、この私と戦え」

「はあ？ 今はシャルルと模擬戦を行っているんだよ、それなら後にしてくれ」

「なら、力づくで——」

ラウラは『レールカノン』の発射体制に入った。しかし、それはIS学園の先生方に邪魔される。

『その生徒、何をやっている!』

生徒の誰かが、このことを先生に報告したんだろう。流石世界のIS乗りを鍛えあげる学園。対応が早い。

「ふん、邪魔が入ったな……」

ラウラはISを解除し、そしてすぐさまこのアリーナから立ち去っていった。

「なんなんだ、アイツは。どういうことなんだ、一夏」

ラウラはあの時、確かに撃つ気でいた。無理やりにも戦闘に持っていくとしていたのだ。一夏とラウラの間には何かがある。筈はそう思ったのだ。

「やっぱり、オルコットさんの言う通り過去に何かがあったんじゃないかな。一夏の気付かないところで」

シャルルは今日のSHLの後の会話を思い出して答えた。

「一夏さん、心当たりは?」

セシリアも一夏の事を心配していた。しかし、一夏は本当に心当たりが全くなかったのである。何故なら自分はドイツまで言った事もないし、もしそういう展開だったら自分より春樹の方がありえる話だろう。

「うーん……そうだ、春樹に聞いてみよう。アイツならなにか分かるかもしれない」

一夏は一時期ドイツ軍にいて、ラウラと親しい存在にある春樹に聞くしかないと思った。

一夏たちは練習を終えて寮へ戻ろうとしていると、春樹が目の前からやって来た。

「よう、練習終わったのか？」

「ああ、それより春樹、お前いままで何処に行ってたんだ？」

春樹はこの一夏の質問を華麗にスルーして自分の用件を話す。

「一夏、箒、俺についてきてくれ。えっと、シャルルとオルコットはすまないけどここでお別れだ」

「そうですか、わかりましたわ」

「うん、分かった。一夏、部屋で待ってるよ」

セシリアとシャルルはそれぞれ、一夏と箒が抜ける事を了承し、先に部屋へ戻っていった。そして、その二人の姿が見えなくなると、春樹は真剣な眼差しで一夏と箒の二人を見た。

「これから行くのは千冬姉ちゃんのところだ。一夏、箒、真剣な話だからしっかりとした態度でな」

一夏と箒の二人はなにやら雰囲気が一変したというのを意識してしまい、呼吸も妙にゆっくりになってしまう。

黙り込む一夏と箒、そして春樹。結局、織斑千冬の部屋につくまで一切喋る事はなかった。

春樹は千冬の部屋のドアをノックすると、中から入って良い、という声が聞こえてきた。春樹はドアを開けて、一夏と箒を部屋に入れる。

「さて、これから俺と織斑先生がお前らに重要な話を言う。耳の穴かっぽじって良く聞けよ。一度しか言わない。そして、すぐに理解するのは難しいだろうが、無理やりにも理解しろ。分かったな」

春樹は二人に少々無理強いをさせるが、気にする様子はない。こ

の三人は千冬の目の前まで行くと、千冬は口を開いた。

「では、はじめるとするか……とりあえず春樹のことだ。今まで束の下へ訪ねていたのは……聞いているな？」

一夏と箒は「はい」と同じ答えを出す。

「なんでそうなっているか……わかるか？　それはな……今、篠ノ之束は命を狙われている」

箒は驚いた。やはり嫌ってるといっても実の家族である。命を狙われていると聞けば驚かないわけではない。

そして一夏も同じく驚いていた。行方不明というのは知っていたが、まさか命を狙われているとは思わなかった。

「ん、まてよ……じゃあ春樹が束さんの下に行く理由ってのは……」
春樹は一夏の言葉を遮るように答えた。

「その通り、俺は束さんの身の安全を守るために動いている。そして……先月このＩＳ学園を襲った謎のＩＳ……あれは、束さんの命を狙っている集団がかったものだろう。恐らくはテストだろうな。どれだけ強いを試す為に」

「ちょっと待て、じゃあ、そいつらのそんな兵器のテストごときで鈴は大怪我を負ったのかよ！」

一夏は興奮して、つい叫んでしまう。それを春樹はおちつけ、とたしなめた。

彼は大人しく引き下がる。

「一応、こういった事態に関しては基本俺が解決することになっている。そして本題だ。何故お前達二人をここに呼んだのか……」

千冬は春樹の言葉を続けた。

「それは、一夏、箒、お前達を束が必要としているからだ。現状ではここまでしか話せないが、きっと近いうちに束と会うことになるだろう。その時に詳しい話を聞く事になる」

一夏と箒は結局のところ、話しが良く分からないでいた。もっとも、情報が制限されている時点で、深いところまでは理解できなかった。しかしなんとなくは理解していた。

春樹は東さんの命を守る為に動いており、それはある組織からの攻撃を守る為である。そして、東さんは一夏と箒を必要としている……。

箒は自分の姉の命が危ないことを知り、しかも春樹が自分の姉を助けてくれている。それだけでも春樹には感謝している。

そしてもう一つ。近いうちに姉に会う事になる事を箒はどうしようかと思っていた。自分が今まで嫌っていた姉。でも今回の話を聞いて少し複雑な気持ちになってしまった。心にはなにかモヤモヤした感じがする。しかしそのモヤモヤも姉と会う頃には直っている事を期待していた。

「しかし春樹。何故今そのことを私達に？」

「良い質問だ、箒。でも考えてみる？ いきなり、はいじゃ一緒に戦うんでよろしく。って言われても困るだろ？ だから、そんな事を近いうちにお願いされるって分かってもらっていた方が良くないかってね。でも『そのとき』が来るまでまだ時間はある。ゆっくり今話したことを考えていてくれ」

ちょっとした沈黙の後、一夏が急に立ち上がり喋りだす。

「待ってくれ、ちふ……織斑先生も……この事に関わっているんですか？」

「実はな織斑、昨日、東から直々に聞いてな。協力関係になった」

「そう、ですか……」

千冬は昨日、春樹を捕まえて東に連絡を取ってもらった事である。東はあんまり千冬には関わって欲しくなかったが、千冬が自ら進んで協力してくれるというなら、お願いしたいと言ってきた。

千冬が「何を言っている、昔からの仲じゃないか。お前を春樹にだけ任せてられんよ」と言うなり東はベラベラと言ってはマズイ事まで千冬に話していた。これは東が千冬を信用している証だろう。そして頼りにしている事も。

「なににせよ、今の事は頭に残してもらえれば問題ないよ。あんまり今は深く考えないでくれ。『そのとき』が来たときに悩んでくれ

れば良いから。じゃあ解散で。部屋に戻ってくれ」

春樹がそう言うで一夏と箒は立ち上がり、なにやら暗い感じで部屋を出て行った。今話されたことで頭の中がいつぱいいいなのだらう。

一夏は部屋に戻ってきた。そこにシャルルは居なかった。シャワールームから水が流れる音が聞こえた。シャワーを浴びているのだろうか。

一夏はベッドに腰かけ、さっき聞いた事を思い出す。

春樹があそこまで強い理由。それは束を助けたいという意味の現れだろう。

一夏はようやく分かった。恐らく春樹は守りたいものができたからこそ、あれだけ強いんだ。目標はただ一つ。篠ノ之束を守ること。なんて簡単で難しいことだろう。しかし、それを遂行する為に彼は強くなった。そう一夏は思った。

「あ、そういうば……」

一夏は何かを思い出しそう呟いた。たしか、ボディークリームが切れそうになっていたはず。もしかしたらシャルルが困っているかもしれない。そう思った一夏は換えのボディークリームを手持ってシャワールームへと向かった。

一夏がドアを開け……

「シャルル、ボディークリーム切れてなかった……か……？」

シャワールームにいたその人はシャルル……ではない。外見は非常にシャルルに似ているのだが、身体が女性のものである。女性の象徴であるその胸元が膨らんでいる。

（あ……これは……どういう……ことだ？ シャルル？）

正直戸惑いを隠せない。衝撃が強かったからか身体が動かない。もう一夏の頭の中は、目の前に裸の女性がいる。ちよつと見えたし儲かったな。というものではない。決してない。

つい先ほど聞いた束の話に今度はシャルルが女性だった（？）と

いう二つの衝撃が一夏を襲っていた。もう何がなんだか分からなくなっている一夏。とりあえず、一夏はボディースープを渡す。

「え。えっと……これボディースープな……」

「え、あ、ありがとう……」

「じゃあな……」

一夏は何故か動かない自分の身体を無理やり動かしてシャワールームから出て行く。

シャワールームのドアが閉まり、今湿っぽい空気の中にいたからか、シャワールームから出ると涼しい風を感じる。一夏はそれですやく我に帰ることができた。

（何なんだ今日は。なんでこんなにサプライズが連続して起こるんだ？ 落ち着け……落ち着くん。春樹が言ってたじゃないか、何事も落ち着いてやれと。そうだ、冷静に対処するんだ）

しかし、別に何もやる事がなかったのでベッドの上に腰掛けて黙っていただけだった。

一夏はじつとベッドの上に座っていると、ガチャリとドアが開く音がした。シャワールームの方からだ。シャルルがシャワーから出てきた。

シャルルは自分のベッドの上に座る。しかし一夏と顔を合わせることはない。気まずい雰囲気が流れている。どうしようかと悩んだ末に一夏は何か飲もうか、とシャルルに聞いた。

「う、うん……お願いするよ……」

一夏はシャワーからあがったばかりだし冷たいものでも、と思い、冷やしてあったミネラルウォーターをシャルルに渡した。

「ありがとう、一夏……」

「お、おう……」

しかし、雰囲気はまた気まづくなっていく。もうどうにでもなれ、と思った一夏はシャルルに事情を聞く事にした。心臓がバクバクいっている中、一夏はゆっくりと口を開け……。

「もし良かったら……事情、聞かせてくれないかな？ ほ、ほら！

前に言つたら、悩みがあれば俺に相談すると良いって……言ってくれない？」

シャルルはふう……と息を吐いて、そして思いっきり空気を吸い込んだ。

「実家から……そうしろって言われて……」

「お前の実家ってことは……デュノア社の？」

「僕の父がその社長で、その人の直接の命令でね」

「命令？」

シャルルは「うん」と頷き、そして……目を閉じる。決心を決めたのかちよつと経って再び目を開けた。

「僕ね、一夏。父の本妻の子じゃないんだよ」

一夏は驚愕した。凄く重い話であつたからだ。これだけの悲しい過去を持っていて今までのあの笑顔。あれは嘘だとは思えなかつた。

「……父とはずっと別々に暮らしてたんだけど、三年前に引き取られたんだ。そう……お母さんが亡くなったとき……」

三年前……ちようどそれは自分が誘拐された年である。そして、春樹がドイツの軍へ体験入隊した年。確かに色々とあつた。あの時シャルルはこんなことがあつたのか、と、一夏はそう思う。

「その時、デュノアの家の人を迎えにきてね。それで、その時にISの適正検査を受けたんだ。するとIS適正が高い事が分かつて……。それで非公式ではあるものの、テストパイロットをする事になったんだ。でも、父に会つたのはたったの二回だけ……話をした時間は一時間にも満たないかな……」

ISの適合検査を受けた。と言う事は、元々シャルルの父はそのことだけを考えてシャルルを呼んだだけということ。自分の為に愛人の子を利用した。そして偶然にもIS適合が高かつたことが分かり、その父は歓喜しただろう。そういうことがなんとなく見えてきた一夏はだんだんムカついてきていた。もちろんシャルルのその父親に。

「その後の事だよ、経営危機に陥つたのは」

「え？　だってデュノア社って量産機のISシェアが世界第三位だろ？」

「結局『ラファール・リヴァイヴ』は第二世代型なんだよ。現在ISの開発は第三世代ISが主流になっているんだ。セシリアさんとボーデヴィツヒさんがこっちに転入してきた理由も、第三世代ISのデータを取る為。デュノアの方も第三世代ISの開発に着手してるんだけど、中々形にならなくて……」

このIS学園に入学する生徒はISを上手に使えるようにする為だけの施設ではない。所謂専用機持ちの人はその用途をもう一つ持っている場合もある。

第三世代ISを使用したデータを取ったり、その第三世代ISが持っている『自己進化能力』によってIS自体を進化させること、つまり『第一形態移行』ファースト・シフトや『第二形態移行』セカンド・シフトまで最低でもさせることが、専用機持ちの仕事の一つである。

そして正直に言ってしまうとここまで第三世代ISの開発が進んでいたのなら、第二世代ISは時代遅れ、と言われてもしょうがないものがある。

「だけど、それとお前が男のフリをしてるのってどう関係があるんだ？」

「簡単だよ、世界的にも非常に珍しく、現在確認されているのは二人だけのISを動かせる男、となれば良い宣伝になるし、僕が男なら、日本で発生した特異ケース、つまり、一夏や春樹に接触しやすい、それで機体データや一夏や春樹の身体データも手に入るかもってね。……そう、IS学園にいるISを動かせる男のデータを盗んで来いって言われてるんだよ、アノ人にね。でも、春樹とは中々接する事ができなかったな。あれ、ばれてたのかな？　僕……………」

でも、言ってみたらスッキリしたよ。ありがとう一夏、僕の話聞いてくれて。それと、今まで嘘をついていてごめん。春樹にも謝らないとね」

「いいのか、それで？」

一夏は若干低めな声でそう言った。そして立ち上がり、シャルルの肩をつかんだ。一夏の目は何か悲しそうで、でもシャルルの事を想ってくれている様だった。

「良い筈ないだろ!? 親がいないと子供は生まれない。そりゃそうだろうけどさ、でも、だからって自分の子供をそんな風に扱って良い筈ない!」

「一夏……」

シャルルは驚いていた。そんなことを言う一夏に。今まで、そんなことを言ってくれる人なんていなかったからだ。

「俺も……両親に捨てられたから……春樹も……。いや、こんな事はどうでも良い。シャルルはこれからどうするんだ?」

「どう……って……」

シャルルは言葉に困った。自分は一体何がしたいんだろうか、どうせ、このままいったら……。……。

「女だつてことがばれちゃったし、本国に呼び戻されるだろうね。きっと……良くて牢屋行き……かな」

一夏は考えた。どうすれば良い? こんな事になってしまったのは自分のせいだ。自分が、見てしまったからだ、シャルルが女だつて言う決定的な証拠を……。じゃあどうすれば……。どうすればシャルルを守れるのか……。

一夏はこれ以上はないくらいに頭を回転させる。そして、ある項目を思い出した。

「だったらここにいろ!」

シャルルは突然の一夏の言葉に驚く。いきなりの事でどういう意味かすら一瞬理解することが出来なかったぐらいだ。

「俺が黙っていれば問題ないし、もし仮にばれたとしてもお前の親父や会社は手出しできないはずだ」

一夏は、自分の手荷物を漁り、そして生徒手帳を取り出し、

「IS学園特記事項。本学園における生徒はその在学中において、ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。ということはこの

三年間は大丈夫ってことだ。それだけあればどうすればいいか考え付くだろうさ」

「良く覚えていたね、特記事項って五五個もあるのに」

「こう見えても勤勉なんだよ、俺はな」

「一夏……ありがとう」

シャルルはこの二日間で見ただけのことないぐらいの笑みを見せてくれた。

一夏はあまりの笑顔に心臓がドキッとしてしまった。そして一夏は思った。この、シャルルの笑顔を守りたい。こんなに良い笑顔をする彼女を悲しい顔にさせたくない。だから、何が何でもシャルルのことは自分が守ってみせると。

第二章『紅の鎧 — Answer —』

1

一夏がシャルルが実は女性だった事の問題でゴタゴタしている頃、一方篠ノ之箒は部屋で悩んでいた。

箒は正直に言うところ織斑一夏のことが好きなのである。

好きになった理由、それは小学生の頃にいじめを受けていたころに一夏が助けてくれた、そしてその後には優しくしてくれたからである。

好きになる理由など、実はちょっとしたことだったりする。小学生のとき、箒は春樹に相談した事がある。その時、一夏を誰よりも知っていて、尚且つ自分と一番仲が良かった人物が彼だからだ。

箒は勇気を出して一夏が好きなのを春樹に話した。すると春樹は笑顔で応援すると言ってくれた。そのときは本当に嬉しかった。結構気を使ってくれたし、色々協力してくれた。

そしてある時、箒は一つの決断をした。剣道の大会で優勝したら一夏に告白をする。好きだと一夏に伝える。その為に剣道の大会に優勝するんだと。

そしたら春樹は剣道の稽古に付き合ってくれた。箒が優勝できるように、とアドバイスもしてくれた。正直嬉しかった。良い友達を持ったと思った。

しかし……。

そのときだ、箒の姉、東がインフィニット・ストラトスを開発し、そして『白騎士事件』により篠ノ之の家系は全員保護対象にされ、そして地元を離れる事になってしまった。

もちろん剣道の大会に出る事もそれで優勝する事も、優勝して一夏に告白することも叶わなくなってしまった。

その後の箒はちょっとした自暴自棄になり、力任せの剣道をして

いた、自分のイライラを解消するだけの剣道。そこにスポーツマンの精神などというものはなかった。

確かに剣道で勝った。剣道の技量では相手より上だった。

しかし箒は何か空虚感に襲われていた。何故なら、剣道というスポーツを楽しんでいなかったからだ。

ただ自分の力を自身が満足する為だけに振り回してただけだった。

（そう……あのときの私は、まるであのラウラ・ボーデヴィツヒのようだ……）

箒はラウラの今までの模擬戦を思い出す。自分の力を相手の事も考えずに振り回す。それはまるで過去の自分を見ているようで、とても不快だった。

（駄目だ、奴の事を考えては……今は……）

箒は考えてる事が全く違うものになっている事に気付いて軌道修正した。箒が一夏と再会して三ヶ月。やはり一夏の事が好きだった。そして彼にどう告白しようかと悩んでいたのだ。

箒は怖かった。彼に告白する事が。

もし彼に振られてしまったら？ 告白したせいで避けられてしまったら？

考えただけで怖くて怖くてしょうがなくなる箒。

（そうだ、こんなときは春樹に相談すれば……）

箒は携帯電話を取り出して春樹に電話をかける。

1コール、2コール、3コール、そして4コール目の途中で春樹が電話に出る。

『もしもし、どうした箒？』

「あ、春樹か。実は相談が……」

『何、やっぱ一夏の事か？』

やはり春樹にはなんでもお見通しなのだろうか。箒はいきなり正解を言われてドキッとした。

「そ、そうだ。実はな——」

箒は自分が考えている事を全て話した。

一夏に告白しようか悩んでいる事、そしてもしかしたら、嫌われたり、避けられたりするのではないかという考え。

その箒の悩みに春樹はため息をつく。

「なんだ、馬鹿にするのか」

『まあ、そんな感じ。確かに一夏は鈍感だけど、面と向かって告白すれば大丈夫だよきっと。箒結構可愛いし、自信持ちなよ。あんまり遠回しにアピールしてるだけじゃ一夏は気づいてくれないぞ?』

「そ、そうなのか?」

『ああ、一夏はそういう奴だよ。あいつは鈍感の中の鈍感だからな。気を惹こうとしてアピールしてるだけじゃ、あいつは答えてくれないよ。だから、好きなんだという事をはっきり伝えるんだ』

「わかった。ありがとう、いつもありがとう、春樹」

『ああ、俺はいつもお前達の味方だよ』

と春樹は言い残して電話を切った。

(面と向かって、はっきりと……か……)

言うだけなら簡単だ。しかし、そこに踏み出すまでが最大の障害である。

やはり不安と羞恥というものが邪魔してそこまで踏み込めない。ましてやこの六年間思い続けてきた男性だ。そしてその想い人に再会した。幸いにも彼は箒のことを忘れずに覚えていてくれた。箒はなによりそれが嬉しかった。

だけど……面と向かって告白して、結果があれだったら?

やはり考えただけで怖い。だけど、春樹の言った通り、伝えないと何も始まらない。だから――。

(よし、なら今度の学年別トーナメントで納得のいく成績を収めたなら……一夏に告白しよう……うん!)

箒には専用機はない。だからこの学年別トーナメントで勝ち抜くのは至難の業であり、箒の現在の腕では専用機持ちに当たっただけで勝てるかどうか危うい。

今まで一夏や春樹、そしてセシリアと練習を続けてきた。確かにISの操縦は入学当初に比べて遥に上達しているのは箒自身も実感していた。

だけど、それだけ。専用機持ちの操縦テクニックにはまだ及ばない。

こういったISのトーナメントを行うときは、専用機持ちの独壇場にならない為に機体リミッターに規制をかけることになっている。武器の出力と機体自体のスペックを量産機並みのものにする事になっている。これで機体性能で勝つことは不可能になるし、求められるのはその操縦者のテクニックのみ。

しかし、そのテクニックは流石専用機持ちと言うべきか、非常に上手である。伊達に専用機を預けられているだけあり、結構前からISを操縦しているのだろう。

しかし、ここで箒は疑問を感じた。

織斑一夏と葵春樹である。

過去に何かありそうな春樹はともかく、一夏はクラス代表を決めるときあの春樹との戦闘。あれはおかしかった。確かまだISの操縦は二回目であり、そしてあの操縦テクニック……。おまけに春樹に勝ったのである。

（一夏……お前はなんだ……）

箒は一夏の存在に疑問に思ったが、そんなことはどうでもいい、
と思い、ベッドにもぐりこんだ。そして箒は眠りにつく。

二日後、量産型ⅠS『打鉄』の使用許可を得ることが出来た箒はセシリアと共に特訓を行うことにした。

ちなみに一夏はこの場にいない。彼とは今あんまり練習したくない。これは箒の一夏への告白のため戦いである。一夏にその為の練習など見て欲しくなかった。

だから箒はセシリア・オルコットに頼んだ。春樹は練習に付き合えないそうなのでここにはいない。セシリアは何故か残念そうな顔をしていた。

箒はそんなセシリアを見て彼女は春樹のことが気になっているのか、と思った。

「すまないな、セシリア。練習に付き合わせてしまってた」

「いいえ、大丈夫ですわ箒さん。お友達のせっかくのお誘いでもあります。学年別トーナメントも近いことですし」

箒とセシリアは春樹や一夏を通して仲良くなっていた。今や名前と呼ぶほどのお友達だ。

セシリアの専用機、『ブルー・ティアーズ』であり、ビットによる全方位攻撃が特徴的な武装を持った機体である。

箒は彼女と一夏がいつも行っている練習をやってみることにした。セシリアが攻撃、そしてそれを十五分間避け続けるあれである。

「やってもいいか？」

「ええ、構いませんけど……」

二人は飛び上がり空中へ、そして。

「じゃあ、行きますわよ!!」

そう言って『スターライトmk?』を放つ。それをかわす箒。

そして『ブルー・ティアーズ』を解き放つセシリア、ビットが箒

を囲み、全方位攻撃を仕掛ける。

無数のビームが彼女を襲う。箒は慌てて、間一髪でかわしていた。しかし今のははっきり言ってまぐれだった。運が良かったただけだ。次もかわせるとは言い難い。

（一夏は……こんなのを毎日やってたのか……これを十五分間逃げ切る……のか？）

無理だ。

箒はそう思った。ただでさえ今までセシリアは一夏と練習してきて射撃の精度も上がっているし、一夏も攻撃を避けることに關してはとてつもなくスキルアップしているはずだ。

到底自分が敵うような相手じゃない。そう思った。

だけど、その後も何発かわす事の出来た箒。

セシリアはその攻撃を何回かわされて驚いていた。彼女は量産機の『打鉄』で、しかもセシリアは一夏との練習で、スキルアップをしているはずなのだ。

なのに、つい最近まで春樹に基礎的な事を教えてもらっていた彼女が、今こうして自分の攻撃をかわしている。

その事実が信じられなかった。

（箒さん……あなた……）

基礎は完全に出来ている。後は臨機応変に対応する応用力を養うだけ、という状態だという事。つまり土台作りは完全に終わっていた。

（何だ、さっきはまぐれでかわしたと思ったが……。当たるかどうかギリギリだがかわせる……？）

箒も自分でもよく分かっていなかった。身体が動いてくれる、危なかったが、何とかかわせる。

しかし、ギリギリの綱渡り状態だった為か、セシリアの攻撃がヒット。たった三分間であったが、毎日練習して日々成長しているセシリアに初めて挑戦、しかも『打鉄』で三分間耐えられただけでも凄いことだろう。

二人は一回地上へ降りて、話し合うことにした。

「箒さん、凄いですわね。基礎はもうちゃんと出来てるみたいで」

「ああ、自分でもビックリだ。まさか私がここまで動けるとはな。危ないところは沢山あったがな」

「後は戦況に合わせれる応用力を鍛えていけばいいですわね」

「うむ、ではもう一度いいか？」

「ええ、行きますわよ、箒さん」

二人がもう一回さっきと同じ練習を始めようと、空へ飛び立とうとしたそのときであった。いきなりの砲撃が二人を襲った。

いきなりの砲撃であったが、セシリアと箒の二人はそれをかわした。

そして二人の前に現れたそれは黒くて、そして大型のレールが右肩部のスラスターに取り付けられているのが特徴的なその機体。ドイツ軍IS部隊隊長専用機『シュヴァルツェア・レーゲン』であった。

「ラウラ……ボーデヴィツヒ……」

セシリアはISの画面に映し出された『シュヴァルツェア・レーゲン』のスペック情報を読んでそう呟いた。

「どういうつもりだ、いきなりこちらに砲撃してくるとは！」

箒は怒りながらラウラに対して怒鳴った。

「イギリスのブルーティアーズと量産機の打鉄……。打鉄はともかく、イギリスのは資料を見たときの方が強く感じたな」

ラウラは箒の怒鳴り声に耳も傾けずに無視をした。箒はこれ以上こいつに何を言っても無駄だと思ったからこれ以上何も言わないようにした。

「さて、古いだけが取得の国は余程人材不足なのだろうな。そして量産機を使っている奴は……学年別トーナメントにでも向けて特訓といったところか……。一つ言っておく、無駄だ、やめておけ。どうあがいても専用機持ちには勝てない」

ラウラはもうあからさま過ぎるほどの挑発を二人にした。セシリ

アと箒の二人はラウラの挑発にまんまと飛び掛る。

「コイツ……余程、ぶん殴って欲しいみたいだな」

「ええ、箒さんの言う通り。これだけの事を言って、吼えるだけか
と
思
っ
て
?」

「ふん、なら。二人がかりで私に挑んで来い」

一夏はシャルルと廊下を歩いていた。

「一夏、今日のISの練習は？」

「今日は箒とセシリアが二人で練習するらしい。春樹もなんか用事があるみたいでないし……」

「じゃあ、今日は僕と一緒に練習しない？」

「ああ、いいぜ。シャルルがいて助かったよ。このままじゃ、練習相手がなくて困るところだったよ」

シャルルは一夏と一緒に練習する事になって嬉しそうな顔をしていた。

すると、とある少女数人がアリーナに向かって走っていく。なんか、アリーナで専用機持ちが模擬戦をやっているらしい。

専用機ということは、用事でいない春樹と現在入院している鈴音、そして一夏とシャルルを除けば、セシリアとラウラ、そして四組の四人だけである。一体誰がやっているのか気になった一夏はアリーナへと走った。それについていくシャルル。

そしてアリーナで戦っていたのは箒とセシリア、ラウラの三人だった。

箒とセシリアは目を合わせると共に頷いてラウラに箒は『ブレード』を持って突込みに行き、そしてセシリアは距離を取って箒を援護する作戦のようだ。

まずは箒の『ブレード』による一振り、これは勿論かわされる。しかしかわした先には、セシリアの『ブルー・ティアーズ』があった。そこからビームが発射されるが、その攻撃がラウラには届かなかった。

ラウラは余裕の表情である。

「なんだ、今のは!？」

箒は驚きの声をあげた。『ブルー・ティアーズ』から放たれたビームはラウラにヒットする直前に消滅したのだ。彼女が右手を前に出すのと同時に。

「Charged Particle Cancellor か…
…」

シャルルは呟いた。

「なんだ、そのチャージド…なんちゃらって？」

「チャージド・パーティクル・キャンセラー…通称『CPC』。これはビーム系の武器を無力化する装備。恐らくこの新装備をIS学園でテストを行ってるんだらうね」

「そうなのか…セシリアの装備のほとんどが無効化されちゃうってことになるな」

「うん、セシリアさんがラウラ・ボーデヴィツヒに対抗するには残りのミサイルが発射できる『ブルー・ティアーズ』二基と実剣装備の『インター・セプター』ぐらいしか彼女にダメージを与えられない」

「でも、弱点はあるんだろ？」

一夏がニヤついてシャルルに問う。

「うん、もちろん。それを、箒さんやセシリアさんが気付くかどうかにかかっているけどね」

セシリアは今の何なのか理解していた。『チャージド・パーティクル・キャンセラー』が自分のISと相性が絶望的に悪い事を。ブルーティアーズのミサイルを発射するが、弾速が遅すぎてまず当たってくれなかった。

こうなったら近接戦闘用ナイフ『インター・セプター』を使用するしかない。そう思ったセシリアは短刀『インター・セプター』を展開し、箒とともに近接戦闘を試みる。

しかし、ラウラのISは近距離から中距離を得意としている。セシリアが近接戦闘に加わったところでどうしようもなかった。第一

近接戦闘はあんまり練習していないのだ。やるだけ無謀だって事は彼女が一番分かっていた。

だが、プライドの高いセシリアがあれだけ挑発されて黙っているわけがなかった。

そして箒はISの機体性能の差に絶望していた。

所詮量産機の『打鉄』である。専用機としてチューンされたISの前では歯が立たなかった。

ラウラのISは機動力、防御力、そして武器の火力をも遥に量産機を上回る。

箒ははっきり言って基礎が完全に出来上がっており、土台がきちんと出来ている。これも春樹との練習のおかげだ。

しかし、目の前のラウラには勝てる気がしなかった。

勝ち目は無い。そう思ったのだ。

近接戦闘用武器の『ブレード』を握り締め、剣道で蓄積された技術を最大限に活用しても、軽く受け流されて反撃を受けてしまう。

セシリアと箒の二人はラウラの攻撃を前に後方へ大きく吹き飛ばされた。

そしてラウラは『ワイヤーブレード』を発射。無数のワイヤーがセシリアと箒の方へ飛んでいく。彼女達は受身を取ってすぐに次の動作に移れなかった。

そして、ラウラの発射された『ワイヤーブレード』に捕まってしまい、喉元を拘束される。首が絞められる状態だ。

ISの防御機能で息が出来なくなることはないが、苦しさは少なからず感じる。

「今度はこっちの番だ！」

ラウラはそう大きく声を出してセシリアと箒の二人を自分の下へ引き寄せる。

そして、二人をボコボコに殴ったり、蹴ったりしたのだ。しかもその加減は度を越えていた。下手をすれば命が危なくなるほどに。

二人のISの装甲はところどころ砕け散り、もうISの装甲も限

界であった。このまま行くとシールドエネルギーが0になるどころか、ISに致命的な損傷が起こるし、何より彼女達の命が危険だった。

一夏はそれを見ていて、憎悪した。これ以上はヤバイと思った。

「なんだよ……何やってんだよ……。やめろおとおお、ラウラああああああああ!!」

アリーナのバリアを叩き、叫ぶ一夏。しかし、アリーナのバリアは素手で叩いたところで割れるはずもないし、ラウラも一夏の発言に耳を傾けることもないだろう。

(そうだ、『零落白夜』でこのバリアを切り裂けば……)

そう思った一夏は右腕の白いガントレットを見つめて、心で念じた。「来い、白式」……。

すると一夏は『白式』^{びやくしき}に身を包まれ、そして右手に持っている剣、『雪片・弑型』を強く握り締めて、そして『零落白夜』を発動させた。

『雪片・弑型』は半分に割れて、そしてその間からエネルギー系の刃が出てくる。

『白式』^{びやくしき}の稼動エネルギーが減っていく中、一夏は目の前のバリアを切り裂き、破壊する。そして、そのままラウラの方へ飛んでいった。

「お前はああああああああああ!!」

一夏は叫んでラウラに斬りかかる。しかし、ラウラの『チャージド・パーティクル・キャンセラー』を前に『零落白夜』でさえも無力化されてしまう。

「なんだ、好きな女が殴られ蹴られてるうちに頭に血が上ったか？ 沸点の低い奴だな……」

「離れて、一夏!!」

シャルルがオレンジ色の機体『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』を身に纏い、そして、一夏がそこから離れた瞬間に実弾系の武器でラウラを狙撃した。

実弾系は『チャージド・パーティクル・キャンセラー』では防ぐことが出来ない。仕方がなく、ラウラはそこから動いてその攻撃をかわした。

『ワイヤーブレード』の拘束が解け、さらにシールドエネルギーが0になった為にセシリアと箒の二人はISがその身から外れ、その場に倒れこむ。

専用機の『ブルー・ティアーズ』は量子化され、量産機の『打鉄』をその場に倒れこむようにして機能を停止、身体を固定する固定具が外れた。

一夏はその隙にセシリアと箒を回収、そして持ち前のスピードでラウラの砲撃をかわし、先ほど切り裂いたアリーナのバリアへ向かい、アリーナの観客席の中に二人を入れた。

「すまないな、一夏……」

「ごめんなさい、一夏さん……」

二人は身体の痛みを我慢しながら一夏に謝った。

「大丈夫だって、謝る事はない。お前らはそこで横になってろ。いいか？」

二人は肯定の返事をしてアリーナの方へ戻った。

その時だった、シャルルがラウラの『ワイヤーブレード』に捕まり、そして『プラズマ手刀』の攻撃を受けそうになっていたのだ。

「シャルル！」

一夏は急いでシャルルを助けようとその『白式』^{びやくしき}を加速させた。

しかし、距離的に間に合いそうになかった。

そのときであった。そこには懐かしきISがそこにあったのだ。

暮桜。

織斑千冬の専用機であり、世界一になった機体。

そしてそこにはもう一人、もう見慣れた……白くて美しい、しなやかな翼がとても特徴的なその機体、葵春樹の『熾天使』^{セラフィム}であった。

千冬は『雪片』でラウラの『プラズマ手刀』を受け止め、そして春樹は『シャープネス・ブレード』でラウラの首元に押し当ててい

た。

「ラウラ、動くなよ。動いたらこれでお前を斬る」
春樹は小さくラウラに警告した。

「きよ、教官……春樹も……」

ラウラは驚きの声を上げる。

そしてラウラは諦めたように体の力を抜いた。

千冬も身体のを抜き、楽な姿勢に入った。そして、全員に聞こえるように大声で警告をする。

「模擬戦をやるのは構わん。だが、アリーナのバリアを壊したり、過度な攻撃を繰り返すその行為は教師として黙認しかねる」

誰もが黙り込んだ。千冬が言っている事は誰もが理解できる。そしてそう指摘され、自分の過ちによりやく気付く事が出来たのだ。

一夏も二人を助ける為とはいえ、アリーナのバリアを壊すのはちよつとまずかったとは今になって思った。

「この戦いの続きは、学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるのなら……」

ラウラはそう言ってISを解除する。

「織斑、デュノアもそれでいいか？」

「あ、ああ……」

「教師にははいと答えろ、馬鹿者が……」

一夏はそのときの千冬を見ると、いつにもない凄く怖い感じの目だった。その目には一夏、そしてその周りの人手さえ、後ろに一步下がってしまうほどの迫力があつた。

「僕も……それで構いません」

シャルルは淡々と返事を返した。

「よし、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止とする。解散！」

保健室ではセシリアと箒が横になっていた。ラウラの攻撃によって少々の怪我をしたからだ。その怪我はISのおかげでそこまでの怪我はなかったが、痛みは少しあるらしい。少し安静にしていれば治るらしい。

だが……。

セシリアの『ブルー・ティアーズ』は損傷が酷く、修理しないと使い物にならないらしい。しかもその修理は最低でも一週間はかかるらしく、学年別トーナメントには間に合わない。よってセシリアはそのトーナメントに出ることが出来ない。

一応、用意されている量産機を使えば出れない事はないのだが、使い慣れない機体を使っても結果は見えているし、それにより変な感覚を身体に覚えこませてもまずかった。

「一夏さん、箒さん……春樹さん……私の分まで、戦ってください。そして、あのラウラ・ボーデヴィツヒを……」

セシリアは弱々しく三人に頼んだ。

三人は無言で首を縦に振りうなずく。

そして……。

「春樹……頼みたいことがある。残り五日間で、出来るだけ私を強くしてくれないか？ 前出した春樹の宿題……強くなりたい理由、見つけたぞ」

あの、クラス代表対抗戦の前に皆で練習しているときに春樹から出された宿題。『自分が強くなりたい理由を考える』というものの答えがようやく見つかったのだ。

「私は……ラウラのような奴に力の使い方を教えられる強さを手に入りたい。あのラウラに、教えてやりたいのだ……」

「そうか……わかった。じゃあ、明日から練習を始めるぞ。だから、早く寝て身体を早く直しておけ」

そう言って春樹は保健室から出て行った。そして廊下に出るなり携帯電話を取り出した。電話の相手は……篠ノ之束だ。

「もしもし、束さん？ 頼みごとがあるのですが。……『紅椿』を明日までにこっちに届けてくれませんか？ コアはとりあえず適当なの積んでくれれば問題ないありませんから……。え？ 見つかったんですか！？ なら話は早い。予定を早めます。『紅椿』を箒に使わせようと思います。もちろん、機能制限リミッターはかけておいてください。……はい、それでは」

そして、電話を切った春樹は、今日自分の部屋へと戻ることはなかった。

次の日のことだ。IS学園に一つの贈り物が届いた。それは昨日春樹が束にここまで送っておくよう頼んでおいたIS『紅椿』である。

それを春樹と千冬と箒はこの学園のアリーナのピットの方へと専用の車を使って運び入れ、そのISの金属製の大きなカプセルを開ける。そこから現れたのは何処までも紅い、真紅のISであった。

「これが……私の機体……『紅椿』……」

箒はまじまじと目の前のISを見る。まるでISを初めて見るかのように細かく隅々まで舐め回す様に見る。箒は正直見とれていた。これが自分の嫌う姉が作ったというのに、そんなことも忘れて目の前のISに惚れていた。その美しいフォルムに。

「そう、これが箒のIS『紅椿』だ。デザインと機能面の案は俺。実際に製作したのは束さんだ」

「え、春樹も……このISに参与しているのか？」

「ああ。このISはお前の為に用意したものだ。本当はもう少し後、箒がもっと強くなったら渡そうかと思っていたんだが……もう待つ必要なんて無かった。箒はもう強い。立派なIS乗りだと判断したからな。あと、本当に必要なときが来てしまった、っていう理由もあるけど」

箒は昨日、春樹が望んでいた答えを出してくれた。『強くなりた理由』を春樹が望む形で答えてくれた。それが大きな理由だろう。大きな力を手に入れるとき、人はそれをどう使うのか、それによって状況が大きく変わってくる。良いことに使えば、人々に喜んでもらう事もできる。

だが、悪いことに使えば人を悲しませてしまうだろう。だから箒

にはその『強くなりた理由』を聞いた。

そして、箒は誰かの為に大きな力を必要とした。だから春樹は急ピッチで『紅椿』という大きな力を用意させた。箒によってラウラを止めてもらう為に。

「さて、篠ノ之。早く『紅椿』を装着しろ。フォーマットとフィッティングを終わらせて、お前の機体になくってはならないからな」
千冬は箒にISを早く装着するようせかせる。千冬にしても、ラウラのやっている事を止めてやりたいのだ。

だが、彼女がやっている事は春樹や千冬があーだこーだ言っても解決にはならないだろう。何故なら、千冬と春樹は過去にドイツ軍基地でその自身の強さを見せ付けている。だからこそ、自分達の事は無視されてしまうだろう。

所詮、力ある者の話でしかない。それに彼女は勝利を求めている。異常なほどに。その理由は恐らく三年前に自分の隊の隊長が殺されたからだろう。

だから、春樹や千冬がラウラをISでボコボコにしたとしても何の解決にもならない。ここはラウラ自身も初めての相手に叩きのめしてもらうしかないのだ。

それにラウラは個人的に一夏を恨んでいる。その原因である千冬が何をやったとしても更にラウラは一夏への憎しみを増させるだけだろう。

ラウラがどんな理由で一夏を恨んでいるかはわからない。一応理由は話してくれたのだが、それだけが全てではないと思われる。何せ、あの言葉だけでは彼女の奥底の気持ちはわからない。

箒は紅椿を身につけると、網膜投影された画面を凝視する。この機体のスペックを確認しているようだったが、彼女の顔は驚愕にかわるまではそう長くはかからなかった。

「これは……こんな高性能な機体……」

「誰が作ったと思ってんだよ、俺とお前の姉だぞ。今回ばかりは姉に感謝しなくちゃなあ、箒」

春樹は箒の疑問に答える。

箒は流石に春樹の言う事に賛成せざるをおえなかった。今回ばかりは自分の姉、篠ノ之束に感謝しなくてはならない。正直、自分の夢を断ち切った姉は許せない存在だが、仮にも実の姉、家族なので本当のところ嫌いでもないかもしれないなかった。

「そうだな、姉さんには感謝せねばなるまい。春樹、今度姉さんに会うことがあったら言うておいてくれないか？ 妹が感謝していたと」

すると、春樹はニヤリと笑って、

「いや、その必要は無いだろう。自分で言うんだな」

すると、春樹の持っている携帯端末の画面を箒に見せ付ける。そこには篠ノ之束が映し出されており、画面の向こうの束は箒を確認するなり、

『やつほゝ、箒ちゃんひさしぶり。元気してた？』

「姉さん!？」

やはり箒は驚いた。春樹は予想通りの反応ですこしニヤケてしまった。

『あまり長くは話せないから、手短に説明するね。箒ちゃんの専用機『紅椿』は私と春樹の二人で製作したんだよ。まあ、実際のところ他にも協力者である整備士の人たちに手伝ってもらったりしたけどね。つと、そこは置いといて……。その『紅椿』は第四世代ISなんだよ』

「え……今、何と言いましたか？」

これまた箒は予想通りの反応を示した。

第四世代ISの存在は本当のところ、あつてはならないものだと思うわれる。何故なら現在のISは第三世代ISの開発が主流になっており、しかもそれはまだ開発段階で実験中といったところだ。それなのにここには第四世代のISがある。そう聞いて驚かない人などいないだろう。

実のところ、箒のフォーマットとフィッティングのサポートをし

ている千冬も驚いているのだから。

『ふふふ……驚いてるねえ、ちーちゃんも良い顔してる。まあ無理も無いよ、まだ第三世代を研究している最中に第四世代だからね——』

その第四世代IS『紅椿』は全ての距離、攻撃・防御・機動。全てにおいて即時対応できるように製作されたのが第四世代ISであり、『紅椿』である。

しかし、問題点がいくつかある。それは世界中に第四世代が作られたと知られれば、篠ノ之箒の存在が危うくなる。どの国に属するか、それを巡って争いの火種になりかねないのだ。そしてその製作者は誰なのか解答を求められるだろう。

篠ノ之束が命を狙われていることが分かっている今、表舞台に彼女を出すのは非常に危険である。

箒もそのことは前に話しているので、『紅椿』の製作者については解答できないだろう。そうなれば、箒の存在はどうなるのか……。IS国際委員会に目をつけられ、身を拘束されてしまう危険性もある。

『だから『紅椿』には機能制限が設けられているんだよ。そのスペックでも結構性能を落としているんだよね』

「これで……性能を落としているんですか？ 信じられない……」

『それでも結構性能が高い専用機程度だから、目をつけられる事は無いと思うよ。詳しく調べられない限りはね。だからあんまり目立ちすぎないようにね』

すると、春樹はそこに口を挟み、

「束さん。それ、これからやること分かかってて言ってます？」

『まあ、箒ちゃんも専用機手に入れたのかあ、お姉さんが関与しているのかな？ って思われる程度にしておいてねってこと。わかった？』

春樹と箒は「はい」と返事をする。すると、フォーマットとフィッティングが終わり、箒の網膜投影された画面には『フォーマット・

フィッティング完了』の文字が表示されていた。

「よし、これで終わりだな。では篠ノ之、春樹と模擬戦形式で試合をしてこのISに慣れて来い」

「了解」

箒はそう言って、ハンガーから出ようとすると、春樹は箒を呼び止める。

「箒、早く『紅椿』を動かしたい気持ちは分かるが……ほら、お姉さんに何か言うことは？」

箒は嫌というよりは少し恥かしい感情を抱き、顔を赤らめる。彼女は春樹が持っている携帯端末に映し出された束をチラッと見ながら、

「ありがとう、姉さん……」

と、ボソツと言って、そのままハンガーを出て行った。

束はとても嬉しかったらしく、物凄いスマイル顔になっている。

春樹はそのまま画面を自分の目の前に持って行き、束との会話を再開する。

「束さん、とても嬉しそうですね」

『当たり前だよ。離れ離れで嫌われていた妹に感謝の言葉を言われれば、そりゃ嬉しいよ!』

「やっぱり……家族って良いですね……」

『春にゃん………』

春樹は両親を失っている。過去に事故死、という風に聞かされている彼だが、実際にその事故現場を見たわけでもなく。ただ、警察の方から事故死ということを知っただけだった。

それが事実かどうかは分からない。ただ言えることは……春樹は両親の愛情を短い時間しか注いでもらっていないということ。春樹の両親が死んだのはほんの五歳の頃であり、ものごころがついてきて親に甘えたい時期。そんな頃を彼は両親なしで生きてきた。

さらには彼には親戚筋というものがいなかった。

だが、そんなときに手を差し伸べてくれたのは、お隣の織斑家「

織斑千冬」と「織斑一夏」だった。織斑家の二人も同じような境遇で両親がいない。だから同じような境遇同士、協力し合って生きていこう。という事になり、それからは一夏と一緒に暮らしてきた。

春樹が織斑家にお世話になる際、それを維持できる程の経済力など、五歳児にはなかったので、家を売り払った。

だから、春樹には実家というものはない。いや、織斑の家が実質の実家ということになるだろう。千冬も一夏も、春樹のことは家族だと思ってくれている。それだけで春樹は嬉しかったのだ。

「いや、ごめんなさい、なんかこんな空気になっちゃって。それから、その春にゃんつてのやめてくださいよ」

『うん……………。でも、やめない!』

「まったくもう……………。じゃあ、俺はこれで。箒と模擬戦に行ってきますから」

『うん。じゃあね』

「はい」

春樹はテレビ電話の通話を切り、携帯電話をポケットにしまう。

そして春樹は制服を脱ぎ、下に着ていたISスーツの姿になり、春樹は自分のIS『熾天使^{セラフィム}』を展開。そこには特徴的な美しい白い翼が広がっている。

春樹は千冬に挨拶をすると、ピットから飛び出し、そのまま近くのアリーナに飛んでいった。

第三章『赤と黒 ―Correction―』

1

学年別トーナメント当日。

今、箒と春樹はトーナメント表を見ている。そして……第一回戦、箒の相手はラウラ・ボーデヴィツヒであった。

「なんという組み合わせだ……。だが――」

「好都合だ、ってか？」

「ああ、そうだな」

箒は今日の学年別トーナメントのために必死に練習してきたのだ。箒の専用機『紅椿』あかつばきとともに。

その練習はとてつらいものであった。たった五日間で箒を現役の軍人相手に対等に勝負できるほどに鍛え上げなくてはいけないからだ。

早朝に練習をし、授業を受け、そして放課後周りが暗くなり、アリーナが使用禁止になる時間まで練習を続けてきた。ちなみにこの練習は極秘に行われてきた。箒たちが使っていたアリーナは千冬が監督し、他の生徒達をそのアリーナには入れさせなかった。これも箒の専用機の事を他の生徒達に知らせない為で、あまり「噂」という形で『紅椿』のことを口外して欲しくなかったということもある。いずれ見せるときは来るのだが、噂という形で広まれば、変な間違った情報まで流れてしまう可能性も無きにしもあらず。さらに、箒が専用機を持った、という情報が流れれば、アリーナには人だけが出来てしまうだろう。そんな状況で練習もあったものではなく、真剣な練習が駄目になってしまう。だからこそ、春樹と二人だけの空間で時間をめいいっぱい使ってもらっていた。

千冬は職権乱用ではないのか、と言われるだろうが、それも束との協力関係にあるからであり、そうでなければここまでではないだ

ろう。彼女もラウラの事は心配なのだ。だからこそ、箒にはラウラを倒して欲しい、そしてラウラに本当の力の使い方を見せ付けて欲しい、と、そう思っているのだ。

「しかし、一回戦からとは……千冬姉ちゃんが裏から手を回してたりして」

「ははは、考えられるな」

箒は笑い、そしてすぐ近くにはラウラ・ボーデヴィツヒの姿がある。それを確認した春樹はこう思った。

（ラウラ……何故こんな風に……。エルネスティーネさんに隊長と認められ、専用機を授かった……。なのになんでこんな……）

彼女は間違った道を進んでいる。確かに、春樹は自分が正しいと思うことをやれとは言った。だが、たとえそれが自分が正しいと思っただとしても、他の人がそれを認めなければ正しい事とはならない。逆に言えば、他人に認められて、ようやくその自分で考えた事が正しくなるということである。

しかし彼女の考えを正しく思う人などいない。彼女は勘違いしている。恐らく口で言ってもわからないだろう。

だから、この学年別トーナメントを利用して、自分の正義をラウラにぶつけてもらうことにした。力とはどうあるべきなのか、どういう風に使えばいいのかを教えるために、箒には頑張ってもらわなければならない。

箒も春樹の目線に気がつき、ラウラ・ボーデヴィツヒの姿を確認した。箒が彼女に目を向けると、それを察知したのかラウラは箒にニヤリと笑って人ごみにまぎれて何処かに行ってしまった。箒は舌打ちをして、春樹に話しかける。

「春樹……ラウラ・ボーデヴィツヒとは昔知り合っただったな。

そのときは……どんな奴だったのだ？」

春樹は言っているのかと、少し悩んでから……、

「ラウラは……アイツは……最初は落ちこぼれだったよ。隊の中でも最弱のな……」

箒はその言葉を受けて衝撃を受けた。でも、よくよく考えてみると当たり前の事である。誰だって最初は弱いものだ。だが、人は99の努力と1の才能とは何処かで聞いたようなフレーズだが、それもそのはずだ、人は誰だって弱いところから努力して這い上がっていく。そして、その努力で何かが出来てこそ、その努力は意味のあるものになる。

だが、ラウラ・ボーデヴィツヒは違った。彼女はその99の努力をその1の才能で水の泡にしようとしている。

あれが、彼女なりの正義だったとしても……周りの人間は誰一人として彼女の行いを認めていない。完全にラウラは一人歩きをしてしまっている。

「どうして……あんな風になってしまったのか、なにか分かっているか？」

箒の質問に、またしても春樹は良く考えてから言う。

「ただ言える事は、ラウラは今、復讐心と嫉妬の両方がごちゃごちゃに混ざり合って何が良くて何が悪いのか、その判断が出来ていないということ。だから箒、アイツを目覚めさせて欲しい。それが、俺がいま箒にできるお願いだ。やってくれるか？」

「ふん……春樹、私たちは何の為にいままで練習してきた？ やってみせるさ、その願い、必ず叶えてやる。だから春樹は安心して待っていていいさ」

そのときの箒の表情はとても頼もしく、春樹は箒に任せても大丈夫だとそう確信したが、逆に不安も覚えた。もし、ラウラとの戦闘中に何らかの襲撃があったらと思うととても不安になる。

この前の鈴音と一夏との試合中に起きた謎のISの襲撃によって鈴音は大怪我をしてしまい、今は入院中だ。そんなことがもし箒やラウラの身に迫ったらと思うととても不安になる。

そんなこともあったからか、春樹はとても不安だった。なにか、いやな予感がして……。

「箒……俺は織斑先生のところに行ってくる。箒は試合前だし、一

人で精神統一でもして気持ちを落ち着かせたりしてなよ」

「うん、わかった……」

春樹はその場から立ち去り、箒とはいったん分かれることになった。

そして、春樹はそのまま千冬がいるであろう、試合が行われるアリーナのモニタールームへと向かう。生徒が続々とトーナメント表を見に、アリーナの方へと歩いていくのに対して、春樹は逆方向へ向かう。

春樹は階段を上り、一般生徒の観客席とは少し高いところにあるアリーナのモニタールームへと訪れた。

春樹はノックをすると、そのモニタールームに足を踏み入れる。そこには千冬一人しかいなく、春樹は目の前にいる千冬に挨拶をする。

「織斑先生、少し話したいことが……」

「なんだ、葵。急用か？」

「そうですね、急用といっちゃ急用です」

「話せ」

「はい。この後の箒とラウラの試合、もし何かがあれば……すぐに俺をアリーナに乱入する許可を与えてくれますか？」

千冬は春樹の顔をじっくりと見てから……。

「何か起こるのか？」

千冬は少し小さめに声を発し、春樹に尋ねた。

「いえ、まだ何か起こるのかはわかりません。ただ、専用機持ちがこのタイミングで二人もこの学園に来るなんて不自然にも程があります。俺の見る限り、ラウラ・ボーデヴィツヒ、またはシャルル・デュノアの両名に関わる事には何かが起こる可能性があり、先日の鳳鈴音と一夏の試合の事から、この試合で何かが起こる可能性は大いに考えられます」

千冬は右手を顎へと持っていき、考えるポーズを取る。

「確かに、その可能性は否定できないな……。よし、分かった、許可しよう。ただ、迅速に対処をお願いしたい」

すると、ドアがいきなり開き、春樹と千冬の二人は慌ててドアの方を見る。そこには山田真耶がそこにおり、春樹と千冬は安堵した。

「あのう……何かマズイところに私来ちゃいましたか？」

千冬は微笑して、

「いや、大丈夫だ。では、春樹はいつでも出れるところに待機している」

「分かりました」

春樹は山田先生に挨拶をしてから、モニタールームを後にする。

（もし、この試合で何かがあったとすれば……、暗部組織の仕業に違いない。ただ……言える事は、何故このIS学園を狙うのかだ……。あのときの奴らは束さんの命を狙っていた……なのに何でわざわざこのIS学園を狙う？ 狙いは両方なのかあるいは……束さんの命を狙う奴らとまた違った組織なのか……だ）

春樹はそのままアリーナの選手待機のピットの方へと向かった。

第一回戦、ラウラ・ボーデヴィツヒ対篠ノ之箒、その火蓋が切つて落とされた。

そして、会場は箒が装備している専用機に驚きの声をあげていた。その真紅の機体、『紅椿』に対し、何故、彼女が専用機を持っているのか。やはり、篠ノ之束の妹だからなのだろうか、と騒ぎ、それをズルイと言う人までいた。まあ、世の中は平等ではない、ということを知ってほしいものだが……。

「なんだ、私に勝ちたいから姉にでも泣きついたのか？」

ラウラはあからさまに箒の事を煽るが、箒は表情一つ変えずにラウラに言い返す。

「確かに、お前に勝ちたいのは否定しないが、この『紅椿』はそんな理由で用意してもらったわけじゃない。その強大な力の使い方間違っている……そんなお前を修正する為だ！ 歯を食いしばれえ！」

試合のゴングがアリーナに響き渡る。

箒は『紅椿』の装備、日本刀の形をした『雨月』と『空裂』を握り締め、ラウラに突っ込んでいく、箒は叫び、一気に距離を詰める。

「っ、速い！？」

ラウラは驚いた、予想外の速さ。見た目の速度では春樹の『熾天^{セラフ}使^{イム}』ぐらいは出ているのではないのか、と思うラウラ。

ラウラは『プラズマ手刀』で箒の剣を受け止めるが、彼女はもう一本剣を握っており、もう一本の剣でラウラを斬る。

二刀流。それは剣道において、非常に扱いが難しいとされている。だが、箒は幼少期から剣道を続けており、基本的なことから応用までしっかりと出来ていた。

そしてこのトーナメントまでの四日間、箒は春樹と共に二本の剣を同時に扱う『二刀流』というものを練習していた。

やはり、二本同時に扱うのは難しく、最初は中々上手く戦えなかったが、何回も春樹と模擬戦を行っていくうちに何かコツを掴んだようで、動きが段々とよくなっていたのが春樹も、そして彼女自身も感じていた。

流石はいままで剣道が続けてきただけはある。基本的なことから応用方法まで理解している彼女だからこそ、この短期間で二刀流をものにしたのだ。

（なんだこれは……こんなことが……）

ラウラは一先ず距離を取り、『ワイヤーブレード』を発射。無数の『ワイヤーブレード』が箒を襲う。

がしかし、箒は縫うようにそれをかわしていく。

ラウラも諦めない。『レールカノン』で箒を狙撃しながら、『ワイヤーブレード』でなんとか箒を拘束しようとする。

そしてそのラウラの攻撃を潜り抜けて箒はまたラウラに接近し、斬る。着実にシールドエネルギーを減らしながら、何度も何度も、ラウラを斬る。

「くっ……ここで負けていられるかあああああ!」

ラウラは『プラズマ手刀』で箒の攻撃受け止めつつ反撃に出る。

ラウラの『プラズマ手刀』も両腕に装備されている。相手が二本の剣を使うなら、自分も二本の剣を使う。目には目を歯に歯をというようにラウラも接近戦を試みる。

ラウラの両腕に装備された『プラズマ手刀』と箒の『雨月』と『空裂』がぶつかり合い、火花を散らす。

（私は……ここで負けられない。死んでいった仲間の為にも、エルネスティーネ大佐のためにも。この『シュヴァツツェア・レーゲン』が負けるわけにはいかないんだ、どんなことがあるうとも……!）

ラウラは三年前にあったドイツ軍基地襲撃事件の犯人の奴らを許しはしない。だから、この力を使って奴らを倒す。その為にはこん

な奴に負けてなどいられない。そんな気持ち彼女の中にあつた。ラウラは『レールカノン』を彼女に向け、発射する。こんな近距離で使うなど凶器の沙汰である。暴発すれば、自分にだって危害が加わる。

箒は焦った。こんな至近距離で当たるわけにはいかない。だから一回攻撃をやめて『レールカノン』の砲弾をかわす。

その時だった。箒の目の前には無数の『ワイヤーブレード』が……。

「なっ!？」

箒はつい言葉を出した。『ワイヤーブレード』が箒の足を掴み、空中へ足を拘束しながら飛んでいく。そして、ラウラは宙吊りとなった箒に、対ISアーマー用特殊徹甲弾を『レールカノン』から発射された。砲弾は真っ直ぐ箒に向かって飛んでいく。

箒にヒットしたかと思われたそのとき、箒の『空裂』からエネルギーの刃が発射され、その砲弾は真っ二つに割れる。割れた砲弾は推進力を失い、その場から地面に落ちる。その瞬間、ラウラの目の前にはビーム攻撃が飛んでくる。

ラウラは慌てて『CPC』を発動、そのビーム攻撃を無力化する。なんとか防いだと安心したその瞬間、目の前には彼女がいた。二本の剣を握った篠ノ之箒が。

「お前のチャージド・パーティクル・キャンセラーは——」

箒は『空裂』で斬る。

「ビーム系の攻撃を無効化する——」

今度は『雨月』で斬る。

「だがそれを発動している間は……身動き出来ない!」

箒はラウラに連続で切り込む。まるで格闘ゲームのコンボを決めているかの様に何度も何度も、ラウラを斬る。

「お前は間違っている! その力のあり方を……その力が何のためにあるのかを!」

箒はフィニッシュだと言うかのように『空裂』と『雨月』の攻撃

によりラウラの事を吹き飛ばし、そして二本の刀から放出されるビームをラウラに向けて放った。

『雨月』は複数のビームを放ち、『空裂』はその斬撃をビームとして放つ。

（何を……お前に……何が分かる……！）

ラウラはその攻撃を諸にくらった。ラウラのシールドエネルギーが一気に削られる。アリーナの端まで飛んでいき、そしてアリーナのバリアに叩きつけられた。

（私は……こんなところで、負けるわけには……！）

その時だった。ラウラのISに異常な変化が起こった。

ラウラ・ボーデヴィツヒは遺伝子強化試験体として生み出された試験管ベビーであり、戦うための道具としてありとあらゆる兵器の操縦方法や戦略等を体得し、優秀な成績を収めてきた。

しかしISの登場後、ISとの適合性向上のために行われたヴォーダン・オージェの不適合により左目が金色に変色し、能力を制御しきれず以降の訓練では全て基準以下の成績となってしまう。

この事から軍で出来そこない扱いされ存在の意味を見失っていたが、突然現れた少年、葵春樹のアドバイスとISの教官として赴任した千冬の特訓。そして、春樹がISを動かした後、営倉に入れられてからは、戻ってきたとき、今度は自分が春樹にISの事を教えるように思い、必死に練習していた為、部隊最強の座に再度上り詰めた。

だがその後、ある奴らによりその願いは碎かれた。

アベンジャーと名乗る謎の奴ら。それにより大切な仲間を失った。そして、春樹もその直後いなくなってしまった。『またね』という言葉を残して。

その後、必死でISの訓練を続けていた。かの織斑千冬のような強く、凛々しく、そして堂々としている彼女に憧れて。あの謎のISと戦っていたような強さに憧れて。

しかし、あの織斑一夏の事を語ったときの織斑千冬表情を思い出す度に胸がムカムカして、イラついてくる。

だから、その原因となる織斑一夏の事が許せなかった。自分が憧れる織斑千冬をあのようない表情にする織斑一夏が。

そして、ドイツ軍基地を襲った奴らを倒すという、願望を叶える為にも。エルネステイーネが自分に託した『シュヴァルツェア・レ

ーゲン』を使って負けるわけには行かなかった。
エルネスティーネ隊長を殺した、奴らを倒すまでは……。

——願うか？ 汝、自らの変革を望むか？ より強い力を欲するか？

何処からこの声が聞こえてくるかは分からない。だが、ラウラにははっきりとこの声が聞こえていた。

よこせ、力を。この私の信念を貫き通す——その力を！
絶対に、あいつらをこの手で倒すそのときまで、私は負けられない！

Damage Level D.
Mind Condition Up left.
Certification Clear.
Valkyrie Trace System
boot.

「うわああああああああああああああ！」

ラウラは叫んだ。そして『シュヴァルツェア・レーゲン』が見るにも無残にドロドロに溶けて、そしてラウラを包んでいく。

「なんだ、これは!？」

箒は驚いた。ISがこんな風になるとは知らない。聞いたこともない。目の前で起こっている未知なる現象をただ見ているだけしか出来なかった。

この現象は第一形態移行ファースト・シフトや第二形態移行セカンド・シフトとも違う。別の何かの現象であった。

そしてサイレンがアリーナ全域に響き渡る。

『非常事態発令。トーナメント全試合は中止。状況をレベルDと認定。鎮圧の為、教師の部隊を送り込みます』

アリーナの観客席の緊急用隔壁が下り、完全に観客席が防護された。

そしてラウラを包み込んだドロドロに溶けたISは段々と形を作り固まっていく。

それはまるで……織斑千冬の専用機『暮桜』を真っ黒に染めたようなものだった。

「私はこれを……無力化できるのか？　しかし、教師がこちらにやってくるはず……」

箒は一度目の前のおどましいものから目を背けるが、何やら考え事を数秒間した後、もう一度ラウラを取り込んでいるおどましい黒いISを見る。

「でも……彼女を修正する為、助ける為に私がやるしかない！」

箒はそう言って『暮桜』を模したそのISに向かい、剣を振った。

しかし、その攻撃を軽々かわし、そのISは箒に向かって剣を素早く振った。その剣筋は箒も見えないほど速く、かわすことなど出来なかった。

箒は地面に叩きつけられ、シールドエネルギーが一気に削られる。「なんだ、これは……。この剣筋……。まるで昔千冬さんに剣道を教えていただいたときにやってもらったものに似ている？」

（なるほど、何から何まで織斑千冬だな。そんなにあの人に憧れるか……。だが、それはお前の強さじゃない！）

ラウラに向かって箒は叫ぶ。

「これがお前の望む強さか！？　それがお前が求める強さか！？　そんな偽りの強さはお前の強さなんかじゃない！　そんなことをして……。お前の憧れる織斑千冬を汚す気か、ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

だが、ラウラは何のアクションも取らない。まるで話を聞いているようだった。そして奴は箒に更なる攻撃を行う。

見えない剣筋には箒も何も出来ない。ただくらうだけしかなかった。

（くっ……。千冬さんは……。流石だな。しかし、本物はもっと凄いはずだ……。！）

ついに箒の『紅椿』のシールドエネルギーは0になってしまい、強制解除されてしまう。箒は身を守るものなど何もなかった。

ヤバイ。

そう思ったが、奴は何もしない。動かない。攻撃してこない。

「いったい……。どういことだ？」

箒はそう言うと、横には白い翼が現れた。春樹の『熾天使^{セラフィム}』だ。

「それはな、こいつはISにしか反応しないからだ。離れていろ、箒」

春樹はそういうと、ラウラに突っ込む。

鋭い剣筋を軽々とかわす春樹。それを見た箒は「すごい」と素直に思った。

「やはり本物以下だな……これが――」

春樹は『シャープネス・ブレード』を持ち、そして……、織斑千冬の剣筋に似ている、否、同じ剣筋でラウラを包んでいた黒いISを模した何かを切り裂いた。そのときの『シャープネス・ブレード』はエネルギーで包まれていた。ビームを展開していたのだ。

「本物だ……」

そう春樹が呟くと、切り裂かれたその切り口からラウラの身体が出てきた。

春樹はラウラを受け止める。

「たく……変な考えを持ちやがって……後で説教かな？」

この騒動は十分も経たずに終局した。

春樹に抱かれているラウラの表情は気を失いながらも微笑んでいるように見えた。

ラウラと春樹、そして箒は何らかの繋がりを感じた。この感じは何なのかは、春樹でさえ分からなかった。

終章『友達 ― Growth ―』

時は夕食時、保健室にはラウラ・ボーデヴィツヒが寝ていた。先ほどの学年別トーナメントにおいて、異常な現象に巻き込まれ気を失っていたからである。

すると、ラウラが目を覚ます。そしてすぐ横を見ると、そこには彼女が憧れ、尊敬している女性、織斑千冬がそこにいた。

「……いつたい、何があったのですか？」

ラウラは弱々しく、そして不安になりながら千冬にそのことを尋ねた。

「一応、重要案件である上に、機密事項なのだが……VTシステムというものは知っているか？」

「ヴァルキリー・トレース・システム……」

「そう——」

『ヴァルキリー・トレース・システム』とは研究、開発、もちろん使用も禁止されており、過去のモンド・グロツソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステムである。

ラウラは「織斑千冬」のデータがラウラ・ボーデヴィツヒのISである『シュヴァルツェア・レーゲン』に組み込まれおり、彼女の身体的ダメージ、そして精神的な……今回のラウラの場合、強い力に憧れ、負けたくないという『願望』がそのVTシステム起動のスイッチになったのだろう。「私が……望んだからですね……」

ラウラは唇を噛み締め、そしてベッドのシーツを握り締めた。

「いいや、お前が何故それを望んだのか……それはあのとき、自分の力が足りなかったと思ったからだろう？」

あのとき……三年前のドイツ軍基地襲撃の事だろう。あの時ラウラは、勇敢に戦い、そして自分を守ってくれた千冬に憧れていた。そして、自分は何も出来なかったことが腹立たしかったのだ。

強くなる為に努力もしたし、部隊でもトップクラスの實力にもな

った。だけど、あいつらには歯が立たなかった。身動きすら出来なかった。そんな本当はそんなに強くもない自分に絶望した。だから力を求めた。織斑千冬や春樹のような……強い力を。

「お前は誰だ？」

「え？」

千冬は突然そんな事を聞いてきたので、わけがわからないラウラ。「言っておくが、お前は絶対に私にはなれないぞ。お前は自分なりの強さを求めろ。自分が本当にしたいことは何だ？ そのしたい事の為に何をすればいいと思う？ それが分からなければ、本当の強さを得る事はできないぞ。私や、春樹のような強い力を……。お前はラウラ・ボーヴィツヒなんだ、他の誰でもない。この事をちゃんと覚えておけ」

「はい……。了解いたしました、教官！」

「学校では先生だと言っているだろう」

そのときの千冬の顔は優しく、そして少し微笑んでいた。

ラウラはその表情を見たとき、ドイツ軍にいたときには感じることのなかった不思議な感情に襲われた。なんだか温かいそんな感情に。

「じゃあ、私は行く。好きなときに部屋に戻れ」

千冬はそう言ってこの保健室から出て行こうとドアを開けると、そこには葵春樹が立っていた。

「葵か、ラウラにはちゃんと言っておいたぞ」

「ありがとうございます、織斑先生」

春樹は軽く礼をして千冬を見送る、そして保健室の中に入り、ラウラの寝ているベッドの近くの椅子に腰掛けた。

春樹はラウラの顔を見るなり、微笑んだ。ラウラが無事で安心したのと、千冬に説教されて顔つきがよくなっていたからだ。

「千冬姉ちゃんに説教されたか」

「うん……。なあ春樹……その……ごめん」

「ああ」

「怒ってないのか？」

「いや、自分が間違っていた事に気付いて、もう反省したんだろ？それに新しい目標も出来た。なら俺から言う事はないよ」

「……ありがとう」

ラウラは毛布に顔をうずくめてそう言った。なんだかとても恥かしそうに。

なんでそんなにはずかしがるのか分からなかった春樹はラウラに向かって「どうした？」と声をかけたが、ラウラは何も言わず、ただ毛布に顔をうずくめていただけだった。

もうどうしたらいいかわからなくなった春樹はとりあえず頭に思い浮かんだ言葉である「夕食」をヒントに何を言おうか考えたが答えは簡単だ。夕食に誘えばいい。

「なあ、ラウラ。もう身体の方は大丈夫なのか？ 大丈夫なら一緒に夕食を食べに行かないか？」

ラウラは毛布から顔をひょこっと出して、

「春樹とご飯？」

「あ、ああ……」

春樹はようやくラウラが反応してくれて安堵する。

「わかった、行こう」

「おう！」

ラウラはベッドから立ち上がって春樹の横に立った、そして春樹の袖を掴んで早く行こうとせかす。

春樹は「はいはい……」とそう言って椅子から立ち上がり、保健室を後にした。

食堂へやって来た春樹とラウラであるが、ラウラはずっと春樹の袖を離さなかったし、今も春樹の袖を掴んでいる。

そこでは箸と一夏、セシリアとシャルルの四人が一緒に食事を取っていた。そして春樹とラウラもそこに混ぜてもらおう事にする。

「よう、皆」

春樹が皆に呼びかけると、皆それぞれ春樹の名前を呼んでくれた。皆はラウラの存在に気付き、ラウラは皆にどう思われているのか不安になったのか春樹の後ろに隠れる。

「おいおい、そんなに警戒すんなって。今回の事はラウラのせいじゃないって皆分かってるからさ。そうだろ、皆？」

皆は頷いて肯定する。やっぱり、皆やさしかった。

「だってさ、安心しろよ、ラウラ」

ラウラは春樹の後ろからそっと出てきてそして、不慣れな感じでラウラは微笑んだ。

そして春樹は食べたいものをラウラから聞いて、そして座っているように言った。

やはり、あんなことになった彼女に気を使って夕食を取りに行っただろう。

そしてもう一つ、彼には計画があった。

春樹はラウラの食べたいものを聞くなり早速注文しに行った。そしてラウラは皆の中へ恐る恐る混じって、そして椅子に腰掛ける。

ラウラは緊張してなにも話せなかった。

それもそのはずである。一夏を叩き、シャルルの練習の邪魔をし、セシリアとはマトモに共闘せず、更には度が過ぎる攻撃を繰り返し、彼女の専用機をボロボロにした。そして箒にも同じように度を過ぎた攻撃を繰り返したのだ。

こんな事をやっておいてこんな所にノコノコと居座る方がおかしいのだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ——」

箒はラウラに話しかけ、言葉が続けた。

「今までやってきたことはもう気に病む必要はない。私たちはラウラ・ボーデヴィツヒの事はもう許しているんだ。そして、お願いがあるんだ」

「お願い？」

ラウラはそのお願いというものは何なのか、もし今までの償いだったのなら、相手の気が済むまで受け入れる覚悟はあった。

「私達の……友達になってくれないか？」

ラウラはいきなりの事でどういふことか理解するのに少々のかかった。

友達になって欲しい、ということは……自分と仲良くなろう。ということだ。

「友達？」

ラウラはもう一度皆に尋ねた。

彼女の初めての同い年での友達は葵春樹だけだった。だけど、もしこんなにも沢山の友達が出来るなら、それは凄く楽しい事だろう。春樹と一緒に過ごした毎日を思い出すだけでも本当に楽しい気持ちになる。

（私は……こんな風に幸せになってもいいのだろうか？ 私はあんな過ちを犯した奴なのに……）

そう思ったラウラだが、そんな気持ちはあつという間に否定されてしまった。

「そう、友達だ。ラウラ、お前がどう思っているか知らないけど、俺達はお前と友達になりたいんだよ」

一夏はそう言った後、続けてシャルルが話す。

「そうそう、もしラウラが嫌じゃなければ、沢山僕を頼ってね」
そして、続けてセシリア。

「専用機を壊されたのは目を瞑ります。あれは私の力が足りなかっただけのこと。ですから、今後私とI Sの練習をして共に強くなりましょうね、ラウラさん」

すると、夕食を二つ持った春樹が登場し、笑顔でこう言った。

「皆こう言ってるんだよ。ラウラ、お前は大切な仲間が出来るんだ。嬉しいがってもいいと思うぞ。もし……嫌じゃなければな」

ラウラは正直なところ嬉しかった。嫌なわけがない。こんなに私が幸せでいいのだろうか、とも思ってしまう。

そして、こんな大事な仲間を自分は守りたいという感情が芽生えたのだ。自分が強くなり戦う理由。それは……友達を守りたいという気持ち。あいつらを倒そうという無謀な事は考えない事にした。自分はまだまだ力足らずな奴だ、そんな奴があいつらを倒そうだなんて、馬鹿な話だと思う。自分は最低限そういう奴らから友達……仲間を守りたい。そう思う。

あいつらを倒すまではいかなくても、守ることなら……。そう思う。

（だから……それが今私が正しいと思うことだ……これでいいのか？ 春樹）

「皆、ありがとう……」

ラウラはそう言って涙を流した。しかしそれはうれし涙。シャルルはラウラの頭を撫でて励ます。春樹もラウラの隣に座ってラウラを励ました。

そのときのラウラの表情は、三年前のドイツ軍にまだいた頃の春樹と友達になったとき以上の幸せそうな表情をしていた。

春樹はそんなラウラを見て安心した。皆と和解して……そして、彼女の中で何らかの決意ができた事が春樹は本当に安心したのだ。（どうなるかと思ったけど、みんな優しいよな……ラウラがこんな嬉しい表情をするなんて……。一夏、箒、セシリア、シャルル……ありがとう。後は、近々退院する鈴と友達になれば完璧だな。まあ、アイツなら誰とでも仲良く出来るだろうな）

ラウラ・ボーデヴィツヒはまた一步、人間として大きく成長した。人間はこうやって失敗を繰り返し、そしてその失敗を糧にして精神的に強くなっていく。それが人間としての成長であり、そして大人になっていくことである。

終章『友達　— Growth —』（後書き）

以上、エピソード2でした。

修正、加筆をしてみてもですね、最初に思ったのが物語の流れが悪い。ということですよ。

春樹の過去編を間に挟んだことによって、この物語の流れが悪くなってしまう、読む側にとっては見づらい印象を与えてしまいました。なので、春樹の過去編はエピソード3として書くことになります。

そして前回の修正前から完全新作のお話として書いたのが、第二章『紅の鎧　— Answer —』の「6」です。

こちらは『紅椿』が届いたときのお話を書いてみましたが……どうでしたかね？

これ書かないと春樹の過去編を抜いた為に異常に短くなってしまうので、その処置みたいなものですがw

では、引き続きエピソード4をお楽しみください。

序 章『過去へ ― Past ―』

これは三年前のお話。一夏と春樹がまだ一三歳の頃の事だ。

第二回 IS 世界大会モンド・グロッソ。

一夏や春樹にとっての我らが姉、織斑千冬が優勝候補としてその大会に参加していた。

彼ら二人は決勝戦での千冬の活躍を絶対見ようとして、このモンド・グロッソの大会会場まで来ていたが、まさか……あんな事になるとは誰も思いもしなかった。

だが、またこれが……全ての物語の始まりなのかもしれない。これがなかったら、春樹や一夏はこれから起こる事に巻き込まれることなく、普通の高校に通っていたのかもしれないし、筈に再会する事は無かったのかもしれない。

だけど……この出来事があったから、私たちは平和に生きているのかもしれない。この世界で、友達と、最高の仲間と共に楽しい日々を過ごす事も無かったのかもしれない。

春樹はこう思った。

もし、この出来事が無ければ……俺は平和に過ごせたのかもしれない。何事も無く、普通の高校に一夏と一緒に登校して、楽しくバカやって過ごして、彼女なんかも出来たりして、毎日が平凡に流れていく日々を過ごしたのかもしれない。

だけど、この生活も悪くないと感じている。辛い事は正直沢山ある。だけど、目的も無くただ平凡に過ごすよりも、何か目的を持って辛い事もありながら、だけど嬉しい事もあって……。毎日が刺激に満ち溢れている生活の方が、俺は楽しくて良いと思う。今体験している事が全てで、「もし」なんてことは妄想に過ぎない。もしかしたら、普通の高校に通って楽しくしているのが今の自分にとって今が最高と思うかもしれないが、それはやっぱり妄想に過ぎないからだ。

だから、今のこの自分のこの体験している事に俺は満足している。
女子しかいないけど、俺もこの状況に慣れてきたし、一夏もいる。
シャルルも……男子として接している。

この今置かれている立場にはなんら文句はこれっぽっちも無い。
織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルル・
デュノアにラウラ・ボーデヴィツヒ。

こいつらは俺の大切な仲間だ。友達だ。もし、こいつらに何かし
ようとする奴らがいるならば、俺はそいつらを許さない。俺は仲間
を守っていききたい。この……力で……。

第一章『元凶　― Kidnapping ―』

1

ここはI Sの試合が行われる国際アリーナ。座席数は二万を超える大型のアリーナだ。

そして彼らはちょうど、試合の合間に抜けてきてくれた織斑千冬と話をしていた。

「じゃあ千冬姉、ちよつと飲み物買ってくるよ」

「ああ、私の試合までにはちゃんと戻れよ、決勝戦見逃したなんてことになったらシャレにならん。春樹、一夏についていけ、お前と一緒に安心だ」

「分かったよ千冬姉ちゃん。じゃあ行こうか一夏」

「おう」

一夏と春樹、この二人は言うなれば兄弟みたいなものである。

この後はいよいよ千冬の決勝戦。

やっぱり千冬は凄かった。たった一振り、それだけでいい。たった剣を一振りすれば終わる。その鮮やかさといえば、見とれてしまふほどである。

彼女の攻撃は相手のシールドを切り裂き、本体に直接攻撃、強制的に『絶対防御』を発動させて一気にシールドエネルギーを削り取る『零落白夜』である。これは織斑千冬が発動させた『単^{ワン}一^{オフ}仕様^{アビリティ}能力』である。

春樹や一夏も千冬の剣術を教わってきた。だからこそ、この大舞台でのその一閃はとてつもなくかつこよかったのだ。

そして彼らはアリーナの外の自動販売機の方へと向かった。何故外まで行くのかというと、アリーナ内で売られているものは何かと高いのだ。お金が少ない中坊の二人にとってはできるだけ安い方が良い。そう思った彼らはわざわざアリーナを出てきたのだ。

「あ……ここまで来てなんだけど、俺トイレ行ってくるわ」

春樹はわざわざアリーナの外までやってきたというのに、突然の尿意に襲われる。内心わざわざ外まで来たのに、また戻らないといけない。その自分の状況が腹立たしかった。

「なんだよ、せっかく外まで来たのに」

「俺もそう思ったよ、悪いけど、俺の分も買っておいってくれるか？俺コーヒーな、ブラックの」

「しょうがねえな、分かったよ、ブラックコーヒーな。早くトイレ行ってこいよ」

「ああ、行ってくるよ。自販機の前で待っていてくれ、迎えに行くからな」

少し冗談を加えて笑いながら言う春樹。それに一夏は冗談混じりに軽く怒った。

「なんだよ、千冬姉の言いなりになりやがって！」
ちふゆねえ

春樹は一夏の話最後まで聞かずにアリーナの方へ走り出した。一夏はしょうがねえな、と思い、そのまま歩き出し自動販売機を探す。しばらく歩いていると……自動販売機があった。

「俺はコーラと……春樹は……あれ、ブラックねえや……仕方が無い、微糖で我慢してもらうかな……」

一夏は自動販売機にお金を入れて微糖のコーヒーを買った。自動販売機の取り出し口に手をつ込み缶を取りだす一夏、そして戻ろうとすると……一夏の目には黒いワンボックスカーが目に残る。それはドラマや映画で見るような誘拐するシーンでよく見るものだった。

（なんだ、あれ。なんか映画のワンシーンみたいだな）

そう思った一夏は春樹に言われたとおりにそこで待機している。近くのベンチに座り、コーラのペットボトルのキャップを開ける。プシュ！という炭酸が抜ける音を聞き、コーラを一口飲む。

一夏はずっとアリーナの方を見ている。春樹が来るのを待っているのだ。

しかし、待ってもいれなくなった一夏は立ち上がってアリーナの方へと歩こうとすると、後ろから車の音が聞こえる。

一夏はその音に気付き、後ろを振り向くと、自分の目の前でいきなりその車が停車し、中から本当に映画にありそうな黒服の男達が現れた。

春樹はトイレを済まして手を洗っていた。

（早く一夏の下へ行かねえとな、飲み物買わせちまったし）

春樹は急いでトイレから出て、外へ出る。そして一夏が向かったであろう場所まで走る。すると、春樹の目の前には信じられない光景が広がっていた。

一夏の近くまで黒いワンボックスカーが止まる。そしてその中から黒づくめの男達が一夏を無理やり連れ込まれている。

春樹は恐怖で身動きが取れなかった。周りには他に誰一人としていない。みんなアリーナの中で決勝戦を今か今かと待っている。

黒づくめの奴らは春樹の存在に気がついていない。これは奴らの状況判断のミスかなんかだろう。目撃者がいる。それだけですぐに助けを呼ぶことができる。

でも春樹は動けない。

そして春樹は結局何もできずに一夏はそのままさらわれていった。そう、「何もできず」に……。

春樹はここまでできてようやく動きが取れるようになった。だけど足がまだ震えていた。息をする事すら難しかった。

そんな足を無理やり動かしてある人のところへ向かおうとした。とても強い人、織斑千冬のところへ。

春樹は恐怖のあまり震える足を無理やり動かし走り出す。早く、早くこの事を千冬に伝えないと。そう思った春樹はひたすら走った。ハアハアと、息を切らせながらアリーナに向かって全力疾走をする。

そして、アリーナ目の前、関係者以外立ち入り禁止の入り口から入ろうとするが、当然警備員の人に捕まってしまう。

「こらっ、君！　ここは入っちゃ駄目だ。関係者以外立ち入り禁止の文字が読めないのか！？」

「早く、伝えないと、あの人に……千冬姉ちゃんに！」

春樹は焦っていて言葉がまとまっていない。この話を聞いただけでは何を言いたいのかまったく伝わらなかった。

しかし、その警備員の耳にはあるワードが頭に残った。「千冬姉ちゃん」である。

そしてその警備員は目の前の子供に目をやった。この子はあの織斑選手の弟なのか、と。あながち間違っではないが、実の弟は一夏である。春樹は義理の弟、といったところか。

だが、そんなことはどうでもよかった。警備員の人は目の前が顔が青ざめており、焦りに焦っている。尋常じゃないくらいの汗をかいているし、余程の緊急事態なのだろうと思った。

「わかった、君の名前は？」

「え、葵……春樹です」

葵春樹、織斑の姓ではなかった。しかし、その焦り方は悪ふざけとかそんなものではなかった。そのことが、警備員の心を揺らがせる。

「じゃあ葵君、ちょっと待っててくれるかな？」

「はい、わかりました」

春樹は待っている間に息を整えようと、大きく息を吸い込んだ。

織斑千冬が選手待合室で休んでいると、部屋のドアがノックされた。いったい誰なのだろうかと思い、ドアを開ける。そこには警備員の人が立っていた。

「織斑選手、お休みになっている所すみません。葵春樹という子供が焦りながら織斑選手の事を呼んでいたのですが……」

「なに？」

千冬の目はガラリと変わった。さっきまでのリラックスしきっていた優しい感じはもうなかった。千冬は急に目つきがきつくなる。

「もう顔も青ざめていて、汗なんか尋常じゃないくらいかいていますし、どうしますか？」

「……よし、会いに行こう。案内してくれますか？」

「分かりました」

千冬は警備員の人についていった。

千冬は考える。いつも冷静沈着でいつもクールな春樹、何事も落ち着いて色んなことを対処する春樹をそこまで焦らせるほどの事態。何が起っているのか、正直、不安に駆られている。

アリーナの外に出る出入り口を出るとそこには葵春樹。警備員の人と言ったとおり、春樹の顔は汗でびっしょりで顔も青ざめていた。「おい、春樹。どうしたんだ、そんなに汗かいて。何が起ったんだ？」

「……………一夏が、目の前でさらわれた」

「なっ!？」

千冬は驚愕する。一夏が、大事な弟である一夏が何者かにさらわれた。

誘拐。

そのキーワードが千冬の頭の中を駆け巡る。

（何故一夏を誘拐した？ 優勝妨害か？ 私はどうすればいい？
何をすればいい？）

考える千冬。

「春樹、そのときの状況を教えろ」

春樹はそのときの状況を出せるだけ出した。

あのときは……春樹がトイレから一夏の下へ戻ろうとしていたときの事である、一夏を見つけたと思えば黒いワンボックスカーが止まり、中から黒ずくめの男達が出てきていきなり一夏を襲って車の中につれ込んだ。そしてそのまま車は何処かへ行ってしまった。

「ごめん、千冬姉ちゃん……俺、何もできなかった……」

「いや、ちゃんとお前の仕事は果たしたよ。お前はすぐに助けを呼んだ。それだけで十分だ」

千冬は春樹の頭を撫でる。

しかし、千冬は考えた。一体どうすればいい？ 一夏はさらわれたのだが、自分のもっている情報が少なすぎる。正直このままじゃなにもできない。

すると黒髪の女性から声かけられる。

「あら？ ブリュンヒルデ、こんな所に……」

『ブリュンヒルデ』、北欧神話に登場するワルキューレの一人だ。その女性は戦死した兵士をオーディンの住むヴァルハラへと導く戦女神ワルキューレの一人として描かれている。それから取って第一回 I S 世界大会にて織斑千冬は見事優勝したその時につけられた称号、それが『ブリュンヒルデ』である。

「お前は……リーゼロッテか」

「はい。で、どうしたのですか？ もうすぐ決勝戦が始まるというのに出口の方へ向かうので気になって追いかけてみたんですけど……」

リーゼロッテ・ミュラー、ドイツ代表の I S 操縦者。次の決勝戦で当たる千冬の相手である。

「実はな——」

千冬は今起こっていることを全て話した。

実の弟の一夏が誘拐された事。

そして、手がかりも何もなく、ただ棒立ち状態になってしまっている事を。

「それは大変ですね……なんなら、このドイツが協力いたしましょうか？ 軍の力を使えばどうにかなるでしょうし」

「そ、それは本当か!？」

「嘘を言うだけ無駄です」

「ありがとう、本当にありがとう」

千冬は心からリーゼロッテに感謝した。そしてドイツ軍にも。

それから千冬と春樹はドイツ軍の人たちの下へ向かう。コツコツと足音だけが聞こえる状態。気を抜けば押しつぶされるんじゃないかと思うほどの雰囲気だった。

リーゼロッテはドイツ軍の下へ行き、その部屋のドアを開けた。

「ん？ リーゼロッテか……どうしたんだ……っと、これはブリュンヒルデ、どうされたのですか？」

今喋ったのはドイツ軍のIS部隊隊長、エルネスティーネ・アルノルトである。彼女はともしっかりとした姿勢をしている。流石は軍人と言ったところか……。

「すみませんエルネスティーネ隊長、このブリュンヒルデが今困っておりまして、お願いがございます——」

リーゼロッテは今の状況を素早く、且つ丁寧に説明した。

すると、エルネスティーネは快く協力してくれると言ってくれた。これには千冬もとてつもない感謝をする。

これで、一夏を助けられ可能性が高くなった。これで一夏を助けられる。そう思うだけで心が落ち着く。

エルネスティーネは春樹に問う、

「では……春樹君……だったかな。一夏君が誘拐した車はどんな感じだった？」

「えーと、黒いワンボックスカーでした。ホイールのカラーは銀。えっと……車の形状は……とても四角い感じだったのを覚えています」

「ありがとうございます、これで大体の事を予測できます」

なにやらドイツ軍のオペレータの人たちがとてもない速さで何か文字をコンピュータに入力している。なにが起こっているのか全く持って分からない。

そして数分後、一夏の現在の座標データを割り出したようだった。とてつもなくスムーズに事が進んでいる。

この中、春樹は何かがおかしいと思っていた。あまりにもスムーズすぎるからである。まるで最初からこうなる事は分かっていたかのように。

「では早速助けに行きましょうか、車を用意してあります。どうぞご自由にお使いください。これが一夏君の場所を知る為の端末です」

「すまない、感謝します。いくぞ、春樹」

千冬は薄型のタッチ式の端末をエルネステーネから受け取った。そして春樹は現在の時刻を見た。決勝戦開始の時刻まで後二十分もない。このまま一夏を助けに行ったら千冬は不戦敗になるだろう。「でも千冬姉ちゃん！ このままじゃ決勝戦に間に合わないんじゃない？！」

「黙れ春樹！ そんなものより大切なものはある。一夏という大切な家族がな……」

春樹はその言葉に黙り込んでしまう。確かにそうだ、千冬は何よりも家族が大事、いや、誰だって家族の方が大事である。これは春樹の失言であった。

「ごめん、千冬姉ちゃん……。じゃあ行こう、一夏を助けに！」

「ああ、そうだな。……お前もその家族の一員だよ」

千冬はそう小さく呟いたが、春樹の耳にはしっかりと届いていた。そのことが何よりも嬉しく、そして一夏を助けたいと思う気持ちが何倍にも、何十倍にも、何百倍にも膨れ上がった。

千冬と春樹は一回アリーナの駐車場まで歩いていったが、その間、千冬と春樹は会話をする事はなかった。どちらも今の状況にいいっぱいであったからだろう。

すると、一台の車がこちらにやってくる。恐らくエルネスティネが用意した車だろう。彼女が準備した車はスポーツタイプの車であった。メーカーのエンブレムを見るとこれはBMWであったか？エルネスティネは運転席のカーウインドウを開けて言った。

「では乗ってください、運転は私がしますので」

「分かりました。乗れ春樹」

春樹は千冬の言われるまま乗り込む。

ちなみにISは無許可で上空を飛ぶことを許可されていない。更に言うならば一般市街地でのISの使用もよほどの事がない限り不可、禁止されている。

使用すれば直ちにISの部隊によって拘束・逮捕、となるだろう。

二人は車に乗り込んでその端末が示す場所へと向かう。その最中、春樹が見た千冬は不安に満ちた顔であった。

座標データが示した位置に織斑千冬、彼女がいる。その場所は特撮ヒーローものとか不良の学生が出てくる映画のようなボロボロの建物がある場所、足元が砂利で本当に人気がない。

千冬はもしものために春樹をエルネスティーネの下に置いてきた。もし戦闘なんてことになれば春樹の身にも危険が及ぶ。

千冬はIS『暮桜』を装備して歩み進む。砂利の足場なのか、とても静かだからなのか、足音が非常に大きく感じる。

人気は……感じられない。ISのハイパーセンサーの能力を持っ
てしてもまったく人気等は感じられない。

ちなみに『ハイパーセンサー』とはISに装備されている超高性能なセンサーである。操縦者の知覚を補佐する役目を行い、目視できない遠距離や視覚野の外をも知覚できるようになる。

(よほど高性能なステルスか……または本当に人がいないのか……)
しばらく歩いていると、ハイパーセンサーに反応があった。人がいる。一人いる。という事は……一夏か？ そう思った千冬は急いでその反応が会った場所へ向かう。

そこはとあるコンテナ。この中に一夏がいる。そう思うと千冬は無我夢中でそのコンテナをISのパワーで無理やりこじ開けた。

そこに居たのは織斑一夏である。間違いない。一夏の姿を見て一安心する千冬。すると一夏も千冬の姿を確認するなり叫んだ。

「千冬姉！
ちふゆねえ」

千冬は一夏の手足に結ばれている縄を切ってあげる。

「千冬姉……ありがとう……凄く不安だったけど、千冬姉が来てくれてホント安心した。本当にありがとう」

「ふん、春樹も来てくれてるぞ。早く合流しないとな」

「そうなのか……春樹が……なら早く行こう」

一夏はなんだか知らないけど元気だった。迅速に救出することができたから一夏の体力的にもまだまだ余裕があるだろう。だけど、何故こんなにもあっさり一夏を救出する事ができたのか、何故こんなにも……。何はともあれ、このままにしておく事もできない。そこで千冬は思った。一夏と春樹は一旦家に帰そう、と。

春樹はエルネスティネと共に千冬と一夏が帰ってくることを願っていた。だが、この二人は決して話すことなく、ただ黙っているだけであった。

そして二人の目の前には二人の人影、あれは間違いない、一夏と千冬だ。

それを見るなり春樹は車の中から飛び出した。一夏の下へ駆け寄る。

「一夏！」

「春樹！」

二人はお互いに名前を呼び合った。そして春樹はとても悲しそうな、そして嬉しくて、安心した、そういう感情がごちゃ混ぜになりながら言った。

「一夏……ごめん。一夏があんな事になったのに、何もできなかった……」

「何言っただよ、春樹はここまで来てくれたじゃねえか。俺があんな事になったときに助けを呼んでくれたのは春樹だって聞いたよ。俺はそれだけで十二分に感謝するから」

「ありがとう……一夏……」

春樹はこのとき思った。自分はなんて幸せ者なのだろうか。こんな兄弟が居てくれる。「血」は繋がってなくても、家族という「絆」は繋がっている。

そして春樹はこの大切な家族を守りたい。心からそう強く思った。

その後、結局千冬は決勝戦に間に合う事はなかった。日本の不戦

敗、ドイツの不戦勝という形になった。

試合会場は強烈なブーイングの嵐。誰もがブリュンヒルデである織斑千冬の試合放棄には戸惑いを隠せなかった。誰もが納得がいかない結果。

こうして第二回 I S 世界モンド・グロッソは幕を閉じた。

第二回 I S 世界大会モンド・グロッソが終わり数時間が経過した。会場の熱気はもう無い。会場からは誰一人と一般の人がいなくなっている。

そして、一夏はドイツ軍 I S 部隊隊長エルネスティーネ・アルノルトが事件の事を聞きだしていた。

「じゃあ織斑一夏君、事件の詳細聞かせてくれるかな？」

「はい……」

一夏は黒いワンボックスカーの中に無理やり連れ込まれた後、そこからの記憶が無いらしい。恐らく、何かの薬で眠らされていたのだろう。そして、気がつけば手足が拘束されていて、あのコンテナの中に閉じ込められていたという話だ。

あの中にいたときは、どうなるのかと不安で不安でしうがなかったらしい。でも、きつと助けは来る。そう信じていた。きつと千冬姉が助けに来てくれる、と……。

その話を近くで聞く千冬と春樹、二人は一夏を守れた。そのことが何よりも嬉しかった。もう目の前には一夏がいる。それだけが何よりも嬉しかった。

「話してくれてありがとう一夏君、この後の事はこっちが何とかするから」

「本当にありがとうございました。なんてお礼をしたらいいか……」
千冬はエルネスティーネにむかって礼をする。

「なに、大丈夫ですよチフユ・オリムラ。……あ、なんなら、私の部隊の教官をしていただけじゃないでしょうか？」

「教官を？」

「はい、私の I S 部隊の教官を」

「……考えておきましょう」

「お願いします」

千冬はそのまま外へ出て行った。春樹と一夏はその後姿を眺めていた。

自分達の姉が軍の教官をする。あの、世界最強と言われた『ブリュンヒルデ』がドイツ軍にISの操縦を教える。これほど光栄かつ贅沢な事はない。一夏と春樹の二人はそのことが誇らしかった。

そして春樹は考えた。

（千冬お姉ちゃんがドイツ軍に……よし——）

春樹は何かを決心した。自分が守るべきもののためにするべきことを見つけた。それを実行する事を。

「一夏……先行ってるぞ」

「え、あ、ああ……」

一夏はその春樹を見て、いつもと違う雰囲気を感じ出していたことに気がついた。

あの春樹が妙に逞しく見えた。男の自分でも惚れ惚れするくらい。人間というものは、何か目標ができて、それを実行しているときが一番カッコいい。男だと妙に逞しく見えるし、女だと妙に色気づいたり、魅力的になったりする。

春樹は今居た部屋から飛び出して千冬を探す。しばらく走り、千冬の後姿を見たつけたと同時に千冬の名前を叫ぶ。

「千冬姉ちゃん！」

千冬はその声に気がついて振り向く。そこには春樹が走って駆け寄ってくるところがその瞳に映し出される。

「どうした、春樹」

「千冬姉ちゃん、ドイツ軍の教官するんだろ？」

「ああ、借りができたからな」

春樹は真っ直ぐに千冬の方を見て、

「じゃあ、俺も……連れて行ってくれないか？」

「何故、と聞いてもいいか？」

「千冬姉ちゃん、俺はやるべき事が見つかった。そのためには自分を鍛える必要があるとそう考えたんだ。だから、少しの間でいい、ドイツ軍にいっしょに連れて行ってくれ」

すると千冬は鋭い目つきに変わる。物凄い目力でそれだけで殺されそうな勢いだった。

「……………わかった。だが、本当にいいのだな？　弱音を吐くなんてことはしないか？」

真剣な表情をして、千冬の鋭い目にも臆せず、

「そんなこと、するわけない。しちゃいけないんだ」

千冬はそんな春樹の表情を見て、

「エルネスティーネ大佐に話をつけてみようか」

「ありがとう、千冬姉ちゃん」

そして、春樹と千冬はエルネスティーネの下へと向かうことになった。

二人は何も話そうとしない。ただ沈黙だけが流れる。二人が歩いている廊下には選手専用のものという事があったか、誰も歩いていない。

エルネスティーネがいるドイツの選手の控え室の前に立つと、千冬はドアをノックする。すると、中から「はい」という言葉を聞くと、ドアが開けられる。ドアを開けたのは当の本人のエルネスティーネ・アルノルトだった。

「あら、チフユ・オリムラ。どうされました？　もしかして、教官の話ですか？」

「そのこともあります」

「とりあえず、中へ入って椅子にでも腰掛けてください」

千冬と春樹は言われるままに中に入って、ソファに腰掛ける。

目の前のエルネスティーネと目を合わせると、

「ではチフユ・オリムラ、我が隊の教官になっていただけるのですか？」

「はい。ただ一つ条件……………というかお願いが」

「はい、何ででしょうか？」

「この子を、春樹をドイツ軍の方へ連れて行っても大丈夫でしょうか？」

「ドイツ軍に？」

「はい、春樹が行きたいと言っているのです」

「春樹君、どういふことかな？」

エルネスティーネは優しく微笑みながら春樹に問う。そして春樹はとても真剣な表情でその問いに答えた。

「自分は……やるべき事ができたんです。それには自身を鍛える必要がある。だから、千冬姉ちゃんが教官をやるっていうドイツ軍の方に行きたいと、そう思ったのです」

その春樹の顔は軍人に引きを取らないキリツとした顔だった。その春樹の顔にエルネスティーネは感心させられた。いまどきの若者でもこのような表情をする子がいるんだな。それもISの登場で男が立場上弱くなってしまっているこの社会で。とそう思った。

「わかりました。では春樹君、泣き言は言わないって約束できるか？」

エルネスティーネはさっきまでの優しい表情は無くなり、ちょっと怖い感じもする真面目な顔になる。それにびびることもなく春樹は、

「泣き言？ そんなものを言うはずありません。何故なら……自分が持ったこの気持ち、信念は揺ぎ無いものだから」

と言った。その表情は希望・信念・勇気・覚悟……それらが詰まったような顔だった。

（この子……不思議な子ね……気に入ったわ）

エルネスティーネはこの揺ぎ無い意思を示した春樹を気に入ってしまった。もしかしたら、とんでもない人になるんじゃないか、という期待もしていた。

「ではチフユ・オリムラ、これからよろしく願います。そしてハルキ・アオイ、君には期待しているよ。では、準備が整ったら連

絡をしますので、それまではゆっくりしててください」

「わかりました、では」

千冬は礼をしてその場から立ち去る。

そして春樹はエルネスティーネの「期待している」という言葉を思い出していてちよつとした考え事をしていた。軍人の目から見て、自分はそんなに期待できるような人なのだろうか、と。

「とうわけで一夏、お前は家に帰っている」
千冬は一夏にそう命令した。

「お、おう……」

そして一夏は、春樹はやっぱり、ドイツ軍の方へ行くのか、と疑問に思っていた。この場には春樹はいない。彼はすでにエルネステイーネについていき、ドイツ軍基地に出向いているからだ。

「そういえば、春樹は？」

一夏は試しにそう尋ねた。千冬がどう答えるのか、それに期待して。

「春樹はやるべき事ができた。だからお前と一緒に帰れない」

「そうか……わかった」

「よし、ならすぐに帰って休め」

「お、おう……」

一夏は後ろを向いてそこから立ち去る。一応、ドイツ軍の護衛をつけて。そして千冬は一夏の背中を見守る。もう、何も無いように、一夏が平和に過ごせるように。そう願っていた。

千冬はドイツ軍からの連絡を待つ。

これから自分は人にものを教えなくてはいけない。今までそんな経験が無かった彼女は内心不安だった。もし、上手くできなかったらどうしよう。そんな感情があったが、それでも自分は第一回IS世界大会の優勝者、ヴァルキリーと呼ばれた『ブリュンヒルデ』なのだから、それに期待する軍人は沢山いるだろう。ここで下手な事をすれば、日本のイメージはガタ落ち。日本を背負っている自分はそのような失敗は許されない。だから、頑張る事にした千冬。

そして、千冬は問題児に出くわす事になる。

千冬はその子と深く関わり、そして……その軍一番のIS操縦者にまで成長させる。やはり、千冬の力とはとてもないものであった。

第二章『IS部隊 ―Army―』

1

春樹はエルネスティネと共に、彼女の隊である『シユヴァルツエア・ハーゼ』の練習訓練場に向かっていた。

「春樹君、少し緊張しているのかな？」

「はい、ただ初めてなものですから……。早くこの環境に慣れたいものです」

「そうかい、さあ、そろそろ私たちの練習場だ」

目の前に広がったのは黒いISが宙を舞っていたり、砲撃したり、ナイフで格闘戦の訓練をしているところだった。

春樹はただ、この光景にすごいと思った。いままで千冬を操っているISを時々見ていたが、こんなにも近くで見るのは初めてだったから。

そこは流石ISの部隊ということもあってか周りは女性だらけだった。男性はISの整備兵ぐらいで、こことは違う場所でISを整備してくれているらしい。

そこにいた隊員たちはエルネスティネの号令により集められる。一斉に、尚且つ迅速にしかも、しっかりとした隊列になっている。流石は軍人、教育させられているだけはあった。

「貴様らに一つ報告だ。今回、かの織斑千冬に教官をしていたく事になった。織斑千冬は明日こちらに出向き、教導してくださる。そして、その織斑千冬の弟である葵春樹には、この半年、この隊と共に基礎訓練を行う事になる。仲良くしてやってくれ」

「―「は！！」―」

その場にいた隊員たちが一斉に敬礼で返事をした。それは一寸狂わず同時に発せられている。

「では春樹、自己紹介を頼むぞ」

「はい。わかりました」

春樹は一步前に出て、

「葵春樹です。心身ともに鍛える為、皆さんと共に訓練をしたいと思っています。ちなみに自分の姓が織斑ではないのは、正確には千冬姉ちゃんの弟ではないからです。自分は織斑の家に引き取られたようなものですから、そのところを理解したうえ、接してくださいと思います。では改めてよろしくお願いします」

春樹は礼をし、今度は一步後ろに下がった。そして、エルネスティーネは命令を下す。

「では各自、自分の仕事に戻れ。そして、ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は。なんでしょう、エルネスティーネ大佐」

駆け寄ってきたその少女は銀髪で、そして右目に眼帯をしていた。それに少々身体は小柄で春樹はちよつと可愛いな。という印象を持った。

「ラウラ、基地の案内をコイツにしてやれ。ちなみにお前と同じ年だからな」

「は。了解しました」

ラウラは淡々とそう言って敬礼をした。エルネスティーネはその場から立ち去る。

そして春樹は目の前のラウラという少女は同年という事を知って驚いた。自分と同年で感情を排除したようなその感じ。小柄で可愛いと思ったとしても、自分よりは年上だと、そう思っていたからだ。

「えっと、ラウラ……だっけ？」

「そうだが、なんだ？」

「そっか、ラウラ。これからよろしく頼むよ」

と言って春樹は握手をしようと右手を差し出す。しかしラウラは行動を起こしてくれない。

「握手だよ、握手」

春樹はそう言うが……やはり無視。春樹は少し怒って無理やり手

を握った。

「ほら、握手。よし、これで俺たちは仲間だな」

「え……あ、ああ……」

ラウラは少し驚いてしまった。男性が自分の手を握ってきたのだ。そういう経験は今まで無かったせいか、とてつもなく驚いてしまう。そして焦ってしまう。

それを見ていた他の隊員たちは……。

やるね、彼。

あのドイツの冷水をいとも簡単にあんな表情にさせるとは……。

これはこれは、なにか大きな進展があるかもね。

おおー！！

といった感じに盛り上がっていた。

「では、基地を案内するぞ」

「わかった」

そして春樹とラウラは基地内を歩き出す。

食堂やISの格納庫及び整備場であるハンガー。そして、このIS隊員が寝る場所である部屋。それは一つの大部屋であり、そこで『シュヴァルツェア・ハーゼ』の隊員たちは寄り添って寝るのだという。

春樹はさっきの整備班の男もこの部屋で寝泊りしているのかと聞くと、ラウラはそれを肯定。整備員の少ない男とも一緒にその部屋で寝るし、着替えも誰がいが構わずやると聞いた春樹は驚いた。だが、ラウラから戦争の前線に出たらお風呂でさえ男女ともに入るから、これくらいの羞恥心はどうってことはないと言われた春樹は、言われてみれば仕方の無い事だな。と納得した。

そして、一通り基地内の案内を終えた春樹。

「まあ、こんな感じだな。質問は？」

「ないぞ、ありがとうラウラ」

「だから気安く名前で呼ぶなど言ってるだろう」

「でも、これから基礎訓練だけだけど一緒に訓練するんだ、仲間という意識を持たないと駄目だろ、違うか？」

ラウラは少し春樹の目を見てから、

「ふん、わかった。私のことはラウラと呼んで構わない。だから、

お前の事も……名前で呼ばせてもらうぞ」

「ああ、わかった。改めて言う。葵春樹だ」

「あ、ああ……は、春樹」

ラウラは少し恥かしそうに春樹の名前を呼んだ。少し顔を赤く染めているようにも見えた。春樹はそれを見て男の名前を呼ぶのは慣れていないのかな、と思った。

「そうだ春樹、これからISの訓練が始まる。お前も見に来るか？」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

二人はISの訓練場へと歩き出す。

「なあ、ラウラってISの操縦どうなんだ？」

「私か？　そうだな……あまり上手い方じゃない」

「そうか……でも大丈夫だ。明日には千冬姉ちゃんも来るし、たちまちラウラも一流のIS乗りになれるだろうよ」

「そうか？　私も、上手くなれるだろうか？」

「多分な、織斑千冬をなめたらだめだよ。あの人は凄いんだからな」

「そうか、期待しよう」

「ああ」

そんな会話をしていたらISの訓練場へついた。春樹は遠くから練習の光景を見つめる。

インフィニット・ストラトス。通称『IS』

それは女性しか使えないというパワードスーツ。春樹の幼馴染の篠ノ之箒の姉である束が四年前に開発、発表した最強の兵器だ。このISは同じく四年前に起こった「白騎士事件」がきっかけで一部限定的ではあるが軍事的にも利用されている。基本は競技として使用されているが、ISを使った凶悪な事件に関しては軍のIS部隊が動き、ISの使用が特別に認められる。ISはISでしか倒せないからだ。

もちろん、基本的に軍事的にISを使用することは『アラスカ条約』正式名称『IS運用協定』にて禁止されている。

隊員の皆はISを装備して射撃武器を装備している。標準的な装備としての実弾装備の『ライフル』だ。狙撃訓練だろうか。

エルネスティーネの合図で目標を撃っていく、的は立体映像で写されたISである。それを的確に撃ち抜いていく隊員たち。特にエルネスティーネは階級が大佐でこの隊の隊長だけあって非常に上手かった。

そして問題だったのは、ラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女だった。先ほど春樹に言っていた通り、あまり上手くはなかった。的には

中々当たらず、十発撃って二発当たるかどうか、ラウラはISの操縦が非常に下手だった。

春樹はそれを見て、こう判断した。

（ラウラは……ライフルを撃ったときの反動を吸収しきれていない。だから銃口が安定しないで弾がよくわからないところへ飛んでいくんだ。だから、もっと脇を絞めて重心を低くもたないと。なんで隊のみんなはそこを指摘しない？）

春樹は苛立っていた。なんで他のみんながそこを指摘しないのか、と。しかし春樹は知らなかったのだ。この事に気がついているのは春樹だけだと。

要するにエルネスティーネは人を指導する力が皆無なのだ。そして、他のみんなも。

（あとで、ラウラに教えてやるか……）

そう思った春樹はそのままずっとISの訓練をじっと見つめていた。

ISの狙撃訓練後は格闘訓練や模擬戦と続けてやっていたが、やはりラウラ・ボーデヴィツヒの成績は著しくなかった。恐らく彼女はIS適正がそこまで高くはないのだろう。

そして今は夕食時、春樹はラウラと一緒に夕食を取っていた。何故かは知らないが、春樹は周りからの妙な視線が気になっている。なにかと注目されているようだった。

何でだろうか、春樹が男だから？ そんなわけは無い。整備班の人だって男だ。じゃあ何で？ 春樹は色々気になっていたが……今はラウラに訓練の事を教えるのが先決だ。

「なあラウラ」

「なんだ？ 春樹」

「さっきの訓練の事なんだが……」

すると、ラウラは少し怒ったような顔をして、

「なんだ？ がっかりしたのか？ それとも笑おうとも言うのか？」

「いや、そんなことじゃない。お前にアドバイスをしようと思ってな」

「アドバイスだと？ ISも操縦したことも無いお前が？」

「まあ、聞くだけ聞いてみろよ。まずは狙撃訓練からだ。お前は撃ったときの反動の吸収ができていないんだ。だから銃口が安定しなくて弾が変な方向に飛んでいく。だからもつと重心を低くもって、そして脇を絞めて撃ってみな？ いくらかマトモになると思うぞ？」

それは周りの隊員から聞いても的確な答えだった。言われてみれば確かにラウラはそこをうまく出来ていなかった。いままで何で氣付いてやれなかったんだろうかと思うほどだ。

そしてエルネスティーネも食事を取っていたところに春樹のその発言だ。注目しないわけにはいかない。流石は織斑千冬の弟、姉のISの操縦を見てきたからこそその判断なのだろう、自分もまだまだだな、とエルネスティーネは思っていた。

「……そうなのか？ わかった、明日から試してみる……」

「ああ、試してみな。それから――」

春樹は近距離戦闘のアドバイスも始めた。これは春樹が幼少期から剣道をしてきたその知識と経験を活かしてのアドバイスだった。だから、より深いところまで掘って近距離戦闘について話してやった。ラウラはそのことを真剣に聞いている。

このときラウラには何かが芽生えた。それは何なのか、ラウラにはわからなかった。

夕食後、皆が寝る大部屋に来ている。ここでは春樹もここに入り寝ることになる。明日から本格的に基礎訓練を始める。覚悟を決めて寝ようとする。と隊員のとある女性が話しかけてきた。

「ねえねえ春樹君」

「なんででしょうか？」

「ラウラちゃんに何したの？」

「は？」

「だから、ラウラちゃんに何したの？ あの子が他人に心開くなんて……あんな表情するなんて……あなた何したの？」

気がつけば沢山の人が春樹の周りに集まってきた。春樹はその質問の意味がよくわからなかったので聞き返した。

「えっと……心開くって……どういうことですか？」

その女性隊員はラウラ・ボーデヴィツヒの事を話した。全ては話せなくとも、なんとなくわかるようには話してくれた。

ラウラ・ボーデヴィツヒは生まれ方が特殊であり、そのせいでI Sの適合値が低くなってしまったらしい。そして、彼女は軍人となるべくして育ってきた、だからこそ冷酷に、『軍人』として生きている。だから冷静かつ冷徹な性格の持ち主で、表情の変化に乏しい。他者を寄せ付けない威圧感を放ち、その人間性は部隊内で「ドイツの冷水」と呼ばれるほどに凄まじかったという。

そのことを聞いた春樹は驚いた。確かに、初めて話したときはそんな印象を持ったが、握手をした後は別にそんな事を感じることは無かった。むしろ話しやすい子だという印象が大きかった。そのことを話すと……。

「うーん、これは……」

そう言って隊員の女性達は目を合わせて一斉に頷いた。すると彼女達の目の色は変わっていた。そこにタイミングよくラウラが部屋に入ってきた。

「ん？ どうしたんだ、春樹の周りに集まって」

その時だった。隊員の女性達はラウラに向かって……。

「ラウラちゃん頑張りなさい、私応援しているから」

「え？」

「寝るときは春樹君の隣を確保しなさい。私が協力してあげる」

「は？」

「ラウラ、おじさん達一同応援しているぞ」

整備班のおっちゃんたちまでラウラに向かってそんな事を言い出した。

春樹はどうしてこうなった。と思っていた。

そろそろ就寝時間。寝る準備を始める一同。しかも皆同時に洗面所に向かい外へと出て行く。なんというチームワークだろうか。

そして気がつけばラウラと二人きりになってしまった春樹。

「いったいなんだというんだみんな揃って……」

「えっと、ラウラ……」

「なんだ春樹？」

と、ここでもうやく現状に気がついたラウラ。男女が同じ部屋で二人きり、このシュチュレーションといえ……。と思うが、ラウラと春樹は会ってまだ一日しか経っていない。そんな関係になる事は決してない。何を期待しているのだろうか、あの隊員達は……、と思う春樹だった。

そして皆が帰ってきた。なんだか「はあ……」というため息が何回も聞こえてきたが、春樹は気にしない事にした。皆が寝始める中、自分も練ることにした春樹。明日からは皆と同じ訓練をするのだ。寝不足なんてことになったら洒落にならない。

開いているベッドに入って寝ることにした春樹。すると誰かの声が聞こえた。「ありがとう」と。その声は聞いたことがある。恐ら

くうらの声である。春樹が声のした方向を見るが、そこには誰もいなかった。

春樹がドイツ軍を訪れて二日目、今日は織斑千冬がこっちに出向く。なぜかというときIS部隊の教官をするためだ。

一夏が誘拐された際に独自の情報網で一夏の位置データを割り出してくれたドイツ軍への礼として彼女はやって来た。

IS 配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』の隊長、エルネスティーネ・アルノルトが織斑千冬を出向く。

「この度は私の部隊の教官を請け負ってくれてありがとうございます、チフユ・オリムラ。春樹君は今、基礎訓練中ですよ、覗いてみますか？」

「ああ、そうだな。見てみよう」

千冬とエルネスティーネは訓練場まで歩き出した。

エルネスティーネは横にいる元『ブリュンヒルデ』、とはいってもドイツが千冬と戦いもしないで手に入れた称号など実質意味がない。「元」というのは間違っている。多くの人間が今でも織斑千冬が『ブリュンヒルデ』だと言うだろう。

エルネスティーネはそのブリュンヒルデを見ると、やはりオーラというのだろうか、もう雰囲気から軍人顔負けのしっかりとした感じがする気がした。落ち着きがあり、どんな条件下でも戸惑う事がない。そんな人なのだろう、と。

しかし、千冬は正直なところこれからの教導は不安な事ではないだった。なにせ人にものを教える事など初めてなのだ。人間誰だって初めてやる事は不安だろう。それは千冬も例外ではなかった。

そうこうしてるうちに訓練場のグラウンドまで来たが、そこには春樹が独壇場で走っている光景があり、それに千冬は驚かされた。彼はいままで訓練を続けてきた隊員たちをランニングで抜いている

んだから。

「すみません、あれは春樹が周回遅れってことではないですよ？」
「……はい。あれは周回遅れなんかじゃなく、本当にトップに立っているんです。彼の身体能力には驚かされました。これまでに何か運動でも？」

「いえ、やっていた事と言えば……剣道ぐらいですよ」

「剣道ですか、じゃああれは……春樹君の実力なんでしょうかね？」
「わかりません、でも春樹は何か強い意志と覚悟がありました。それが彼をあそこまで動かしているのかと」

「精神論ですか、でも……あながち間違いではないかもですね」
するとエルネスティーネは隊員たちに千冬が来た事を教える為に声をかけた。

「ハーゼ部隊集合！」

エルネスティーネのこの号令で一斉に彼女の前に並んでいく、もちろん春樹もそこに混ざっている。

「こちらの方が今日から半年の間、ISの教官をしてくださる織斑千冬臨時軍曹だ」

織斑千冬は臨時ではあるが、ドイツ軍に配属する。と言う事になるので階級が与えられる。その階級は『軍曹』一応エルネスティーネは大佐なので彼女の方が階級は高いのだが、まるで自分が下の階級のように接していた。やはり、かの『ブリュンヒルデ』ということで恐れ多いのだろうか？

「私が今回貴様達を教える事になる織斑千冬臨時軍曹だ。貴様達を使えるようにするのが私の仕事。だから、厳しい訓練になるが覚悟しておけよ？」

「」「は！」「」

隊員の全ての人が織斑千冬に対して敬礼をする。そして千冬も慣れない敬礼をして返したが、何故か千冬はその敬礼が非常に決まっていた。

春樹はついに来た千冬に胸を躍らせていた。この人が来たのなら

ば、ISの訓練が非常に面白くなりそうだし、皆がISの操縦が上手くなるだろうし。彼はなにかとISの訓練を見てるのが好きになっていた。自分は男だから操縦できないが、見てるだけでもなんか楽しかった。

春樹は体力だけは自身があつた。先ほどのランニングだけは自分の目標があることもあり、何があっても負けたくなかった。結果は見事トップを死守し、ランニングを終えた。

しかしこの後は近接戦闘の訓練である。春樹は流石に経験がないので不安要素が沢山ある。精々春樹が今までやって来た剣道の動きを応用してやるしかない。そう思った春樹はラウラを相手にする。友達というか同年という事もあって何かとやりやすい相手だからだ。

「じゃあ、お相手よろしくなラウラ」

「ああ、いくぞ春樹」

二人はゴム製の模擬ナイフを片手に刺しあいを始めた。

間合いを読み、一突き。そしてもう一突き、と春樹はリズム良く攻撃をするがラウラは軽々避ける。流石に素人の攻撃に対して涼しい顔をするラウラ。それに屈することなく攻撃を続ける春樹。

すると、遊びが終わったかのようにラウラの鋭い攻撃が飛んでくる。春樹は間一髪でその攻撃を避けるが更に次の攻撃が飛んでくる。相手の攻撃を許さないラウラの攻撃。攻撃は最大の防御と言うがこの事だろう。

春樹は剣道で鍛えた動体視力を生かして避けるだけで反撃の糸口が見えない。

「どうした？　こんなものなのか、春樹」

ラウラが立ち止まってそう言うとき……。

春樹は落ち着くことにした。春樹は目を瞑る。

心眼。

春樹はこのスキルをもっていた。心の目で相手の動きを悟り、そして攻撃をする。これは感覚のみに頼った現実的ではない戦法。し

かし春樹は剣道においてこの『心眼』の能力をもっていた。これには千冬と春樹、そして箒も驚いていた。なにかの悟りを得た、そういうことらしい。ちなみに一夏にはもっと凄いスキルをもっていた。彼は時折動いているものがスローに見えるらしい。いつもではなく、そういうことになるときはなにか頭の中がクリアらしいが……。

ラウラは春樹がいきなり目を閉じたので驚いていた。なにか気持ち悪いほど落ち着いた感じ。でも決して諦めた様子がない。何かなんだか分からないラウラはとりあえず模擬ナイフで突くが、春樹が目を瞑ったままその攻撃を避けた。そしてそのままラウラにむかつて鋭い一撃を入れたが、ラウラはそれを避けて春樹にタックルする。春樹はその一撃に賭けていた。しかし避けられた。これにより大きく隙ができてしまった春樹はラウラのタックルを諸に受けてしまう。

「ぐはっ！」

腹に入ったのか、春樹はみつともない声をあげてしまう。そのまま豪快にぶっ飛んでしまう。

「なんなんだ、それは！」

ラウラは今でも驚いていた。目を瞑っていた春樹がそのまま自分の攻撃を避けたあとそのまま的確な鋭い攻撃をしてきたのだ。あれは正直危なかった、と思うラウラ。

そんなことよりも春樹が目を瞑ったままあれだけの芸当を شدしたのが問題である。

「春樹、今のはなんだ！」

ラウラは腹に手を当てて痛みが和らぐのを待っていた春樹を揺さぶる。しかしそんなラウラなどお構いなしに黙って腹の痛みが引くのを待っていた。

数十秒後、春樹は二人の間のシーンとした空気を打ち破るべく、むくつと立ち上がり、さっきの心眼の説明を始めた。

「今のは心眼って言って、心の目で相手の動きを見るといったものだ」

「なんだと？ そんなことが可能なのか？」

ラウラは激しく春樹の身体を揺さぶる。

「まあ、落ち着けよ！ 一部のそういった能力をもってる人なら可能みたいだな」

「うむ……で、心の目。とはなんだ？」

「あれ、わかってなかったのか。えっと……なんて言うかな……要するに感覚だよ。相手の殺気を感じ取り、その感覚で相手の攻撃を避けたり、攻撃したりするんだ」

「うーむ、よくわからん」

「まあ、結構オカルトなところがあるから深く考えないほうがいいぞ？」

「……あまり納得できないが、わかった。と言っておこう」

すると、千冬が大きな声で部隊全員に命令を出す。

「よし、格闘訓練はここで終了だ。十分間の休憩の後ISの訓練に移る。それまでに訓練場に集合せよ！」

部隊の皆は「了解」というと、さっさとそこからいなくなる。各々は水分補給をしたり、汗を拭いたりとして、ISの訓練場へと向かっていった。

ISの訓練に移る。ここからはようやく織斑千冬の出番だ。

春樹は傍らで練習の風景を見ている。

そしてラウラが昨日の春樹のアドバイスを活かすときが来たのだ。狙撃、格闘、この二つのアドバイスを受けた彼女は昨日までの落ちこぼれではない。少しでも成長してればいいのだが……。

織斑千冬が隊員の前に立つ。なんだか妙に決まっていた。隊員の皆も千冬のオーラには何かを感じるようである。

「では、いつも通りにやってみろ。そこから私は教導を入れる。ではエルネスティーネ大佐、お願いいたします」

「了解しました、織斑教官。では狙撃訓練から始める。各自『ライフル』を装備し、狙撃訓練を始めろ」

「「は！」」

隊員たちは次々と『ライフル』を装備してIS用射撃訓練場まで移動する。

そして準備を終わらせたものから撃っていく。そこから織斑千冬が問題点を挙げて指導する。という流れだ。

他の隊員たちは千冬の指導により、確実によくなっている。千冬の装備は『零落白夜』を使った剣術しかないが、流石は『ブリュンヒルデ』、射撃のこともちゃんと指導している。織斑千冬をなめてはいけなかった。

そしてラウラの番が周ってきた。ラウラは『ライフル』を構えて昨日の春樹のアドバイスを思い出す。

ライフルを持つとき脇を絞めて、重心を低くもつ。たったこれだけである。これだけでどれだけ違うのか、ラウラはドキドキしていた。そして、目標を目掛けて撃つ。しかし外れる。そしてもう一発。

今度は当たった。

ラウラは嬉しかった。初めてこんなにもすぐに当てることができたのだ。

そして続けてもう一発撃つ。

そして十発撃ち終わった。結果は十発中六発命中、昨日より三倍以上、命中率は50%を超えたのだ。ラウラは嬉しかった、自分がこんなにも当てる事ができるなど、考えもしなかった。しかし現実起こったのだ。たかが六発、されど六発。他の隊員の平均が十発中八発ヒットの中、ラウラは遅れを取っているが、すばらしい成長であることは変わりなかった。

ラウラは近くで見ているだろう春樹を探した。春樹は遠くの方で見守ってくれていた。ラウラは慣れない笑顔を春樹に見せた。

他の隊員は驚いていた。ラウラがいきなり六発も的に当てた事、そしてラウラが笑顔を見せた事だ。いままでこのようなことはなかったのだ。『ドイツの冷水』と言われたラウラがこんなにもやわらかくなって笑顔を見せている。

だが、それはとてもいいことである。他の隊員がラウラがこんな風になってくれて嬉しかった。

そして織斑千冬も驚いていた。聞いた話によるとラウラ・ボーデヴィツヒという人物はIS適合が低く、ISの成績はあんまり芳しくなかった、という話であったが、この狙撃訓練では聞いていた話とは違う成果が挙がっていた。

「すみません、エルネスティーネ大佐」

「なんでしょう？ 織斑教官」

「ラウラ・ボーデヴィツヒの事なのですが……」

「ああ、実はですね、昨日――」

エルネスティーネは昨日の夕食時にあった事を話した。

葵春樹がラウラ・ボーデヴィツヒの問題点を挙げ、さらにアドバイスまでした。そして先ほどの訓練がその成果であることを。

「春樹が……」

千冬は更に驚いていた。春樹がそんなことをしたのかと、確かに剣道では心眼を使い始めるわ、それでもってちゃんと使いこなすわで色々と凄かったが、まさかISの事まで口出しをして、さらに問題点を直すとなると、流石に驚くしかなかった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

「お前ももうちょっと落ち着いて撃ってみろ、ISの自動照準ロックステムがあるんだから、的一つ一つを的確に狙う。そのためには標準を的にあわせたときにワンテンポ遅らせて撃て。別に早撃ちではないのだから、的確に的を狙うんだ」

「了解しました。ありがとうございます、教官」

ラウラは敬礼して訓練に戻った。

そして千冬は春樹の方を見た。ぼけーと訓練の光景を見ている彼がラウラを成長させたという事実に分の立場が危ういような気がした千冬であったが、そんなものは気のせいだ、幻想だと思って彼女は訓練の指導に戻っていった。

第三章『崩れていく日常　―Unknown―』

1

ドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』に体験入隊して数週間、春樹は時折足を引っ張ってしまい、連帯責任として隊のみんなに迷惑をかけたこともあったが、春樹はそんな自分を許せず、人一倍頑張っていた。とりあえず持ち前の体力を駆使して隊のみんなに追いつくのが目標である。

ランニング、近接格闘訓練、射撃訓練、等々様々な訓練を続けていた中、意外と春樹が最も得意だったのは以外にも射撃であった。

春樹はハンドガンを扱うのが非常に上手かった。最初こそ慣れてなくて全然的に当たってくれなかったが、何発か撃っていくうちに段々と正確に且つスピーディーに射撃をすることができるようになっていた。

ラウラもこのことには驚きを隠せなかった。聞けば春樹は剣道をやっていたと言っていたのに得意なのは射撃。

人間は時折意外なものが得意だったりする。春樹の場合それが射撃だったのだ。

ISの訓練は相変わらず千冬による鬼教導が続けられていた。元々高い能力をもっていたハーゼ部隊であったが、千冬のその教導によって更にレベルアップしていた。

ラウラはなんと部隊でベスト5に入るんじゃないか、と思うほどの実力の持ち主になった数週間で成長していた。春樹もこれには驚いた。最初は直視できないほどの下手なISの操縦だったが、あのとときの春樹のアドバイスとこの数週間に渡って行ってきた千冬の教導の成果は多大なるものだった。

ラウラは最近本当に嬉しそうな表情をする。春樹と会ったばかりの頃は表情があんまりなく、『ドイツの冷水』と言われるほどの

冷たい感情をあらわにするその性格。だが、春樹と会ってから、千冬の教導を受けてから彼女は非常に楽しそうにしていた。

部隊の人間もこのラウラの変化にはとても嬉しく感じている。葵春樹という人物には本当に感謝したいぐらいであった。ラウラの『友達』になってくれた事に。

千冬もラウラのその表情には微笑ましいものを感じていた。春樹が彼女と友達になり、それからISの操縦も上達が早かった。ラウラのこの状態の支えとなっているのが葵春樹その人である。

そう、ラウラは春樹と接しているときに一番幸せそうなのである。

そしてこの今の状況は崩されてしまう事を、彼女はまだ知らなかった。

現在、春樹はI Sの訓練場で千冬の教導によって扱^{しじ}かれているハーゼ部隊を見ていた。この時間帯はこうしているのが習慣である。ハーゼ部隊のI Sを自由自在に操っているところを見て春樹を時々思うのだ、自分もI Sで空を飛んで、自由自在に操ってみたい、と。

しかしそれは願わない夢、理由はわからないがI Sは女性にしか使うことができない。何故か男性はI Sが使えないのだ。

I Sの開発者である篠ノ之東は実は知っているのかもしれない。I Sが女性にしか使えない原因を。

しかし彼女は行方不明。そしてたとえ見つけてもそのことを教えてくれるのかさえ怪しい。篠ノ之東は結構投げやりにすることが多い。少なくとも自分の興味の無いものはそんな風に扱うのだ。それがモノであってもヒトであっても。

ラウラは順調に成績を上げていた、どんどん成長しているのが分かる。

そして……

一番油断し易いのも、この時期なのである。

今はI Sによる模擬戦が行われている。一対一のタイマンで行われている。実力が近いもの同士で行われるこの模擬戦は自分が今どの段階にいるのか、目に見えるように示してくれるのだ。だからラウラは次々と対戦相手が変わっていく。段々強い乗り手と戦う事になるのだ。

ラウラはそれなりの実力者との模擬戦を行っている。今までに受けた指導を思い出し、そしてそれを駆使して戦う。

ラウラはハーゼ部隊に配給されている量産型I S『シュヴァルツ

エア・ゲーベル（黒い銃）』を駆っている。そのISは両肩部に『キャノン砲』を装備、そこから発射されるエネルギー弾は威力が強い。そして『ナイフ』が近距離用武装として用意されている。

ラウラともう一人の隊員は『キャノン砲』を使い射撃を入れながらも隙を見つけては『ナイフ』で近距離戦を挑む。シンプル且つ実戦的な戦術である。

このときラウラは成長してきた自分を過大評価しすぎていた。

そしてそれを感じ取っていた春樹。ラウラは非常に危なっかしかった。今にでもミスをして相手にやられそうな感じがしていた。

ラウラは『キャノン砲』を撃ちながら距離を詰めるが攻撃が当たらない。しかもその後の追撃である『ナイフ』の攻撃すら当たらない。流石にここまでできたならば相手も非常に強くなってきている。簡単には勝たせてもらえないだろう。

そしてついにそのときが来た。戦闘場所は遥か上空、そこで戦闘が行われていたがラウラがミスをしたのだ。相手の攻撃を避ける為に機体を無理な方向へ傾けてしまった。それによりバランスを崩してしまう。さらにそこに相手の『キャノン砲』の攻撃が飛んでくる。それをもろに喰らったラウラのシールドエネルギーは0になり、なんと、上空から一直線に落ちてくる。なにが起こったのか分からないラウラの対戦相手。

このときラウラはあまりの衝撃に気を失ってしまったのだ。ISの制御ができない中、機体は一直線に地面へ向けて真っ逆さま。しかもシールドエネルギーはもうない。もしこのまま落下したら……。危ないと考えた春樹は、ISがそのまま落下してもパイロットの身は守れるほどに頑丈で、安全なものということも、その先のことも考える暇もなく身体を自然と動かした。本当に何も考えずに……。

ラウラの方へ走る春樹。

そして――春樹はあるものに手を伸ばした。

ラウラは目を覚ました。そこには軍の医務室の天井が見える。ラウラはあのときの事を思い出していた。

自分はその時、自分の油断からできた隙を突かれて『キャノン砲』の攻撃を受けた……が……その先のことは覚えていない。一体何があったのか、気になるラウラは周りを見渡した。しかしそこには誰もいなかった。

なぜ自分が一人なのか、医務室の人が一人二人いてもおかしくないのに何故……？

すると医務室のドアが開く。

そこには織斑千冬が立っていた。

「教官！」

「目が覚めたのか、ラウラ」

「教官、一体何があったのですか？ 私はあの時気を失って……あの後どうなったのですか？ 誰が助けてくれたのですか？」

しかし千冬から発せられた人物はラウラの予想を大きく斜め上に裏切る人物だった。

「あいつだ……春樹だよ」

ラウラは驚いた。だってラウラはあの時ISを装備していたし、結構な高さから真っ逆さまに落ちていたはずである。

そんなものを素手では流石に受けることはできない。ではどうやって？

「教官、でも私はあのときISを装備していました、一体どうやって私を助けたんです？」

「……春樹がISを動かした」

今、千冬から信じられない言葉を聴いた。「春樹がISを動かした」なんてはずはない。ISは女性しか反応しない。起動することができないのだから。

「きよ、教官……今なんと？」

「だから、春樹がISを動かしたと言ってるだろう！」

千冬の大声にラウラはすこし驚いた。

確かにいま織斑千冬は「春樹がISを動かした」と言った。どう聞いても間違いない、聞き間違いはなかった。

「どういうことか……聞かせてもらえますか？」

「あいつは——」

千冬は説明した、あのとき何があったのかを。

ラウラが落下しているときに、助けに行こうとした千冬の横を春樹が抜き去る。勝手にISの訓練場に入ってきて、さらに近くにあった空いている予備のISに勝手にさわり、そして起動させた。その時千冬は驚きを隠せなかった。いや、そこにいた隊員全員が驚いていた。

そしてそのままラウラの方へ飛んで行き、ラウラを受け止めたらしい。

「そんな馬鹿な！ たとえ動かせたとしても、春樹はISについて右も左も分からないはず。そんな芸当ができるはずは……」

「だが事実だ。今、春樹が尋問を受けている。嘘発見器も持ち合わせて話を聞いているところだ」

千冬はラウラの話を遮り、現状を説明した。

今、春樹は何故ISを動かせたのか、ということ。

目的は何なのか、ということ。

本当は自分がISを動かせる事を知っていたのではないか、ということなど質問をしていたが、春樹は全て「分からない」と答えていた。自分は何も知らない。気付いたら体が勝手に動いていて、ISを動かしていたらしいのだ。しかもこの答えに嘘発見器はなんの

反応もない。嘘は……ついていないことになるが……。

「織斑教官」

するとエルネスティーネ大佐が医務室に入ってきた。

「なんです、エルネスティーネ大佐」

「報告です、只今葵春樹の尋問が終わりました。嘘はついていないようですが、念のため営倉に入れることになりました」

「了解だ。で、その期間は？」

「一ヶ月間です」

「わかりました。私もそちらの方へ向かいます」

「わかりました、では……」

千冬はエルネスティーネと共に医務室を出て行った、そしてラウは……絶望の表情をしていた。そして何も考える事さえできなくなっていた。

ベットのシーツを握り締め、そして、彼女の顔には涙があった。

葵春樹は営倉にいた。何故自分がこんな所にいるのか気持ちの整理がついていなかった。

あの時自分はラウラを助けるのに必死だった。気がつけば自分がISに乗っていた。何故かは知らないけど、無意識の中で乗り、そして飛んだんだ。ラウラを受け止めて我に返ったときにはもう遅かった。

ラウラを助ける事はできたのに、降りてくれば自分は軍の上層部の人たちに囲まれて、そして尋問室に強制連行された。よくわからない装置を頭につけられるし、何がどうなっているのか、全く分からなかった。

無駄な抵抗はしないほうがいいと思ったから、とりあえず質問には正直に答えていった。そこには織斑千冬もいた。途中でいなくなったが、何処に行ったのだろうか。

嘘はついていないことは分かってもらえたのだけれど、何故か自分は今営倉にいる。

恐らく警戒を続ける、と言う事だろう。

だけど春樹には何の裏もない。自分でISを動かせた理由も分からないし、動かしただけでと言って特に何をするってわけでもなかった。だが、営倉に入れられてしまう。確か、期間は一ヶ月だったはずだ。ラウラはその間、どうなるんだろうか、と春樹は心配だった。するとそこへ、二人の女性が現れた。

「春樹、すまないな」

織斑千冬だった、そしてその隣にはエルネスティーネ・アルノルトがいた。

「春樹君、君が嘘をついていない、というのは分かるのだけれど、

上の決定だからね、どうしようもなかったんだよ」

座っていた春樹はゆっくりと立ち上がり、

「いえ、大丈夫です。ああなっちゃったら警戒しない方がおかしいだろうし……」

「ああ、そうだ春樹君」

とエルネステイーネは笑顔で、

「君がISを動かした事は世界には公表する事はないから」
「え？」

春樹は驚いた。何故なら男がISを動かした。という事実がどれだけのニュースになるのか計り知れない。世界の常識を翻した人物がここにいるのに何故？

「考えてみる春樹、ここはドイツ軍だ。この特殊ケース、未知の存在をまずは自分達のために研究したいだろう？」

この話を聴いた瞬間、春樹は青ざめた。自分が研究材料になる。そのことを考えただけでも不安だった。

「そう心配な顔をしないで、春樹君。私達が何とかするから、ね？」

エルネステイーネは笑顔でそう言ってくれた。それがなにより春樹の心を安心させてくれた。

「そのための一ヶ月間だ。春樹」

千冬はそう言って、後ろを向いた。

「だから、お前は安心していろ。お前は私が守る」

そう言って千冬は立ち去った。そしてエルネステイーネもこっちに微笑みかけ、それから後ろを向いて営倉から出て行った。

そして春樹は後悔したのだ。今、ラウラの事を聞けばよかった、と。

春樹は営倉に設置されている固いベッドに腰をかける。

（千冬姉ちゃんとエルネステイーネ隊長がなんとかしてくれる……か……。さて、ラウラの事聞きそびれちゃったけど……大丈夫かなって過保護すぎかな？ アイツは一人でもやっていけるはずだよな、前までのラウラとは違うんだし……）

ラウラは春樹と会うまでは一人ぼっちだったらしく、人を寄せ付けない感じがあった……らしいが、そんなものは春樹という『友達』ができてからはそんな感じは見せなくなっていた。

今となっては周りの人たちと和解して、皆仲良くやっている。そこから笑いが絶えなかったし、悔しさだって分かち合った。悲しさだって分かち合った。

だけど、この一ヶ月間はそれに春樹は参加することが出来ない。

（それは……とても寂しいな……）

春樹はそれにとてつもない寂しさを感じていた。ラウラが心配だし、それでもって寂しさも感じてしまう。

春樹は感じた。

ここで一ヶ月間耐え抜いていけるのか、と。

第四章『崩れ去る日常　―Raid―』

1

葵春樹が営倉に入ってから一ヶ月が経とうとしていた。この一ヶ月間は春樹にとって苦痛しかない毎日であった。得にする事もない。何も起こらない。だから時間が無駄に長く感じてしまう。人間にとって何もない事こそが苦痛である。

それももうそろそろ終わる。

春樹は千冬やエルネスティーネが頑張ってくれたのか、特に身の危険を感じる事は起こらなかった。

(ラウラは……元気にしてたかな……?)

春樹はこのドイツ軍に来てからの初めての友達、同い年の女の子のラウラ・ボーデヴィツヒの心配をずっとしていた。そういうことぐらいしかする事はなかったのだ。

そしてこの営倉はある程度の立場の人で無いと立ち入ることができない。無論、ラウラは少尉である。つまり簡単に言えば会社の平社員と変わらないのである。

そんな彼女はこの営倉に入ることができない。

しかし織斑千冬は違った。一応、春樹の保護者兼教導官である為許されている。

そして所属している『IS 配備特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ』の隊長エルネスティーネ・アルノルト大佐もこの営倉に立ち入る事が許されていた。

この三週間、時折その二人が話に来てくれたが、まあ、そこまで楽しい話題とかはなく、事務連絡がほとんどである。

そしてこのとき、春樹は思いもよらぬ人物が着てくれることを知らない。

ドイツ軍基地、その門の目の前にある女性が立っていた。

その姿は青い個性的なワンピースに、頭にはなにやらウサ耳のよ
うな機械的なものをつけている。

その名を「篠ノ之束」

かのISの製作者である。彼女の顔を知らないものはいないだろ
う。全国ネットで顔が晒されているのだから、インターネットでも
彼女の名前を検索すればすぐに顔写真が見れるだろう。たしか彼女
は今政府によって保護されているはずであるが……何故ここにいろ
のだろうか。

「はいはい、こんにちは。篠ノ之束です！」

そう言って門兵の人に身分証明になるものを見せ付ける。

門兵は驚いた。かのIS開発者が目の前にいるのだから。

「あ……えっと……何の御用で？」

「ここに織斑千冬がいるはずなんですけど」

「はい、確かに今はISの部隊の方で教官をやっておりますが……」

門兵という立場だが、世界的にも有名人であるかの『ブリュンヒ
ルデ』である織斑千冬がこの基地で教官をやっているということとは、
ISに関わっていない人物でも知っている事だ。

「実は、彼女と会うことになっているのですが、連絡を取っていた
だけですか？」

「はい。しばらくお待ちください」

そう言って門兵は織斑千冬に連絡を取った。そしてしばらくして
……。

「織斑軍曹殿があなたとお話をしたいそうです」

「分かりました」

そう言って束は門兵についていき、目の前のモニタに目をやった。そこには千冬が映し出されており、束はなにか懐かしい感じがした。「やつほー、久しいね、ちーちゃん！」

『何のようだ、束』

「何の用だって、冷たいねーちーちゃんは。知ってるんだよー春樹のこと」

束のその言葉に千冬は表情をにがらせた。春樹がISを動かした事はこのドイツ軍の人物しか知らない。このことを口外したものは重い処罰をくらう事になっている。一体どうやってその情報を手に入れたのか、不思議でたまらなかった。

「おやおや、何でそのことを知っている？ って聞きたそうな顔をしているねえー。でも秘密。裏ルートから手に入れた情報だからね」
『なんだ、その裏ルートは？ ……まあいい。で、本当に何の用なんだ？』

「春樹に合わせてくれないかな？」

千冬はいきなり真面目な口調に引き締まった表情になった彼女に少しびびっていた。 いままでこんな表情を見せるのはほとんどなかった、というか見たことがなかったのである。

『何か知ってるのか？』

「いいや、これから調べるの。天才束さんに任せてもらえれば簡単に分かっちゃうんだから！」

『ふん……待ってる。そっちに行く』

通信が切れた。千冬がわざわざこっちに出向いてくれるらしい。しばらく経って千冬が束の前に現れた。

「やつほー、ちーちゃん！」

と束が叫んで千冬の方へ全力疾走、そして千冬の身体へダイブ！しかし、千冬はその束の体をすらりと華麗にスルー。そのまま束は地面に突っ込んでしまう。

束は地面にぶつけた自分の顎を撫でながら、
「痛ーい！ 避けるなんてヒドイ！」

「さっきまでの真剣な表情は何処へ行った？　はあ……春樹に会うんだろ？」

「うん、そうだね。早速行こうか」

と言って千冬についていった。

しかしそこで待っていたのは厳重な荷物検査と身体検査。軍の基地に入るのだから当たり前だろう。盗聴器や盗撮機など持っていたら、情報漏洩の恐れもあるし、そのところは厳重に取り調べなければならない。

持ち物一つ一つ厳重なチェックが行われる。

結局このチェックが終わったのは三時間後であった。

春樹は営倉で暇な時間を過ごしていると、奥の方から足音が聞こえてきた。誰か来る。しかし恐らくは千冬かエルネスティーネだろうと、そう思っていた春樹だったが、その予想は大きく裏切られた。なんだかよくわからない人物が自分の目の前まで来たのだ。

「やあやあ、久し振りだねえ春樹！」

もしかしたら、と春樹は思った。個性的なワンピースとこの奇妙なウサ耳。そしてこのハイテンションな喋り方。間違いない……。

「えっと……束……さん？」

「正解！ みんなのアイドル篠ノ之束だよ！」

手でピースを作ってそれを目元に持っていくお馴染み(?)のあのポーズを取る束。しかし、誰からの反応が返ってこない束は怒り出した。

「もう！ ちょっとくらい反応してくれてもいいんじゃない!？」

ツツコミぐらい入れてよお！」

「えっと……ごめんなさい……」

「まあ、いいや。で、自分がISを使えた理由、わかってる？」

「え、じゃあ束さんは原因を!？」

「いいや、これから調べるんだよ。本当は営倉入りは一ヶ月という期間だったけど、私の力で春樹を解放させたから」

春樹は今束が言った「私の力」という言葉が気になった。やっぱり、ISの生みの親だからなのだろうか、それとも何か別の要因があるのだろうか？ もしくは、金という絶対的な力を使ったのか……まあ、そういった手段ははっきり言ってどうでもよかった。なによりここから出られたことが一番嬉しかったから。

とある軍人が鍵を持ってきて牢の鍵を開けて、更には春樹の荷物

をも返してくれた。

「さて、調べてみようか。春樹がISを使った原因を！」
あいかわらずの高いテンションで春樹の手を握り締め、引っ張っていく。

そのとき春樹は少しドキッと心臓に若干の痛みを感じたが、自分で自分がそうなったのか、はつきりとは分からなかった。もしかして、自分は……そう思いながらもそんなことはない、と自分のよくわからないその気持ちを否定していた。

「で、束さん。一体何処に？」

その喋り方には少したどたどしさが見られる。

「ん」とね、まあ、ここの実験室を貸してもらってるんだ。そこに行ってみよう！」

「はあ、分かりました。ところで、俺の体を解剖……なんてことはないですよね？」

「んなことするわけじゃないじゃん。もっとスマートにするのが私のやり方だよ、春樹」

そして束はさらに歩くスピードを速めて春樹を引っ張っていった。誰もいないことを確認して廊下を突っ切る。まるで誰かに見られたらマズイような感じだったのを春樹は感じた。

ラウラ・ボーデヴィツヒが廊下を歩いているとある人物が目に入った。それは彼女が待ちに望んだ人物、葵春樹であった。彼はすぐに道を曲がってしまい視界から外れてしまう。

彼はなにやら女性に手を引かれて何処かに手を引っ張られ、どこかに行こうとしていた。しかもその春樹の手を引っ張っていた女性は、このドイツ軍基地ではあまり見たことがないが、何処かで見たような顔をしていたような気がするが、誰だったか、と考えていた。

とりあえず追いかけるようとして、彼が曲がったところへ走っていくと、そこには……誰もいなかった。一体何処へ行ったのだろうか、ついさっきここを曲がったはずである。しかし目の前には誰もいなかった。

すると後ろにある女性が立っていた。

「ボーと立って何をしている？　ボーデヴィツヒ」

ラウラが振り返るとそこには織斑千冬が立っていた。

「きよ、教官！」

慌てて千冬に向かって敬礼をするラウラ。そして千冬も敬礼を返す。

「教官。今、誰かに春樹が引っ張られていくところを見たのですが、何か知っていますか？」

「ん？　春樹だと？　見間違いないのか、春樹はまだ営倉の中だぞ」

「え？」

ラウラは考えた。今のは何かの見間違いだったのか、しかし、あれは間違いない春樹の顔であった。そして不思議な格好をした女性と共に移動していたのをはっきりと覚えている。

「春樹は営倉の中だ。わかったか？」

「は、はい……。分かりました……」

千冬なあまりの鋭い目にラウラは引くしかなかった。

（しかし、あれは間違いなく春樹だった……でも何故このことを隠す？ ……何かあるのか？）

「では、教官、私はこれから自主訓練に入りますので」

「そうか、あまり無茶はするなよ」

「了解」

千冬はそのままそこから立ち去り、そしてラウラは……。

（春樹……）

春樹の事を想い、探る事を決心する。

彼女にとって春樹という存在は心の支えなのだ。この約一ヶ月間、寂しい思いをしたが、先ほどようやく彼の顔を見ることが出来た。

彼が営倉から出たのだ。それだけでも彼女にとっては希望そのものだった。

春樹は気がつけばとある研究室にいた。さっきまで廊下を小走りで進んでいたのに、一瞬でこの研究室に立っていた。隠し部屋だろうか？　ていうか、何故隠し部屋がこのドイツ軍基地にあるのだろうか？　もしかしたら、元々ここでドイツ軍は春樹の研究をするはずだったのかもしれない。

そしてそこにはド素人の春樹には全く分からないコンピュータが並んでいる。

「はい、じゃあ春樹、そこ座って」

束は春樹に近くにある椅子を指差して座るように要求した。

春樹は「はい」と答え、何をするのか不安になりながらもその椅子に腰掛ける。すると束が春樹の頭の髪の毛一本をつまんで抜いた。「痛っ！」

いきなりの事で春樹は驚いた。しかし束は、

「あゝ、失敗したゝ、もう一本抜くよ」と言い出した。

春樹は一体何なんだ、と束に問うと、髪の毛の根毛の根毛鞘からDNAの鑑定をするらしい。何故こんな事をするのかというところ。

「ISのコアはね、人間の遺伝子に反応するんだよ――」

束から語られる事実、インフィニット・ストラトスは人間の遺伝子に反応するが、何故か女性の遺伝子にしか反応しなかった。その為、男には使うことができない。ということらしいが、それでは春樹がISを動かせる証明には全くなならない。

では何が要因なんだろうか、まさか、春樹には女性の遺伝子が混ざってるとでもいうのだろうか？

「まさか、俺には女性の遺伝子が混ざってる……なんて事は？」

「当たらずとも遠からず、つてとこかな。私も春樹の遺伝子を詳しく調べてみないと分からないけど、きっと春樹の遺伝子には特別な何かがあると踏んでいるんだ」

「特別な……何か、ですか？」

「うんそう、特別な何か。今からそれを調べるから、春樹はこの部屋でゆっくりしてていいからね」

そう言って束は春樹の髪の毛をもう一本引き抜いた。今度は上手くいったらしく、満足げな顔をしていた。それから小難しい今まで見たこともないような機械をいじりだす束。春樹は正直全く分からないので、ただじっと待っていた。

（そういえば、ラウラはどうしてるんだろう、なんか営倉から出てきたけど……大丈夫なのか、本当に？）

春樹はそう思って、久し振りの携帯電話をいじる。とりあえずはニュース等で現在の外の情報を手に入れたかった。

インターネットでニュースの記事を見て周る春樹。そして、ふと彼は「篠ノ之束」というキーワードでインターネット検索をかけた。すると、彼女が行方不明という記事があった。この記事が投稿された時刻はつい最近であり、ごく十分前であった。

彼女は保護施設を抜け出して、そしてそのまま連絡も取れずに行方不明になったらしい。

春樹はこの記事を見て、目の前の彼女を凝視した。この記事の当の本人がここにいるのだ。もしかして、この俺のことを調べる為だけに、大事になることを覚悟して来たのだろうか？　しかしそれならボディーガードみたいな感じのをつけてここまで来ればいいのに、何故一人でこっそり来たのだろうか、という疑問にぶつかってしま

う。

恐らく、人に見られていては駄目なのだろう。極秘に動きたかった、そういうことになる。では、こんなドイツ軍基地の中でこんな事をしていいのだろうか、と思ったが、もしかしたら、この訪問でさえ非公式なのだろうとそう思った。

（そうだ、一夏にメールでも送るかな）

そう思ったときだった、束が解析を完了したらしい。仕方が無いので後でメールをすることにした。

「早いですね。流石は天才束」

「やめなされ、照れるじゃないか」

「そんな事より結果を」

「そうだね、春樹のDNAには――」

その時だった、ドイツ軍基地が大きく揺れた。しかも縦揺れであったから、立つ事さえ難しかった。案の定、束も春樹も転んでしま

う。

いったいなんなのか、地震なのか、と心配になる春樹。

しかしさっきの揺れは地震のものではないことを感じていた。

そして、外が大変な事になっている事も感じていた。

ラウラ・ボーデヴィツヒはどうしていいか、わからなくなっていた。

春樹が何処へ行ったのか、いなくなった通路を探していたところにいきなりの爆発音、そして突然の縦揺れ……。

これは間違いない、敵の襲撃だ。ラウラはそう思った。

（誰だ、ドイツ軍基地をを襲撃する馬鹿は！）

彼女はそう思い、IS 配備特殊部隊の下へと駆ける。

『緊急事態発生、何者かがこのドイツ軍基地を襲撃、各自配属された隊へ集合せよ』

というコールがかかる。

ラウラは走った。

様々な人が廊下で交差する。

男、女、誰もがパニックに陥っていた。軍人たるもの、こんなことでパニックになってどうする、とラウラは思っていた。それはドイツ軍の軍人のほとんどがたるんでいた事を示していた。

（くそっ、なんだこれは。こういった事態を速やかに対処する。それがドイツ軍ではないのか！？　こんなとき、春樹ならどうしたのだろうか……）

ラウラはこんなときでも彼のことを想っていた。

初めて自分に馴れ馴れしく話しかけてきた奴、でもあいつと居て楽しい。

友達。

ラウラは初めての感覚だった。自分にISのアドバイスをしてくれたり、一緒に食事を取ってくれたり、笑い話を聞かせてくれたり。そんな彼なら、この事態どうしたのだろうか。ISを動かせると

いう彼なら……。

そんな感情がめぐる中、皆が集まることになっているブリーフィングルームに到着し、『シュヴァルツェア・ハーゼ』の隊員と合流した。

「ラウラか、これで全員だな」

IS 配備特殊部隊隊長、エルネステイーネ・アルノルト大佐がそこに居た。そして他の皆もここに居る。

「では、現状を説明する。現在、謎のIS二機がこのドイツ軍基地を襲撃、今もこのドイツ軍基地を徘徊している模様。ただちに我がシュヴァルツェア・ハーゼはISを装備し、その目標を無力化する。質問は？」

ドイツ軍基地が襲撃された。しかも謎のISに。

しかもこの基地内を動いていると言う事は大型の質量兵器は使用できない。ならどうするか。ISが配備されているこの部隊だけが頼りということになる。

小型で機動力と火力を持った目標を無力化する一番効率の良い方法はISを使用する他になかった。

「はい、隊長」

「なんだ、ラウラ」

「その目標のISの武装などは分かっているのですか？」

「残念ながらそれは分からない。なので目標と接触した場合、戦闘を行いながら情報を収集するしかない」

「……了解いたしました」

「他に質問は？」

他の隊員は黙ったままだ。質問はもう無いのだろう。

「ならば各自ISを装備しろ。最小単位は二機^{エレメント}だ。そしてラウラ、貴様は私と組むように」

「隊長とですか？」

「不満か？」

「い、いえ……」

ラウラは正直驚いていた。自分が隊長と組む事になるとは思いもしなかったが、よくよく考えてみればラウラは一ヶ月前にあのような失態をしてしまったのだ。もし何かがあったときの為にフォローできる人物を配属することにしたようだ。

本当はラウラと共に行動する人物は葵春樹が一番良いと思っていたエルネスティーネだが、彼は今営倉にいる。だからせめて自分がラウラと組んで春樹を回収しようという魂胆だった。

隊員たちは次々とブリーフィングルームを出て行き、ISを格納しているハンガーへと走る。

「ラウラ、お前と私はまず春樹を回収するぞ」

「え……あの……そのことなのですが……実はさっき春樹がとある女性に連れて行かれるのを目撃したのです……」

「何？」

エルネスティーネは春樹が営倉から出たということは聞いていなかった。春樹が営倉から解放されるのは五日後のはずだったが、何故そんなことが起こっているのかわからなかった。そしてその女性とはいったい誰なのだろうか。

「嘘……のはずがないよな。お前は無駄な事はしないし、ここで嘘を言う理由もない」

「……嘘ではありません。あれは間違いなく春樹でした」

「……なら一応営倉の方に行ってみるか。ではラウラ、私達もハンガーへ急ぐぞ」

「了解！」

ラウラとエルネスティーネはブリーフィングルームを出てハンガーへ向かった。

彼女らはハンガーへと走る。目標の敵と対峙しないように願いながら、先ほどのブリーフィングルームから100メートル先のハンガーへと。

ハンガーからは先に出て行った隊員たちが出て行く。エルネスティーネに挨拶してさらに加速する隊員たち。

「私達も急ぐぞ」

「了解」

エルネスティーネのその声にラウラは更に走るスピードを上げた。ハンガーへとついたラウラとエルネスティーネは整備されている『シュヴァルツェア・ゲーベル』を起動させる。

無論、これを装備するのはラウラだけであり、エルネスティーネには専用機がある。

彼女の専用機の名は『シュヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）』
様々な武装を装備した万能機である。

対ISアーマー用特殊徹甲弾を発射する『大口徑レールカノン』
をはじめ、相手を攻撃したり拘束したりする事ができる『ワイヤー
ブレード』に近接戦闘用の『プラズマ手刀』がある。

ラウラは『シュヴァルツェア・ゲーベル』の最終調整を終え、出
撃可能となった。

「よし、準備が出来たようだな。ではまずは営倉の方へ向かう」
「了解！」

ラウラとエルネスティーネは春樹が居るであろう営倉の方へ向か
った。

襲撃した当人である二人は目標を探す為にドイツ軍基地を探索していた。

その二人が装着しているISは二つとも黒く、顔まで隠されている。両手には剣が握られており、そこからはビームも発射できるようになっていた。

「おい、アベンジャー1」

「なんだ、アベンジャー2」

アベンジャーと名乗るその二人。恐らくコールサインだろう。

その二人の声は、変な感じがした。これも恐らく声から人物が特定できないようにする為だろう。

誰だか分かってはならない、と言う事は暗部の組織に関係するものである。顔や声等々絶対にこういった行動をするときには知られてはいけない。普段の生活に支障が出るからだ。

「本当にここに篠ノ之と例の男が居るのかよ」

アベンジャー1が問う。そしてそれにアベンジャー2が答えた。

「ああ、間違いないよ。情報収集専門の奴らからの情報だ。篠ノ之束とそのISを動かせる男がそこにいる、とね」

「ふーん、じゃあ信じていいんだあ。篠ノ之束と……織斑一夏がここに居る事」

「信じていいと思うんだけどね、でも織斑一夏が牢にぶち込まれてるっていうから行ってみたけど、もうそこは誰も居なかったしね……情報収集する奴を疑うよ全く」

「でも、もしかして篠ノ之束がそいつを既に牢から連れ出していたとしたら……」

「それなら、見つけ出して二人とも殺すまでだよ」

「そうだよな。アハハハハ！」

アベンジャー1が高笑いしてISを加速させてドイツ軍基地の廊下を凄いスピードで駆けていく、アベンジャー2もそれに続いて後ろについていった。

春樹は束と共に隠し部屋の中で身を隠していた。

「束さん、これって……」

「……………」

「束さん？」

正直束は焦っていた。もしかしたらこれは自分を狙う奴らの襲撃なのかもしれないと。

やはり何だかんだ言って篠ノ之束はISを開発した歴史に名が残るであろう人物であり、ISのコアの製造方法を知っているのは彼女だけなのである。

そして、命を狙われる可能性も無きにしも非ずなのである。

「春樹……私の側に……いてくれる？」

「え？」

「お願い……。私の側にいて」

「は、はい……」

春樹は突然の束の要求に戸惑った。そんな事をわざわざ言わずとも側にいるつもりであったが、本人から直々にそう言われるとなんだか変な気持ちになってしまう。

しかし、束の顔は不安と恐怖でいっぱいであった。

このとき、春樹は唯一つ、このときに決めた事があった。

篠ノ之束を守り通す、何があっても、何が来ようとも、彼女を守る。他の事なんて関係ない。今は束を守ることだけを考えることにした。

外からは何やらISが飛び交う音がかすかに聞こえてくる。IS部隊が動いたのか、もしくはこのあたりを敵がISに乗って徘徊しているのだろう。

こうなったならば敵の襲撃があったのは間違いないだろう。束が怯える理由もこれで良く分かった春樹であった。

しかし、春樹はこれ以上何をすれば良いのかも分からなかった。とりあえず束とここに身を隠して、外の騒ぎが収まるのを待つしかないだろうと、そういう判断を下したのだ。

「束さん、安心して。俺がここに居るから」

「うん、ありがとう春樹」

すると束が春樹に身を寄せてきた。ドキッとする春樹であったが、束の怯えた顔を見るとそんな感情など起きるはずもなかった。

そんな束を見てつい抱きしめてしまう春樹。

「大丈夫、どんな事が起ころうとも……俺は……」

「春樹……」

束は春樹の胸に顔をうずくめる。この数ヶ月、軍で鍛え上げられたその胸筋はとても逞しく、そして春樹がとても強く感じられ、束は凄く安心できた。

しかし、その安心は長く続く事はなかった。

いきなりの爆音と爆風に身を縮める二人、そして入り口の方には……。

「みいつけたあ……!」

漆黒の鎧に二つの剣、ISを身に着けた人が一人居た。

「こちらアベンジャー1よりアベンジャー2へ、目標の二人を発見、位置を確認次第こっちに向かってくれ」

『アベンジャー2了解』

そしてそのアベンジャー1と名乗ったその顔まであるISを身につけた人はこちらへISの機械音を鳴らしながらゆっくりと近づいてくる。

「さあてえ、お前ら二人とも殺す……ああん？ はあ？ 誰だよコ

イツ、織斑一夏じゃねえじゃん」

篠ノ之束と葵春樹の二人は「織斑一夏」に反応した。彼がこの謎のISを装備した奴らに何か関係があるのだろうか？ 何故彼を殺

そうとする？　と考えたが、目の前のこの状況をどうするかが問題である。

「まあいいや、そこのお前がなんで篠ノ之束というか知らないけど、一緒に死んでもらうわあ、アハハハハ！」

そう言っただけ黒いISがこっちに突っ込んでくる、もう駄目だ、ここで死ぬ、そう確信した二人だった。

（終わりだな……ごめん、束さん、一夏、千冬姉ちゃん、ラウラ……）

が、しかし目の前の黒いISは気がつけば横に吹き飛び、目の前には束と春樹の二人が良く知るIS……その名も『暮桜』

彼女が『雪片』を握って立っていた。

「大丈夫か、束、春樹」

あまりにも突然な事で言葉を出せない二人、ただ頭を縦に振りその質問を肯定する。

「てめえ……確か織斑千冬だったな、こうなったら仕方が無い。お前も殺す！」

「ふん、やれるものならやってみろ」

狭いこの研究室で二つのISが動き出す。

千冬は素早い踏み込みで相手を切ろうとするが、黒いISは軽々それをかわす。もう一度切り込み、更にもう一回切り込む。

しかし、相手はこの連続の切り込みをかわし続け、今度はこっちの番だとも言うように二つの剣を降る。

その剣筋は千冬にも引けを取らないものであった。鋭く、正確な一閃。千冬はその攻撃には防御の姿勢を取って身を守ることしかできなかった。

「どうしたあ？　お前はあのブリュンヒルデだろオ？　こんなもんかよ、アハハハハ！」

黒いISに乗っている奴は余裕な感じを出して喋っている。まるで織斑千冬をからかうかのような動きで攻撃、本気はまだまだ出してないぞ、とも言いたげな感じで斬ってくる。

相手は顔を隠しているので表情までは千冬にまで伝わらないが、それでも喋り方であきらかに千冬を馬鹿にしていることがわかった。

「くっ……春樹、東、私がコイツの相手をする。お前らは逃げろ」

「でも千冬姉ちゃん——」

「逃げろと言っている！ これは命令だ、教官としてのな……」

春樹はその言葉で立ち上がり、研究室から春樹と東は出ようと出口へ走る。

「お前エら待ちやがれ！」

謎の黒いISは逃げる二人に向けて、剣の先についている銃口を向けたが、風を切るような音がしたと思った瞬間、その剣は真つ二つになっていた。

逃亡を阻止する為の攻撃を防がれた為、春樹と東の二人はここから逃げ出すことに成功した。

「てめエ……」

「ふん……余所見をしている場合か？ お前の相手はこの私だ！」

千冬は『零落白夜』を起動させていた。『雪片』にはエネルギーの刃になっており、そのおかげでその剣の鋭さは何十倍にも増していた。

しかしこの攻撃には弱点がある。

この『零落白夜』はISを動かすための稼動エネルギーを使用する。その使用量は十秒で一般的なISの稼動エネルギー量の五分の一を持っていく。

つまり、ゲームのように必殺技を乱発する事はできないのである。

千冬は素早く『零落白夜』を解除してここぞというときの為に稼動エネルギーを温存する。

「アハハハハ！ やっぱりその『零落白夜』は弱点が多すぎる欠陥品の単一能力仕様てかア？」
ワンオフ・アビリティ

「言ってるカスがっ……私はこれで世界一になった」

「それは世界の代表選手がそれこそカス揃いだっただって事だろ？」

「なら、何故お前はそれだけの力を持って代表選手にならない？」

「こんな事する奴が教えるんでも？」

「思っていないさ、期待はしてない」

二人はまた動き出して斬りあう、黒いISは先ほど二つの剣の内一本は先ほどの『零落白夜』の一閃で駄目になってしまった為に一本での戦闘になった。

二人が激しく切りあいが続くが、千冬はじりじりと押されていた。世界一に輝いた織斑千冬が謎の黒いISに、しかも剣術で押されているということは誰かが見ていれば驚愕の事実だろう。だが、この戦闘を見ている者など誰一人と居なかった。

（春樹、束……生き残れよ。私もコイツを倒してすぐに追いつく）

千冬はそう思って『零落白夜』を起動させて黒いISに斬りかかった。

ラウラ・ボーデヴィツヒとエルネスティーネ・アルノルトは営倉の中にいた。

営倉の中にいるはずの葵春樹を回収する為だ。

しかしそこには春樹は居なかった。なにやらISが暴れまわった痕跡が残されており、ラウラとエルネスティーネは最悪の事態も想像していた。

「隊長……これは……」

「もしかしたら、ラウラが見たその春樹は間違いなく本人だった……ということがほぼ確定したことになるな」

「はい。では春樹は何処へ行ったのでしょうか？」

「………なら、ラウラが言っていたその廊下のところまで行ってみるか。何か分かるかもしれない」

「了解」

ラウラとエルネスティーネは営倉から廊下へと移動して春樹が消えた廊下へと向かった。

二人のISは凄いスピードを出しながら狭い廊下を右へ左へと曲がっていく。やはりこの旋回性能とこの加速力、最高速度など、機動性能だけでもやはり現状の兵器の中でもトップクラスの实力を持つ。やはり、このISという兵器は世の中の兵器の常識を全て覆したものである事が改めて感じられる。

そして量子化による様々な装備の複数所持が可能。これが反則と言わずなんと言おうだろう。

それを使って現在このドイツ軍が襲撃を受けている。しかもたった二機のISに。

ISを倒せるのはISだけ、と言われているが……あながち間違

いではない。機動力と火力、そして距離を選ばない装備を持つことが出来るISが万能に機能するからだ。

ラウラとエルネスティーネは自分が今操っているISと襲撃者が操っているISに差はない。まったく同じものである。

ISというものはやはり危険でしつかりと管理しなければ最悪、世界征服などという漫画だけにしかないような事も不可能ではないと思ってしまう二人。

「目標の位置まで後100メートル」

「了解」

エルネスティーネはISにより表示されたドイツ軍基地のマップを確認してラウラに伝える。ここから一直線で残り100メートル。二人はさらにISを加速させてそこまで突っ切る。残り20メートルといったところでブレーキをかける二人。

止まると同時に右に曲がり、身を隠す。ここから左に曲がり真っ直ぐ進めば目標の位置である。

「ラウラ、準備はいいか？」

「大丈夫です。行けます」

「じゃあ行くぞ。カウント……5、4、3、2、1……」

武器を構えて二人は左に曲がる。すると見覚えのない部屋があった、しかもドアらしきものがない。見てみるとドアが吹き飛ばされていた。

その部屋にはもう誰もいない。

「こんな部屋があったなんて……隊長はご存知でありましたか？」

「いいえ、私もこんな部屋を見たことがない。なんでこんな部屋が……」

「隠れて何かを調べる為……でしょうか？」

ラウラのその発言にエルネスティーネは寒気を感じた。思い当たる節がいくつかある。まずはISを動かした春樹の事と、ラウラたちのことなどだろう。

「……とりあえず中を調べるよ」

「了解」

ラウラはエルネスティーネの少し変な間を気にしたが、今はこの場所を調べる事が最優先だ。

二人は誰もいない部屋の中へと入る。そこはなにやら戦闘したような後がある。そして敵の武器らしい壊れたものが落ちていた。

これはISの武器なのかと手に取ってみると、確かにそれはISの武器だった。剣の先が綺麗に切れており、真っ二つになっていた。あまりにも綺麗に折れていた為、これは何かしらのISの武器によって切断されたと予想する二人。

と、いうことはこの場所で戦闘が行われていたと言う事だ。なら戦闘を行った人は何処へ行ったのか……。

そして、恐らくここにいたであろう春樹は何処へ行ったのか……。

「隊長……」

「そうだなラウラ少尉、春樹は今、敵から逃げている可能性が高い」

「どうします？ 探しますか？」

「そうだな、もし敵から逃げているなら、早く見つけ出して保護しない」

「なら……」

「ああ。ではこれより葵春樹を保護する為に行動する」

「了解しました」

二人は隠し部屋から出て行き、春樹を探す為にISのハイパーセンサーの反応を頼りに春樹を探す事にした。

春樹と束は廊下を走り続けていた。

春樹はいままで体を鍛えてきたし、元々体力には自信があったので特に問題はないのだが、束はあまり運動は得意ではないのか息が切れている。

しかしここで足を止めて休んでいる暇はない。少しでも遠くまで逃げる事が最優先である。一步でも遠くへ奴から逃げる。

しかしこれは相手が何人いるのかということを考えていない危険な行為であったが、春樹はこれに気がついていなかった。

（早く……もつとだ。奴から少しでも遠くへ逃げないと……）

息一つも切らさず走る春樹であったが、息をゼエゼエ切らせている束は春樹に要求した。

「待って、春樹……もう私……はあはあ……体力が……」

春樹は後ろを向いてみると束が息を切らせて汗をかいていた。ヤバイと思った春樹は近くの部屋を見つけてそこに身を隠すことにした。

束の手を引き、近くの部屋の中に入る春樹と束。ドアをロックして座り込む二人。

「ごめんなさい束さん……あなたの事をちゃんと考えていなかった」

「いや……いいよ。こちらこそごめんね、こんな事に巻き込んで……」

「え？」

「だってアイツ言ってたでしょ、篠ノ之束を殺すって」

春樹はその束の発言を聞いて黙り込んでしまう。

そうだ、束は今命を狙われている。

何故かはわからないけど一夏も命を狙われている。

今アイツは家で一人だ。でもドイツの人が一応監視をしているから何とかなっていると思うが、しかし今回のドイツ軍の襲撃……。たった数人の監視の中、先ほどの千冬並みの強さを持った奴が来たら、一夏はどうなるのだろうか。

一夏が無事な事を祈る春樹、そしてさっき分かれた千冬はどうなったのか、非常に気になる。千冬は無事なのか気になってしまい落ち着けない。

「春樹……。大丈夫だよ、ちーちゃんならアイツをきつと倒してくれる。きつとね」

「そんな保障が何処にあるっていうんですか!？」

つい春樹は束に向かって叫んでしまった。明らかにあの戦いは千冬がじいじりと押されていたのだ。あのまま戦えば千冬は負ける。そしたらどうなる？

答えは「死」だ。

あれだけの事をしでかす奴だ、戦った相手を殺さないわけがない。そこから自分のISの情報が漏洩する可能性があるからだ。だから自分と戦った相手を殺さないわけではないはずである。

そして春樹は、怒鳴ってしまった事を反省していた。こんな時に……命を狙われている当の本人に向かって怒鳴り散らすなど最低だ。
「あ……………。ごめんなさい、怒鳴ってしまった……………」

「ううん、こっちこそごめんね、根拠のない事言っちゃって……………」
少しの間が生まれる。そして二人は静かに笑い出した。

「束さんとこんな風に話すことってなかったですよね」

「ふふ、そうだねー。春樹は正直あんまり好きじゃなかったんだ。私達とちーちゃん達の間にいきなり割り込んできたよそ者だったからね、あの頃は」

「そうですね。そこは否定できません」

「でも、私は…………今なら春樹の事認めれるかも」

「そうですか？」

二人がリラックスしきっていたところに、春樹と束の前にうつす

らと大きな影が生まれた。

二人は驚いて後ろを振り向くと、先ほどとはまた形がちがう黒いISがあった。

「見つけた。こちらアベンジャー2、目標を発見」

『アベンジャー1了解』

春樹は驚愕した、そして束も……。

今かすかに「アベンジャー1」とそう聞こえた。

なら、織斑千冬はどうしたのだろう。さっきまでその「アベンジャー1」という奴と戦っていたはずだ。

しかし、今はもう大丈夫だ、と言わんばかりの余裕の返事。もしかしたら、織斑千冬はやられてしまったのかもしれない。

そんな思考が頭をめぐる中、銃口をこちらに向けて放とうとしている黒いIS。

「じゃあね、さようなら……」

アベンジャー2は銃口を二人の方へ向けてビームを放つ、春樹は束を抱き寄せてそれを間一髪でかわす。

「へえ、中々やるねアンタ。篠ノ之束を庇いながらそれがいつまで続くかな？」

もう一回ビームを放った。それを春樹は束を抱き寄せながらそれをかわす。

（この余裕、アイツ遊んでやがる……）

春樹はその射撃が本気ではない事を悟った。明らかに銃口を向けてから発射するまでの間が長いのである。それは避ける時間を作ってあげているみたいであった。

「さて、遊びはこれ位にして……そろそろ本気で殺しに行きますか……」

その黒いISは顔まで隠れていて表情は分からない。けども、笑っている表情が安易に想像できた。楽しそうに二人に近づいてくる。そして……剣を振りかざして……二人は横に真っ二つに……なるはずだった。

目の前にはもう一つの黒い機体がそこにあった。しかしこれは味方なのだとすぐ分かった。何故なら自分達を庇って攻撃を防いでくれていたからであり、そしてその顔は見慣れた人物であったからである。

「危なかったね、春樹、それと……もしかして……篠ノ之束さん？」
そこにいたのはエルネスティーネ・アルノルトである。彼女の『シュヴァルツェア・レーゲン』の『プラズマ手刀』で相手の剣を受け止めていた。

そしてエルネスティーネの質問に「はい」と答える束。

（また他人に助けられたのか……束さんを守るとか言っておきながら……俺は……）

春樹は自分の誓いも守れないような自身に腹が立っていた。

ISを操縦できる自分だが、その肝心なISが近くにない。もしISがあつたとしてもともに使用したことがないから、束を守れるかどうか分からない。

役立たずな自分だな、と春樹は絶望した。

エルネスティーネは相手の攻撃を受け止めながら、

「まさか、篠ノ之束がここに来ていたとはね。ラウラ！」

「は！」

「春樹と篠ノ之束様を保護している。コイツは私がくい止める」

「了解！」

ラウラは『シュヴァツェア・ゲーベル』に乗っており、春樹と束に近づいた。

「大丈夫か春樹、それに篠ノ之束さんも」

「ああ、ラウラ」

「はい、大丈夫です。春樹が守ってくれましたから」

二人はラウラの後ろへ行き、ラウラのISに身を隠す。

そしてエルネスティーネはアベンジャー2と戦っている。しかし、この狭い空間で戦うには『シュヴァルツェア・レーゲン』は不利すぎる。もっと広い空間でないと武器を有効活用できないからだ。こ

こで使用出来る物といえば『プラズマ手刀』ぐらいである。『ワイヤブレード』などこんな狭い場所で使用することなど不可能であるが、相手は違う。メイン武器が剣であり、小回りが利く短刀である。そのことからこういった狭い場所では非常に有利である。

相手もこういった場所での戦闘になるからこういった装備にしているのだろう。やはり場所によって装備を換えるのも重要である。

エルネスティーネとラウラ。その相手に黒いIS、コールサイン「アベンジャー2」

この三人がこの狭い部屋で戦っている。

ラウラは『キャノン砲』を使った砲台的な役割、そしてエルネスティーネは『プラズマ手刀』を使った近接戦闘で戦っている。

「ふふふ、あなたの装備じゃ、こんな狭い場所では不利だろうに」

「でも、二対一のこの状況ではそんな事を言ってる場合か？」

「何を言ってるの？ 私達は二人なんだよ？」

その瞬間だった。もう一機の黒いISがエルネスティーネのISを切り裂く。

「アハハハハ！ 何油断してるんだよコイツは。軍人だろ？ ISの部隊の隊長なんだろ？ アハハハハ！」

そこで高笑いしていたのは「アベンジャー1」だった。

エルネスティーネは吹き飛び、壁に衝突。あまりの衝撃に口から血を吐き出し、そしてISが解除されていた。

ラウラは言葉を失っていた。たった一撃、たった一撃で『シュヴァルツエア・レーゲン』のシールドエネルギーを0にしたのだ。

ありえなかった。いったいどんな装備なんだ、とそう思ったラウラはエルネスティーネの方を見る。

口から血を吐き出し、さらに体の方も血まみれ、そして何より見た目では分からないが骨の方までその衝撃は伝わっており、折れているらしい。

「隊長！」

ラウラは驚きのあまり隊長の方へ駆け寄る。ショックのあまり涙

を流し、妙にかん高い声になっていた。

「あらら、そのちっこいの。守るべき対象を間違えてるんじゃないのかな？」

アベンジャー1は馬鹿にしたようにラウラに話しかける。

ラウラはしまった、と思った。

軍人らしからぬ今の行動。ラウラは自分の今の失態に心を痛める。そして、アベンジャー1は春樹と束に襲い掛かった。

そのときである。またアベンジャー1は横に吹き飛んだ。まるで先ほどの隠し部屋のときのように。

「おやおや、また同じようにやられたな。お前には学習能力というものはないのか」

そこに立っていたのは織斑千冬だった。『雪片』を握りながら敵の二人に語りかけた。

「お前ら、私の大切な人に手を出すとはな……。覚悟は……。できているか？」

「て、てめえ……。見失ったと思ったらこんな所にまた出てきやがって。殺す。ぜってエに殺してやる」

アベンジャー1は立ち上がるなり興奮状態でそう言った。

「殺すか……。さて、お前に私を殺せるか？ 今の私は機嫌が悪い」

「アハハハハ！ 言ってる逃げた雑魚がっ」

アベンジャー1とアベンジャー2が並ぶ。そしてそれに立ち向かうとしているのは織斑千冬ただ一人。

この三人が戦いを始めた。アベンジャーの二人は春樹と束を殺す為。織斑千冬はその二人を守る為に。

そして春樹と束、ラウラはエルネスティーネの近くに駆け寄った。「ラウラ……。ハアハア……。私、もう駄目かも」

壁に頭を強く打ち付けたエルネスティーネは非常に危ない状態になっていた。

しかしISには『絶対防御』というものがあり、操縦者の身は守られるシステムがあるはずなのに、エルネスティーネは今瀕死状態

にあった。

束はこの状態がいったい何なのか理解できなかった。自分が開発したインフィニット・ストラトスを超えるそれをあいつらは造ったのだろうか、『絶対防御』なんてものが無力と化すそれを。

「ラウラ……私のこの『シュヴァツツェア・レーゲン』を使ってくれないか？ 私はもうそんなに長くはない。だから、次期隊長はお前にするよ。異論は認めない。私が認めたIS乗りだからな」

「ですが……！」

「ああ、大丈夫。シールドエネルギーは予備のエネルギーパックで補給されてあるから。問題なく今使えるよ」

「いえ、そんなことではなく……」

段々と声が弱くなっていくエルネスティネ。ラウラの口元に人差し指を持って行き、喋るな、と目で伝えた。

そして足についている『シュヴァルツェア・レーゲン』の待機状態である黒いレッグバンドを取り外し、ラウラに授けた。

「後は、よろしく頼むよ。……もう休んでいいかな？ 結構この状態を保つのは辛いんだよ」

ラウラは唇を噛み締め、そして顔を上げて敬礼をした。

「エルネスティネ・アルノルト大佐……お世話になりました……！」

「うん、ラウラ。春樹と仲良くね。せっかくの同い年のお友達なんだから」

エルネスティネはそう言って……静かに目を閉じた。

「[隊長!」

春樹とラウラは揃ってそう叫んだ。しかしエルネスティネから反応がない。このことが何を示しているのか……。春樹とラウラ、そしてそこにいた篠ノ之束も十二分に理解していた。

篠ノ之束はショックを受けた。ISで人が死ぬ。このことを目の前で体験してしまったのだ。束にとってISはいうなれば自分の子供のようなもの。それによって人が死んだ。このことが何よりシヨ

ツクだった。

そして、そのISを使いこのような事をしでかす奴らを許せなかった。今千冬が戦っている。黒いISの奴らが。

しかし今の自分には奴らと戦えるだけの力がなかった。今頼れるのは、織斑千冬とラウラ・ボーデヴィツヒという眼帯の子だけである。

「ラウラ、その量産機、俺に使わせてくれ」

「何？」

「ラウラはその隊長からのISを使うんだろ？　なら、今使っているISを俺に使わせてくれ。頼む！」

「しかし、春樹。お前はISをマトモに動かした事がないのだろうか？」

「……そうだ、否定しない。でも、俺は束さんを守ると決めた。どんなことがあるうとも、絶対に。だから、お前がそれでも駄目というのなら、俺は無理やりにもお前のその量産機を使わせてもらう」
ラウラは目を閉じて、「ふ……」と笑った。

「仕方が無いな。なら『シュヴァルツェア・ハーゼ』の隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒが春樹に『シュヴァルツェア・ゲーベル』の使用許可を出す」

「ありがとうございます。ラウラ……隊長殿！」

ラウラはISから降りて、隊長から授かったレッグバンドを身に着けた。そしてISを起動させた。

新しいユーザー登録など、正式に使えるように再設定し直すラウラ。そして春樹も『シュヴァルツェア・ゲーベル』の設定をする。

千冬もその光景をチラッと見て、微笑んだ。ついにこの二人の本気が来ると思ったからだ。

設定はものの三〇秒程度で終わる。そして、そこに立っていたのは『シュヴァルツェア・レーゲン』を身に纏ったラウラと『シュヴァルツェア・ゲーベル』を身に纏った春樹だった。

しかし春樹はISスーツを着ていない為、操縦性は悪くなってし

まうが、そんなこともお構いなしに春樹はISを扱う。

「いくぞ、春樹！」

「ああ、ラウラ隊長！」

ラウラと春樹は千冬の横に並んだ。これで三対二、数ではこちらが有利になったが、問題はそのISの強さにある。相手は専用機のシールドエネルギーを一撃で0に出来るほどのふざけた攻撃力を持っている。

奴らの攻撃の前にはシールドエネルギーの量など関係ない。一撃でも攻撃が当たればそれこそひとたまりもない。先ほどのエルネスティーネ大佐のように死を迎えることになる。

「お前エ……お前もISを動かす事が出来るのかよオ！」

「どういうことだ？」

春樹はアベンジャー1の言葉を理解できなかった。お前「も」と奴は言った。なら奴が言った言葉と組み合わせてみる。

確か奴らは篠ノ之束と織斑一夏を殺す任務を任されているらしい。なら、その「お前も」というのは一夏もISを動かせる、ということになるのではないのか？ そう考えた春樹。

「なら、本当にお前を殺さないといけなくなったな」

春樹の質問を無視し、アベンジャー2は春樹を殺すと言った。

春樹は素早く束の近くに行き、束を守る状態になる。

「束さん、待ってて。こいつらを撃退するから」

春樹はそう言って二人に『ナイフ』を持って立ち向かった。

敵の攻撃を縫うようにかわし、攻撃を入れる春樹。かわされはするものの、春樹は物凄く相手を押していた。

（なんだよ、これ……相手の動きが見える。どうすればいいのかわかるし、自然と体も動く……）

春樹は自分の動きに驚いていた。ISのおかげなのか分からないが、体は自由自在に動くし、何をすれば、どういったアクションを起こせばいいのか即座に分かる。そして体は思ったとおりに動いてくれる。

イメージできる。何をすればいいのか、どう動けばいいのか。
頭の中の雑念が消える。

頭の中がクリアになる。

相手の動きが良く見える。

「なんだ、コイツはア!？」

「コイツも、我らと同じ?」

アベンジャーの二人はよくわからないことを話していたが、春樹はそんなことも気にせず『ナイフ』で奴らを刺そうする。

そして『キャノン砲』で奴らを砲撃する。

着実に相手のシールドエネルギーを削っていく。

そんな戦闘に千冬とラウラは眺めているだけだった。

何故彼女らは春樹の助けに入らないのか、それはあまりにもレベルが高すぎて自分が入ったところで足手まといなる可能性が高いからだ。

それは千冬でさえそう思ったのだ。自分の武器は『雪片』という剣が一本のみ、これで近接戦闘に割り込んだところでこのあまりの戦闘スピードには追いつく自信はなかった。

だから、束の保護をする事にしたのだ。

(春樹……お前はいい……なんなんだ?)

千冬はそう思った。

そしてラウラはワイヤーブレードにより相手を拘束するそのワンチャンスを狙っていた。

左右からの剣をかわし、『キャノン砲』をアベンジャー1に打ち込む春樹。

「なんだ、何なんだよオ! その強さはア!」

春樹は黙ったまま、アベンジャー1は吼える。

アベンジャー2による後ろからの射撃もかわし、『キャノン砲』を発射する。

アベンジャー1は剣を春樹に向かって振り下ろしたが、キックによりその剣を弾き飛ばされる。そして……。

「今だ！ 春樹！」

ラウラは叫び『ワイヤーブレード』を発射、アベンジャー2の両手両足を拘束。そこに『キャノン砲』を撃ち込んで撃ち込んで撃ちこみまくる春樹。

一気にシールドエネルギーを削られ、後方に吹き飛ぶアベンジャー12、そして、千冬による『零落白夜』で止めを刺されるアベンジャー12であった。シールドエネルギーは間違いなく0になった。

「最大出力の零落白夜だ。下手をしたら命も危険に晒される危険な攻撃だが、お前らを無力化するにはこうするしかなかったと思うな」

アベンジャー12は動かない。

そしてアベンジャー1はこれは非常にまずい状態になった、と感じた。いや、これは間違いなく非常にまずい状態なのである。だって、三対一という状態は弾幕を張られてしまえばたちまち蜂の巣になってしまうからだ。

「ちい……こちらアベンジャー1、作戦続行不可能。これより帰還する」

そう言つてアベンジャー1はとても大きなハンマーを持って床を叩き割った。そこには大きな空洞がある。

失敗したときのために逃走経路を準備していたのだろう。こうなつては追いかけるのは無謀な事なのである。

「やったのか？」

ラウラはそう呟く。

「ああ、目標は一体を拘束、もう一体は逃走させてしまった」

そして束は、春樹の事をずっと見つめていた。

（春樹……やっぱり君は——）

束はそう思ったが、あまりの疲労感に襲われその場に倒れてしまった。

「っ！？ 束さん！！」

春樹は驚いてISから飛び降りて束の下へ駆け寄ったが、ISか

ら降りた瞬間、春樹もとてつもない疲労感に襲われてしまう。これだけの緊張感を持った逃走と戦闘。これだけの事があればそうなってしまうのも仕方が無いだろう。

この二人は二回も敵に見つかり死にかけたのだ。そのたびに誰かかしらに助けてもらっていた。この二人は凄く運が良かったのだ。下手をしていたら死んでいた。

その現実を直面する春樹。

そして……春樹はその場に倒れてしまった。ラウラや千冬に何か話しかけられたような気がするが、それが春樹に届く事はなかった。

終章『覚悟と決意 — To The Future —』

葵春樹は目を覚めます。そこはドイツ軍の医務室である。

「起きたか、春樹」

そこにいたのは織斑千冬とラウラ・ボーデヴィツヒであった。そして隣のベッドには篠ノ之束が寝ていた。そして他のいくつかのベッドにも見慣れたI S部隊のメンバーが寝ていた。

「俺は……結局どうなったんですか？」

千冬が春樹の質問に答えた。

「今回の襲撃でドイツ軍基地が半壊、シュヴァルツェア・ハーゼの隊員も二人死んだ。しかし、守るべき対象は守りきったんだ。そこは誇って良いと思うぞ」

「そうですね、この任務で散っていった仲間達には笑顔で感謝したいといけませんね……」

「そうだな」

春樹はここで泣いて悔やんでもしょうがないと思い、前向きに考える事にした春樹。

今回のこの襲撃は誰のせいでもない。しいて言うなら襲撃してきたあいつ等のせいだ。

「そういえば、奴らの内一人は捕まえる事ができたんですね？ 何か分かりましたか？」

「……それがな。自爆した」

「え？」

「奴の体とI Sものとも爆発して跡形もなく吹き飛んだんだ」

「情報漏洩を防ぐ為、ですかね？」

「おそらくな。暗部組織かなんかだろう。手がかりも、奴らの目的も分からないままになってしまった」

アベンジャーと名乗った二人……奴らの目的はなんだったのか。篠ノ之束や織斑一夏、そして葵春樹を殺してなんになるのだろうか。

春樹は考えた結果、もしかしたら俺がISを動かせることに関係があるのだろうと考えた。そして奴らの話からすれば一夏もISを動かせるのかもしれないかった。

すると束も目を覚ました。

彼女は目をこすってあくびをしながら身体を伸ばす。

「んっ、……あ、ちーちゃん、春樹……」

「束か、起きたんだな」

「うん。なんか……ごめんね。特に春樹には沢山助けてもらっちゃった。ありがとうね、春樹」

「え、あ……はい。大丈夫ですよ」

素直に感謝されるとなんだか恥かしくなってしまうた春樹、そして自分は束のために何をしたんだろうか、と思った。

「ラウラ……」

「なんだ？ 春樹」

「いや、これからお前は隊を引っ張っていく事になるだろうけど……大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「千冬姉ちゃん、ラウラのやつこんなこと言ってますけど」

「ま、お前が一人前になるまで私が扱いてやるからな、訓練が再会したら覚悟しておけよ？」

千冬は少し鼻で笑いながら言った。

「は。了解いたしました、教官」

春樹は相変わらずのラウラを見て笑う。つい先ほどみんなの隊長だったエルネステイーネ・アルノルトは死んだ。そして次期隊長がラウラになり専用機を受け取ったのだ、『シュヴァルツェア・レーゲン』を。

隊長を任せられるとは生半可な気持ちでは務まらない。だが、ラウラなら隊員を引っ張っていくと言う責任を背負っても大丈夫だろう。

専用機を持つ。これは力の使い方を間違えた者に与えた場合はい

ろんな人を悲しませる。現段階で最強とうたわれる兵器なのだ。一歩間違えれば、世界を滅ぼしかねないほどの性能を持っている。

「ところでちーちゃん」

「なんだ、束」

「これから春樹と二人きりで話したいんだ。ちょっと二人で出て行ってもいいかな？」

「二人でか？ そうだな、今IS部隊のブリーフィングルームが空いている。あそこは何の被害にもあってないからそこに行け」

「ありがと、ちーちゃん」

束は笑顔で千冬にお礼を言って、そして春樹の手をつかんだ。

「さ、行こうか春樹」

「あ、はい」

引っ張られるように医務室から出て行く二人。そしてそこに残ったラウラと千冬は顔を合わせるなり、ラウラから千冬に話しかけた。

「教官、一つ聞きたいことが」

「何だ？」

「教官は……何故あれほど強いのですか？」

ラウラは襲撃してきたあの黒いISと対峙したときの千冬の戦闘が頭から離れなかった。

あの時はエルネスティーネの方に集中していたのだが、しっかりと千冬の戦いも目に焼き尽くしていた。

大佐ですら一瞬でやられてしまったのに、千冬は奴らと対等に戦っていたし、あの時は二対一であったのだ。しかも束や春樹、そしてラウラを守りながらの戦闘だった。

ラウラは『ワイヤーブレード』を一回使用するだけで精一杯だったのだ。あのときの春樹、そして千冬の戦闘は頭から離れる事はなかった。

「そうだな、私には弟がいる」

「春樹ですか？」

「いや、確かに彼も大切だがな。私の実の弟だよ」

「確か、織斑一夏……でしたよね？」

「そうだな、私は実の弟が凄く大事だ。色々あってな、最初は一夏と二人で暮らしていた。春樹が私達と一緒に暮らすようになったのは一夏が小学生になったときの事だったな。春樹には悪いが、私にとって一夏はたった一人の血の繋がった家族なんだ。だから、一夏を守る為、そして強くするために私は強くなった」

千冬が語っている姿は微笑んでいて、とても優しく感じた。ラウラには千冬のこのような表情は見たことがなかった。

いままで千冬を尊敬してふれあってきたが、このような表情になった事はなかった。はじめて見る千冬に戸惑いを感じるラウラ。

（教官、何故そんな顔をするのです？ 何故？）

「あの、教官……。これから……よろしくお願いします」

「期待している、みっちり扱いてやるからな」

そのときの千冬はいつも通りの千冬の表情になっていた。

ラウラはこのときに何か分からないモヤモヤを感じていた。

春樹と束はIS部隊用のブリーフィングルームへ来ていた。

「じゃあ、春樹。お話の続き……しようか」

「はい」

束は椅子に座る。

「春樹の遺伝子にはね、普通の人にはない特別な因子があるんだよ

――」

春樹の身体についての事を詳しく聞かされた。はっきり言って信じられないようなことではあった。何故なら……春樹がISに乗ると、コアが強く反応し、そして、春樹のその因子も強い反応を示していた。お互いに反応し合うように。恐らくこれがISに乗れる理由なのではないか、と。

しかも、そのとき普通では考えられないような出力をISは出していたらしい。

「それで私は考えたんだ。これが本当のＩＳのコアの力なのではないか、ってね」

春樹は立ったまま、手を握り締め、束の話を黙って聞いていた。
（これが本当なら……一夏もＩＳを使うことが出来るのか？ あいつらが言っていた事と合わせると、恐らくそうだ……）

そして束は話を続けた。

「で、春樹に頼みたいことがあるんだ」

「頼みたいこと……ですか？」

「そう、私のところに来ない？」

春樹は少し考え、

「……どういう事です？」

束は目を瞑り、一呼吸置いて再び目を開いた。そしてゆっくりと口を開け、

「今回のこのドイツ軍基地への襲撃は私がターゲットだった。で、天才束さんはこんな事を考えた。表舞台には出ない暗部組織が何かを策略している。そして今回の私と一夏、そして追加で春樹を殺すのが奴らの目的の一部分。その大きな目的は分からないけど、殺そうとするという事は奴らの目的の障害となるものである事は間違いない。だから――」

束は立ち上がって、

「この暗部組織の計画が世界的に危険な事ならば、それを止めたい。私が生み出したＩＳで悪い事をするなら、絶対に許さない」

束は春樹の両肩を掴む。

「……春樹、だから私にその力を貸して欲しい。本当は年上のお姉さんが年下で、まだ中学生の春樹に助けを求めるのはみっともないという事は分かってる。でも、私はあいつらのような奴らは許せないんだ。お願い……春樹……お願い……」

束は俯きながら必死に春樹に助けを求めている。

そんな束に対して春樹は微笑みながら、束の手を握って言った。

「束さん、俺……こんな俺でも誰かを助けられるなら喜んでお受けし

ます。束さんを守ることが、皆を守ることにつながるなら……俺は束さんを命をかけて守ります」

このとき束は感じた。春樹の目は戦士の目になっていた。戦うものの目……それはあらゆる覚悟と目標を掲げ、その目標の為に血眼で頑張る。そのような目をしていただ。

束はそんな春樹に対して特別な感情を抱いてしまった。このときの春樹が誰よりも頼もしく、逞しく、そしてカッコよく見えた。

（……私、まだ中学生の春樹に……？　嘘、ありえない……でも……）

束は心臓をチクリと針で刺されたような刺激を否定しながら、でもあのとき守ってくれた春樹を思い出してしまい、ますます自分の感情が分からなくなってしまう。

「束さん……どうしたんですか？」

「え、いや……なんでもない……あ、ありがとう。春樹」

束は笑顔で春樹に礼を言った。

春樹は初めて束のこんな笑顔を見たので、少し驚きながらもその可愛らしい笑顔に見とれてしまった春樹。そんな自分が非常に恥かしく思えてきて顔が熱くなった。

二人は非常に物理的に近い所にいた。もう目と鼻の先である。

彼、彼女の顔が目の前にある。二人はそう思ったら急に恥かしくなってしまう、どっちと言うことなく同時に身体を離れた。

「あはははは……」

「えへへへ……」

二人は苦笑いしながら気持ちを落ち着かせていた。そして……。

「なら、今すぐにでも私と一緒に来て、春樹には悪いけど、このドイツ軍基地とはお別れになってしまおうけど……」

「……………大丈夫ですよ、俺はもう束さんを守って決めましたから」

しかし春樹は心残りがあった。ラウラの事である。

彼女とは友達になれたのに、一ヶ月もしない内にISを動かして、

それが理由で営倉に入れられて……そして謎のＩＳによる襲撃。本当にあんまり一緒にいられなかった。

彼女にとっては同じ年で初めての友達だったという。だから春樹は心残りがあった。もっとラウラと遊べたらなって思っていた。

だけど、もう彼女は一人じゃない。エルネスティーネに、皆に認められた『シュヴァルツェア・ハーゼ』の隊長である。春樹が兄のように、または父親のように過保護になってどうする？ それはただ気持ち悪いだけだ。だから……「これでいい」と春樹は思ったのだ。

「じゃあ、行きましょう。さよならは言いません。だけど……」

春樹は携帯を取り出してメールを打った。贈る相手はラウラである。

「今、ラウラに『またね』って贈りました。もう心残りはありません。じゃあ、行きましょう束さん」

「……うん。行こうか」

そして春樹と束はドイツ軍基地を後にした。誰にも何も言わずに、ただ、春樹がラウラに対して『またね』と打っただけである。

そして春樹と束の二人は仲間集めに徹した。束の新たな組織を立ち上げる為に。

これが暗部で話になっている『束派』と呼ばれる集団である。

葵春樹はそこでＩＳの操縦を磨くことになる。仲間と共に。

以上が葵春樹の物語であり、そして、ここから新たな物語がもう一つ始まる。

そう、『織斑一夏の物語』が。

終章『覚悟と決意 —To | The | Future—』(後書き)

以上、エピソード3でした。

なんだかんだで、書き直しは行いませんでした。

少しか修正と加筆をしたぐらいで、物語の中身は再投稿前とほとんど変わっておりません。

まあ、再投稿してみて思ったのは……、せっかくのオリジナルストーリーが文章能力の低さで駄目になってしまっている、といった感想。

なんかね、しっくり来ないんですね。情景をイメージしにくいというか、なんというか。

修正前では、この台詞は誰が言っているのだろうか？ って自分の書いたのを改めて見て思ってしまった部分もありましたから、自分でこれはマズイと思いましたよ。

もし、そんな部分があれば教えてくだされば幸いです。すぐに修正いたしますので……。

では引き続き、エピソード4をお楽しみください。

序章『平和な日々　― Discharge ー』

七月一日、土曜日。今日の授業は休みである。

今一夏と春樹と箒の三人は鳳鈴音の退院するお手伝いをしている。
今まで色々と溜め込んだ衣類等を四人で協力して片付けていた。

主に箒と鈴音が衣類。一夏と春樹が荷物運搬といったところだ。
彼女達がまとめた荷物を男二人が運ぶ。

外には山田先生が車でスタンバイしており、鈴音の荷物を学園の寮まで運んでくれるそうだ。一夏と春樹はそこまで運ぶのが仕事になっている。

「色々と今までありがとね」

「何、気にする事はない。鈴は親友だからな。当然の事だ」

「じゃあ箒、今度リハビリも兼ねて私と模擬戦ね！」

「ああ、分かった」

鈴音はみんなに感謝していた。今まで何度も何度もお見舞いに来てくれた三人には本当に感謝していた。定期的に暇を見つけてはお見舞いに来てくれる。そんな三人には色々と話聞いていた。転校生のシャルルとラウラの事や先日起こった事件の事。

そして箒が専用機を持つことになった事。このことは鈴音にとって聞き捨てならないことであった。親友が専用機を持ったことによってそれはライバルと化す。何故なら、専用機を持つということはそれだけ実力が認められたということ。いい加減な気持ちで専用機を扱うのはご法度である。だからこそ箒は鈴音にとって競い合う相手となった。

「よし、これで全部片付いたみたいね。三人ともありがとう」

「おう、じゃあ看護師の人たちに挨拶するとしますか！」

一夏はそう言って、鈴音がお世話になった看護師の人たちの下へと向かい、そして三人でご挨拶をした。いままでありがとうございましたとご挨拶をして、それから山田先生の車へと向かう。せっか

くだから学園まで車で送ってくれるそうだ。

病院の階段を下りながら、春樹はシャルルやラウラの事について話した。

「学園に着いたらまずはシャルルとラウラに挨拶だな」

「そうね、皆から話は聞いてたけどまだ会ってないし。会うのが楽しみだわ。でも、まさかISを動かせる男がもう一人居たとはねえ……」

その言葉にビクツと身体を強張らせてしまう一夏。

シャルル・デュノアは父親の命令で男のフリをしてIS学園に通っている。何故かというと、一夏や春樹のデータを收拾したく、それをしやすくする為に男のフリをしているのである。

しかし、ある日一夏は偶然にもシャルルの裸を見てしまい、そしてそのせいでシャルルが女である事がバレてしまった。

しかし一夏の優しさもあり、シャルル、もといシャルロット・デュノアはこのIS学園で平穩に過ごすことができる。しかし、一夏以外の人物にその真実を知らせるわけにはいかない。学園中の噂になってしまえばシャルルの人生もそこでアウトになってしまう。この秘密だけはなんとしてでも隠し通さなければならぬ一夏である。

「どうしたんだ一夏？」

春樹は急に身体を強張らせた一夏にその疑問を問いかけた。

「な、なんでもねえよ。早く行くぞ、山田先生も待ってるだろうしな」

そう言っ一人で先に行ってしまった一夏。

「……なんなのよ、どうしちゃったわけ？ 一夏の奴……箒知ってる？」

「いや……知らないな、どうしたんだろうか……？」

箒は知らないのは当たり前である。一夏以外はシャルルが女だという事実は知っているはずはないはずだ。

「春樹、アンタは何か知ってる？」

「残念ながら知らないな」

春樹は淡々と答えた。

その答え方に違和感を感じた鈴音だったが、どうせ問いただしてみても適当にあしらわれてしまうだろうしあまり気にしない事にした鈴音。

とりあえず山田先生が外で待っているそうなのでその場に残った三人は先に行った一夏を追いかける。

一階まで下りた三人はそのまま病院の入り口へ向かうとそこには山田先生と一夏が待っていてくれた。

春樹、箒、鈴音の三人は山田先生の下へと駆け寄り、挨拶をした後山田先生の車の方へと歩き、そして車の方へ乗り込んだ。そして皆で山田先生によりしくお願いしますと挨拶をすると、山田先生は「はい」と返事をしてそのまま車を発進させた。

IS学園に着くまで鈴音は山田先生に色々と詳しく聞いておきたいことがあった。

授業の進み具合や、転校生の事。

そして、今まで起こった事件の事である。

「ちょっといいですか、山田先生」

「なんですか、^{フレン}鳳さん？」

「IS学園で起こった事件……詳しく聞かせてくれますか？」

「……鳳さんに話せる事は限られていますけど――」

山田先生は今まで起こった事件を話した。

まずは鈴音も巻き込まれた謎のIS事件。あの事件に鈴音は直接関わっているのだが、謎のISの攻撃を受け、そのまま大怪我を負って病院へ運ばれた為、その後のことは全くわからない。一夏たちに聞いてみたのだが、話していいのか危ういラインだということで直接先生に聞くことにした鈴音。

そして今がそのときである。山田先生の話によると、あのISは無人機である今までは全く違った概念で作られている、ということだけであり、それ以上のことは分からなかったらしい。

何のためにIS学園に送り込んだのか、攻撃をしてきた理由、そ

もそも無人機というものはISの性質上ありえないことである。ISコアは人間と同調して初めて起動する。それを人を介することなく動かすことなどありえなかった。

「無人機……？ そんなことがあるはずが……」

「ですが事実です。これ以上の話は出来ませんが、どうか理解してください鳳さん」

「……分かりました……」

鈴音は納得は出来ていないが、話せないことなら仕方が無いと思ってこれ以上聞くのを諦めた。

すると一夏は暗い雰囲気なこの空気を打開するべく、話の方向性をシフトする話をふった。

「山田先生。鈴にシャルルとラウラの事、先生から見てどんな人か教えてあげてくれませんか？」

「デュノアさんとボーデヴィツヒさんですか……そうですね、デュノアさんは本当にいい子だと思いますよ。とても紳士的で、優しく、落ち着きがあって。優等生気質な子ですね。そしてボーデヴィツヒさんは、最近なんか変わりましたよね。最初は誰も近づくなかって感じがしてましたけど……なんか自分をするべきことが見つかったのでしょうかね？ 彼女はとても努力家ですよ」

「へー、会うのが楽しみだわ」

鈴音はちよつと楽しそうな表情をしながら言った。

そして車はIS学園の近くまでやってきた。

第一章『友達? — Shopping —』

1

学園に着いた四人は荷物を部屋へ運び終わると早速シャルルとラウラに会いに行くことになった。事前に会うことを約束していたのだ。二人は食堂で待っていてくれるはずである。

一夏は先攻して食堂へと向かった。

一夏と春樹、鈴音と箒は食堂へと着くとそこにはシャルルとラウラが既に待っていてくれていた。シャルルはこっちこっちと手招きをしてくれた。

「遅いよ皆、待ちくたびれちゃった」

シャルルはため息をついて、一夏の方に目をやった。それを見た一夏は「悪いな」と両手を合わせてシャルルに謝ると、皆食堂の椅子に座ってテーブルを囲んだ。

そして一夏が話を始めた。

「まあ、あれだな。シャルルとラウラにはもう伝えてるけど、コイツが鳳鈴音だ。仲良くしてくれ」
ファン・リンイン

「鳳鈴音よ。よろしくね、デュノアさんに、ボーデヴィツヒさん！」

「うん。よろしくね、鳳さん」

「よろしく頼むな。鳳鈴音」

同じ年の子が自分に対してわざわざ丁寧な言葉で接してくるとなんだか気持ち悪さを感じる彼女。すぐさま鈴音はそのことについて話す。

「そんなに畏^{かし}まらなくていいって。鈴音でいいわよ。あ、一夏や春樹、箒が言ってるみたいに鈴でもいいわよ。とりあえず、敬語はやめてくれれば……。だから、二人とも名前で呼びたいんだけど……いいかな？」

「うん、別に構わないよ」

「私も構わん」

シャルルとラウラは鈴音の性格は一夏達に聞いた通りだった。とても人懐こくて、しかも明るくて、誰とでも仲良くできる。そんな子だ。

「そういえば、もう少しで臨海学校ね、楽しみだなあ海」

その言葉にシャルルはドキッとしてしまった。同じく一夏もその鈴音の発言にはドキッとしてしまった。何故なら、シャルルは実は女であるし、そのことは一夏とシャルルの二人だけの秘密である。もしこれが皆にばれてしまえば……今度行く臨海学校は専用機持ちの新しいパーツをテストする貴重な場であるが、その一日目は海で自由に遊んで良いことになっている。

シャルルは男の設定なので、いろんな女の子から一緒に泳ごうと誘いを受けるだろう。しかし、ただ単に断り続けても不振に思われるだろうし、無理やり連れて行かれれば女だという事がばれてしまう。かと言ってシャルルが肌を晒すわけにはいかない。

シャルルは特製のコルセットで胸を押しつぶして、胸のふくらみを隠している。コルセットなど皆に見せるわけにもいかない。なら、どうすればいい？

一夏とシャルルは二人揃ってそう考えていた。

「どうしたんだ、二人とも」

ラウラは二人の不振な態度に疑問を持ったので聞いてみた。

「え、な、なんでもねえよ」

「う、うん。なんでもないよ。臨海学校のことすっかり忘れていただけ。あはは」

あながち嘘ではないのが上手い。確かにシャルルは臨海学校という行事を忘れていた。覚えていたなら事前に対策は練っているはずである。臨海学校に行くまであと五日、それまでに何かいい考えを思いつかなければならない。

「うーん、病院から一夏は様子が変わなよねえ……あのときはこの二人の話題になったときに動揺していたみたいだし、今回はシャルル

と一緒に動揺しているし……。あんた達、何か隠し事でもあるんじゃないの？」

流石鳳鈴音、鋭い。

核心を突かれてしまい更に動揺しそうになる二人を春樹がフオロ―に入る。

「その辺にしておけ鈴。二人が困ってるじゃないか、あんまり隠し事を詮索するもんじゃないぞ？」

「うむ、春樹の言う通りだ。鈴、その辺にしておこうではないか、誰でも話したくない事や知られたくない秘密ぐらいあるだろう」

「わかったわよ、ごめんね二人とも」

春樹と箒に怒られてしまった鈴音は素直に謝った。

その後も何分か話は続いたが、鈴音の荷物のまとめもあるので一回お開きになった。箒とラウラは鈴音についていきお手伝い。そして男である一夏と春樹とシャルルは適当にやっている、という事だった。

シャルルと一夏は自分の部屋へと戻るととりあえず五日後に迫る臨海学校の対策を考えなければならぬ。

「どうしよう一夏！ 僕このままじゃ……」

「まあ、落ち着け。考えるんだ。要するに女性の身体の特徴的な部分を皆に分からないようにすれば良いんだろ」

「うーん、僕のこの胸は特製のコルセットで隠してるからね、そのコルセットが見えないようにできればいいんだけど……」

「なんか、服の様な水着ってないのかね？」

「調べてみようよ」

一夏は部屋に備え付けてあるパソコンの電源を入れ、検索サイトを早速開き、男性用の水着をチェック。自分が買うものも考えつつ、シャルルの身体を隠せる且つ似合いそうなものを探していく。

色々と検索ワードを考えながら色んなサイトへと飛び回り、そして一つの回答を見つけたのだ。

その名も「トップス水着」

上半身に着る水着であるが、シャルルのこの状況にはこれ以上ないぐらいの適した水着であった。この水着は日焼けも軽減したり水から上がった後の冷え感も抑えてくれる。これならシャルルのコルセットを隠しながら水着になる事ができる。

しかもこれまたオシャレなものもあるので着ていても何の違和感もないはずだ。

「これなら何とかなるんじゃないか？」

「そうだね、でもここら辺に売ってるのかなあ？」

「明日にでもショッピングモールの方へ行ってみるか？」

「え……一夏と一緒に？」

「ああ、明日日曜日だし。俺も水着買つときたいからな」

「じゃあ、明日ね……」

「おう。……そろそろ夕食の時間だな。食堂にでも行くか」

「うん！」

シャルルはとても嬉しそうに返事をした。いつも男のフリをしているシャルルだが、シャルルも女の子である。気になる男の子と一緒に出かけともなれば、テンションが上がってしまうのも仕方が無いだろう。なんだかんだでまだ一五歳の女子高生なのだから。

一方、春樹はラウラと一緒に夕食を取ろうとしていた。二人は手に夕食を持ちながら空いてる席を探していた。

「とりあえずラウラ、鈴の手伝いお疲れな」

「ああ、鈴は……アイツは明るい奴だな」

「そうだろ？ アイツは小学校から明るくて元気な奴だったからな」
「そうなのか。なら楽しい日々を小学生のときに送っていたのだからな……」

ラウラは少し寂しそうな顔をしていた。彼女は生まれが特殊で戦う為だけに生まれる事になった遺伝子強化素体である。彼女は友達というものを知らないまま生きてきたのだ、春樹と知り合う前までは……。

春樹は自分の小学生の頃、ラウラがどんな生活を送っていたのか、はつきり言って想像できない。だが、この今のラウラの表情を見るなりあまりいい思い出がなかったのは確かであった。

では、どうすればいい？ 答えは簡単だ。これから友達……春樹や一夏、箒にセシリアに鈴にシャルルと共に良い思い出を残せばいい。このIS学園の三年間、この貴重な学校という時間を思う存分に楽しんで、思い出を作っていけば良い。

「ラウラ……とりあえず座ろうか、あそこ空いてるみたいだな」

「ああ、そうだな……」

二人は空いているテーブル席にお互いに向かい合う形で腰掛けて、そして春樹が、

「もう少しで臨海学校だけど、ラウラは水着とか持ってるのか？」

「水着だと……？ 学校指定のものしかないが……」

「そうなのか、もしあれだったら明日一緒に買いに行かないか？」

「一緒に……」

「ああ、町の方に出て買い物行こうか」

「あ、ああ。そうだな、行こう！」

ラウラは物凄く嬉しそうな表情をしながら春樹の事を見つめた。それに春樹もラウラのその表情につい微笑んでしまう。すると近くからとある女性の声が聞こえてきた。

「あ、あの……今の話——」

その声の主はセシリア・オルコットであった。どうやら今話を聞いていたらしい。セシリアは一緒の席で食事してもいいかと聞き、了解を取った後に春樹の隣に座る。

「で、なんだっけ、セシリア」

春樹は話の事を聞くと、

「あ……。先ほどボーデヴィツヒさんと水着を買いに行くと言っていましたよね？　もしよかったら私もわたくしも一緒にさせて頂いてもよろしくて？」

セシリアは若干上ずった感じな声でそう言った。とても恥かしそうな感じで春樹に聞いてくる。春樹は特に問題はないし、もしかしたらこういう事に疎いラウラにアドバイスをしてくれるかもしれないと思う、一緒に行ってもいいかな？　と思った。もとより断る理由もないのだが……。

「大丈夫だよ」

「本当ですよ！？」

「ああ、じゃあ明日な。明日の十時に出発だ。いいか、二人とも」

「ええ、分かりました」

セシリアは本当に嬉しそうに春樹を見つめて笑ってくれたが、ラウラはぶっきらぼうに「分かった」と答えただけだった。拗ねている様に見えた。だが、春樹の事は見つめていた。

しかし春樹はそんな事も気付かずに食事に戻ると、そこに現れたのは一夏とシャルルの二人だった。

ラウラは二人が来たのに気付き、二人を見るとラウラはなんだか

嬉しそうな表情をしているシャルルに気がついた。

「なんか嬉しそうだが、なにかあったのかデュノア？」

「え！？ あ……なんでもないよ！」

「そうか……」

あからさまに焦りを見せたシャルルにラウラは不振に思いながら彼を見続けた。一夏は春樹の隣に座り、シャルルは一夏の前に座った。

すると一夏はシャルルに向かって、コソコソと小さな声で話しかけた。

「おいシャルル、何か女の子ぽくなってたぞ、気をつけろ」

「うん、ごめん……」

シャルルも小さなかすれた声で一夏に謝った。その光景をすぐ近くで見ていた春樹は「どうしたんだ」と問うと、「なんでもない」とたぶらかされてしまった。

しかし春樹の表情はとても何かを知っているような感じで一夏の方を見ていた。

（な、なんだよ春樹……まさか、シャルルの秘密を知ってるんじゃないか……）

一夏は春樹の方を見るが、何事もなかったかのように夕食を口に運んでいたので一夏は春樹の事をしばらく気にかけてながら自分も食事を始めた。

「そういえばセシリア、お前なんか凄く嬉しそうだけど何かあったのか？」

「え？ あ、それはですね——」

そうセシリアが言いかけたとき、また皆がよく知る二人が現れた。篠ノ之箒と鳳鈴音である。

「なんだ、皆一緒に食事を取っていたのか」

「なによ皆……言ってくればいいのに……」

鈴音は不機嫌そうに言葉を吐いて、そしてまた二人も夕食を持ってテーブルを囲むように座る。箒は一夏の隣に、そして鈴音はシャ

ルルの隣に座った。

「ま、皆でこうやってご飯食べれるなら、いっか」

鈴音はやはりとても優しい子だ。鈴音は今箒から相談を受けている。もちろん一夏についてである。以前は春樹に頼っていたが、やっぱり箒が転校してしまっただ後に入れ替わるかのようになったが、その時から鈴音は一夏の事はよく知っているのだ。

一応、彼女も中学校二年生で転校してしまい一夏と春樹とは離れ離れにはなってしまったが、小学校から中学校まで長く付き合っていた仲だ、大抵の事はお互いに結構分かってしまう。

しかも鈴音は女の子だから、そこからの視点の方が箒にとっても良い事だろう。やっぱり男からだけの言葉より、女性からの言葉も聞いたほうが断然良い。春樹もこのことには賛成してくれた。鈴音なら心配は要らないと、自分なんかより役に立ってくれると言ってくれた。

しかし、鈴音には好きな人はいないのだろうか、そう思う箒。

自分には色々と協力してくれる鈴音だし、自分の親友だ。彼女とお見舞いを繰り返しているうちに自然と仲良くなっていったが、一方的に相談に乗ってくれるだけで、彼女からの恋沙汰の話はしたことがなかった。

鈴音も年頃の女の子だ。恋の一つや二つあってもおかしくはない。今はシャルルの隣に座っている。確かに彼は紳士的でとても良い人であるが、鈴音は実際の所箒には知る由もない。見たところ、シャルルに対しては特別な感情を抱いてはいないと思われるのだが……。

特に変なアクションも起こさず、楽しそうに皆と話して食事を取っている。彼女は恋愛より友情をとる人なのだろうか、箒の脳内にはそんな思考が流れる。

「ん、どうしたの箒？」

鈴音は夕食に手もつけず、何か考え事をしているような顔をしている箒に声をかけたが、箒は「なんでもなし」と答えて食事を取り

始める筈。

「なにかあったら私が相談に乗ってあげるからね」

「うん。ありがとう鈴」

男二人に女五人。この七人はその後も笑いが絶えない夕食が続いた。

その光景は正に青春という言葉がピッタリで、高校を卒業して大学やら就職した人がもしこの光景を見たなら、もう一度高校生活に戻りたいな、と思うような……そんな微笑ましい光景だった。

次の日の七月二日、日曜日。シャルルと一夏はショッピングモールへと来ていた。

IS学園は外出する際も制服の着用が義務付けられているので、二人ともIS学園の制服である。

シャルルはちよっぴり緊張気味。それもそのはず、実のところシャルルは女の子だからだ。「シャルル・デュノア」という名は偽名であり、本名は「シャルロット・デュノア」である。

彼女はとある家庭の事情があり、男としてIS学園に編入してきた。その事情とは織斑一夏と葵春樹のデータを取ってくる事であり、接近しやすくする為に男に扮していたのだが、偶然シャルルの裸を見てしまい、一夏には女性である事がばれてしまっている。だから、彼と二人だけのときは女の子らしいところをちよっとは見せている。しかし、仕草などはしっかりと仕込まれているのか男そのものだが、一夏にばれてからはどことなく女の子らしいところがチラホラと見えてしまっている。その度に一夏に注意されているシャルル。

今日、シャルルは一夏と一緒に買い物に来ているわけだが、誰が見ているのかもわからないので、とりあえず「男の子」であるシャルルでいなくてはならない。

しかし、男の子とデートなんて事を経験した事がないシャルルは緊張してしまって、動きがぎこちなくなってしまうている。

「シャルル、どうしたんだよ。緊張でもしてるのか？」

「え……な、なんでもないよ。さ、水着買いに行こうよ!」

シャルルは誤魔化すように先行して歩く。

ふと一夏が立ち止まり、

「シャルル、悪いけど先に行ってくれるか？ 俺、他に買ってお

きたいものがあるんだよ」

「え……うん……わかった。早く追いついてよ！」

「わかったよ」

シャルルは先に水着売り場の方へと歩いていった。一夏はシャルルが見えなくなるまでそこに立ち止まり、そして、シャルルとは逆方向へと歩き出した。

何故、一夏はこんな事をするのか。それは臨海学校二日目の七月七日は篠ノ之箒の誕生日なのだ。だから、一夏は彼女に送るプレゼントを買うためにこのショッピングモールへと来たのだ。はつきり言うと、一夏にとって水着はおまけのようなものである。

色んな店を見て回り、箒には何をプレゼントすればいいのか悩む一夏。

（うーん、どんなプレゼントがいいんだろうか……。そうだ、新しいリボンなんかどうかな……？）

一夏は箒の事を思い出し、彼女のポニーテールを思い出す。彼女はリボンで髪をまとめている。だから、新しいものをプレゼントするのでもいいかな、と思ったのだ。せっかく再会できたし、再会してから最初の誕生日なのだから。

（そういえば、あのリボン——）

かすかに覚えている小さい頃の思い出。確か、今箒が使っているリボンも……一夏がプレゼントしたものだっただと、一夏はかすかな記憶を頼りにして思い出そうとしていた。だが、記憶が曖昧だ。はつきりと思い出せない。

（あのとき……駄目だ、思い出せない。まあいいや、今は箒へのプレゼントを買うことだけを考えればいいんだ）

一夏はそう思って、そういった女性向けのものが揃っているお店を探して、中に入る。やはり女性向けだけあって可愛いものが多い。沢山ある。すると、女性店員が一夏に話しかけてきた。

「いらっしやいませ。何をお探しでしょうか？」

その女性はとても若くで十代から二十台前半だろうか、エプロン

を身に着けている。

「あ、すみません。髪を留めるリボンってありますか？」

「はい、ございますよ」

若いがとても礼儀正しい女性店員。やはり、日本人のお客に対する接待というのはとてもしっかりしているのが分かる。外国の人がこの礼儀正しさに驚き、感心しているとは……外国の店員さんはどんな接待をしているのだろうか？

一夏はリボンのカラーとデザインを良く見て箒が似合うと思うものをじっくりと考えている。

篠ノ之箒はあの専用機『紅椿』のあの赤がとても似合っていたので、やはり赤が似合うかな？ と思った。

だが、赤と言ってもその赤色のリボンだけでまた何種類かあるのだ。またそこで悩んでしまう一夏。

すると店員さんが、

「女の子へのプレゼントですか？」

「あ、はい。幼馴染への誕生日プレゼントです」

「そうなんですか、その女の子には赤が似合うのかな？」

「そう……ですね。でも、赤のリボンでも何種類かあって何が良いのか……」

すると店員さんは微笑んで、

「ではこちらなんかどうです？ 最近の流行なんですよ、こういったシンプルかつ可愛いデザインのもので」

そう言って店員さんが手に取ってのは、ちよつと細めの赤色のリボンだ。特に凝った模様が入っているわけでもなく、だけどこれを箒がつけたら……と考えると、とてもいい感じに思えた一夏はそれを買うことを決意。

「じゃあ、それ買います」

「まいどありがとうございます。では、プレゼント用の包装にしておきますね」

「はい、ありがとうございます」

一夏はそのお会計を済ませて赤いリボンが入っている紙袋を受け取った。そして、その店から出るなりシャルルが待っている水着売り場へと向かおうとすると、とある人物に出会う。その男は、一夏の見知らぬ男性。だが、その男は一夏の事を知ってるかのような目で一夏を見てくる。

少し細身で、顔はイケメンと言ってもいいんだろうか……。髪は日本人のような黒い色で、見た目からしたらとてもいい人っぽい雰囲気がある。

その男は一夏に近づいて、

「もしかして……葵春樹君かな？」

「え？」

「ああ、いや。人違いならいいんだ。そのIS学園の制服で男子って言ったら片方の手の指で数えられるしかないから……そうじゃないかな、と思ってるね」

「春樹と知り合いなんですか？」

「まあ、知り合いって言うか……ある意味同じだね」

その男は意味ありげに言った。という事は一夏の中で仮説ができる。この男は葵春樹となんらかの繋がりがあり、そして知り合いのようなものである。つまり、篠ノ之束の組織に何らかの関係があるということ。

だが、この男を仲間と決め付けるのも早い。敵の可能性も考えなくてはならない。束さんや春樹が戦っている暗部の人物という事もありえるのだから。

「そうなんですか、でも今日は春樹とは一緒じゃないんで……」

「そうなんだ。参ったな……まあいいや、ごめんね、引き止めちゃって」

「いいえ、それじゃあ……」

一夏は逃げるようにそこから立ち去り、男から距離を取る。

(なんだ、アイツ……春樹に教えないといけないな)

一夏は水着売り場へと向かった。

一夏はメンズの水着売り場へと来ると、そこには春樹がいた。一夏は先ほどの男の事を早速伝えようと思ったが、ここで話さずIS学園に戻ったときに話した方が安全だと思い、先ほどのことはここでは話さないことにした。

「お、一夏か。お前もここに來てたのか」

「ああ。春樹は一人か？」

「いいや、ラウラとセシリアとで來たんだ。今は二人仲良く水着を選んでいるだろうよ。お前こそ一人か？」

「いいや、シャルルと來たんだ」

「そうか、アイツならさっきあっちで見かけたぞ」

春樹が日々さす方向、それは昨日シャルルと二人で色々と調べた「トップス水着」のコーナーであった。

「そうか、じゃあ合流してくるよ」

「ああ、じゃあな」

一夏はトップス水着のコーナーへと歩いていった。そしてさっきと水着を買った春樹はセシリアとラウラを待つだけだ。

とりあえず状況を確認しようかな、と女性用水着売り場へと行ってみると、ラウラがセシリアに翻弄されていた。ラウラに似合あう水着は何なのかとあれこれ色んな水着を押し付けていた。

「おーい、まだなのか？」

春樹は二人に向かって言うと、セシリアは素早く春樹の方を見るなり駆け寄ってきて春樹に詰め寄る。

「春樹さん！ ラウラさんの水着はどんなのが似合うと思います？」

「って言われても……そうだラウラ、部隊の皆に聞いてみたらどうだ？」

「え……ハーゼ部隊の皆にか？」

「ああ。なんだかんだでお前は部隊長だからな、皆お前の事はしっかりと考えてくれるだろうぜ」

「……そうだな」

「おう。じゃあ、俺はあっちで一休みしてるからな」

そう言って春樹は休憩所の方を指差し、そしてそこに向かった。ラウラは携帯電話を取り出して電話をかける。

電話をかけた先はラウラが隊長を務めているIS部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』の副隊長クラリッサ・ハルフォーフ大尉の携帯電話である。

電話が繋がる。

『もしもし、どうかしましたか、隊長』

「あゝ、実はだな。今度臨海学校に行くのだが、そのときの水着を買いかたになってな……そこでどんな水着を買えばいいのか分からん。そこでハルフォーフ大尉からアドバイスを貰いたい」

『なるほど……では隊長が今所持している水着は？』

『学校指定のスクール水着一着だけだが……』

『なんですって！？』

クラリッサはつい叫んでしまい、ラウラはあまりのうるささに携帯電話を耳から遠ざける。

「な、なんだ……ハルフォーフ大尉」

『し、失礼しました。ですが、それでは一部のマニアしか受け付けません。隊長はあの葵春樹という男性を意識しているのでしょうか？』

「な、何を言う！？」

『失礼いたしました。とりあえず、隊長はこの部隊のイメージカラーである黒の水着を選んでください。黒が似合うお方というのは美しい女性である証拠。隊長にはそれだけの美しさがあります』

「う、美しい……？」

『そしてもう一つ……選ぶ水着はセパレート型女性用水着、つまりビキニにしてください。やはり無難かつ男性には効果的！』

「な、なるほど……黒のビキニだな……了解した」

『は！ 御武運を……』

そして電話を切るとそこにはセシリアはもういなかった、何処へ行ったのかと思うとセシリアは凄いスピードでラウラの前に再び現れる。彼女の手には黒いビキニが何種類か持っており、「さ、早く試着しよう」と言わんばかりの目で見てくる。

「わ、分かった……試着してみるか……」

ラウラはそう言って、セシリアと共に試着室へと向かう。

一夏とシャルル、春樹の三人は皆水着を買い終わり、後はセシリアとラウラに合流するだけだった。

せっかくだから一緒にI S学園の戻ろうということになり、今はその二人を探しているところだ。

女性用水着のコーナーへ三人が行ってみると、そこには見慣れた女性が二人。一人は黒髪にすらっとした体格をしており、とても美しい女性。そしてもう一人は少し身長は低く幼さが残る体格だが、胸だけは豊満である。

実のところその人物は織斑千冬と山田真耶である。先生方も臨海学校のときに着る水着を買いに来たのだろう。

「あれ、織斑君に葵君にデュノア君！」

山田先生はいち早く三人に気付き、声をかけてくれた。三人は先生の方へと近づき、

「三人も水着を買いに来たんですか？」

「ええ、でもオルコットさんとボーデヴィツヒさんも一緒に来たので、そろそろ買い終わったかなと思ってこっちに来た次第です」

山田先生の問いにシャルルが答えた。すると、千冬が一夏と春樹に向かって、

「一夏、春樹、お前らはどっちの水着がいいと思う？」

彼女が提示してきた水着はどちらもビキニではあるが、色が違う。黒と白、どちらの方が良いのか……。二人は間髪いれずに答えた。

「「黒だな」」

あまりの即答にも動揺することなく千冬も「そうか」と言ってその水着を持ってさっさとレジの方へと持っていった。

すると、セシリアとラウラがこっちにやって来た。

「一夏さんとデュノアさんも来てたんですの」

「ああ、まあ。今先生たちと会ったところだ」
すると会計を済ました千冬が戻ってきた。

「オルコットとボーデヴィツヒか。そうだ、皆お昼はまだ食べてないか？」

「まだですけど」

春樹が答え、

「俺らもまだだな」

一夏が答える。

すると千冬は微笑んで、

「なら、一緒に食べに行かないか？ 私が奢ってやる」

「良いんですか？」

シャルルはそう言うと、千冬は。

「ま、せっかくだからな……山田先生もいいでしょう？」

「はい、もちろん。皆さん一緒に食べましょう」

すると皆は顔を見合わせて、「はい」と一斉に答えた。

一夏はこのときすっかり忘れそうになっていた先ほどの謎の男についての事だ。せっかく近くに居るのに話す事を拒んでしまう。なんかここで話すのは危険な気がするからだ。とりあえず、IS学園に戻ったら春樹に話そうと一夏は思った。

そして、千冬と山田先生。一夏と春樹とセシリアとラウラとデュノアの七人は先生についていき、おいしいお昼ご飯を頂いた。

第二章『青か赤の海　― Romance 』

1

七月六日、ここは臨海学校。目の前には青い海に白い砂浜。そして、一日目は自由行動、つまり……海で泳ぐもよし、ビーチバレーをするもよし、日光浴をするのもよし、部屋で涼んでいるのもよし。だけど、ほぼ全ての女子は水着を持ってきているらしく、皆海を堪能する気満々である。

ということで一夏は更衣室にて水着に着替えていた。ここにはシャルルもいる。シャルルは女の子だが、男の子の設定でこのIS学園にいたので、しょうがなくここで着替えている。一夏はシャルルが女の子だという事は知っているのでシャルルに気を使ってロツカ―越しに着替えているし、誰かが来てもいいようにシャルルには外からは見えない位置で着替えてもらっている。

シャルルは膨らんでいる胸を特製のコルセットで締め付けて隠している。そして、着替え終わった彼女は一夏に確認を取った。

「一夏、もういいかな？　こっちはもう大丈夫だよ」

「そうか、こっちももう大丈夫だ、じゃあ行くか」

「うん」

二人は更衣室を後にして外へと出る。そこには白い砂浜と青い海が広がっており、そして周りには……女の子しかいなかった。

それもそのはず、IS 学園はISの事を教える場所、基本ISは女性にしか動かせないのだから当然である。

しかし、例外というものがある、一夏もその一人だがもう一人……葵春樹はこの場にはいなかった。周りを見渡して本当にいないかどうか一夏は確認するもやはりいない。

「あ、織斑君とデュノア君だ！」

とある女子がそう言った瞬間、周りの女子が一斉に一夏とシャル

ルの下へと走ってくる。この様子だと春樹がいなのは確かだろう。
「あのさ、春樹こっちに來てない？」

一夏は尋ねるが、周りの女子は首を横に振るだけである。一夏は
なんかあるのだろうか、とも思いながら、とりあえず今は海水浴を
楽しむ事にした。

「おりむー凄い筋肉だねえ……カッコいい」

IS学園生徒会所属、布仏本音^{のほとけほんね}。通称「のほほんさん」が一夏の
腹筋にタッチしながらそう言った。

「まあ……今まで春樹と鍛えてきたからな」

「へえー、じゃあ葵君もこんな筋肉なんだあ」

「まあ……」

一夏の筋肉はやはり凄かった。これも今まで毎日春樹とトレーニングを続けた成果であろう。

「つーか、のほほんさんってこういうの好きだよなあ」

布仏本音は着ぐるみの様な水着を身に着けている。というか、水着なのかも怪しい代物だ。黄色いそのデザインは、とあるゲーム会社の電気を発する黄色いネズミを連想させる。

「いーちーかー!!」

後ろからそう叫んできたのは鳳鈴音である。彼女はそう叫んだ後、ピョンと飛び跳ねて一夏の肩に乗っかる。

「っておい！ あぶねえからいきなり飛びつくのはやめろよ。……

はあ、お前も変わってねえな、いつもこういう事して俺と春樹を困らせるのは」

「いいじゃない、楽しければ」

鈴音はそう言って一夏の頭に抱きつく。

「俺や春樹は楽しいとは限らねえよ……」

周りの女の子達は驚いた後、「いいなあ」という視線をぶつけてくる。困った一夏を助けてくれたのはシャルルだった。

「ほら鈴音下りて。早くみんなで遊ぼうよ」

シャルルは「みんな」を強調して言うと、鈴音は反省したように。

「……そうね。ごめんね一夏」

「大丈夫だって、もう慣れてるからな」

一夏は笑いながら答えるとそれにつられるように鈴音とシャルルもクスクスと笑う。

するとそこへラセシリアとラウラも登場、セシリアは『ブルー・ティアーズ』と同じカラーである青い水着に腰にはパレオを巻いている。やはり彼女には青が似合っている。

そしてラウラは黒いビキニであり、更には髪はいつもと違ってツインテールにしてあり、小柄な彼女の可愛さを更に引き立ててくれている。

「一夏さん、もういらしていらっしやったの？ あ……春樹さんはまだいらしていませんか？」

「ああ、春樹はまだいないみたいだな」

「僕達もさっき来たばかりなんだ」

「そうなんですの……」

セシリアが残念そうにしている最中、ラウラはなんだか一安心したような仕草。彼女はこういった格好は初めてなのだろう。しかもこれを春樹に見られるとなるとなんだか恥かしいし、ここにまだいないと分かってほっとしたんだろう。

（本当に春樹の奴何してるんだろう……、一応、買い物に行ったときの男の事は話したけど……そのことで何かあったのか？）

五日前、シャルルと一緒に水着を買いに行ったあの日、一夏は謎の男に話しかけられた。その男は春樹の事を知っていたようだったし、春樹を探していた。そのことをIS学園に帰ってきたときに話す春樹は顔色を変えて何処かへと行ってしまった。恐らく束さんにも連絡しに行ったのだろうが、そのときの顔色は芳しくなかった。

言うなれば……絶望。本当にヤバイ感じの表情であったのは一夏の目に焼き付けるように残っている。

（春樹……お前は一体どんなことに首を突っ込んでいるんだ？）

すると、鈴音から一緒に泳ごうというお誘いが来た。一夏は正直考え事に浸りたかったが、わざわざこんな青い海を目の前に考え事で時間をつぶすのもなんだと思って今は楽しむ事を優先させた。

一夏は鈴音の下へと走って海へ入る。

（束さんの組織か……）

あのシャルルとラウラが編入してきた直後だったか……あの時に春樹と千冬から話された篠ノ之束の組織、その勧誘。束さんの命が狙われている……。そして今までIS学園で起こった事件。春樹はその事件に関与して謎の無人機を倒し、ラウラのISの暴走を治めた。

これが束さんの命を狙う奴らに関係があるのなら……。

（本当に、真剣に考えなくちゃいけないみたいだな）

一夏は海へと飛び込んだ。

葵春樹は篠ノ之束と一緒に皆が遊んでいる海から少し外れた場所にいた。

今回、篠ノ之束は春樹の『熾天使』^{セラフィム}、一夏の『白式』^{びやくしき}、箒の『紅椿』^{こうすん}の専属メカニックとしてここに来ている。

今回の臨海学校の宿泊研修の目的は広々としたところでのIS操縦訓練。専用機持ちは新しいパーツのテスト及び、ISのチューンアップが目的である。

篠ノ之束はISの仕様が他とは違う『白式』『熾天使』『紅椿』の新パーツとチューンアップの為に来た……というのは表の事情であり、本当の目的は、暗部組織が動き出した。という情報を少し前に手に入れた為、ここまで篠ノ之束は訪れたのだ。

その情報とは、アメリカとイスラエルが協同して作られたISが明日、テスト運転をするというもの。そして、それに合わせて暗部が動き出したというものであった。

暗部の奴らはそのISを悪用する可能性が高い事と、今までIS学園で起こった事件からして、今回もIS学園が来ているこの臨海学校がターゲットにされる可能性が非常に高いと予想、そのため篠ノ之束がここに訪れたというわけである。

「束さん、何故危険を冒してまでここに来たんですか？ 本来なら安全な場所で待機して俺に指示を送ればいいのに」

「そうもいかないんだよね、今回ばかりは。そのアメリカとイスラエルが協同して開発したっていうIS、^{シルバリオスベル}『銀の福音』はスペック的に今の『熾天使』と『白式』、『紅椿』じゃあちよつとヤバイんだよね……。たとえば因子の力を行使しても……」

「因子の力を使っても……ヤバイ……!？」

因子の力……それは、男性でもISを動かせる原因と見られているものであり、そしてその因子を持っているものがISを動かし、そして因子の力を行使したとき、ISのコアは通常より遙に強く操縦者と同調し、ISもといコアの本来の力を使うことが出来る。というのが篠ノ之束の見解であり、一つの仮説である。

「だから、こうやってこの束さんが来たってことなんだよね。だから用意してあるよ、『熾天使』のバージョンアップパーツと『白式』のバージョンアップパーツ。そして『紅椿』はリミッターを外さないだね」

『紅椿』リミッターはそのISの本来の力をIS学園に知らされないようにするためにリミッターをかけて基本スペックを落としているのだ。何故なら『紅椿』は第四世代のISなのだから。

この第三世代でさえ、実験機の域を出ないこの現在に、第四世代のIS……装備の換装無しでの全領域、全局面展開運用能力の獲得を目指した世代である。

そして何を隠そうその第四世代IS『紅椿』のパイロット篠ノ之箒は春樹と同じその『因子』持っている者である。そして『白式』のパイロットである織斑一夏も同様にその『因子』を持っている。つまり、暗部に立ち向かえる事ができる者、ということになる。だから、その二人を束の組織に呼んだのだ。

「後それからもう一つ目的が……、箒ちゃんと一夏の私の組織への勧誘は直々にやりたかったからね。やっぱりこういうときは本人がいないと駄目だと思うんだ」

「そうですか……、分かりました。とりあえず、何かあったときは俺が束さんを守りますよ。そのために俺はいるんですから」

純粹な笑顔で春樹がそう言うとき束はぎゅっと春樹の身体を抱きしめた。束は春樹の耳元で、本当に小さな声で「ありがと」とそう言うて離れる。

そして束は焦るように春樹にこう言った。

「じゃあ春にゃん、海に行こうか！」

「海って……水着は持ってきてるんですか？」

「もち！」

束は笑顔でそう言う。海の方へと走っていった。でも、束はあんまり運動が得意ではないのか走る速度は遅かった。

春樹はそんな束を見て笑うと、五日前の一夏の言葉を思い出す。

（俺の事を知っていた謎の男か……もし、束さんを狙う暗部の人間ならば早めに始末しなくちゃならない。もし仲間になれる余地があるのなら、そのときは仲間に入りたいし、全く関係のない人間ならほっとけがいい。ま、今は目の前の事だけを考えよう）

春樹はそう思うと束の事を追いかけた。

織斑一夏は鳳鈴音と一緒に泳いで遊んでいた。シャルルは海岸でビーチパラソルの下でクラスの子とお話をしながら涼んでいる。

「一夏、競争よ！」

「あ、ちよつと待て！」

一夏と鈴音は競争だ何だと無邪気に遊んでいた。が、このとき鈴音の身に危険が忍び寄る。

「!？」

なんと、鈴音の足がつってしまったのだ。足が思うように動かせない、そして今いるところは足が底につかないような海だ。

当然、溺れかけてしまう鈴音だったが、このときの一夏の対応が早かった。

一夏は鈴音の違和感を感じ取り、すぐさま溺れていると判断し、鈴音の下へと急いで泳いだ。

じゃばじゃばと必死にもがいて水上へと上がろうとしている鈴音を一夏は背負うように背中に乗せてあげた。

「い、一夏……ありがとう……」

「どうしたんだよ……鈴」

「ちよつと足がつっちゃって……あはは……」

「まったく、笑い事じゃねえだろ、溺れてたじゃねえか」

「大丈夫、ギリギリのところで一夏が助けてくれたから」

「そうかい、とりあえず沖まで行くぞ、しっかりつかまってる」

一夏は上手く鈴音が水面より上になるような形で泳いでいく、岸が近づく最中、鈴音は強く一夏の背中を強く握り締めていた。多分、物凄く怖かったのだろう。

しかし、それもそうだろう、死ぬか否かの瀬戸際だったのだから。

岸までつくとシャルルが出向いてくれた。鈴音は大丈夫だから、
とは言うものの、しばらくは安静にしてクールダウンした方が良く
と説得して、ビーチパラソルの下で休ませた。

「はい、鈴音」

シャルルは鈴音に冷たい飲み物を渡した。鈴音はありがとうと感
謝をしてそれを受け取ると一口飲んだ。

鈴音は海をぼけーっと見ていると、一夏が鈴音の下へと来てくれ
た。

「どうだ、鈴。落ち着いたか？」

「うん、まあね」

「俺も少し休憩だ」

「あ、飲み物飲む？ 一夏の分もあるよ」

「すまないな、シャルル」

一夏はシャルルから飲み物を受け取るなりゴクゴクと音を立てな
がら飲んでいく。

するとそこに織斑千冬と山田真耶が水着姿で登場。山田先生はそ
の豊満な胸で、男の子を悩殺。そして千冬はそのスタイルの良さと、
黒いビキニでこれまた男の子を悩殺できるだろう。

と言ってもここに男子は一人しか居ないのだが……。

一夏は無駄に無反応、逆にクラスの女子の方がスタイルが良いだ
の何だのって盛り上がっている。やっぱりそういう事は女の子の方
が盛り上がりやすいのだろう。男の子がそういうことで盛り上がれ
ないのは精神年齢的にやっぱり幼い部分があるからなのだろうか……
…？

「先生達も泳ぎに来たんですか？」

シャルルがそう尋ねると、

「まあな、せっかく水着も買ったんだ。少しぐらい泳がないとな」
千冬がそう答える。

そして、一夏はその千冬の黒いビキニをつけた千冬を見てしみじ
みと思った。俺と春樹の目に狂いはなかった……と。

「そうだ、先生。ビーチバレーやりませんか？」

とある女子が提案すると、みんなは大盛り上がり。クラスの皆でやりましょうやりましょうと先生達を急かしてくる。クラスの皆の勧めで千冬は山田先生と話した結果、二人ともやるという事に。

「おりむーも一緒にやろー」

布仏本音が一夏を誘う。もちろん断る理由もないし、むしろやりたい気持ちはあったので、シャルルと鈴音、セシリアとラウラも誘ってバレーボールをする事にした。

だが、ここにまだいない人物がいる、春樹と……箒だ。

(そういえば、春樹はともかく箒まで……どうしたんだろう……) 海で遊んで良い時間になってから随分と時間が経っている。

すると更衣室の方から新たに二人が現れる。一人は皆が見慣れている人物である葵春樹に、もう一人はほとんどの人が知らないであろう篠ノ之束であった。

「やっほー、ちーちゃーん！」

と、砂浜を走って千冬の下へと行こうとしたが、砂に足を取られてその場に倒れてしまう。春樹はクスッと笑って、束の下へと行き、「大丈夫？」と声をかけると、

「アイテテテ……あははは……私って本当に運動音痴だよね」

「その分、頭は誰よりも良いでしょう？」

春樹はそう言うのと、

「そうだなあ……恐らくこの世でもトップクラスの頭の持ち主だろうな」

と、千冬は束の近くまで来てそう言った。

今この海にいる人たち何人がこの運動音痴が誰なのか正しく認識できている人は何人いるだろうか？

いや、たとえ分かっても信じられないだろう。ISの生みの親で、現在行方不明とされている篠ノ之束が目の前にいるのだから。

しかも白いビキニの水着で。

そして春樹がとその篠ノ之束が一緒に来た……いろんな意味で怪し

いと思う生徒一同。ただ一人の生徒を除いて。

「何故お前がここにいる？」

千冬は質問をするが、束はその質問を無視して千冬に質問をした。

「ねえねえ、箒ちゃんは？」

「質問をしているのはこっちなのだがな……」

そう呟いて周りを見渡すが、肝心の箒がいなかった。

「織斑、箒を知らないか？」

一夏は千冬の質問に頭を横に振って否定した。

「いいえ、俺もさっきいないのかな、と思って周りを見渡していました」

「だそうだ、どうする束？」

「大丈夫、そのうち来るだろうし。たとえ来なくても急ぎの用事じゃないから」

と束は言いながら一夏の方を見てニヤニヤと笑い始めた。やはり、自分の実の妹の好きな人ぐらいちゃんと把握しているようである。しかしその可愛らしい顔が台無しになるぐらいにニヤけている為、それを指摘するべく春樹は言った。

「束さん、ニヤけ過ぎですよ。せつかくの可愛い顔が台無しだ」
すると束は顔を赤らめて、急に春樹の事を直視できなくなってしまう。

春樹はそんな束を見て、どうしたのだろうかと疑問に思いながら、彼女に近づいてどうしたのか聞こうとしたそのとき束は春樹の腕に抱きついた。春樹はどうしたのかわけが分からなくなる。

しかも今の格好は水着だ。肌を覆っている布はそれはもう薄く、そして束の豊満な胸も春樹の腕にしっかりと押し付けられていた。

「もう春にゃんったら、そんな事言ったらこの束さんでも照れてしまうのですよ」

「た……束さん……み、皆が見てますよ……」

春樹は周りの皆の反応を見て顔を青ざめた。皆に大きな衝撃のせいで口をあけて啞然とし、黙り込んでしまっている。一夏も、千冬

も春樹と束のその状況を見て驚愕してしまった。

束は生徒達の方を見て、何やら勝ち誇ったかのような笑み。

そして、ラウラは何故だか春樹の事が遠ざかったかのような感覚に襲われてしまう。ただ、あのときの……ドイツ軍基地の襲撃のときのターゲットになったISの開発者である女性が春樹に好意を向けているだけだというのに……。彼女が春樹を好きになってしまうのは自然だというのに……。ラウラは何故だか空虚感に襲われる。

そして、セシリアもラウラと同じような感覚に襲われていた。自分の好きな男性が他の女性と仲良くしている。しかもその女性が春樹の腕に抱きついている。この事によるショックはとても大きく、そして自分の気持ちが無処へ向かえばいいのかが分からなかった。

一夏は久し振りに束さんに会ったと思ったらいきなりこれで啞然としたし、千冬も同様な理由で啞然としている。

シャルルは……密かにあんな風に積極的になりたいと思っていた。「とりあえず、バレーやろうよ。皆もやろうとしてたんでしょ？」

束はそう言くと、皆もじゃあ皆でやろうと言い出した。せっかく春樹も来だし、ISの開発者さんが来てくれたから、ということでは皆でバレーをする事に。

ジャンケンでチームを作った結果、一夏のチームは「シャルル」「鈴音」「千冬」で、春樹のチームは「セシリア」「ラウラ」「山田先生」である。束は春樹を応援する、と言っていたので見学している。

この四対四の戦いが切っておろされる。

などという楽しい海水浴はこれで幕を閉じた。

結局最後まで海水浴場に来なかった筈は何をしていたのだろうか、疑問に思った一夏と春樹、そして束であったが、それはこの後の夕食で理由を聞くことにした。

楽しい海水浴が終わり、温泉も堪能して今は夕食時。一夏達のクラスのみんなは一つの大部屋で夕食を取っていた。

その夕食とは刺身やすき焼きといった豪華なものであった。

一夏は箸とシャルルに挟まれて座布団に座っている。一夏は隣に話しかけて、海になんで来なかったのかと聞くと、気分が乗らなかったからとしか返してこない。

箸はぶつぶつと何かを言ったような気がした一夏だが、なんだか機嫌が悪そうな感じがしたのでそっとしておく事にした。

一方春樹はテーブルを前に椅子に座って夕食を取っていた。左隣にはラウラが、右隣にはセシリアがいる。

セシリアとラウラは正座に慣れていないので、一緒に食事を取る事になった春樹の彼女達への気遣いだろう。

皆でわいわいと食事を楽しんでいると、部屋にとある女性が乱入してきた。頭にはウサ耳の形をしたカチューシャのような機械を付けており、浴衣姿の篠ノ之束が。

いきなりの乱入に箸は驚いてしまう。自分の後ろには行方不明だったはずの姉がいるのだから。

すると束は春樹の下へと歩いていき、そして春樹に後ろから抱きつきながら、

「春にゃん、話があるから、後でロビーで待ってるね」

それだけを残して、みんなの部屋から出て行った。いきなりの事でさっきまでの楽しい雰囲気なくなってしまうている。とても静かになってしまった。

春樹は今の束にはちょっとしたムカつきを覚えてしまった。せっかくクラスで他の悪しくしていたのにこんな空気にして帰っていつ

た。今の行動は何の為だったのか……。そう春樹は考えていると、セシリアがとてつもなく元気なさげな顔をしている事に気がついた。「大丈夫か？　気分優れないのか？」

と春樹は聞くとセシリアは「大丈夫」と答えるのだが、表情は何か一つとして変わっていないかった。

そして春樹は悟った、今までのセシリアの行動と、束が目の前に現れてからのその態度。もしかしたら……。春樹はなんとなく、核心は持てないにしてもそう思ったのだ。

春樹はセシリアの耳元に顔を持って行き、吐息多めでコソコソと話し始める。

「セシリア、あのさ……。夕食の後に俺の部屋に来てくれないか？　話したいことがあるんだ……」

セシリアはピクツと身体を震えさせ、顔を赤らめて春樹の方にゆっくりと向き直る。そこには微笑んでいる春樹の顔があった。

彼女は心臓をバクバク言わせながら、「はい」と答えて首をゆっくりと縦に振った。

「ありがとう、じゃあ待ってるから……」

春樹は席を立て、この部屋から出ると束が待っているロビーへと向かった。

廊下には誰もいない。恐らく、他のクラスは温泉に入っているだろうし、それ以外のクラスも皆自分達と同じく食事の時間だ。誰とも遭遇するわけがない。ただ、先生は別だが。

さっき夕食を食べていたところからロビーは非常に近い。歩いてすぐだ。

ロビーまで出ると、そこには束がさっきと変わらぬ姿で立っていた。彼女は春樹が来たのを確認すると春樹の下へと走って抱きついた。

「待ってたよ、春にゃん！」

元気よく、子供らしく言う束。だが、春樹はそんな彼女とは対照的に物静かにぼそりと呟いた。

「東さん……なんで……」

「え？」

「なんで皆で楽しく夕食を食べているときにあなたが来るんですか？」

東は春樹の態度を見てびびってしまい、春樹の身体から離れると、彼の顔を見る。その表情は明らかに怒っているのが分かる。

「それは……春にゃんに話があったから……」

「なら、メールで連絡すりゃいいでしょう？　わざわざそこに来る必要性なんてないでしょう？」

東は何の言葉も返せない。春樹は続けて、

「あなたがあそこに来た事で楽しい雰囲気が出た。この行事はね、重要な高校生生活の思い出になりうるものなんですよ？　東さんがあそこであんな行動をするから、それで楽しい雰囲気が壊れてしまったんですよ」

海のとときにはシュチュエーションがまた異なる。あの場合は単純に遊びだったし、その場のノリが良かったので特に雰囲気は悪くはならなかった。

確かに、一部の人の元気がなくなってしまったのは否定できないが、全体の雰囲気はよかったのは事実だ。

しかし、さっきの行動は……あれは食事中だ。東の行動に食事中ということもあってか不快に思う人も多いだろう。

「これは一応IS学園の行事の一つなんです。ISの開発者であるから、俺達の専属メカニックであるからといって好き勝手やってもいいってわけじゃないと思うんです」

東は一步下がる。やはり何も言えない。

「それで、話ってのは？」

東は春樹のその聞き方には冷たさを感じた。いや、いつもより言葉に温かさが無い。完全に怒っている様だった。

東は弱々しく、

「明日……暗部が動き出すから……気をつけてね……それだけ」

そう言ったときの束の表情はとても不安に満ちて、本当に春樹の事を想っているのが伝わってくる。春樹はそんな束を見て心臓がバクバクし始める。

「……わかった。ありがとう。あと、気を付けるのは束さんもだよ」春樹はそう言った後、自分の部屋の方へと走っていた。

そして、そこに残った束は遠のいていく春樹を見て不安な気持ちになる。もうこれ以上会えなくなる様なそんな気がして……。

春樹は自分の部屋へと走る。自分の気持ちはどうにかなりそうだった。わけがわからない。この気持ちは何なのか……春樹には分らなかった。

（何だよ、この感じは……こんなの初めてだ……）

すると、鈴音から電話がかかってきた。春樹はその電話に出る。

「もしもし、なんだよ鈴音」

『なんだよって……あんた忘れてんじゃないわよ！ 箒の事、忘れてるんじゃないでしょうね！？』

箒の事とは、今日の海水浴のとき鈴音と話して計画されたことである。名づけて「一夏と箒の距離を一気に縮めてみようぜ作戦」……そのままである。

要するに一夏と箒が二人きりの状態を作り出していい感じの雰囲気にしようというありがちなものである。

『こっちは準備OKだって言うのに……そっちはどうなの？』

「わりい、これからだ。大丈夫、上手くやるから」

鈴音は笑いながら、

『ちゃんとやりなさいよね、まあ箒もちょっと緊張しててリラックスさせるまで時間が少しかかるからそんなに急がなくてもいいから』『了解、じゃあな』

『うん』

通話を切ると、また再び自分の部屋へと向かう。部屋は一夏とシャルルと一緒に三人部屋である。

春樹は自分の部屋に戻ると、そこには一夏とシャルルの二人が既

に部屋に戻っていた。

春樹は早速箒と会わせるべく、一夏にむかって言った。

「一夏、箒が呼んでたぞ。ロビーまで行ってこい、アイツが待ってるから」

一夏の場合、この際ストレートに用件を言った方がいい。一夏の場合、変にひねって言うとな変な誤解を招く可能性が大いにあるからだ。

一夏は、「そうか」と言って何の疑問も持たずに部屋から出て行く。そして、春樹的にはシャルルもこの部屋から出て行って欲しかった。何故ならこの後セシリアがこの部屋にやってくるからだ。このとき春樹は何故この部屋に呼んでしまったのか、と後悔したが、それはもうしょうがないとして済ませた。

「シャルル、実は……セシリアと重要な話をこの部屋でしたいんだ。だから悪いけど……お願いできるか？」

「ふふ……いいよ。どれくらい？」

「そうだな……長くて二十分ってとこかな」

「ちよっと長いね。でもいいよ、その辺ぶらぶらしてるから」

「すまないな……」

そして、シャルルもこの部屋からいなくなる。これでこの部屋には春樹一人だけになった。シーンとする自室。テレビも電源をつけないで本当に静寂に包まれる。

（束さん……なんで、そんな悲しい顔を？）

春樹が真っ先に思い浮かんだのは束だった。何故自分が束のことですごしい感じになってしまうのか分からなかった。

だが、これからセシリアがこの部屋に来る。しっかりとお話をしなくては、と思う春樹。彼はセシリアの好意には気付いていた。

彼女はイギリスの女性らしく、褒めると恥かしがりながら「よしてください」と言って謙遜する。

特に春樹がISで褒めたりすると特に恥かしがるし、この前の買い物だってそうだった。春樹と一緒ににお出かけできると思って嬉し

がっていた。

どっちかというと、あの時はラウラにずっと構っていたのだが、でもよくセシリアと視線が合ったのは事実。視線が合うと決まって彼女は自分から視線をそらしていく。

そして今日の出来事、束と一緒に出てきた春樹……そして束と話していたとき、セシリアはなんだか寂しそうな顔をしていたのを覚えてる。

だから、そのことの確認を取って、そしてその話の決着をつける為に彼女を呼んだのである。

5 (前書き)

【追記】 8月6日

「篠ノ之箒にリボンをプレゼントしたのは一〇歳の誕生日」、という設定に変更しました。

後の『第四章－2』において、この話と矛盾点が発生してしまうので、こういった処置を施した次第です。

今後、こういったミスが起これぬように注意しますので、何卒、この二次創作小説をよろしくお願いいたします。

織斑一夏は春樹に箒がロビーで待っていると教えてくれたのでロビーに向かうべく廊下を歩いていると、セシリアに会った。

「お、セシリアじゃねえか。どうしたんだ？」

「いえ、ちょっと……」

セシリアは誤魔化すように笑って答えると、彼女も一夏に問う。

「一夏さんこそどうしましたの？ 一人で」

「まあ……ちょっとな。箒に呼ばれてんだ」

「……そうなんですの」

セシリアはビクツと身体を震わせたかと思うと何事もなかったかの様に話を進める。彼女はふと箒の事を思い出す。

箒はどう考えても一夏の事が好きだ。詳しく聞けば小学校の頃は一緒だったみたいだし、このIS学園において六年ぶりの再会という事もあったか更に箒は一夏の事を意識してしまったのだろうとセシリアは考査した。

「まあ、なんだ。お互いに人待たせてるみたいだし、これで……」

「そうですね。それでは」

セシリアがそう言って、一夏とは逆の方向へと向かう。一夏は一体何処に行こうとしているのか分からないが、とりあえず箒を待たせているので急いでロビーの方へと向かう。

一夏は色んな生徒とすれ違い、ちょっとした視線を受けながらロビーへと着くと、箒はロビーにある椅子に腰掛けていた。

箒は一夏がやって来たことに気がつく、顔を赤く染めながら身体を硬くする。心臓が無駄にドキドキするなか、一夏が近づいて声をかける。

「よお、箒。待たせたか？」

「い、いや……大丈夫だ」

「そうか。で、なんだよ用事って」

「えっと……とりあえず夜風に当たって散歩しながらでいいか？」

「ああ、いいぜ」

一夏と箒の二人は旅館から出て行く。目の前には月で照らされてこれまた美しい海が広がっている。今は雲ひとつなく、しかもそれなりに涼しい、というちょうど良い環境。夏にしては凄く過ごしやすい気温だ。

二人はしばらく歩き、旅館から離れて人の雰囲気も感じられなくなったところで二人は地面に座って海を見ながら黙っている。

ちよつとの間、この幻想的で美しい海を見ながら、箒は言った。

「い、一夏……明日は何の日か覚えているか？」

明日は七月七日……つまり、篠ノ之箒の誕生日なのである。

箒は期待していた。一夏が自分の誕生日を忘れているはずがない。卑しいかもしれないけど、何かしてくれるだろうとそう思っていたのだ。

「当たり前だろ、幼馴染の誕生日くらい覚えてるさ。ガキの頃皆で祝っていただろ、春樹と一緒にさ」

「そうか……そうだったな……」

一夏が言った言葉は正に箒が望んでいたのと同じ言葉だった。箒は妙に身体が熱くなるのを感じながら、気分が高まっていく。

すると、一夏は思い出し笑いをしながら、

「そういえば、覚えているか？ 箒の誕生日のときにさ、春樹がくしゃみかなんかしてケーキのロウソクを消しちゃった事」

「ああ、あれか。あの場は皆で笑っていたな。今となってはいい思い出だ」

箒もそのことを思い出して笑う。そして、落ち着いてくると、箒は髪を留めているリボンに手をやって、思い出に浸るようにした。そして一夏に聞く。

「……これの事、覚えているか？ 私の一〇歳の誕生日にこのリボ

ンをプレゼントしてくれた事」

一夏は箒がリボンの事を言っているのに気付き、

「もちろん。忘れるわけじゃないじゃないか」

箒は一夏の顔を見つめながら、

「私はな、一夏がこのリボンをプレゼントしてくれたとき、本当に嬉しかったんだ。一生大事に使うんだってその時決めた。だから、今でも大事に使っているんだ」

一夏は正直、箒が言ってくれたことはとても嬉しかった。凄く前のことなのに、箒は忘れずに、しかもそのときのプレゼントをずっと使い続けてくれたのだ。大事に使ってくれた。一夏は逆に感謝したい位の気持ちになる。

「ありがとう箒。そんなに大事に使ってくれて」

そして箒は黙り込む、一夏の方をチラチラと見ながら、それから息を大きく吸って一夏の方をしっかりと見る。

「……一夏……明日、大切な話があるんだ、だからその……明日の夜、時間を空けておいてくれないか？」

「え？ いいよ、大丈夫だ」

箒はこのとき決心していたのだ。明日、一夏に告白する事を。しかし、正直こうやって真正面から言うのはとても恥かしい。春樹には真正面からぶつからないと一夏を振り向かせるのは難しいと聞いていたのでやってみたものの、やはりこうやって言うのは恥かしかった。

そして一夏は、目の前の少し顔を赤くしながら恥かしがっている箒を見てドキッとしてしまう。このとき、彼には箒の事がいつも以上に可愛く映っていた。

彼女が告げたその大切な話というのも変な期待をしてしまう一夏であったが、もしその期待が外れてしまったならば虚しく感じてしまうだろうと思って必死で自分を騙そうと平常心を保とうとしていた。

「じゃ、じゃあ、おやすみ。また明日な」

箒はそう言ってその場から立ち去ってしまう。箒はこの場から一秒でも早く逃げたかったのだ。そうしないと自分を保つ事が出来なくなりそうだったから。

そして一夏はその場から立ち去って行く箒の後姿をじっと見ていた。さっきから変に箒の事を意識してしまう。変な気持ちだ。

今まで幼馴染だと思っていた箒をこういう風に感じることはこれが初めてだった。

もはや一夏はこのとき箒を一人の女性として見ていた。

この感情は何なのか、これが恋というもののなのか、これが人を好きになる事なのかと一夏は思う。

そして、一先ず部屋へ戻ろうとしたそのときだ。とある女性の泣いている声がかすかに聞こえてきた。後ろの木の陰から聞こえてくる。いつからいたのだろうか、そう思いながら一夏はその泣いている声の下へと行ってみる。なんとなく聞き覚えのある声だったような気がしたからだ。

すると、見覚えのある女性が見えた。その女性は篠ノ之束。すると束は近づいてきた一夏に気付く。

泣いているところが見られた。もう何がなんだかわかんなくなつた束は一夏に抱きつく。

「ちょっと、束さん！？ どうしたんですか、いきなり……」

束は涙を流して、そして苦しそうに声を出した。

「春樹に嫌われたかもしれない……もう、駄目かもしれない。一夏あ……私、どうすれば良いと思う……？」

「どう、って……」

一夏は何でこうなってしまったのか、よく分からないのだ。春樹に嫌われた、もう駄目かもしれないというのはどういうことなのか、その理由を束に詳しく聞いてみる。すると、束はゆっくりと一夏から離れる。

「あのね、さっき……春にゃんに怒られちゃったんだ……。なんで食事中にあんな事をしにきたのかって」

確かに、食事中に束が来てそして春樹と何かを話した後、束は部屋から出て行った。そのときの春樹はなんだか不機嫌だったのを一夏は覚えている。

たぶん、あの時クラスの皆が静まり返って雰囲気が悪くなってしまったことに怒っているのだろう。

一夏は束の気持ちは確証は持てないが分かっていた。恐らく束は春樹の事が好きだ。何故好きになったのかは一夏には分からないが、海の事とか、食事中に春樹に抱きついた事とか見ていれば一目瞭然である。

これまでも束と会う機会が多かった様である春樹は何らか事があるのだろう。しかし、この二人は付き合っている。という事ではなさそうだ。

そして束も、異性を好きになる事はこれが初めてなのである。

そう、これは初恋。

初めての恋というものはやはり経験がないせいか上手くいかないものである。しかも相手は春樹。一夏の知る限りでは彼は未だ女性と交際したことがないはずである。

「絶対に嫌われたよ……どうしよう……ねえ、どうしたらいいの！？」

束は若干ヒステリックにそう言った。

「束さん。大丈夫ですって。春樹はきつとこの程度で人を完全に嫌うという事は無いと思いますよ。アイツはちゃんと自分のやってしまった過ちを反省したら、何事もなかったかのように次からは接してくれます。春樹はそういう奴ですよ」

この前のラウラ・ボーデヴィツヒのときもそうだった。一度は道を踏み外してしまっただが、その後ちゃんと反省し、そして今では春樹とラウラはもう仲良くやっている。そして一夏たちとも友達になった。もうラウラは一夏達の大切な仲間だ。

「……ありがとう、一夏。私、ちよっと元気出てきたよ、ありがとう」

「いいえ、色々と頑張ってくださいね」

束は自分を励ましてくれる一夏には感謝していた。

そして、一夏には自分の組織に入ってもらう人物。という事は、今後春樹の事で相談できそうだな、と思っていた。

更にもう一つ。明日には一夏と箒には重大な責務を負わせる事になってしまうかもしれない事を、申し訳ない気持ちになっていた。すると、一夏はあることを聞いてみる。

「束さんは結局、春樹のことが好きなんですか？」

「うん！」

一夏の質問に束は笑顔で、そして元気良く、力いっぱいそう答えた。

箒は旅館へと戻ると、辺りを見回し誰かを探している様子の織斑千冬に出会った。箒がどうしたのだろうかと千冬に近づくと、彼女は箒を見るなり、

「ああ、篠ノ之。一夏を知らないか？」

と聞いてきた。箒はさっきまで会っていたので、何処にいるのかはわかる。だから、正直に何処にいたのかを話す。

「え……ああ、さっきまで会ってましたよ。一緒に夜風にあたってました」

「そうか。すまないが、呼んできてくれないか？」

「あ、はい。分かりました」

箒は一夏を探す事になったので、再び外へと出る。さっきまで一夏と一緒にいた所まで歩き、その付近を捜す。

しかし、見当たらない。もう旅館へと戻ってしまったのだろうか、と思うが、戻ったのなら自分とすれ違ってもおかしくないと思ったので、まだこの辺りにいると予測する箒。

すると、森林の方から声が聞こえてくる。一夏の声のような気がしたので、もしかしたらいと思い、その声のした方へと行ってみる。そこには一夏と、自分の実の姉、篠ノ之東がそこにいた。二人とも身体が妙に近く、そして二人とも笑顔で話し合っている。このとき、箒は嫌な気持ちになった。自分の好きな男性が他の女性、しかも自分の姉と知らないところで、二人きりで楽しそうに話をしている。人目につきにくいところで。一夏と東の二人は寄り添っているようにも見えた。

こんな状況であるから、マイナスな思考に陥ってしまう箒。その原因の一夏の事も別にやましい事でもないし、ただの人生相談の様

なものだから責められない。こればかりは誰も悪くなく、タイミングが悪かった、としか言えないだろう。

箒はそんな光景を見て目から自然に涙が出そうになる。自分の気持ちにモヤモヤしたものになり、自分の感情もわかんなくなる。頭の中は混乱して何を考えていたのかも忘れて思考停止に追いやられてしまう。

箒はその場から逃げ出す様に旅館へと走る。

旅館へと戻ると、千冬が話しかけてくる。

「篠ノ之、一夏は見つかったのか？」

しかし、箒はこんな状況で言えるはずもなく、

「いいえ。すみません、見つかりませんでした」

と答え、すぐさまその場から去る。今にも涙腺が崩壊しそうで、誰にも涙を流しているところは見て欲しくないからだ。だけど、誰かを頼りたいのも事実。箒はこんなときに頼れる人物といえど春樹か鈴音だが、今回ばかりは女性である鈴音しか頼りに出来る人がいない。人氣がないところ、もう皆入浴時間が終わっていて誰も来ないであろう風呂の方へと向かった。そして鈴音に電話をする。

「鈴……」

そしてついに涙腺が崩壊してしまい涙が溢れてくる。鈴音は涙声になっている箒の変に思い、

『箒どうしたの？　ねえ今どこにいるの？　今から箒のところに行くから』

「お風呂のところだ……」

『分かった、お風呂ね』

そう言うのと鈴音の方から電話を切った。

そして箒は近くにある椅子に座り込みあふれ出てくる涙をどうかしようと思死に涙を押さえ込もうとする。だが、止まることはない。止まってくれない。自分では止まって欲しいと思っているのに関わらずだ。

必死に自分の感情と戦っていると、鈴音が来てくれた。鈴音は箒

を見るなり駆け寄って箒の事を優しく包み込んだ。

鈴音の顔の横に箒の顔が来る。ボロボロに泣いていた箒の顔は、せつかくの美人が台無しになるほどだ。

「箒、どうしたの？　こんなになるまで泣いちゃって……」

鈴音は内心焦っていた。つい先ほどまで「一夏と箒の距離を一気に縮めてみようぜ作戦」とか言って二人きりさせた。そして今日の前には箒がボロボロに泣いている。最悪の事態も予測した鈴音は自分のせいで……と思い、深刻に考えてしまう。

「一夏が……姉さんと……」

「箒のお姉さん……一夏と束さんがどうしたの？」

「一緒に……楽しそうに話していたんだ……寄り添いながら」

鈴音は何かの間違いだろうと思った。まさかあの二人がそんな関係になるとは思えないからだ。

とは思ったものの、束と一夏は小さい頃から知り合っていた様だし、可能性があることは否めない。だが、長い間会ってもいないのに、いきなりそんな関係になるとは考えにくい。

なんだかんだ言って一夏はそういう恋愛事は真面目に考える人で、そういう色恋沙汰に敏感になる中学生のときも、そういうことは真剣に考えていた。

はつきり言って一夏は容姿も良いしモテる。だが、今まで一夏は女の子と付き合ったことがなかった。本人曰く、付き合うなら本気で好きになった人にしたいと言っていた。たかが中学生のお遊びの様な付き合いに対してでも良く考えていた一夏。そんな彼がお互いの事をあまり知っていない束の事をすぐさま好きになるのだろうか、と思うと首を捻りざるをおえない。

だが、本当に一夏の初恋が束だったとなれば洒落にならない。箒の事を更に悲しませてしまう。

鈴音はそんなことあるわけない。と自分に言い聞かせて「大丈夫」だと思い込ませていた。

（一夏なら、箒の事を真剣に考えてくれているはず……）

鈴音は一夏が箒にプレゼントをちゃんと用意してあることを知っている。前に相談を受けたからだ。だから、一夏は箒の事を想ってくれている。そういった確信を持っていた。

ただ、このタイミングでそれを言うわけにはいかない。だが……。「箒、明日はアンタの誕生日でしょ。もしかしたら、一夏が何かくれるかもね」

プレゼントの内容は言わない。だけど、こんな箒をほっとけるはずもなく、プレゼントの事をほのめかす程度で箒の事を励ます。

「そう……だろうか……?」

箒は顔を上げて鈴音の方を見ながら言うと、鈴音は笑顔で言った。「うん。きつとそうだよ。一夏の事だもん、用意してくれていると思うよ。だから、明日になれば……ね?」

その言葉に励まされた箒は少しだが、笑顔を取り戻す。

「そう……だな。別に、姉さんとそういう関係になっているという確信はまだ持てないもんな」

「そうだよ、だから箒は安心して明日を待ちなよ!」

鈴音は箒を励まし、そしてしばらくの間、箒が落ち着きを取り戻すまで一緒にいてあげた。

箒は鈴音という親友を持って本当に嬉しいと、その時思ったのだ。った。

一方、セシリアは春樹が独りだけでいる部屋にやって来た。その部屋にはセシリアと春樹の二人だけである。

セシリアはこの二人だけの空間に身体が硬くなる。もし、変なことが起こってもおかしくはない。何故なら年頃の男女が二人だけにいるのだから。

「セシリア……」

「は、はい！」

ふと、春樹はセシリアの事を呼ぶと、彼女は慌てたように返事をする。そして、春樹は単刀直入にセシリアに尋ねた。

「お前、俺の事……どう思ってる？ いや、もっと直接的に言うかな……。俺の事……好き……かな？」

あまりにも質問が直球過ぎる為か、セシリアは慌て、そして恥かしがりながら、あたふたしてマトモに話すことが出来ない。

しばらくして呼吸を整えると、セシリアは言う。

「^{わたくし}私は……その……春樹さんの事が……好きですわ。あの最初に戦ったあの日から、ずっと……」

「そっか……」

春樹はセシリアの気持ちは十分に分かってあげたし、嬉しかった。だが、素直に彼女の気持ちを受けとることは出来なかった。まだ、自分の中にあるモヤモヤする何かがまだ残っているし、そして今自分のおかれている状況が、セシリアと交際することを許すわけにはいかなかったからだ。

仮にセシリアの気持ちを受け止めてあげて彼女と交際することになったとしても、その当の本人である春樹のせいで彼女を苦しめる事にもなりかねない。

そして、春樹には決意している事がある。それは、「篠ノ之束を命を懸けて守る」というもの。これだけは、あの三年前のドイツ軍基地襲撃事件から、それは決めた事だ。何より、春樹は『束の組織』に入って暗部の活動をしているのだ。彼女を巻き込むわけにはいかない。特に『因子』を持たないものが関わったのなら、命はないだろう。だけど、春樹にはその力がある……だから。

だけど、セシリアと付き合ってしまったえばその責務はどうなる？

正直なところ、恋愛などしている暇は無かった。いつ暗部の奴らが束の命を狙ってくるのかも分からない。そんな状況で女の子と遊び惚けているなど言語道断だ。彼は束を命を懸けて守ると決めたのだから。

だから、春樹は強くならなくてはいけない。春樹がISの操縦が上手く、そして強かったのはそういう理由があるからだ。

目標があれば人は努力できる。その言葉の下、春樹は今まで自分を鍛えてきたのだ。

「その気持ちは凄く嬉しいよ……でも、今の俺にその気持ちを素直に受け止めてあげる事は……できないんだ」

「え……？ どうして……。理由を言ってください！」

セシリアは春樹に詰め寄りながら自分の告白を断った理由を尋問のように聞き出そうとしていた。

「俺は……束さんを守らなければならない立場にいるんだ。これ以上のことは言えない、セシリアを危険な目に合わせるかもしれないからね……。でも、もう一度言うけど、セシリアの気持ちは本当に嬉しかったよ」

「春樹さんは……束さんの事が好きですのね」

「……！？ 違う！」

春樹はセシリアの言葉を聞いた瞬間に胸の辺りにズキツという痛みを感じた。しかし、こんな感じになるのは初めてだ。

しかも、「違う」とは言ったものの、本当にそうなのか、と自分のその感情に疑問を抱いてしまう。

「嘘ですわね……」

セシリアはそう言うと、春樹は黙り込む。

春樹はどの感情が正しくて、何が間違っているのかわけが分からなくなってしまう。

「じゃあ、俺は……どういう風に考えればいいんだよ！何が本当の気持ちなんだよ！教えてくれよ……！！」

春樹は混乱していた。そしてついセシリアに向かって叫んでしまう。女性に怒鳴りつけるというのは褒められたものではない。だが、今の春樹はそれをもしてしまうほどのストレスを感じていたのだろう。今まで辛い訓練に命がけの実戦。数々の辛い出来事、わずか一六歳の男の子が耐えられる精神のマージンを優に超えてしまっているのだ。今まで耐えてきただけでも凄い事だろう。

それが、今回の事も含めて様々な要因が重なり、ついにそれが爆発してしまったのだろう。

「そんなの分かりません。それは春樹さんの気持ちなのですから、私に分かるわけないでしょう！？」

その時、春樹はついカッとなってしまう、セシリアの事を押し倒す。セシリアの浴衣が少しはだけてしまいが、春樹はそんな事は気にしなかった。春樹はセシリアの事をまっすぐ見つめながら、こう言った。

「そうだよな、お前が俺の気持ちなんて分かるはずがないよな！人の気持ちなんて他人に分かるわけねえよな……俺の本当の気持ち……！」

春樹は八つ当たりをする様にセシリアに言葉をぶつける。自分が出来る最大の事を……。

しかし、セシリアは極冷静に、真剣に春樹の事を見つめて。

「春樹さんは……今まで私たちに色んなことを教えていただきました。でもそれは、きっとあなたが目標の為に頑張ってきた事を私たちにも教えてくれたということ。春樹さん……自分の気持ちにもっと正直になりましたら？ その目標……本来あなたは何を望んでそ

うなったのかをまた思い出してみましようよ」

自分の目標。

春樹が忘れかけていた、命がけで束を守ることに決めたその原点。それは、一夏が誘拐されたことから始まった。あのときに、春樹は目の前で行われている一夏の誘拐に何のアクションも取る事が出来なかった。それが悔しかったのだ。だから、強くなりたいと願った。自分の大切な人を守る為に。

だから千冬にお願いして、ドイツ軍基地まで足を運んだのだ。

そして、その時に……束と……。

（そうか……俺は……。でも、それでいいんだろうか？）

「セシリア……その……ごめん」

「ええ。それより……この格好をどうにかしてくれますか？」

今の二人の格好は春樹がセシリアの事を押し倒したかのような状態。まあ、実際押し倒したのだが……。

しかし、こんな所を誰かに見られたら……、それを思うと背中がぞっとした。自分だけでなくセシリアまで迷惑をかけてしまうことになる。

そう思った瞬間だった、部屋のドアが開く……そこに入ってきたのは織斑一夏だった。彼は目の前の光景に驚愕した。

春樹は慌ててセシリアから離れるが、その行動が更に一夏に不快感を抱かせてしまう。

この部屋の空気が凍りつく。

シーンとする中、春樹はセシリアに部屋に戻るように言った。彼女を早くこの空気から開放させる為に。元はといえば自分が悪いのだから。

セシリアは黙って首を縦に振り、春樹の顔を見てそそくさとこの部屋から出て行く。

すると一夏は普段より低い声で怒った様に言う。

「春樹……お前……何してた？」

「いや、やましい事は何一つない。ちょいと言い争いになっちゃて

ね。で、俺がキレちゃってああなった」

一夏は春樹を睨みつけながら、

「本当か？」

と問うと、春樹は、

「本当だ……」

と言うが、一夏はこの春樹の態度には納得がいかず、信じきる事ができなかった。

いつもの春樹ではない、と一夏は思った。いつも通りの春樹ならば、こんなテキトウな返事はしない。もっと理性的にもの言うはずである。だが、今の春樹にはそれがなかった。一夏は何かがおかしいと思いつつも、春樹に先ほどの事を伝える。

「そうか、ならいい……。それから、さっき束さんに会ったよ」

春樹は身体を少しビクツとさせた様な気がしたが、何事もなかったかのようにぶっきらぼうに言った。

「ふーん……それで？」

やはり今の春樹は何かがおかしいと思う一夏。彼のテキトウな態度を見て一夏は正気に戻させようとキレる。一夏は畳に座っている春樹の胸倉を掴んで無理やり起こさせる。そして、壁に春樹の体を押し付けた。

「それで？　じゃねーよ！！　束さんは泣いていたんだ！！」

一夏は叫ぶ。それに身体を震わせて反応する春樹。

「泣いていた？」

「ああ、さっきまで束さんと話していたんだ。束さんの気持ち、沢山聞いたよ……。春樹、お前は束さんに愛されてんだよ、惚れられてんだよ！！　お前気付いていないのかよ！？」

春樹はなんとなくだが、自分の気持ちのモヤモヤ感が少しだが晴れた気がする。春樹はこのとき理解した……。自分の気持ちが高なのかを。

「……………」

春樹は黙り込む。そして数秒の間、二人の入る部屋は静寂に包ま

れていた。そして、春樹の口から言葉が発せられた。

「束さんは……何処にいる？」

「……この旅館を出て少しの所、木が沢山生えている所だ」

それを聞くなり、春樹は胸倉を掴んでいる一夏の手を無理やり解き、そして部屋から飛び出る。

「きゃ!？」

という声が聞こえてくる。その声の主はシャルル・デュノアもといシャルロット・デュノアであった。今の声は凄く女性らしく、シャルルもマズイと思った。だが、そんなことを気にもせず春樹は何処かへと行ってしまう。

春樹はロビーへと走る。するとそこには織斑千冬がいた。

「どうした春樹、そんなに急いで、何かあったのか？」

と聞くが、春樹はその言葉すらを無視して旅館から抜け出した。

春樹はひたすら走る。すると、木が沢山生えていて、海が綺麗に見えるところまで出てきた。そこは先ほどまで一夏と箒が話していた場所だ。

春樹は周りを見回すが、誰もいない。春樹はISを起動させ、ハイパーセンサーだけを機能させる。この付近の人の気配を感じようとするが、反応がない。

束は何処かへと行ってしまった。

その事が、春樹の胸に突き刺さる。何か物足りないような、悔しいような、様々な感情が胸の辺りを渦巻いている。

その後も春樹は束がいそうな場所を何箇所も探したが……見つけることが出来なかった。

「くそっ……束さん……話したいことがあったのに……」

春樹はそう呟き、そして彼の夜は更けていった。

第三章『失敗—Silver—』

1

七月七日、臨海学校研修二日目。本日からISについて真面目に触れられる。

専用機を持たない一般の生徒は量産機で操縦の練習を行い、そして専用機を持っている生徒はその専用機の企業や団体からのバージョンアップパーツが送られてきたり、実際に現地に来て専用機をチューンしていったりする。そのパーツのテストを行ったり、チューンしたISの起動実験をするのが今日の目的である。

専用機持ちのメンバーは一般の生徒とは少し離れた場所で集まっているが、四組の四人の専用機持ちの生徒はここに居合わせていない。いや、元々この臨海学校研修には参加していない。ここで行われるバージョンアップパーツのテストは彼女達の本国で行われるらしいからだ。だから、四組の専用機持ち全員は、現在本国へと帰国している。

ここにいるのは、織斑一夏、葵春樹、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、^{フラン・リンイン}鳳鈴音、シャルル・デュノアにラウラ・ボーデヴィツヒである。

そしてこの場の責任者として、教師である織斑千冬がこの七人の目の前に立っている。

その他には一夏の『白式』、春樹の『熾天使』、そして箒の『紅椿』のメカニックである篠ノ之束もそこに居合わせていた。

「それでは、専用機を所持している諸君は、各自バージョンアップパーツのインストール等を開始し、テストをしろ」

織斑千冬がそう言うと、そこにいた七人の生徒と、一人のメカニックが一斉に動き出した。

セシリアは高機動用のブースターパーツで鈴音は『龍砲』の強化

パーツ。シャルルはシールドの強化パーツ。そしてラウラは新たなレールガン『パンツァー・カノニア』である。

彼女達はそれぞれ自分のISに新しいパーツをインストールする中、一夏、春樹、箒の三人は篠ノ之束の前に立ち、ISの本体のみを出現させた。

今回、こういったチューンを行うのかと言うと、『白式』には射撃武器を追加させると言ったものであった。

『白式』は元々、超高機動の接近戦闘型のISであるが、やはりそれだけではこれからの戦いは勝ち抜いていけない。『雪片・式型』による『零落百夜』の一撃必殺を目的とするならば、牽制を目的とした射撃武器ぐらいは欲しいところなのだ。ただ、総重量は少し重くなってしまう為、加速力は少し落ちてしまうが、それでも理論上は全ISの中でもトップの最高速度を誇っていた。

何故、最初から装備していなかったのかと言うと、一夏には射撃武器に頼らず機動だけで戦闘する、という事を覚えさせる事で、高度な操縦技術を身につけてもらう、というのが目標であったが、その目標に達したので、この度ついに射撃武器を追加する事になったのである。

そして、春樹の『熾天使』^{セラフィム}であるが、このISは篠ノ之束が暗部と戦う為だけに作り上げたISであり、近・中・遠距離全てに対応する武器を所持している。

近距離戦闘用に日本刀を模した実体剣の『シャープネス・ブレード』があるが、天使を模しているこのISに何故日本刀なのかという点、葵春樹が剣道をやっていた事があり、日本刀を構えればカッコいいのではないのか、という束の勝手な考えでこうなったのであった。

そして、接近戦闘用武器のビーム系武器として『サイズ』があるが、死神と聞いて一に想像するであろう鎌を何故、天使を模しているISに装備したのかと言うと、これまた束の独断でカッコいいからという理由である。

そしてメイン武器である中距離から近距離で戦う事になる『ブレイドガン』である。ビーム系の弾丸に銃の先端に実体剣をつけている、という武器である。

そして遠距離武器として、『バスター・ライフル』というものがある。大型の砲撃武器で、ビーム系の砲弾を撃ち出す武器である。『熾天使』の武装中、火力が一番高いのはこの『バスター・ライフル』である。

これだけの武装があるため、今回、追加武装は無く、基本性能の向上を目的としてチューンアップが施される。

そして、箒の『紅椿』はこの後起こるであろう事態に備え、能力リミッターを解除する事になるが、箒にはただの基本能力向上を目指したチューンという事しか伝えなかった。詳しく伝えるのは彼女が正式に束と協力関係を持つてからだろう。

そして春樹と束との関係は少し距離を置いた状態になっていた。

昨日の夜、束を探し回った春樹だったが、そのまま見つけれず、次の日になり今こうやって対面している。しかし、その二人の関係は昨日の海水浴のときは全く違い、ぎこちなさが見られる。

それに春樹はセシリアとも距離を今は置いている。昨日の今日では仕方が無いのだろう。

そして箒も一夏とは少しだけ距離を置いている。今は一夏と束の関係を良く観察して、昨日の事はどういふことなのか、そういった関係なのだろうか、と判断する材料を集めている。

「じゃあ、始めようか。じゃあ一夏、今回のチューンアップで追加された射撃武器のテストを行ってみようか」

一夏は『白式』を一回待機状態であるガントレットに戻してから、今度は装備する為にISを展開する。一夏の身体が、白い鎧に包まれる。すると、通信回線から束の声が聞こえてくる。

『装備の一覧を見てごらん。新しい武器があるでしょ？』

一夏は網膜投影されているモニタを確認。確かに『白式』に新たな武装が追加されていた。

『ビームガン』という小型のビーム系射撃武器である。ただし、それは無理やりISに装備されているようなもので、腕のところにビームの発射口が取り付けられている……と言うよりは埋め込まれている、と言ったほうが見た目的には正しいかもしれない。

『白式』には武装を追加できる領域が存在していない。だから正統な方法では『白式』に武装を追加する事ができないのだ。だから束は無理やりだが『白式』自体を改造する事で射撃武器を装備する事に成功した。

「確認しましたよ、束さん」

『りょかい。じゃあ、今からターゲットを用意するから、それで試しながら照準とかを調節していつてね』

「わかりました」

と一夏は言う和一夏は一回空へと飛ぶ。ISを模したターゲットがホログラムで現れる。一夏は早速そのターゲットに向かってビームを撃つが、そのビームはとんでもない方向へと向かっていった。照準が大きくズレているのだ。

『ありや、随分とズレてるね……。今のズレからみると……照準を右へ12000程度調節してみて』

この「12000」とはミリメートルの事で、照準を右へ12メートル調節しろ、と言う事である。

一夏は指示通りに照準を12メートルズラしてもう一回発射してみるが、またも当たらず。だが、掠る程度にはなってきたので、これからは自分の感覚でやっていくだけだ。

『じゃあ一夏、後は自分で調節して……射撃練習でもしてなよ』

「分かりました」

一夏は一人で調節を始める。

照準を少しずつ調節していつて、ピッタリになるように微調整を繰り返す。その調整を五分程度続けてやっと照準がしっかりと合った。やはり慣れていないことは何かと時間がかかってしまうな。と思った一夏は射撃練習へと移った。

一方、春樹の『熾天使』と箒の『紅椿』は束のチューンアップを受け、二人で模擬戦を行っていた。

箒はあまりにも能力が違ふ『紅椿』に正直戸惑っていた。自分の知っている『紅椿』でないようにも思えてくる。それほど「速い」のだ。

最高速度や加速力を見ると一夏の『白式』にも引けを取らないぐらいの性能だ。今のところはその『紅椿』の性能を持て余して振り回されてしまっている。

だが、その速さも身体になじんでくる頃の箒は自分の知らない未知の領域を体験する事になるだろう、と少しばかり中二病臭い事を思ってみた春樹。

しかし、春樹も少々この『熾天使』に苦戦している。動きが凄くピーキーになっており、メリハリの利いた動きになっている。端から見ればとても危なっかしい動きに見えるが、反応速度がとても速くなった分、素早い回避が可能である。だが、それも使いこなせたら……の話だが。

「箒。どうだ、そっちの方は？」

「ああ。少しずつだが、この速さにも慣れてきたよ」

「そうか、こっちも段々とだけこの反応速度の速さに慣れてきたところだよ。じゃあ、そろそろ本気で行くか！」

「うん！」

箒は力強く返事をして、紅椿を前進させようとしたときである。いきなり山田先生の甲高い叫び声が聞こえてきた。その場にいた皆は何事かと思い一斉に山田先生の事を見る。

「織斑先生！！」

山田先生のその声は、焦りが見られとんでもなくヤバイ事が起こっているかの様にも見えた。

千冬と山田先生は何やら話し出すが、何を言っているのかわからない。生徒達に聞かれても内容をわからなくする為の処置だろう。

（来たか！？）

春樹はついに暗部の組織が動き出したのかと思い、束の下へと行きISを一時解除する。こうなれば、公私をわきまえて、昨日何があったとしても気にすることなく動かなくてはいけない。

「束さん」

「うん。箒ちゃん、一夏、こっちに来て！」

一夏と箒は束の指示通り、束も下へと行き、ISを解除する。そして、千冬と山田先生が話しているところに束、春樹、一夏、箒の四人が介入。

「……束。どうやら、お前の出番らしいな」

「そうらしいね」

千冬と束は目を合わせてそう言った。そして、千冬は生徒達に指示を飛ばす。

「本日のISテストは中止、全生徒は早急に旅館へ戻れ！」

専用機を持っているセシリア、鈴音、シャルル、ラウラの四人はその言葉に驚く。このISのテストを中止せざるをおえない状況になっている、という事を理解したからだ。

「すみません、先生。何故ISのテストを中止するのですか？」

シャルルは千冬にどうしてなのか、を問うが、千冬は冷たく返事を返す。

「それは貴様らには教えられない。すまないな……、ともかくお前は自分のISを回収しだいにすぐに旅館へと戻れ、いいな」

そう千冬は言う、山田先生、篠ノ之束、葵春樹、織斑一夏、篠ノ之箒と共に旅館の方へと走っていった。

残った四人は一体何が起きているのか、そして、春樹と一夏と箒までなんで一緒にについていったのか、それがすごく気になっていた。

「ラウラさん、一体どうしたのでしょうか？」

セシリアは問うと、軍人であるラウラはキリツとした態度で答えた。

「それは我々が詮索していいものではない。先ほど教官が教えられ

ない、と言ったからな。機密事項なのだろう」

今度は鈴音が会話に入ってくる。

「でも、なんで一夏と箒まで……春樹はなんとなく怪しい事に首を突っ込んでいるのは分かってたけど……」

「それは僕も思ったんだ。何であの三人が……」

次はシャルルが会話に入る。

「……もしかしたら……」

ラウラは呟くと他の三人がその言葉に異様に食いついた。

「もしかしたらって……どういこと!？」

シャルルはラウラに対して少し叫んでしまった。

「それは、旅館に戻ってから話そう。とりあえず教官の指示通り早く旅館に戻るんだ」

ラウラは自分のISの下へと行き、待機状態のレッグバンドへと戻す。それを見た他三人も自分のISをそれぞれの待機状態へと戻し、そして四人は旅館へと戻っていった。

織斑千冬と篠ノ之束。そして織斑一夏と葵春樹、篠ノ之箒の計五名は旅館のとある部屋を使わしてもらっていた。ここにはその五名以外は誰もいない。

ホログラムで映し出された画面には銀色のISが映し出されており、一夏たちの目の前に千冬が立つ。

「では、現状の説明をする――」

現在、アメリカとイスラエルが協同して開発されたIS『銀の福音^{ベル}』が今日未明、ハワイ沖でテスト運用、そして暴走したという。

さらにそのISはこの臨海学校の上空を飛び、IS学園の生徒に危険が及ぶ可能性があるとして早急にそれを無力化、停止させたいというのがこちらの考えであり、この問題については教師一同で何とかするという話になっていた。

「ちょっとよろしいですか、織斑先生。それでは何故私たちがここに呼ばれたのですか？」

箒の疑問ももっともである。何故、春樹たち学生がこんなにも危険な事件に首を突っ込む事になるのか。それは、篠ノ之束がここに来る前にとある連絡を受けていたからである。

「それは束が説明してくれる」

千冬がその場を退けると篠ノ之束は千冬が居た場所に立ち、

「じゃあ私から説明するね。実はここに来る前に一つの連絡があったんだ……。国際IS委員会からの連絡がね」

一同は驚愕した。なんていったって、国際IS委員会という、世界中のインフィニット・ストラトスを管轄している組織である。各国のISの保持数やその動きを監視しているのだが、その組織が実質暗部組織である束の下に連絡をよこしたのだ。

世間一般ではISの開発者である篠ノ之束は行方不明、という事になっているが、裏の世界ではちよつと違う。篠ノ之束という存在は、裏の世界で動いているのは、その裏の世界の人々にとっては常識である。だからこそ、篠ノ之束は命を今狙われているが、その理由はいまだ分からない。

「続けるよ。国際IS委員会は暗部組織の動きを察しているんだよ、今現在大きな動きを見せていることをね。だからこれに対抗する組織を立ち上げたいという案から、私の組織をバックアップしたいという話が出たんだよ。そして、今回のISの暴走を解決に導けたのなら、私の組織を正式にバックアップしてくれるという話が舞い込んできた」

つまり、今回の『銀の福音』の暴走は前から予測されていたということ。暗部の動きをある程度察知しているようなのである。

「そこで一夏、箒ちゃん。結論を出すときが来たよ……。事前に春樹から話を聞いていたと思うけど、私の組織に入ってくれるかな？でも入れば命を危険に晒す事になる。平和に生きていきたいというのなら、このまま回れ右をしてこの部屋から立ち去る事をオススメするけど……」

一夏と箒の二人は黙り込んでいる。

たかが一六歳の子供が人生を大きく変えることになる重要な選択肢を提示されてしまって、頭の中で色んな思考が渦巻いているのだろう。

だが、春樹はほんの一三歳のときに人生を大きく変える選択肢があっさりと決めたのだが、あの時は場合が場合だった為にすぐに結論を決めた。

しかし、今この現状はそのときの場合とは全く違う。春樹はあのとときに束を見捨てるという選択肢は絶対にありえないものだった。あれだけの事を経験して、そして束を助けざるを得なかった。

だが、今この二人はまだ拒否するだけの余裕はあるはずなのである。覚悟がなければはっきり言って束の組織に入らない方が良いと、

春樹と束自身は思っている。覚悟が無いのに暗部の奴らと戦おうだなんて、無駄に自分の命を溝に捨て^{どぶ}るようなものだ。それなら、最初から、このことは春樹と他の組織のメンバーに任せてもらった方が良いと思っている。

そして、最初に口を開いたのは一夏だった。

「俺は……入ります。束さんの組織に……。散々考えていたけど、俺は昔から春樹と兄弟みたいな関係だし、束さんは筭の大切なお姉さんだし、何だかんだでISというものを動かして楽しいし、でもそれを壊そうとする奴らを俺は許せないと思います。だから、束さんの組織に入って強くなろうと思います。そして、俺の大事なものを守ろうと、そう決心しました」

一夏は自分の決心を語ってくれた。それを春樹と束、千冬は心からその気持ちを受け止めてあげた。彼のその決心を貶すものなどない。いや、貶すところなど一つもない。彼の決心はとてもカッコよくて勇敢で、それでもって頼もしいものだ。

春樹も一夏の発言には、自分は織斑家の家族の一員なんだということを感じた。

そして後一人、篠ノ之箒の返事を待つだけである。

すると彼女はゆっくりと目を閉じる。誰一人として話すものなどはない。この部屋は静寂に包まれる……。

そして、彼女は目を開けた。その目は決心がついたのか、先ほどまでとは別人のようにキリッとした目になっていた。力強い眼差し、それを春樹と束、千冬は感じ取る。

「私は……姉さんの組織に入ります。理由はほとんど一夏と同じです。私もこのISを動かす事が楽しくなってきた。春樹に教わって、ISを自分の手足の様に動かせるようになった。それに私は快感を覚えました。私はそんなものを悪用する奴らを許せません。それに……姉さんの命が狙われているのに、私が何もしないなんて……そんな事は出来ません。この組織に入る権利があるなら、私は入ります」束は自分の妹の言葉に涙目になっていた。自分の妹からこんな言

葉を聞けたのだから姉としてはこれほど嬉しい事はないだろう。

こうして、一夏と箒は正式に束の組織の一員となった。これより春樹と共に危険な任務に立ち向かっていく事になる。どんな事が起きようとも、この二人は自分が降した判断にはなんら後悔はしないだろう。それほど二人の目は覚悟を決めた目をしていたのだ。

そしてこれから今回の任務について語られる。

千冬が再びモニタの前に立つと任務についての話を進めた。

「では、今回の任務の内容について話す。今回のターゲットは先ほども言ったとおり『銀の福音』^{シルバリオ・ゴスペル}、以後『福音』とするが、それが今回のターゲットだ。これはアメリカのテストパイロットである『ナスターシャ・ファイルス』という人物が『福音』のテストを行っている時に謎の暴走を起こし、制御不能に陥ったそうだ。そこで、貴様らはこの『福音』を機能停止させ、パイロットを救出するのが今回の任務だ。何か質問は？」

すると、箒は挙手をし、

「その『福音』の詳しいスペックを教えてくださいと思うのですが」「うむ。これは国家機密の事項に触れてしまう為、絶対に口外してはならない。もし、口外してしまった場合はそれ相応の対応を受ける事になる。ま、既に束の組織に入った時点で大丈夫だとは思いますが……。では、『福音』のスペックだが――」

シルバリオ・ゴスペル、銀の福音は射撃特化型の機体であり、背中のウイングも含め全身に計三六門の砲身があり、ビーム系の弾を撃ち出す。

何より怖いのはその砲身の多さであり、そこから撃たれるビームの弾幕は恐ろしいの一言に限る。特に一夏の『白式』や春樹の『熾天使』はスピードに特化させ、シールドエネルギーを極限まで削った機体はこのISとは少々分が悪いだろう。弾幕を張られ、自慢のスピードを使ってさえ回避が間に合わないような場面に遭遇する危険性があるからだ。

「なるほど……了解いたしました」

「よし。では、作戦内容を説明する――」

今回の『福音』を撃退する為の作戦。それは、『白式』による最大出力の『零落白夜』による一撃必殺の作戦だ。

まず、篠ノ之箒の『紅椿』の超高度度ハイパーセンサーを利用する為に一夏は背負ってもらい、それを頼りに全速力で『福音』の下へと接近する。

そして、そのまま一夏は『零落白夜』を発動し、『福音』を斬る。といったものである。

三六門もの砲身がある『福音』相手では長期戦を強いられると、こちらが不利になる可能性が大いにあるからである。

しかし、これはおおまかで最高の動きである机上の作戦内容ではない。だから、もし失敗した場合は一夏と箒には臨機応変に対応してもらわなくていけない。

その場合は、『紅椿』のマルチに対応できる装備で一夏のサポートをし、次の『零落白夜』を発動し、斬れるタイミングを作ってやるしかない。

「以上だが、質問はあるか？」

すると一夏は手を挙げて、

「春樹は、この作戦には参加しないの……ですか？」

すると春樹は微笑みながら一夏の方を向いて、

「すまないな、一夏、箒。俺は他の仕事があるんだ。だから……今回はお前達に同行できない。最初の任務なのにお前達二人だけに頼んでしまつて本当にすまないと思つてるよ。だけど、今回の俺の仕事もやらない訳にはいかないんだ」

このとき、一夏は思った。

（もしかして……例の男の事なのか？）

例の男とは、一夏がシャルルと一緒に水着を買いに来たときに一夏は一旦シャルルと別れて箒へのプレゼントを買いに行き、そしてその時会った怪しい男の事だ。春樹の事を探していて、何かしらの情報を持っているだろう事をほのめかしていたその男だ。

もし、その男の事ならば……春樹はどうなってしまったのか、不安もある中、春樹なら何とかしてくれる、という期待もあった。今まで春樹はＩＳ学園で起こってきた事件を解決に導いてきたのだから「春樹……お前、生きて帰って来いよ……」

一夏は不安げな顔をして春樹に言うと、

「はは、お互いにな」

春樹は笑ってその言葉を返してあげた。恐らく春樹なりの気遣いであろう。必要以上に春樹の事を心配している一夏を春樹は笑って返事をしてあげる事で、一夏にはちょっとした安心感を持たすことが出来る。

だが、春樹の本心はちよつと違った。不安に恐怖、それに駆られていた。

先ほど、ここに来る間に束から受けた話。それはここら付近に未確認のＩＳがいるという情報だった。一応、そのＩＳもステルスをかけているらしいが、流石はＩＳの生みの親だけあってそういう対応は早くて、手馴れている。

実質、初めてのＩＳによる一対一の対人戦。命を懸けた人とのぶつかり合い。今まで身体を鍛えてきた春樹であっても、たかが一六歳の男子高校生が命を懸けた戦いなど恐怖を感じないわけではないのだ。

作戦成功の為に顔にはそんな恐怖心というものは表さない。それだけでも大いに評価できることであろう。

「よし、なら一五分に作戦を開始する。各自、ＩＳの最終確認等を済まし、指定された場所に待機している。作戦開始の合図で作戦開始、先ほど言ったプランどおりに最初はやれ。上手くいかなければそっちで上手く立ち回ってくれ。……死ぬなよ」

千冬は最後にボソツと言うと、そのままモニタの方を向いた。

そして、一夏と箒、そして春樹はお互いに目を合わせて視線だけの会話をすると、お互いに頷き、そしてそのままこの部屋を出た。

三人はそれぞれ、作戦開始時点へと急ぐ。

ここは旅館のとある大部屋。ここにはIS学園の一年生の生徒の一部がいる。鳳鈴音とセシリア・オルコット、シャルロット・デュノアにラウラ・ボーデヴィツヒもここにいた。

ここにいる生徒達はわけも分からず、いきなりISの授業は中止と言われこの部屋に入れられたわけだが、彼女達四人の親友である織斑一夏と篠ノ之箒、そして葵春樹はここに居なかった。

その三人とさっきまで一緒だったこの四人は何かしらやばい事になっているのはなんとなくだが察していた。それにその三人が関わっている事は一目瞭然。だが、そんなことを周りの人に言ったところで何の意味もない。余計に混乱が起るだけだし、何の得にもならない。

マイナスな要素しかないので、話す必要はなかった。

「春樹さん、大丈夫でしょうか？」

最初に口を開いたのはセシリアであった。

昨日、あんな事が起きたのだが、あれは無かったかのように話し出すセシリア。あの事は誰にも話せない。相談しようにも相談できる相手がいないのが現状だ。しいて言えばラウラだろう。

すると、そのラウラがセシリアの言葉に返してきた。

「案ずるな。どんなことだろうと春樹の奴は今回の任務を終えてケロッとして帰ってくるだろう。アイツは……強いからな」

ラウラは信じる。あの時、ドイツ軍基地でのあの事件のときに見せてくれた春樹の力を。

そして、シャルルは一夏の事を気にしていた。

「でも、何で一夏は春樹と一緒に何処かに行っちゃったんだろう……大丈夫かな？」

すると、隣の鈴音もそれに頷いて、

「うん。箒も一緒に行ったけど、心配よね……」

今度はセシリアが、

「あのときの山田教諭の顔……ただ事ではなかったですわよね……？」

あのととき、山田先生が専用機持ちがテストを行っていた岩場の海岸に山田先生が訪れたときの表情は焦りが見えており、ただ事ではないのは優に察する事はできたのだ。

するとラウラはある事を話す。

「ここに来る前に言ってた、もしかしたらって事だが……」

ラウラはそう言うのと、周りの三人は静かに頷いてラウラの話进行こうとする。

「もしかしたら、私と春樹がドイツ軍基地で共に鍛えていたときに起きた事件に関連しているかもしれない」

シャルルはラウラに疑問をぶつける。

「ラウラ、それは……話していいことなのかな？」

「……大丈夫だ、むしろ、皆に聞いて欲しい。ただ、あんまり口外しないで欲しい……」

ラウラはそう言うのと、他の三人は頷いてラウラと共に生徒がいない大部屋の端に行く。そして囲むように皆は座ると、ラウラは語りだす。

「三年前……私は春樹と共にドイツ軍で共に鍛えていた。そして、そのとき外には知らされていない事件が起こった。この事件を知るのはその当時からドイツ軍に居た人物と、織斑教官と……春樹と篠ノ之束だ……」

ラウラの口から、信じられない……いや、そんなことだろうと心のどこかでそう思っていたとしても認めたくない人物の名前がそこにあった。

葵春樹だ。

それに、篠ノ之束の名前も出てきた。

セシリアは昨日の事から、何で春樹はあんな状態だったのか、なんとなくだが想像できた。

そして、ラウラは言葉を続ける。

「そのとき、ドイツ軍は襲撃にあった。たった二機のＩＳにな」
他三人の表所は驚愕の顔になる。その言葉は到底信じられなかった。軍隊相手にたった二機のＩＳで襲撃をかけたことに。

「そして、ドイツ軍は機能停止状態にまでに追い詰められた。そのときのターゲットがそのとき何故かドイツ軍基地に来ていた篠ノ之束だった。そして、春樹は命がけで篠ノ之束を守っていた。その時に、ほとんど初めて動かすＩＳを使って、しかもドイツ軍の量産機でその二機のＩＳを圧倒した。本当に信じられない光景だったよ……」

周りの三人はただ、じっとその話を聞いているのに精一杯だった。いきなりこんな事を言われて、頭の中で情報を整理するだけで精一杯だったからだ。

「待ってください。では、春樹さんはそのドイツ軍基地を襲撃した者たちと関係があるものと今まで戦ってきたと言いますの!？」

「そうだ……おそらくな」

セシリアはようやく理解した。昨日のあの衝動的な行動。今までの春樹ならば絶対にありえない態度。そして束を守らなければならぬと言ったその意味。あまりにも重くて、大きな責任。彼女は昨日春樹に対してあんな風に冷たく当たってしまった事を悔やんだ。彼も凄く悩んでいたのだと、今はっきりと理解できた。

「そんなことって……ありますの……？」

セシリアは言葉を押し殺して、本当に小さくそう呟いた。だが、周りの他三人にはその声は聞こえていた。しかし、その三人は聞いていないことにしてあげた。

セシリアと春樹の間でいったい何があったのか、それはまったく持って分からない。だからこそ誰もそのことは触れなかった。

「だけど、僕は心配だよ……箒さんのこと……。もし、ＩＳでの戦

いなんてものがあつたら……」

シャルルはそう言った。それは、篠ノ之箒のISの熟練度が一夏と春樹に比べて劣っているのだからだ。

箒は『紅椿』を手にしてからまだ一ヶ月も経っていない。だからそれだけ春樹や一夏に比べて『紅椿』という自分の専用機の熟練度は劣っているはずだ。なのに、そんな状態で危険な任務に行くというのはあまりにも危険すぎる。

「恐らく、外で何か危険な事が起こっているはず。じゃなかったら全生徒が旅館内にISの訓練を中止してまで閉じ込めるなんてことは無いと思うんだ」

シャルルはそう言うのと鈴音は、

「確かに……そうなると、やっぱり箒の事が心配ね……」
するとラウラは、

「大丈夫だ。春樹のISの操縦テクニックは誰よりもある。三年前よりも遥かに強くなっているのは私が身を持って分かっている。箒も一夏も、何があっても守ってくれるはずだ」

「ですが……」

今度はセシリアが出ない声を搾り出して喋りだす。

「そんな確証はありませんでしょう？ 一夏さんや箒さんを春樹さんが守り切れるなんてことは、それは春樹さん自信も同じ事……春樹さんですら危険な目に遭う可能性だって……」

「セシリア!!」

シャルルはつい叫んでしまった。周りの生徒がこっちに一斉に振り向いてきた。そんなこともお構いなしにセシリアの肩をつかみ出す。セシリアがあまりにもマイナス思考になってしまっているからだ。

「セシリア……そんなことを考えちゃ駄目だよ……。もっとポジティブに考えなくちゃ。まだ一夏たちが本当にそんな危険な任務に向かったのかどうかも分からないんだよ？ 確信は実の所ないんだ。だから、これだけ考えればいいんじゃないかな……『一夏と春樹と

箒さんが無事に僕達の前に再び現れる』事をね……」

シャルルにそう言われたセシリアはハッと我に返った。さっきまで自分が取り乱してしまった事に気付いて反省をした。

「ごめんなさい。少々取り乱してしまいましたわね……。シャルルさんの言う通りですわね。皆さんが無事に私たちの前に現れるのを待ちましょうか。そうなる事を願って」

鈴音とシャルル、ラウラの三人はセシリアの言葉に頷くと、四人は両手を握り締めて強く願った。

『一夏と春樹と箒が、無事に自分達の目の前に現れるように』と……。

一夏と箒は海岸の方まで来ており、作戦開始まで残り五分を切った。

二人ともI Sの最終確認も終えて、後は自分自身を落ち着かせて任務に集中する事だけを考えるだけであつた。

「箒……大丈夫か？」

「あ、ああ。一夏こそ……気を抜くでないぞ」

箒はなんだかよそよそしさが見られていた。

恐らく昨日の事だろう。昨日の夜に彼女が目撃した一夏と束が二人きりで気の陰に隠れて楽しそうに会話していた事が原因だ。

あの一軒から箒は一夏との距離を分らない程度だが開けていたし、箒には一夏にそのときの事を尋ねる勇氣もなかった。もし、あのことが本当に色恋沙汰だったのなら箒自信はどれだけショックを受けてしまうのかも計り知れない。

すると、千冬から連絡が入った。

『織斑、篠ノ之、聞こえているか？』

二人は「はい」と返事をする、千冬は続けて作戦概要を確認する。

『作戦開始三分前だ。では、改めて作戦概要を確認する。織斑は篠ノ之の背中に乗り、ハイパーセンサーを頼りに超音速飛行で福音を搜索。発見次第そのまま超音速飛行で福音に接近。そして織斑による零落白夜で一撃必殺で福音を撃墜。いいな？』

「了解」

二人はそう言う、千冬は頷いて笑顔で二人を見ると、そのまま連絡する為の回線を切った。

作戦開始まで残り二分。一夏は箒に背負ってもらい、ガッチリと

『紅椿』の肩部を掴みホールドし、急加速に備える。

箒はブースターの出力調整をして完璧なスタートダッシュが出来るように万全の注意を払う。

「一夏、準備は良いか？ 残り一分三〇秒だ……」

「いいぜ、箒。この任務、絶対に成功させよう。そして、無事にあいつらの下に帰るんだ」

これから始まるのは命がけの任務であり、今まで春樹と行ってきたような訓練ではない。失敗すれば死ぬ可能性だってある。だけど、この任務をちゃんとした覚悟で引き受けた以上、必ず成功させて、皆の前に現れることが自分達の目的だ。

この任務が失敗すれば、臨海学校に来たIS学園の一年生は危険に晒されてしまう。それを回避する為にも一夏と箒は必ず『銀の福音』を撃墜し、機能停止させてそのパイロットであるナスターシャ・ファイルスを救出する。そして自分達は無事に帰ってくる。それが今回の任務だ。

時間は刻一刻と迫ってくる。ついには一分を切り、二人には額に汗があふれ出てくるような感じに襲われる。恐怖と勇気、そして責任。それがここの二人に押し寄せてくる。まるで津波のように目に見える恐怖のようにも感じている。

箒は一層強くブースターを吹かせる。段々と音が大きくなっていき、今にでも飛び出しそうな感じがする音に変化していく。任務開始まで残り一〇秒。

「いくぞ……一夏……！」

「ああ！」

その時、ISからアラームが鳴る。作戦開始の合図だ。その瞬間、『紅椿』は砂浜からその姿を消した。

物凄いスピードで『福音』がいるであろうポイントへと超音速飛行する。出ているスピードは1225km/hを超え、まさに超音速飛行である。一夏と箒の二人はISの機能である『パッセル・イナーシャル・キャンセラー』通称『PIC』のおかげで慣性の法則

を無視することが出来る。よってこれだけの速度で飛行しても彼らにはGというものがからない。だからこれだけの速度での飛行が可能なのである。

（なんだよ、この速さは……半端ない……！！）

一夏はそう思った。

箒は全神経を集中させ、ハイパーセンサーを頼りに『福音』を索敵する。

そして一夏は『雪片・式型』を握り締め、『瞬間加速』の用意をしている。いつ『福音』に遭遇しても良い様に、必ず作戦を成功させる為に一夏は全神経を剣を握る右腕に集中させる。

そして海岸から10km程飛んだその時、ハイパーセンサーに反応があった。ここからちょうど2km進んだところに『福音』は飛行している。このまま飛べば鉢合わせになるだろう。

「一夏、反応があったぞ、準備は良いか？」

「大丈夫だ。いつでもいける！」

一夏はより一層『雪片・式型』を強く握り締める。

「よし、今から七秒後に接触する。カウント行くぞ！」

すると、一夏のISの網膜投影された画面にはタイマーが表示され、刻一刻とその時間は減っていく……。七、六、五、四……と……。

そして残り三秒……。

一夏は息をも潜め、『瞬間加速』をする為に『紅椿』から手を離れたその瞬間、一夏は『紅椿』から落ちると『白式』は『瞬間加速』により瞬間的に最高速度を出す。一直線に加速すると、一夏は最高出力で『零落白夜』を発動し、『雪片・式型』からはビームの刃が展開される。

次の瞬間、目の前には白銀のISが現れた。そのISこそ正しく『銀の福音』そのものだ。

一夏は剣を振るう。一撃必殺、それがこの任務の目標だった……。しかし、その目標は失敗に終わってしまう。

「なッ!？」

一夏の振るった剣は『銀の福音』に当たらなかった。否、少しだが『福音』のボディには傷が出来ていた。ほんの少しなのだが一夏の攻撃は掠っていた。

しかし、それは致命傷にはならなかったらしく、『福音』は悠々と空を飛んでいるが、少なくとも大きなダメージは入っただろう。

『零落白夜』はISのシールドバリアを切り裂いて直接IS本体に攻撃を当て、ISの機能である『絶対防御』を強制発動させ、シールドバリアのエネルギーを大量に消費させるというものだからだ。

一夏の攻撃が掠ったその瞬間、『福音』の動きはガラリと変わった。正に戦闘態勢という言葉以外考えられない程の威圧感が二人を襲った。こちらがやらねばこっちがやられてしまう。そう直感した二人は焦りと共に必ずこの『福音』を倒さなければならぬ責務に追われていた。

「一夏!」

「分かっている箒。サポート……頼む……!!」

「ああ……任せろ!」

このまま帰ることは、束の組織に入ることを自分で決めたその覚悟を無かった事にする事になるし、彼女には多大なる迷惑をかけることになる。絶対にこの『福音』を倒してから帰らないと、束や春樹、千冬に合わせる顔がない。

一夏は『零落白夜』を解除すると、二人は『福音』に立ち向かう。まずは箒が先攻して『福音』に隙を作らなければならない。『零落白夜』で斬りつけるその隙を。

箒は『福音』の方へと飛んでいき、二本の日本刀である『雨月』と『空裂』を握り締めて斬りつける。だが、その攻撃は簡単にかわされてしまう。流星は超高速型のISである。

『福音』は箒の攻撃を避けたと同時に距離を取り、その場でくりと一回転すると全身の砲身からビームが連射される。それはビームの雨の嵐と表現するのがピッタリで、二人は「ヤバイ」と思い逃

げるのがやつとであつた。

そのビームの雨が止み、逃げ切った一夏は吐き捨てる様に言った。
「クソッ!! あんな化け物機体をどうやって……、でもやるしかないんだ。待ってくれている千冬姉や束さん。そして別の仕事をしている春樹の為に俺たちは負けられないんだ。そうだろ? 箒!」

箒はニツコリと笑うと、一夏の方を見て、

「ああ。そうだな……。一夏、この任務が終わったら話したいことがある。だから、絶対に成功させて帰るぞ!」

箒にはもはや先ほどのまでの一夏に対する心配事は何もかも抜けていた。あの束との事はとりあえずは気にしない事にした。とりあえずこの任務を無事に成功させて、それから改めて一夏に真正面からぶつかると、そう決心した。

「わかった」

一夏はその箒の話の深い内容までは理解していなかったが、大切な話だということはなんとなくだが理解していた。だからこそ、彼女の為に無事にこの任務を成功させるという気持ちが更に昂ぶる。

『福音』の攻撃は終わらず、翼から無数のビームが更に降り注ぐ。二人はそれを自慢のスピードでかわしていくが、箒は数発攻撃をくらってしまう。

しかし一夏は「攻撃が当たる」イコール「死」を意味するので、今までセシリアと行ってきた回避練習の成果を発揮して全てのビームをかわしていく。

一夏はそのまま『福音』に接近を試みるが、やはり遠距離特化型だけあってビームを攻撃を行い接近を許さない。やはり一夏一人だけでは倒す事のできない相手。なら……。箒とともに共闘するしか方法はない。

「箒!! お前が接近してアイツの動きを止めて欲しい。少しの間でいい、お願いだ!」

「……分かった。いくぞ、一夏!!」

箒は先攻して『福音』の前に出て、一夏は大きく迂回して『福音』との距離を一定になるように取る。

箒は『雨月』によるビーム攻撃と、『空裂』によるビーム斬撃によって牽制し、『福音』に反撃の余地を与えないようにする。

一夏も無理やり腕に取り付けた新装備である『ビームバルカン』で箒を中距離からサポート。本当には攻撃の余地を与えない。正にビームの弾幕を逆に張ってやる二人。

必死にビーム攻撃で牽制しつつ『福音』を追い掛け回していた箒はついにその前に立つと二本の剣で『福音』を攻撃する。何度も何度も斬り付け、防御の体制しか取らせない。

その場が硬直状態となる。攻撃するタイミングはここしかない。

「一夏、今だ!!」

箒はありったけの声で叫ぶと、一夏はそれに反応するように『瞬間加速』^{ツシヨン・ブースト}を行う。回りの景色がゆっくりとなる。一夏には周りの全ての現象がともゆっくりに見える。狙いは『銀の福音』ただ一つ。一夏は『零落白夜』を発動し、『雪片・式型』の先端からはビームの刃が出てくる。

チャンスはこのタイミング。

一夏は『福音』を斬ろうとしたその瞬間、一夏の目に飛び込んできたのは船だった。ここら辺一帯の海域はIS学園の教師及び国際IS委員会の人たちが閉鎖したはずなのに、そこに見えたのは船だった。

（なんで……？　なんでこんな所に船が!?!）

その時、箒が押さえ込んでいた『福音』がビームを放ち箒を吹き飛ばす。その時の流れ弾がその船に飛んでいくのを一夏は確認した。（おい……ふざけんな……。どういふことだよ、これは……!）

一夏には今、僅か一六歳の子供には残酷な選択肢が突きつけられている。一つは『船に乗っている人を見捨てて銀の福音を攻撃して任務を達成すること』で、もう一つは『船に乗っている人を助ける代わりに箒が作ってくれた銀の福音を倒すチャンスが無駄にするこ

と』である。

あまりにも残酷で究極の選択肢、それを一夏は一秒も立たない内に決めなくてはいけない。周りがゆっくり動いているように見える……。これは一夏が剣道の稽古をやっていると、時々そのような現象に遭う事は何度かあった。それがたった今、この場でその現象に遭遇している。無限に引きのばれるようにも感じるこの空間。

その時……一夏は船の人を助けた。

一夏は流れ弾を全て剣でなぎ払い、船の方へと飛んでいくのを防いだ。

「一夏！？　どういうことだ！？」

「ごめん、箒。でも……俺は船の人たちを見捨てられなかった……！」

「何を……？　……あ……」

箒は一瞬何か分からなかったが、一夏から視点を外れて、海の方へと目を向けるとそこには本来入れるはずもないところに船が悠々と浮いていたのだ。

一方『銀の福音』は二人から遠いところで動きを一旦止めていた。シールドエネルギーの残り残量が結構危険な状態なのだろうか。先ほどまで一夏と箒の二人のビーム攻撃による弾幕が結構な量のシールドエネルギーを削る結果になったようだ。

「一夏、何故止めを刺さなかった！？」

「あの船を見殺しになんて出来ないんだよ！！」

一夏は叫び、言葉を続けた。

「とりあえず、もう一度動きを止めてみよう。お願いだ……」

「……………わかった」

このときの箒の言葉は少し冷たさを一夏は感じた。実際、一夏自信も今の発言は凶々しいと思っている。だが、この任務を成功させる為にも、何でも良いから足掻くしかなかった。

先ほどと同じように箒が先攻して『福音』に向かって行き、一夏はこれまた先ほどと同じ威容に一定の距離を保つ為にある程度『福音』に近づく。

しかし、先ほどと同じ事に大人しく引っかかるわけもなく『福音』はいとも簡単に一夏と箒の連携を崩すように動き回る。あちらも落とされないように必死のようだ。

（くそっ！ やっぱりさっきは船の人を見殺しにしてまで止めを刺すべきだったのか？）

中々次の攻撃のチャンスがやってこない。おそらく二人の動きは『福音』には安易に予測できるほど学習しているのだろう。この作戦が一撃必殺というのもそこにある。こういった戦闘にまだ不慣れた二人には『零落白夜』による一撃必殺を決めなければ、相手は動きを読まれるようになってしまい、段々と不利になっていくことを作戦を考えた千冬たちは予測していたのだ。

二人が考えるフォーメーションをことごとく崩していく『福音』に二人のコンビネーションというものはもはや無いに等しい状態になっていた。

お互いにお互いの事を考えない動きになりつつあるのだ。このまま行けばいずれは負けることになるだろう。もし新しい動きが出来て、良いコンビネーションを見せてくれればこの状況を覆すことも可能なだろうが、今の二人にはとても出来るような芸当ではなかった。いくら幼馴染でも六年も離れていれば、ちょっとした距離はできてしまうし、仮にずっと一緒だったとしても所詮他人であり、そういったコンビネーションというものは練習を繰り返さなければ身につかないだろう。

今回の場合、明らかに練習不足で、これに関しては春樹のミスだった。今までやってきたことは個人の能力を鍛える練習であって、この二人のコンビネーションを鍛える練習は今までやってきていない。

「くっそおおおおおお！」

心のどこかでもう無理なのではないか、という感情があったのかもう作戦というものは何も無かった。一夏は『零落白夜』を発動して、ただ叫んで、馬鹿の一つ覚えのように、一直線に『瞬間加速』イグニッション・ブーストで突っ込む攻撃をした。

しかし、こんな攻撃など当たるはずもなく、簡単に避けられてしまふ。更に『零落白夜』は強制解除され、一夏は網膜投影されたモニタに絶望的なメッセージが表示される。

『稼動エネルギー限界量。直ちに戦闘中止し、指定ポイントまで退避せよ』と……。

一夏は諦め切れなかった。

しかし、これ以上続けても勝ち星は見えてこない。これから見えるのは自分達が敗北する未来だけで、だからここは一時撤退するしかなかった。

「クソッ、クソッ、クソッ!! 箒!!」

一夏ふり向いて箒の方を見ると、一夏の瞳に写った光景は信じられない、いや、信じたくないものであった。

箒が『銀の福音』によるビームの雨をモロに受けてしまっているところだった。そこから退避しようにも自分の力だけではそのビームの雨によって身動きが取れない状態になっていた。

「うわああああああああああ!!」

箒は叫び、更にシールドエネルギーは無くなってしまい海に突き落とされた。

そして、焼き切れたリボンがゆっくりとひらひら揺れながら落ちていく……。

「箒!!」

一夏は叫んで、箒の下へとダッシュしその身体を受け止める。

「箒……箒? 箒!」

一夏は何度も彼女の名前を叫び続けた。だが、その言葉に彼女は何の返事も返してくれない。一夏は絶望しか感じられなかった。考えは段々ネガティブな方向へと向かっていく。

すると『銀の福音』は一夏の方を見る、攻撃態勢になりビームの雨を今度は一夏へと放つ。

だが、一夏はすぐに『瞬間加速』イグニッション・ブーストを行い、その攻撃をかわずと、そのまま『福音』から遠退き、戦闘エリアからの脱出に成功した。

一夏と箒が『銀の福音』と対峙している頃、葵春樹はまた違う場所に向かっていた。

一夏たちを束の組織に招き入れる為にブリーフィングを始める少し前、束の持っているセンサーが探知したその反応はISであった。法律上、ISを指定された場所以外で展開して使用することは禁じられており、それが見つかった瞬間に軍で特別に配置されているIS部隊、ISに関しての事件を担当する警察みたいなものだが、それがそのIS使用者を取り囲んで拘束してしまうだろう。

しかしそのISは準備が良く、ステルス機能と光学迷彩を装備しており、そう簡単には発見されにくいようにしていた。つまり……あまり人に見つかってはならないような事をしている可能性が高いといえる。

だから春樹はそのISをセンサーの微弱な反応を頼りにその正体と目的を探ることと、もし世界を脅かすような裏組織の人間だった場合は戦って拘束をすることが今回春樹に課せられた任務だ。

春樹はセンサーの微弱な反応を頼りに空中を彷徨っている。もうかれこれ一〇分程度飛んでいるが、ISの姿は見えてこない。確かにセンサーにはこちら辺に微弱な反応があるのだが……。

春樹はもっと高度を上げて見ようと思い春樹は上昇した。雲により視界が遮られるが、春樹はそんなことには構わずそのまま雲を突っ切る。

雲を抜けると青い空が見え、周りを見回すとそこには……ISがいた。

「やっと見つけた……おい、お前！」

ISを身につけた人物は春樹に気付いてこちらを向くと、黒いボ

デイが太陽の光に反射して眩しく輝いている。

黒いIS。

春樹にとっては黒いISには何かと縁があるようだ。IS学園を襲った黒い無人機のISに、『シュヴァルツェア・ハーゼ』のイメージカラーとその部隊のISの黒色。そして……あのとき、ドイツ軍基地を襲撃した奴らも黒色のISを身に纏っていた。

「そこのお前！ 一体こんなところで何をしている？」

目の前のISの操縦者は、なんの躊躇いも驚きもなく、淡々と話し出す。

「おやおや……こんなにも早く見つかってしまうとはね……。待っていたよ、葵春樹君」

その目の前のISの主の声は間違いなく男のものだった。ということは、例の『因子』を同じく持っているものなのかもしれない。

そして、何故か春樹の名前を知っていたので、春樹は警戒を強めて戦闘態勢に入る。

「ははは、何もそんなに強張らなくても。君と少し話がしたい」

と目の前の人物がそう言うが、春樹は警戒を緩めたりはしない。

いつ襲われるかわからないし、一撃でも攻撃を喰らった瞬間、それは負けに繋がるからだ。

「話だって……？ ならお前の名前を教えろ、それが条件だ」

「了解した……なら、レイブリック・アキュラ……と言っても言うておこうかな」

レイブリック・アキュラというのは恐らく偽名だろう。こういう仕事をしている奴らは普通はコードネームで仕事をしている。この名前はコードネームかなんかだろう。

「偽名か？」

「さあね、どう取ろうがお前の勝手だ。さて、話というのはだな……お前は篠ノ之束をどう思っているのか……まずはそれを聞きたい」
春樹はその話の内容が予想もしていなかった事なので少しばかり戸惑ったが、篠ノ之束の命を狙う者ならばそういった話題を振って

もおかしくはない。

「どうして束さんの事を……何が狙いだ？」

「それは教えられないな」

春樹は正直なところ、束のことが好きになっている。自分ではその「好きだ」という結論までたどり着けていないが、そういった感情にはなりつつある。いや、彼の中で束の事を好きになってはいけないと思っただけのどこかに枷をつけているのかもしれない。好きになる事で、束に執着してしまい、周りが見えなくなってしまうことを恐れている。だけど、どこかほっとけないあの感じは春樹自身の「束を守る」という事のエネルギー源になっているともいえる。

「束さんは……守ってあげたいと思えるようなそんな人です。頭は良いし、色んな事を知っている、そんなところに憧れるけど、時々アホの子になってしまう……。そんな彼女を俺は……守ってあげたいと思うんです。これが……俺の想いです」

するとレイブリックは薄気味悪い笑い声を上げて、
「そうか……それがお前の想いか……。でも、もし篠ノ之束の事を殺したいぐらい恨んでいる人がいて、そいつらが集まった組織があったとしたら……どうする？」

春樹は今までに起こったことが脳裏に蘇ってくる。特に、ドイツ軍基地の事は忘れてくても忘れられないほど印象に残っている。あのときの事は一寸狂わず思い出す自信が春樹にはあった。

今思えば、全ての始まりはあの時始まったのかもしれない。もし、あの時自分がドイツ軍基地に向く事がなかったら……こんな事にはならなかったのだろうか、と思う春樹。

「そんな奴らがいたなら……俺は俺が信じる正義を貫くだけだ」

「ふふ……良い答えだな……ッ!!」

レイブリックはいきなり春樹に斬りかかった。だが、そのいきなりの攻撃にもしっかりと反応して避けると、風を切り裂く音だけがそこだけに残る。

「何をッ!？」

「アンタが束を守る奴だというなら、まずは……お前を切り裂いてやる！」

レイブリックは『ビームブレード』を再び春樹に向かって斬りかかる。

春樹はそれを避け、こちらでも武器を構えた。その武器は剣の『シヤープネス・ブレード』であり、相手の剣に対抗するかのように同じく剣を振るうことにした。

「IS学園を襲ったあの黒い謎の無人ISはお前達の仕業か!？」

「それは俺たちじゃねえな、俺たちのターゲットは唯一つ……篠ノ之束だけだッ!!」

お互いの剣が交差し火花を散らす、レイブリックは一度距離をおくと、『ビームブレード』の先端からビームを発射し、春樹の事を狙撃した。

春樹はそれを避けると、敵に射撃武器があると判明した春樹は『ブレイドガン』を展開し、牽制の射撃を行いながら距離を詰めていく。

その牽制射撃を避けながらまたレイブリックも距離を詰めていく……段々と距離が縮まっていき、お互いの距離が零になると、またお互いの剣がぶつかり合う。

すると春樹は小さく笑い出して、

「準備運動はこの辺にするか？」

「そうだなあ、そうすることにするよ」

その瞬間、お互いの動きは激変した。戦闘スピードは格段に上がり、気が緩めばそのまま攻撃を一方的にくらってしままい、落されてしまうだろう。

春樹はこのとき確信した、奴が『因子』の力を発動したのだ……。だから、春樹も『因子』の力を行使する。

すると、春樹と『熾天使』との一体感が増加し、さらに五感が強化されたかのように、相手の動きがはっきりと見えるようになる。たとえば目を瞑っていても……だ。

これより、戦いは普通では体験できないような領域に達する事になる。

レイブリックと春樹の正確な射撃、それをお互いに間一髪で避けるともう一発発射する。レイブリックはそれを避け、春樹は『天使の翼』でそのビームを防ぐ。すると目の前にはレイブリックが春樹の首を斬り付けようとしていた。

春樹はそれをギリギリのタイミングで『ブレイドガン』の剣の部分で防ぐと、身体をひねってレイブリックを受け流し、後ろからビームを撃ち込んだ。

しかし、ビームはレイブリックを貫通した。当たった形跡もなく、ただそこにはレイブリックの黒いISがあるだけだった。

（センサーではお前はそこにいるのに……なんで当たらないんだよっ！？）

そう思った時にセンサーにはもう一つISがいることに気付いた。春樹は後ろから斬りかかろうとしているレイブリックの攻撃を見ずに身体を屈ませてかわした。

「質量を持った……残像!？」

ワンオフ・アビリティ

「そう、これが俺の単一能力仕様だ」

思わず春樹は舌打ちをしてしまった。

質量を持った残像……ということはセンサーにはあたかもそこにISが居るかのように表示されるし、肉眼でもそこにいるかのようにしか映らない。とてもやっかいな単一能力仕様だ。ワンオフ・アビリティこれを連続で発動されてしまうとセンサーには無数のISを感知してしまい、センサーを当てにできなくなる。後は肉眼で本物を見極めるしかない。

「くそっ……厄介なもん使いやがって……」

春樹はそう吐き捨てるが、レイブリックは手加減なんてものはするはずもなく、単一能力仕様を使っていく。

「お前に見極められるか？ 葵春樹……!」

無数に現れる残像。春樹のセンサーにはものの数十秒で五〇体以上ものISを感知してしまい、どこに本物がいるのか、センサーは

もはや当てにできない。だから、じつと目を凝らすのがどれが本物かは分からないし、いつ攻撃を仕掛けてくるのかも分からない。一撃受けたら終わりの仕様の『熾天使』^{セラフィム}は細心の注意を払わなくてはいけない。

だが、センサーも駄目、肉眼も駄目なら一体どうすればいいのか……。残る方法は「心の目」という所謂「心眼」というものを使わざるを得ない。春樹は元々相手の殺気を感じ取る能力を持っていた。それはこの「因子」の副作用的なものなのかは分からないが、今はこれに頼るしかなかった。

春樹はゆっくりと目を瞑り、神経を研ぎ澄ます。周りの光景をイメージして、どこに誰がいるのかを感じ取る。チャンスは一瞬。

目の前の残像が全て春樹に襲い掛かるが、この中に本物は一つで攻撃が当たるのも一つだ。その本物の攻撃だけを防ぐ事ができれば良い。

春樹は全神経を研ぎ澄ませて本物を見極め、そして春樹は目を瞑ったまま右上のレイブリック目掛けてビームを放った。

その攻撃は見事ヒットし、本体だけを残し、周りの五〇体もの質量を持った残像は消滅した。

レイブリックは当たり所が悪かったらしく、今の攻撃で大量のシールドエネルギーを奪われてしまった。

「お前……なんで……？」

レイブリックは悔しそうに春樹に聞く。

「なんでって……心眼ってやつかな……」

「ふん……非科学的だな……」

レイブリックは春樹のオカルトチックな話には興味がなかったらしく、そこまでの詮索はしなかったが、レイブリックの単一能力仕様を攻略されたのはとても大きなアドバンテージで、これでレイブリックは単一能力仕様を使って優位に立つことは難しくなってしまうと言える。

「そんなこと言ってられる場合か？ 俺にお前の単一能力仕様は通

ワソオフ・アビリティ

用しない」

ワンオフ・アビリティ

「そうかな……単一能力仕様は通用しなくても、それ以外で勝てばいいことだ。違うか？」

「……その通りだな。ふははは。さて、やろうか……どっちかが碎け散るまで！」

春樹は大きな鎌を構えてレイブリックに対して振ると、風が切れる音だけが鳴るとレイブリックの姿はそこにはない。春樹はレイブリックが後ろにいる事を感じ取り、身体を回してその場で一回転すると、まさに切りかかろうとしているレイブリックに攻撃が当たりそうになる。だが、その攻撃がキチンと見えているかのようにその攻撃を避けると、残像を残して春樹の視界から本体がいなくなる。

（いいねえ……ヤバイ。これほどのスリル……今まで味わった事がない……！）

この時、春樹の気持ちはとてもハイになっていた。気持ちがこの究極の戦いの中で物凄く昂ぶっており、いつもの春樹はそこにはいなかった。麻葉を与えられた人間のように頭の中はとてもクリアになって何処かがおかしくなってしまうているが、気持ちが昂ぶっている状態でも何処かしら戦闘については冷静な判断を下している。

どこからともなく斬りかかってくるレイブリックを最小限の動きで避ける春樹。その顔は何処かしら笑っていた。頭がどうかしてしまったのではないのか、という印象を受けるその表情はどこかしら狂気を感じさせる。

レイブリックはそんな春樹の顔を見て顔を引きつらせた。その時、ちよっとした隙が生まれ、春樹はそのチャンスを見逃すことなく鎌で攻撃をする。

ギリギリでレイブリックはその攻撃を避けると、春樹に向かって言った。

「おい、お前……。頭大丈夫か……？　なんだよ、その微笑みは？　何だよその余裕の表情は！？」

本当にどうにかしてしまったのではないのかと思ってしまう程、

今の春樹はどこかおかしくなっていた。そこにはいつもの優しい表情の彼はおらず、狂気に満ちた顔をする男がそこにいた。この戦闘を楽しんでしまっているような男が……。

「おい、それで終わりかよ？ まだまだこれからだろ？ なあ！？」
すると、一通の連絡が春樹の下に入った。春樹はその通話に出ると、束がとても必死に春樹に訴えかけた。

『春樹！！ 一夏が、箒ちゃんが……失敗して……箒ちゃんが、意識不明に……！！』

その言葉でようやく我に返る春樹。

そして、さっきまでの自分を思い出して、自分のその行動と言動に吐き気がしてくる。まるで違う人が乗り移ったかのような感覚だった。

すると、気が付けば目の前にはレイブリックがいた。

「……っ!？」

春樹は言葉が出なかった。何も出来ないままレイブリックに攻撃をくらってそのまま遙か下の海へと一直線に落下していく。

そして、攻撃を受けた直前に春樹の耳に飛んできた言葉。

「お前は……危険だ」

というレイブリックのささやくような声だった。

春樹の機体である『熾天使^{セラフィム}』は装甲を極限まで薄くした超ハイスピード型の機体であり、シールドエネルギーと引き換えにスピードを手に入れている。その装甲の薄さは強い攻撃を一回でも受けてしまったらアウトな程薄く、攻撃が当たらないことを前提に作られている。

しかし、攻撃をくらってしまった春樹は、そのたった一撃でシールドエネルギーがなくなり、戦闘続行不可能な状態に陥った。

海まで物凄いスピードで落下していく春樹は水面ギリギリでホバリングし、元の海岸まで一直線に逃げていく。とりあえず、レイブリックから出来る限り今は離れなくてはいけない。こんな状態では確実に死んでしまうからだ。

「一夏……箒……」

春樹は二人の顔を思い浮かべ、海岸へと戻っていった。

春樹は皆の居る旅館へと戻ってきた。春樹のISはたった一回の攻撃で致命的なダメージを負ってしまい、完全に修復するには少しばかり時間がかかりそうだった。

一先ず春樹は一夏と箒の下へと急ぐ。

春樹は作戦が失敗し、箒が負傷したと聞いたときには何故だか分からないうちがハイになっていた状態が一気に冷めていくのを感じていた。まるで、お酒に酔っている状態が身の回りにヤバイ事が起こった瞬間に酔いが醒めるような感じのようだった。

旅館の中へと入り、ブリーフィングルームとして使っていた場所へと行くと、そこには山田先生と織斑千冬、そして篠ノ之束が居た。「織斑先生、一夏と箒は何処です？」

そう聞くと千冬はビックリした後、春樹の方を見るとゆっくりと口をあけて、

「春樹か……。箒は元々私たちの部屋だったところで点滴を受けているよ。診に行くんだったら静かにな」

「わかりました。あと……。何があったんです？」

千冬は息を吐き、大きく息を吸い込んで深呼吸をしてから小さな声で話し出した。

「一夏が……判断ミスをしたらしい。それで福音に箒は撃墜されてしまい、拳句の果てに作戦は失敗してしまったそうだ」

「そうですか……。分かりました、ありがとうございます。それから束さん、ちょっと……」

春樹は千冬に一礼してから束を手招きすると、一旦この部屋から出て行く。

ロビーまで行き、お互いに向き合うと春樹はゆっくりと口をあけ

て、

「束さん。暗部組織らしき人物と交戦してきました」

「そう……大丈夫……だった？」

束はとても心配そうな顔で春樹を見る。彼女の内心は春樹にはあまり戦って欲しくないというのが正直な気持ちだ。

本当は自分の我が侘にここまで付き合ってもらう事はない。ただ、自分の愛する人には死んで欲しくないし、ずっと側にいて欲しい。ずっと自分を愛してもらいたい。そんな我が侘な気持ちが彼女の中にある。

彼はそんな我が侘な自分の為に命を懸けて戦ってくれている。この気持ちを無下にするのも失礼なことだが、彼女からすればそんな事をやめてでも自分の側にいて欲しかった。いっそのこと、春樹にはISを使える能力なんてものが無かった方がよかったとも思えてくる。

だが、春樹がISに乗れたからこそ彼女は春樹に対してこのような感情を抱くことになったし、今この状況がある。とてもやるせない気持ちになる。

「はい、大丈夫でしたよ。この俺を誰だと思ってるんですか？俺は束さんを助ける為なら死ぬなんてことは絶対にしませんよ」

春樹は笑顔でそう返す。それは彼の強がりであり、彼女の前では誰にも負けない「強い」男でならなくてはいけない、という想いの表れだ。

正直なところ、春樹をここまで動かす原動力というものは「篠ノ之束」そのものにある。

ドイツ軍基地にて、束を守る事を決意してからというもののそれだけを考えて生きてきた。

何を利用すれば良いのか、どういった努力をすれば良いのか、そういうことを考えて生きてきたのだ。

正直、春樹の中学校生活は一般の生徒が送るようなものではなかった。

本来ならば遊び惚けて楽しく暮らしていくのが極一般の中学生と
いうものだが、春樹はそんな余裕など無かった。やっている事は中
学生の枠をはみ出していた。

「頼もしいね……えへへ」

束は恥かしそうにして、笑って誤魔化すと、春樹は微笑んで言葉
を続ける。

「じゃあ、続けますね。先ほど交戦したのはレイブリックという男
でした。そして、その男も『因子』の力を行使し、通常ではありえ
ない動きをしてきました。あれは間違いありません」

「奴らの狙いは？」

「それは……篠ノ之束の殺害。恐らく、ドイツ軍基地を襲撃した組
織と同一だと思われます」

「そう……動機は分かる？」

「はい。奴らは篠ノ之束に恨みを持っているらしいですね。心当た
りがありますか？」

右手を顎にそえて、彼女は色々と思い出してみるのが、何も出てこ
なかった。自分が今までしてきた事といえば、学生時代等の事を除
くと『ISの開発』だけである。

「とても失礼な話だけど……私個人が人にやって来たことでは心当
たりはないね。でも、もし、ISの開発が関係していたのなら……」

ISという超ハイスペックなテクノロジーを開発した事は世界を
大きく揺るがした。

元々は宇宙開発を目的として作られたのだが、兵器として運用が
可能で、更にそれが様々な兵器を陵駕する存在と認識されたときは、
世界中がISというテクノロジーを巡って篠ノ之束本人とその研究
所の下へと駆けつけた。そして、彼女の下には莫大な金がつぎ込ま
れたのだが、軍事目的としての使用を頑なに拒否した彼女は一部の
国から追われる身となり、この日本という国自体に保護された。

だが、このテクノロジーを日本だけ所持する事は国際問題になり
かねない。そこで、日本という国家は篠ノ之束を説得。「軍事利用

の禁止」、「核となる『コア』の製造方法を篠ノ之束本人のみが所持する」という条件で世界にISの詳細情報を流した。

もし、それによって誰かが不幸になったのだとしたら、篠ノ之束が恨まれるのも分からなくはない。「篠ノ之束があんなものを開発なんかしなければ、こんな事にはならなかった!」と思う人も大勢いるだろう。

「なるほど……やはり全てはISですか……」

「うん……もしかしたら、ISなんてものは生み出さない方が良かったのかもね。ろくな事が起きていないし……」

「後悔しても仕方がないですよ、束さん。時間は決して戻せない。タイムマシンなんてものが出来てしまったらそれこそ世界が大変な事になる。だから、今のこの状況をどうするのか、それだけを考えましょうよ」

「うん……」

「では、俺はこれで。とりあえず箒と一夏の様子を見てきます。これからの事はそれから決めましょう。今は一夏の様態を見ておく必要がある。だって、『零落白夜』が今回のキーアイテムですからね」

束は真剣な表情になり、

「そうだね、一夏の『零落白夜』は今回の作戦ではとても重要だからね。じゃあ、春にゃん。箒ちゃんと一夏の様子、見てきて」

「はい」

春樹は一礼してロビーを後にすると、事前に配られた部屋割りが書かれているプリントを頼りに先生方々の部屋を探す。

周りは物凄く静かで、聞こえてくるのは春樹の足音だけ。束の方は近くの椅子に座って静かに何かを考えているし、他の生徒はまた離れた大部屋で一年生の生徒が拘束されている。だから、こっちの方まで生徒は来る事はないし、来たとしてもこの事件に関係のある一部の人間だけだ。

その静寂は目的の部屋の前まで来ても続いている。それは不気味なほどで、徐々に日が落ちてきている現在はその不気味さも増して

いる。

ドアを開けると布団が見え、点滴を受けている箒が横たわっていた。その傍らには一夏が正座で座っており、ただじっと黙っている。このとき、ドアは開いたままになっている。

「一夏……どうしたんだ？」

春樹は一夏に尋ねるが反応は返ってこない。ただじっと箒を見続けるだけだった。そんな一夏に春樹はもう一度尋ねた。

「一夏、お前はこれからどうするんだ？」

だが、一夏は一向に話そうとしてくれなかった。そこから動こうともしない。

春樹はそんな一夏が許せなかった。

「おい、一夏ア!!」

春樹は一夏の胸ぐらを掴み、力づくでこの部屋から追い出して壁まで追い込んだ。ドアがガチャンと音を立てて閉じると、春樹はおもいつきり一夏の顔面を拳で殴る。

静かな廊下に顔面を殴った鈍い音が響き渡る。一夏は殴られてもなお死んだような顔をしている。そして弱々しい声で一夏は言う。

「何すんだよ……」

反抗はするものの、覇気というものは感じられなかった。おそらく、箒がこんな風になってしまったのは自分のせいなのだと思います。そんな彼に春樹は追い討ちをかける。

「お前、箒がこうなったのは自分のせいだんだと思っているだろ？ 確かにそうさ、箒がこうなっちまったのはお前が力不足だったからだ。お前が正しい選択をしなかったからだよ。だがな、お前はそこからどうするんだ？ もしかして、お前は箒の目の前でメソメソ泣いているしかないヘタレなのかよ!？」

そこまで言われて黙っていられない。一夏はできるだけの力を振り絞って春樹に言い返した。

「じゃあ、どうすればいいんだよ？ 俺は何をすりゃいいんだよ？」
「黙っていたってこの状況は何にも変わらない。……福音の撃墜に

失敗したんだったら、今しなくてはいけない事はなんだ？」

一夏はちよつとだけ間を空けてから言う。

「……福音を……倒す」

「そうだ、その通りだ。箒はちよつと気を失ってるだけだ。束さんが作ったISを信じないとな。いいか、福音をこのままにしておけばここに居る皆が危険なんだ、わかるな？」

「ああ……」

「だから、俺たちはなんとしても福音を倒さなくちゃいけない。福音を倒す事こそが箒への最大の償いだと思うんだ」

一夏は春樹の話を聞くと、唇を噛み締め黙り込む。しかし、表情は先ほどと比べると明らかに明るくなってきており、そこには「希望」が見えてくる。

そして、一夏は決断を下した。

「分かったよ、行こう！ 今の俺がどれだけ出来るかはわからない。だけど、俺はあのととき、目の前の一番優先しなくちゃいけないことを無視した……その結果、こうなってしまった。だから……せめて俺はあの福音を倒す事でお詫びをしたい」

一夏は改めて覚悟を決めると、春樹はそれの際に解決しなくてはいけない問題を挙げていく。

まずは一夏、春樹両者のISは現在致命的なダメージを追ってしまっていることだ。

もはや機体はボロボロで、あまり無茶な事はできない。春樹の『セラフ天使』は機体の性能を出し切る事は非常に困難な状態だし、一夏の『白式』の『零落白夜』も機体の不具合で長時間使うことは難しい。

次に、二人のISがこんな状態では『銀の福音』には勝てないことは分かりきっているので、応援が必要になってくる。そこで、春樹が提案したのは……。

「仲間が必要だ。いるだろう？ 俺たちには心強い仲間がな」

「おい、春樹……それはマジで言ってるんだよな……？」

「ああ、マジだ……今できるのはそれしかない。ここは仲間頼るしかないんだ」

春樹が言う「仲間」というのはもちろん鳳鈴音とセシリア・オルコット、シャルル・デュノアにラウラ・ボーデヴィツヒ。それに加えて織斑千冬のことである。二人のISがボロボロでサポートがなければマトモに働けないので、ここは他の人たちに頼る他はなかった。

「春樹、一つ聞くけどな……皆の無事は保障するんだろうな？」

「大丈夫だ。千冬姉ちゃん強いし。俺だって『福音』のドッグファイトは無理でも皆のサポートぐらいは出来る。こっちは数は多いけど、皆の安全を確保する為にあまり長期戦はしない方が良く。ここは一夏の『零落白夜』にかける他はないな」

「そうだな……」

共に戦うように頼みたい人物は千冬を除いて全てが生徒である。

代表候補生もこの中に含まれているが、それはレギュレーションのある正式な試合においては確かに強いかもしれない。しかし今回はレギュレーションなんてものはなく、命の危険にだって陥る危険性がある。そんな作戦に参加させようとした春樹は正直皆を巻き込みたくはなかった。だが、現状でこの状況を覆すには代表候補生の実力が必要になってきてしまう。だからこそ皆の力が必要で、春樹はこうなってしまう事を悔やんでいた。

「じゃあ、皆のところに行こうか春樹……。俺は……いや、俺たちは勝つぞ……！」

一夏は改めて覚悟を決めた。『銀の福音』を絶対に、今度はシールドエネルギーを0にしてパイロットを救出し、IS学園一年生の安全を確保する。それが……二人の仕事である。

7 (前書き)

※『ストライク・ガンナー』について。

この装備の設定を改変いたしました。原作では「ビットをスラスタ―として使うもの」であったのを「スラスタ―の強化パーツ」というものに改変いたしました。

ですから、ビットとスラスタ―は別個です。

こちらの配慮が足らず、混乱を招いた事をお詫び申し上げます。

生徒がざわざわと喋っているのに対して専用機持ちである鳳鈴音、セシリア・オルコット、シャルル・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒの四人は、ある事を願ってから一言も喋ることなく、ただ彼らの帰還を願っていた。そう、無事に帰ってくることを……。

すると、その大部屋の扉が勢い良く開かれた。そこにいた生徒達が一斉にそこへと目をやると葵春樹と織斑一夏が立っていた。

生徒達は何故かここに居なかった二人に話を聞こうとして一斉に二人の下へと立ち上がって駆け寄るが、春樹の一喝で生徒達は立ち止まった。あまりの迫力に隣にいた一夏も驚く程に。

「専用機持ちはこっちに来てくれ。早く！」

専用機持ちである四人は急いで立ち上がり春樹の下へと駆け寄る。一体何が起きているのかはわからない。ただ、あまりよくない事が起こっていることはなんとなく悟っていた。

四人が部屋から出てくると、春樹は警告するように言った。

「気になると思うが一切ここから出るなよ、皆。それと、余計な詮索は入れないように頼む」

勢いよく扉を閉め、そして、着いて来いと言わんばかりに少し早歩き気味にブリーフィングルームへと向かった。

「あの……春樹さん。これから何処へ行きますの？」

これからどうするのか、気になる皆に代表して春樹に説明するセシリアであったが、春樹はブリーフィングルームに着いたら話すと行って何も答えてくれない。

女の子四人の後ろの方には一夏がいる。無いとは思いますが、彼女たちが変な行動を起こさないように後ろから見張っているのだ。

ただ無言で、しかも速いペースで歩いていると、ブリーフィング

ルームの目の前までやって来た。春樹は息を大きく吸い込んでその襖を開けると先生二人と、束がこちらを見てくる。

数秒、無言の空間が出来た後に千冬は大きく目を見開き、低い声を出してこう言った。

「おい、葵。何故ここにその四人を連れてきたのか説明しろ。早く！！」

春樹は千冬のその叫び声にも動じずに言葉を返す。

「これが、福音を倒す為の最終手段です。こんな状況下では専用機持ちの力が必要なんですよ」

「ふざけるな！！ 事情を詳しく知らない子達を戦場に向かわせるなど許さん！！」

千冬は春樹の目を見て、心からの想いを彼にぶつけていた。一夏と箒の二人は力強い決意の下にこの作戦に参加しているし、何よりこの二人はISの本来の力を発揮させる『因子』とやらを持っている。だからこそ、千冬も覚悟を決めて弟と友達の妹を戦場に送った。しかし、その「因子」とやらも、今この状況もマトモに知らない子達を戦場に送る事などまず気なんてものは進むわけが無い。

この状況において、ここにいる事情を詳しく知らない専用機を持っている四人の生徒たちを戦場へ送り、作戦の成功率を上げるか……。またはこの四人の子達を安全な場所で保護して、『銀の福音』には春樹と一夏、場合によっては千冬自身も出撃して『銀の福音』撃墜作戦を行うか……。今この状況ではいったいどんな選択をすれば良いのか千冬には分からなかった。ドイツ軍で教官をやっていた彼女でさえ、流石にこういった命を懸けた戦いには無縁の可愛い教え子たちを戦場に送るのは抵抗がある。何が良くて、何が悪いのか、その境界線がとても分かりにくく、難しいこの議題において今とるべき行動とは？

ここにいる者たちは、実のところ頭を悩ませていた。

「時間がありません。皆に説明を！」

専用機持ちの皆と共闘を考える春樹。

「何を言っている！ そんな事は教師として許すわけにはいかない！！」

教師として、これ以上自分の生徒たちを戦場に送ることなど許すことはない千冬。

既に彼女は一夏と筈、そして春樹という自分の教え子を戦場へ送っているのだ。この三人は状況が特殊であるから、危険な事をさせたくないという気持ちを苦しみながら取り払ったのだが、この専用機持ちの四人までこの事に巻き込むとなると気が参ってしまうぐらいだ。

すると、束が前に出てきて、

「ちーちゃん。ここは私が決めるよ。ここでは私が全てを決める権利を持っているから」

「束、お前もふざけた事を言うのか！？ この子達を戦場に送るなど、この私が許さないからな！」

「ちーちゃん、あのね……。これは私の身の安全がかかっているんだよ。そして……私の死は世界の政治的バランスを崩壊させてしまう恐れもあるんだよ。だから、とても最低なことだろうけど、私は生きなきゃいけないんだ、どんなことをしようともね」

実際のところ、束の生死は今後の世界のIS情勢を大きく揺らす要因となる。もし、束が死ぬ事になれば、ISのコアの製造方法は分からなくなってしまうし、より高いテクノロジーを手にする事は難しくなってしまう。なんと言っても束は「装備の換装なしで全領域・全局面展開運用の獲得」を目指す第四世代の機体を作り上げている。

その『紅椿』は極秘裏に製造された為、通常は第三世代程度のスペックまで落としているが、作り上げたのは事実だ。

それだけの技術力を持っている篠ノ之束が死んだという事になれば、世界中のIS情勢は混乱し、ISの進化は急激にスピードを落とすことになってしまうだろう。

恐らく束を狙っている組織はそれが狙いだ。それからどうするの

かは分からないが、良くないことが起きる可能性がある為、放っておくのは危険である。

だからこそ、裏組織の情報を詳しく調べてその処置を行うまでは束は死ぬ事は許されない。必ず生き抜かなければならないのだ。

「でも、私もこの子達を強制的に戦場へ送るのも気が引けるんだよね。だから、ここは彼女たちの意思で決めてもらおうよ」

と、束は全部とはいかなくても事情を出来る範囲で彼女たち四人に話した。

まずは、この付近にいる『銀の福音』というISがこちら周囲一帯を襲う可能性があり、生徒たちに危険が及ぶかもしれない事。

次に、その撃墜作戦に失敗し、一夏と春樹の機体は大きく損傷してしまい、長時間の稼動が不可能で、修理の方も時間的にキツイ事。そして、篠ノ之箒が倒れてしまった事だ。

それを聞いた四人は驚愕した。

そんな専用機持ちの四人に束は最後の確認をする。

「そこで、君たちにはこの『銀の福音』の撃墜作戦に参加して欲しいんだけど……、どうする？ この任務はとても危険だよ。命だって落とす可能性だって否めない。拒否するなら今の内だし、それなら今聞いたことは忘れてもらってこの部屋から出て行って」

親友である篠ノ之箒が現在意識を失っていると聞き、一度はどれだけ危険な事をしているのか、と一歩引いてしまったが、大切な仲間が助けを求めているというのに危険だから逃げるなんてことはしようしない四人。

率先して言葉を出したのは鈴音だった。

「友達がピンチだっていうのに逃げる奴なんて何処にいるのよ！ 私は協力するわ！」

そんな鈴音につられて次に言葉を放ったのはセシリアだった。

「そうですわ！ 大切な仲間が私たちに助けを求めているんですもの。やりますわ、私も^{わたくし}」

続けてシャルルも言葉を発する。

「うん、そうだね。一夏と春樹は大切な仲間だもん。協力しますよ、僕も」

そして、最後にラウラ。

「そうだな……、過去に春樹には沢山助けてもらっているしな。大切な仲間の為にも春樹に協力する」

四人全員がこの作戦の参加の意を表した。

春樹と一夏の二人はこの四人には感謝したくても感謝しきれない。このピンチの中、自分たちが考えられる唯一の突破口。その四人がこの作戦に参加してくれると言ってくれた。

「いいのか、お前ら。本当に危険な任務だぞ？ それに、今回の作戦に参加することによって監視されることになる。『銀の福音』は国家機密が含まれるISだからな。それと戦闘を行うということはそういうことだ」

千冬は最後に四人に脅しの言葉をかけるが、四人の意思は変わらない。一夏と春樹、そして箒は自分たちにとってかけがえのない仲間であり、その仲間が助けを求めてきたのならば、それに応えなければ親友失格だ。

千冬はそんな強い意志を示した四人の目を見て、

「そうか……お前らの意思は確かなものだ……。なら春樹、早速作戦について説明をしろ。ブリーフィングを始めるぞ。いいな、束？」

束は首を縦に振ると、彼女は春樹にブリーフィングを始めるように指示をする。

「春樹、これから皆に作戦の概要を説明するよ」

「はい!!」

春樹は気合を入れて返事をした。

春樹の傍らには束と千冬が立ち、そして他の五人は春樹の目の前に立たせる。

「これよりブリーフィングを始める」

春樹はホログラムによって映し出されたモニタを操作して、資料

を提示していく。まず最初に表示されたのは『銀の福音』のISの画像とその情報だ。

「これが今回の作戦のターゲットである『銀の福音』だ。パイロットは『ナスターシャ・ファイルス』というアメリカ人。このISのテスト中に暴走し、この俺たちの泊っている旅館へと向かっているところを先ほど一夏と箒の二名が交戦した。一夏の『零落白夜』が微かに当たったことにより、作戦続行は不可能と判断したらしく、現在は自己修復中だそうだ」

このとき、ブリーフィングを聞いている一夏を除く四人は疑問を持った。何故、一夏と箒の二人だけなのか。春樹は何故この作戦に参加をしていなかったのか。それでもって何故、春樹のISは長時間の運用が不可能なほど損傷を負っているのか。

四人とも同じ事を考えていたが、今はブリーフィング中なので質問は慎む事にした四人。

「福音の詳細なスペックデータは配布する。それを読みながら聞いて欲しいんだが……」

各自のISにデータが転送されていく。それを網膜投影して各自確認しながら、春樹の話に耳を傾ける。

「手元の資料の通り、三六門もの砲身からビーム攻撃をしてくる中距離から遠距離に特化した機体だ。そこで、各人に別々の行動を取ってもらう。まずはセシリア・オルコット」

「はい！」

「今日の新装備テストで高機動を手にいれるスラスター装備が送られてきたんだったな？」

「そうですわね。名称は『ストライク・ガンナー』高機動用パッケージです」

セシリアが今回の新装備テストで送られてきたのは高機動用のパッケージ『ストライク・ガンナー』。

彼女が一夏や春樹のスピードに翻弄され、一度でも接近を許してしまったら終わり、という現状を解消したいと思い、この高機動用

パッケージの開発を頼んだ。

これにより、接近されてもある程度距離を取ることができる。このパッケージは最高速度よりは加速力を、前進よりは後退する推進力の方が強く作られている。接近されたときの回避とターゲットを視界に入れたまま距離を取る事を想定されて作られているからだ。

「なら、お前にはその機動力で福音から常に距離を置きながら、『スターライトmk?』の狙撃とビットによる攻撃で遠距離支援をして欲しい」

「了解いたしましたわ」

次には春樹は鳳鈴音の方を向いて、

「よし、次に鳳鈴音」

「は、はい！」

鈴音は少々緊張気味だ。これほどの緊張感は初めてだということと、こんな春樹は初めて見るからだろう。

「鈴には中距離から近距離の支援を頼む。お前の機体の『龍砲』によるかく乱攻撃をメインに置き、状況に合わせて『双天牙月』で近中距離で戦ってくれ」

「う、うん。了解！」

次にシャルル・デュノアの方を見て、

「次に……シャルル・デュノア。お前はその多様な武装を利用し、俺と共にこの小隊のバックアップをする。特に指示はしない。その戦況で一番やらなくてはいけないことを常に見つけて動いていくぞ」

「うん、わかった。皆の事は僕たちがサポートするんだね」

「ああ、そうだ」

シャルルは状況が状況だからか、いつにもなくすごくやる気になっている。いや、シャルルだけじゃなく、皆がそうだ。

このIS学園で出会った仲間たち。それがとても危険な目に遭っている。それを知った彼女たちは行動せずにはいられなかった。仲間がピンチだと聞けば、助けずにはいられない。そんな感情が自然と沸き起こるのだろう。

最後にラウラ・ボーデヴィツヒだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「はー！」

彼女は姿勢を正し、ビシツとした態度で春樹に耳を傾ける。

「お前は一夏の盾役になってもらいたい。あの福音の装備はほぼ全てがビーム兵器だ。なのでお前は『CPC』を使って防御に徹するんだ。状況によって砲撃などでの支援も頼みたい」

「了解しました」

ラウラは敬礼をしてきた。

春樹は微笑みそうになりながらも、決して真剣な顔を崩したりはせず、そのまま話を続ける。

「そして一夏。お前の『零落白夜』で『銀の福音』を斬れ。一回振るだけでいい。それだけあれば十分だろ、一夏？」

「ああ、あたりまえだ。任せとけよ」

一夏は誇らしく、そして……春樹と目を合わせて確かな友情と覚悟を感じ取っていた。

「よし、各自の行動は把握したな？ 作戦行動中はとりあえずフリーに動いてくれ。周りを良く見て、何をしなくちゃいけないのか、それをキチンと見分けてくれ。いいな？」

「「「了解！！」」」」

一夏、セシリア、鈴音、シャルル、ラウラの五人は一斉に返事をした。

今、気を失っている筈の為に、この戦いは無事に成功させて筈の下へと迎えに行く。それはみんなの共通認識であり、そしてそれが目標だ。

「では、これより一五分後に作戦を開始したいと思います。各自、自分のISの確認をしっかりとしておいてください。では、束さん。発令を……」

「うん。ではこれより一五分後に『銀の福音撃墜作戦』を開始します。各自、それまでに海岸へ集合せよ」

「「「「了解!!」」」」」

今度は先ほどの五人に加えて春樹も返事を返す。

すると、春樹は千冬を呼び出して一度部屋を出る。

「なんだ、葵」

「千冬さん。『暮桜』をしつかりと準備して置いてください。そして、束さんと一緒にここではない何処かに隠れていてくれませんか？」

この瞬間、千冬は顔色を変える。

彼女は分かっていた。ISを用意して、束と一緒に隠れる。それは紛れもなく篠ノ之束の命が狙われているということ。

あのドイツ軍基地で起こったようなことが起こる可能性があるということ。

「奴らが来るのか？」

「はい。先ほど交戦しました」

「……………なら、ここは私ではなく、葵が側にいてあげるべきだろ。側で守ってやれ、いいな」

「では、『銀の福音』の事は――」

「それは、私が出る。私も教師だからな、生徒たちが見える場所を守ってやりたい」

これは彼女がどちらにせよ言おうとしていたことだ。

教師として、生徒たちが直接見える場所で、直接手が出せる場所にいてやりたいと思っている。なんといったって、千冬は今は教師でも、かつては『ブリュン・ヒルデ』と呼ばれていた程のIS乗りだ。実力的には何の問題もないはずである。

「……………わかりました。皆の事……………よろしく願います」

すると、千冬は春樹に背を向けて、

「ああ……………まかせろ。……………私の弟の珍しい頼み事だ、しっかりと守ってやるよ」

と言ってドアを開ける。

どんな表情だったのかは春樹にもわからない。ただ、久し振りに

「弟」と呼んでくれた事はどことなく嬉しくなってしまう。

今や両親も親戚もいなくなってしまった春樹にとって、織斑の二人は大切な家族である。一夏は同じ年だから兄弟というよりは「かけがえのない親友」で、年上の千冬は「カッコよくて、頼りになる自慢の姉」である。

二人は部屋に戻ると、急遽メンバーが変わった事を皆に伝えた。

春樹がこの作戦に出ないときいたときはとても不安になったが、その代わりにに織斑千冬が出る。その事を聞いた五人は驚くが、千冬のような強い人物がいるだけでとても心強い。

「よし、では集合場所である海岸へと向かうぞ」

「――「はい!!」――」

作戦メンバーである六人はそのまま部屋から出て行った。

この部屋には山田先生と篠ノ之束、そして葵春樹だけになった。

「山田先生……」

「はい、なんですか、葵君」

「俺と束さんは、少し外に出ます。だから、ここには一人になってしまいますけど、皆のオペレーター、よろしくお願いします」

春樹の真剣な頼みに山田先生は笑顔で答えてくれる。

「大丈夫ですよ、葵君。私が皆を死なせないように、ちゃんとオペレートしますから」

春樹はそんな山田先生の笑顔を見て少し気が楽になった。やはり、山田先生には何処となく癒されるところがある。これから、どうなるか分からず不安な気持ちになっていた春樹にとって山田先生の微笑みは天使のようにも感じた。

春樹は微笑んで山田先生の言葉を返す。

「それでは、よろしくお願いします」

そう言って、春樹はこの部屋を後にする。

この部屋には一人だけになってしまった山田真耶。

彼女はまさかこんな事になるとは思いもしなかったのだ。昨日までは楽しく海で遊んでいたはずだ。それが、ここまで大変な状況に

なってしまうと、逆にこの現実を否定したくもなる。

「皆さん……死なないでくださいよ……」

彼女にはそう言うのが精一杯だった。

作戦開始まで一〇分。

『銀の福音』との最終決戦が始まろうとしていた。

第四章『守るものと護られる者 ―United―』

1

作戦開始五分前。

『銀の福音撃墜作戦』に参加する織斑一夏、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルル・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒの五人の生徒と、教師である織斑千冬はISの最終確認を行っていた。

一夏はバッテリーを使い、できる限りの稼動エネルギーを充電している。

ISの稼動エネルギーの正体は電気である。ISには『固体高分子形燃料電池』が積まれており、最大で四八時間の連続稼動が可能なのだが、一夏のISの単一使用能力である『零落白夜』の仕様上、それだけの稼動は不可能である。

現状、先ほどの『銀の福音』との戦いで、残りのエネルギーはスツカラカンなので、今こうやってできる限りの充電を行っている。

その他の五人はISの点検を必死に行っていた。

一度失敗しているこの作戦。

この作戦に失敗は許されない。

残りのチャンスは恐らくこの出撃一回だろう。

稼動エネルギーを充電するしかない一夏は、必死に点検を行っている皆を見ながら呟く。

「残り……五分……。この作戦、必ず成功しなくちゃ……」

作戦開始時間は刻一刻と迫ってくる。もっとこの整備時間を取りたいというのが正直な気持ちなのだが、『銀の福音』も何時再稼動するかは分からないので、そう長い時間は取れない。

結局、不完全な状態で出撃しなくてはいけない事実は、この現状からいくら足掻こうと変わらない。本当に最低限の事をするしかない時間である。

「よし、点検はその辺にしておけ。織斑を除く四人はISを装備しろ。織斑はギリギリまで稼働エネルギーを充電しておけ」

生徒たちは力強い声で返事をする。

各々がISを装備していく中、一夏は『白式』^{びやくしき}をじっと見つめていた。

いきなり渡された自分の専用機である『白式』^{びやくしき}と共に練習を続けてきた一夏だが、今思えば皆と一緒に訓練していくにつれてこのISとの一体感が増していくのを感じていた。

今となったら、この一体感が当たり前すぎて忘れかけていた感覚だが、よく思い出してみると初めて装備した時の違和感が懐かしく思えてくる。まるで良き友人となるかのように、その親近感が増していた。

そんな、つい三ヶ月前の事を思い出して微笑む一夏。

今となっては仲間と言えるような友達がいる。

だが、そこにはISもいたのだ。

それは一夏に限った話ではない。

篠ノ之箒。

セシリア・オルコット。

鳳鈴音。

シャルル・デュノア。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

そして、葵春樹。

皆が同じように自分のISと深く関わり、そしてその結果、自分たちの周りには最愛の仲間ができたのだ。この出会いにはISがあったからこそ起きた事であり、それが無かったのなら皆には出会う事すら叶わなかったわけである。

だから、ISがあって本当に良かった、と一夏は改めて思う。

作戦開始まであと一分を切った。一夏はISとバッテリーの接続を切る。

完全に充電が終わったわけではない。だが、作戦開始時間が来て

しまったのだから、これで作戦に参加するしかないのだ。

一夏の役目は『零落白夜』での一撃必殺攻撃を『銀の福音』に叩き込む事。それだけを考えて行動する。それだけだ。

たった一振りだけでいい。

春樹にそう言われた。もちろん一夏はその気である。自分の尊敬する姉が静かなる一振りで敵を仕留める。それで決着はついてしまう。そのカッコよさに憧れた一夏は、自分の姉と同じようにやるだけだ、彼はそう考えている。

一夏はISを装備し、『雪片・弑型』を握り締め、千冬の方を見る。

実の姉がそこにいる。何故だか春樹と交代するようにこの作戦に参加してきた。今、春樹は何をしているのかわからない。

だけど、今はそんなことを気にしている場合ではなかった。作戦開始まで三〇秒。六人はお互いに顔を見合わせて、そして何かを感じ取ったかのように頷く。

千冬も含め、皆の願いは一つだ。

誰一人として傷つくことなく、『銀の福音』を撃墜して無事に生還する。それだけだ。

網膜投影されたモニタを確認すると、刻一刻と作戦開始の時間がカウントされていく。

残り一〇秒。

一夏の額には汗があった。失敗を恐れずに、ただ成功することだけを考えてやるしかない、と書いていても中々恐怖だけは取り払うことができない。

「皆、恐怖する事は決して駄目な事ではない。それがあからこそ、生きて帰ろうと思うんだ。行くぞ、みんな。作戦開始だ！！」

タイマーが残り〇秒を示した。作戦開始の合図である。

六人のIS乗りは一斉に空へと飛び立つ。

六機とももの凄いスピードで空を翔るが、一夏の『白式』は最高速度とは程遠い速度だった。もっとスピードが出るはずなのだが、機体の状態も不完全なだけあってこれ以上の無理は機体に深刻な悪影響がある。一夏は感じているのだ。だからこそ、このスピード程度に抑えている。これも一夏と『白式』の一体感が増したからこそできた芸当だ。

目的地まで一直線に飛ぶ六人らはセシリアの『超感度ハイパー・センサー』にIS一機の反応があった。しかも、そのISは動く気配が全くない。

「いましたわ！ これより5 km前方にISの反応。これは……間違いありません『銀の福音』です」

セシリアの報告に千冬は指示を飛ばす。

「よし、セシリアを除く四名は私について来い。『銀の福音』に接近する。セシリア、私たちと福音との距離が1000になったら、お前の『スターライトmk?』で『銀の福音』を狙撃しろ」

「了解いたしました。皆様、お氣をつけて」

五人は静かに頷き、セシリアとは一旦分かれる。

一夏はラウラの後ろへと着く。この作戦の各々のポジションは、近距離は千冬、中距離が鈴音とラウラ、遠距離はセシリア、そして全体的なサポート役となるのがシャルルである。

一夏はこの作戦において、特別な立ち位置にいる。『零落白夜』での一撃必殺の攻撃を福音に与える役目だ。もちろん、千冬も『零落白夜』を使えるので、このどちらかがそれを使って福音を無力化できればいいのだ。

これは、『銀の福音』を海岸へと近づく前に無力化させなくてはならなく、短期決戦を強いられるものである。だからこそ、一撃で勝負が決まる『零落白夜』にかけるしかないのだ。

距離が丁度1000 mになったところで、福音にビームがヒット。福音は自己修復を一旦止め、周りを見渡す。一体何処から攻撃を仕掛けてきたのか、それを確かめるために。

(キツチリ距離1000で撃ったな……、流石は代表候補生だ!!)
千冬がそう思うと、福音の後ろに『零落白夜』を発動させながら飛び込んでいく。

これで勝敗に決着がつくと思いたいのだが、福音は避けてしまう。やはり、福音も馬鹿ではなく、このような襲撃は簡単にかわされてしまう。

一方ラウラは常に一夏の前に立ち、ビーム攻撃が飛んでくることが警戒し、いつでも『CPC』を発動できるように準備をしている。鈴音は今回のテストで送られてきた強化パーツ『崩山』を装備。これは見えない弾丸を放つ『龍砲』を四門に増強したもので、それを使い『銀の福音』をかく乱。そして、千冬が福音の動きを止める為に接近戦を試みている。

セシリアは遠距離で支援砲撃を続けており、ビット攻撃で福音の動きを制限。

『銀の福音』は負けじと三六門の砲身から出されるビーム攻撃で回りのISを分散させる。やはり、一体で複数体と戦わなくていけない『銀の福音』は一对複数では少々分が悪い。そこで、敵ISを分散させて、一対一に持ち込もうという魂胆だ。

近くにいた千冬と鈴音は、シャルルのシールド装備で無傷だ。そのシールド装備というのが、今回のテストで送られてきた防御パッケージ『ガーデン・カーテン』だ。実体盾が二枚にビームシールドが二枚という防御に特化させたパッケージである。

一夏の方もラウラの『CPC』でラウラと一夏共々無傷だ。

「やっぱり、人数でのゴリ押しは駄目みたいね」

鈴音は肩を落としながら言った。それにシャルルは答える。

「うん、やっぱりちゃんと連携を組まないと、奴を倒せない」

福音の攻撃を避けながら二人は会話をする。

「そうね……。織斑先生……!」

「なんだ?」

「もう一度接近しましょう。一夏か織斑先生、そのどちらかが『零

落白夜』で福音を斬らなくちゃいけない。だから、そのチャンスを作らないと!」

千冬と鈴音の二人はお互いに頷くと、『銀の福音』に接近を試みる。それにシャルルも同行して、接近できるまでのサポートをする。ラウラは少々危険な賭けになるのだが、レールガンである『パンツアー・カノニア』を使用し、二人が接近できるまで福音の気をこちらに引こうという考えだ。一夏を守らなくてはいけない立場にいるラウラだが、これも作戦成功の為だ。仮にこちらにビーム攻撃をしてきたとしても『CPC』があればそれを無効化できる。

ラウラは『銀の福音』の動きが少し止まった瞬間に弾丸を撃ち込む。ヒットはしないものの、注意をこちらに向けることに成功。

「一夏、こちらへ攻撃が来る。注意しろ!!」

「ああ、分かっている。大丈夫だ」

一夏も攻撃をかわすことに関してはセシリアとの練習で高い技術を手に入れている。逆にセシリアもその練習のおかげで高い射撃能力を手に入れたわけだ。

福音はこちらに大量のビームを放ってくる。

ラウラは『CPC』を発動させるが、正直、これだけの量をすべて防げるかどうかは不安であった。だがしかし、その不安要素を打ち消す出来事が目の前で起こる。

セシリアのビットが『銀の福音』が放ったビームを打ち落としていく。最後に『スターライトmk?』のビームで多くのビームを相殺。ラウラと一夏まで届いたビームはほんの十数発であった。三二発のビームをここまで減らす事ができるセシリアに他のメンバーも感服していた。

「セシリア、支援感謝する!」

ラウラはセシリアに通信で感謝のメッセージを伝える。

『いえ、お構いなく。こんな事など出来て当たり前ですわ!』

ラウラと一夏はセシリアの返事に微笑んでいた。彼女らしいな、
と思いながらラウラと一夏は福音に接近する。千冬と鈴音が『銀の

福音』に無事接近できたからだ。

千冬が『雪片』で福音と接近戦で動きを止めている。福音がビーム攻撃で千冬を離そうとするモーションを見た瞬間に鈴音は後ろから『崩山』で福音を攻撃。見えない弾丸に当たったその衝撃で福音はのぞけてしまう。

この瞬間、福音に隙が生まれた。

「一夏、今よ！」

鈴音は叫ぶと、既に一夏はこちらへ突っ込んできていた。

「千冬姉！ 鈴！ どけろおおおおおおお！！！」

一夏は叫びながら、『銀の福音』へと飛び込む。千冬と鈴音はその叫び声を聞いて反射的にその場から離れる。

一夏は『零落白夜』を発動させて、『銀の福音』を斬りつける。

『零落白夜』はシールドエネルギーを切り裂く特殊な攻撃。その効果で機体に直接ダメージを負わせて強制的に『絶対防御』を誘発させ、一気にシールドエネルギーを奪い去る一撃必殺の攻撃。しかし、その強力な攻撃である故に大きなリスクを伴う。IS自体の稼動エネルギーを大量に消費してしまうのだ。

だが、強力な攻撃であることには変わらない。

まさに逆転の一撃必殺攻撃。

一夏は『銀の福音』を最高出力の『零落白夜』で確かに斬りつけた。それにより、『銀の福音』のシールドエネルギーは一気に0になるはずだ。

しかし、『銀の福音』が倒れる事はなかった。

謎の光に包まれる『銀の福音』。その形状が少しずつ変化している事をそこにいた六人は確認していた。

そう、『第二形態移行』だ。
セカンド・シフト

予想もしていなかった状況。まさか、一夏の一撃でこのような事を誘発させてしまうとは、一体誰が考えたのだろうか。

この一撃にかけていたこの作戦は失敗に終わってしまう。

だが、諦める者など誰もいなかった。

一夏の『白式』の稼動エネルギーはまだ残っている。『零落白夜』も後一回は発動できるほどの量だし、もし仮に一夏が動けなくなっただとしても千冬がいる。彼女も『零落白夜』を使える。利用できるものは利用するのみだ。

「まさか、ここで諦めている奴はいないよなあ!? さあ、行くぜ。アイツを倒す為にもう一度!!」

一夏はそう大声で言うのと、

「「「了解!!」」」」

セシリア、鈴音、シャルル、ラウラの四人が一斉に返事を返した。千冬も微笑んで、一夏と目を合わせた後頷いた。

目の前には青く光る翼を生やしたISがいる。これは『第二形態移行』により変化した姿である。 いったいどんな攻撃を仕掛けてくるのか、それはここににいる六人には予想などできるはずもない。

ここにいる六人は誓う。絶対に、生きて帰るのだと。絶対に、福音を倒して、春樹や箒の前に現れてやるのだと。

この戦いはどんどん危険なステージに突入していく。

篠ノ之箒は夢を見ていた。

それは、彼女の幼少期——小学校四年生の頃の記憶だ。

思い出がフラッシュバックの様に甦っていく中、まず最初に見たのは、ある日、教室の掃除中起こったことだった。一緒に掃除の班にいたとある男子児童達が箒をいじめていた。その時に使われていた言葉が——。

男女。

剣道をやっていて、尚且つ気が強い彼女は、小学校のときにそういう悪意のあるあだ名で呼ばれたことがあった。

そして、掃除の時間。先生がいなかった教室で、そのいじめはよりひどいものになっていた。

男子児童が複数人で箒に対していじめを行う。言葉の暴力を振る舞い、箒を精神的に追い込んでいく。そこに現れたのは、先生に呼ばれていて掃除に遅れてやってきた一夏であった。

そのいじめ現場を見て彼はこう言ったのだ。

——おい、何やってんだよ。掃除する気がないなら帰れよ、邪魔だから。

そう言った一夏。すると、いじめの対象が彼へと移っていく。

元々姉同士が仲が良いことから、一夏と箒も幼稚園からの仲だ。

お互いにとっても大事な友達だし、とても仲が良いのは当たり前のことだ。

だが、いじめグループの男子児童はそれを「夫婦」だ「カップル」だと馬鹿にしていく。

やはり、小学生はそういうことには過剰に反応するし、それを馬鹿にする傾向がある。箒もこの夢を夢だ、昔の記憶だと自覚しながら、気分が悪くなる。

だけど、これは一夏が好きになるキツカケだった。

一夏はそのいじめをする男子児童を殴ったのだ。その後は当たり前のように先生にバレることになり、親から言われるように言われていた。

そして、箒は質問をしたのだ。ああなることはわかっていたのに、なんでわざわざ殴るような事をするの？ と。
すると彼はこう答えた。

——だって、箒がいじめられてたんだぜ？ それに、言葉の暴力を振るっていた。だからその分殴らせてもらっただけ。許せなかったんだよ、俺の大切な友達の箒をいじめてるあいつらがな。

この言葉を聞いた瞬間に箒は一夏に対する想いが強くなったのを感じていた。その想いが恋だと気付くまではそう時間はかからなかった。

それからというものの、彼に対する気持ちは日に日に強くなっていた。

次に聞こえてきた言葉は——。

——はい、箒。これ誕生日プレゼント！ 似合うと思うぜ。

これも、一夏の声だ。彼の声が聞こえてくる。

この情景は確か、箒が一〇歳の誕生日を迎えたときの誕生日パーティー。このときに側にいてくれたのは、一夏と箒の両親だ。

今、箒がつけている髪を結ぶリボンは、このときにプレゼントしてもらったものだ。このプレゼントを箒は今でも大切に使っている。

だって、大好きな人からプレゼントだ。それで髪を結んでいつものポニーテールにすると、彼はとても似合うと言ってくれた。それからこのリボンをいつだって使っていた。

だけどその時、束と千冬はそこにはいなかった。

確か、このときはISの開発で二人とも急がしかったはずだ。その時の言葉を箒は覚えていた。

——宇宙開発が一気に進展する発明をするからね。待っててね箒ちゃん。大金持ちになってお父さんとお母さん。そして箒ちゃんにも、楽させてあげるから！

彼女が夢みていたもの。それは、インフィニット・ストラトスによって宇宙開発が進み、人類を更なるステージへと道しるべになって欲しい、という願いだった。

そんな純粋な気持ちで束はインフィニット・ストラトスを製作したのだが、そんな願いも叶う事はなかった。

その原因はISが軍事的に使われるキツカケになったあの事件。

『白騎士事件』である。

それは、世界中の軍事施設のシステムがエラーを起こし、全百数発のミサイルが日本に向けて放たれた。それをある一機のISが全て斬り落としたのだ。

それこそ、世界で第一号のインフィニット・ストラトス『白騎士』であった。その開発者の篠ノ之束は思いもなかったISの性能に驚いてしまう。

——そんな……。こんなものを私は作ってしまったの……？　こんな危険なものを！？

箒はその時、姉である束の側にいた。そして、モニタリングしていた姉がそう叫んだのを思い出し、とても悲しそうだったのを箒は

思い出した。

当時は何故そんな悲しい顔をしているのか分からなかったけれども、今では理解できる。あの時、姉は世界を大きく変えてしまうようなとてつもない『兵器』を作ってしまったと、絶望していたのだ。それからというもの、世界は大きく揺れた。ISのテクノロジーを知ろうと各国の政府が一斉に動き出してしまった。

このままでは篠ノ之束の親族までも危険に及ぶ可能性がある。そう言われた家族一同はバラバラになってしまった。

もちろん、一夏ともお別れすることになってしまふ。今度の剣道大会で優勝したら、一夏に告白しようと決心したこのタイミングでだ。

結局、一夏には何も言えないまま引越してしまい、絶叫に近いほど泣いてしまったのを覚えている。実の姉だって恨んだ。アイツさえないなかったらこんな事にはならなかった、とも思ったこともある。

あれ？

春樹は……どこだろう。

引越しの直前に……何か……あった？

記憶が無い！？

どこに行ってしまったんだ、私の春樹との記憶は？

何故、一夏との記憶しかない！？ 何故！？

一夏たちとの出会いから、引越しまでの記憶に春樹も居たはずなのに、何故この記憶の夢の中には登場しないんだ！？ どうして……一夏だけじゃなく、春樹との思いでもとても大事なものののに、何故この夢の中で思い出せない！？

思い出せ。思い出すんだ。春樹との記憶を……。

！？

その瞬間、夢の中だというのに強い頭痛に襲われた。頭が割れる

ように痛む。吐き気まで出てくる。なんだ、これは……なんなんだ！？

その瞬間、彼女は目を覚ました。

頭痛と吐き気は現実の身体でも同じ症状が出ていた。額は汗でびっしょりだ。

呼吸を整えて、傍らを見ると、心配そうに山田先生が箒を見ていた。

「あの……篠ノ之さん、大丈夫ですか？ 凄くうなされてとても辛そうでした。嫌な夢でも見ていたんですか？」

「いえ……そんなものではありません。ご心配なく、大丈夫ですから」

嫌な夢などではない。しかし、疑問がいくつも生まれた夢であった。春樹の事の記憶は今確かに存在している。誕生日パーティーでも一夏と一緒に祝ってくれたし、学校でも仲良くしてくれた。一夏と一緒に三人でよく遊んだのも覚えている。

しっかりと春樹との記憶も存在しているのに、あの夢はなんだったのか、ただ単に夢であるからその空想の世界では思い出せなかったのか。

しかし、やけに鮮明な夢であった。まるで、実際に過去に起こった事を辿っていくかのように感じる。まるで、それが現実のように。だが、いまはそんな夢の事はどうでもいい。現状を把握しなくてはいいけない。

「山田先生。今は……どうなっているのですか？」

山田先生は真剣な表情になった後に答える。

「篠ノ之さんが織斑君と『銀の福音』の撃退作戦に出向き、失敗。篠ノ之さんは気を失い、現在に至ります。篠ノ之さんが気を失ってからはだいたい一時間ぐらい経ってます」

たった一時間で箒の体は回復していた。いや、元々そんなに怪我

はしていない。これも、束が作った『紅椿』のおかげだろう。流石は第四世代のISで、攻撃力、防御力、機動力、どれをとっても高性能だ。そんな高性能なISのおかげで箒は軽傷で済んだんだろう。流石は天才篠ノ之束、といったところか。

「それで……一夏と春樹は？」

「はい……それは……」

突然口ごもってしまう山田先生。なにやら言いづらそうな顔をしている。

「言ってください。お願いします」

山田先生は落ち着いて聞いてくださいます、と注意してから話し出す。「織斑君は現在、『銀の福音』と交戦中です。その作戦遂行のメンバーに……、セシリア・オルコットさん、鳳鈴音さん、シャルル・デュノア君、ラウラ・ボーデヴィツヒさん。そして、織斑先生がいるんです」

「え………?」

箒は信じられなかった。何故、『銀の福音』を倒す作戦に皆が参加しているのか。一夏と千冬ならまだ分かる。だけど、何故関係ない他のメンバーまでいるのか、彼女には分からなかった。

「な、何故、皆が参加してるんですか、その作戦に！」

「これは……葵君からの提案です。現在の戦力、つまり専用機をフルに使わないと、勝つのは難しいそうで……」

「そんな……勝手な事を……ッ！」

「ですが……葵君も沢山悩んで……それで悔やみながらもこの決断をしたはずです。彼の事をあまり責めないであげてください」

「なら、私も行きます！」

箒は布団から起き上がろうとすると、何故か自分の身体から力が抜けていくのを感じる。そのまま彼女は再び布団に横になってしまふ。

「篠ノ之さん……、あまり無理をしないでください!! 皆さんは、あなたの為に頑張っているんですよ? だから、篠ノ之さんは安静

にしてください」

「ですが！！ 私も……皆が頑張っているのに、ここでのうのうと休んでいるのは、我慢なりません。私も行きます」

「篠ノ之さん……」

「皆は私の大切な友達が私の為に頑張ってくれているなら、私だって友達の為に頑張りたいんです。だから、行かせてください！！」

山田先生はふと目を閉じて微笑むと、金と銀の鈴がついた紐を箒に渡した。これは『紅椿』の待機形態である。

「え……何故これを山田先生が？」

「束さんから預かってました。修理も完璧に終わったから、安心していいよ。だそうです」

「姉さんが……」

「篠ノ之さんのお姉さんはとても妹想いの良い人ですね。なんだか憧れちゃいます。私は一人っ子でしたから。あと、これ……束さんからの手紙です」

箒はその手紙を手に取り、そして中身をみる。そっけない便箋の中には紙が一枚。それを取り出すと、そこにはこんなことが書いてあった。

箒ちゃんへ

さっき急遽書いた手紙だから、たいしたことは書けないけど最後まで読んでください。

箒ちゃんはきっと私のことを恨んでいると思います。お姉ちゃんには分かるよ。だって、どことなく避けているからね、私のこと。理由は多分、私がISを開発して世界問題になって、そして家族が日本政府に保護されて、一夏や春樹と離れ離れにしてしまった事だと思います。

箒ちゃんは一夏のこと好きだからね。箒ちゃんが一夏に告白しようとしていたのも知ってるよ。だって、私の妹だからね。実の妹の事ぐらいなんでも知ってるよ。

そこで、私は箒ちゃんに謝ろうと思います。

本当にごめんなさい。

本当は実際箒ちゃんを目の前にして面と向かって謝らなくちゃいけないのだろうけど、それができるかも分からない状況になってしまったので、せめて手紙で伝えられたら、と思って筆を取ってこの手紙を書いた次第です。

許してもらえなくても構いません。

ですが、私が箒ちゃんにしてしまったことは、取り返しのつかない事であることはしっかりと理解しています。そこだけはどうか分かってください。

もう時間が無いので、ここで筆を置かせていただきます。

紅椿はしっかりと修理したので安心して使ってください。

では、がんばって。

篠ノ之東より

箒はその手紙を読んで、齒を噛み締めた。

（許してもらえなくても構いません、か……。私はとくに姉さんを許していたのにな。確かに殺したくなるほど恨んだこともあったが……。姉さんの作ったISのおかげで私の周りにはとても大切な友達が、仲間が出来た。逆に姉さんにお礼を言いたいぐらいだ。だから私は……）

「先生、私は行きます。先生がなんと言おうと私は行きます」

すると、山田先生は微笑んで、ちょうど終わった点滴の針を丁寧に抜いてあげた。止血用のガーゼを当ててあげて、

「はい、これでよし。……篠ノ之さん、絶対に皆と一緒に帰ってきてくださいね、それがあなたを行かせる条件です」

「……はい」

箒は静かに返事をする、ゆっくりと立ち上がり部屋から出て行

く。

箒は不思議と身体がさっきと比べてはるかに楽になっていた。精神的なものなのか、それとも他に何かがあるのか……。だが、箒は分かっていた。

自分の中にある力の事が、春樹が教えてくれた『因子の力』というものが。

箒はその力が何の為にあるのか、その意義を決めていた。

それは仲間の為に、また、自分の大切な人の為に使うものなのだと。そう箒は決めた。これがこの力の本当の使い方なのかは彼女には分からない。だが、この使い方が正しい使い方なのだと、箒は思っている。そう信じているのだ。

（皆、待っていてくれ……。今行くからな）

箒は廊下を走り出す。今すぐにでも皆を助けに行くために、彼女は全速力で走る。

3 (前書き)

すみませんが、今回は物凄く短め。

葵春樹は車で移動していた。しかも、ドライバーは葵春樹である。

彼はこんな時の為に様々な乗り物の運転の仕方を覚えていた。一般常用車にトラック、ヘリコプターに、一応飛行機の運転方法まで身につけていた。何故なら、任務先でいったい何があるか分からないからだ。だから乗りものは一通り乗れるようにしている。

「東さん、いいですね？ 多分、あの旅館には帰れない可能性が高いですよ」

「うん。だからお手紙を書いたよ、箒ちゃんにね。一応、私の気持ちは伝えておいたから」

「そうですか……。すみません……。俺が力不足なばかりに……」
「ううん。春にゃんはちゃんと仕事をしてくれたよ。元はといえば私がここに來た事が間違いだったね……」

春樹は黙り込んでしまう。ここでなんていい返してあげればいいのか分からなくなったからだ。

ここで、何を言ってあげるのが正解なのか、と春樹は悩んでしまう。否定するのが正解なのか、それとも肯定した上で仕方が無いことだったと言ってあげるのが正解なのか。

すると、春樹よりも先に東が続けて話し出してしまった。

「ごめん。そんなこと言っても、もう遅いよね……。あははは……」

東は落ち込んだように笑い出す。空気が重いが、それはしょうがない事だろう。この状況で笑い話をする気にもならないし、そんな笑い話はこんな状況で話せるわけもなかった。

だけでも、ここで何か話さないとも何も進まないし、精神的につらい。だから春樹は何か話そうと必死だ。

「あー、あの……。東さん。昨日の夜のこと……。なんですけど」

「え……!？」

束は驚き、昨日の事を思い出した。

あのとき、束は周りの事を考えないで行動してしまい、春樹のみならずおそろく周りの皆まで不快な思いをさせてしまったことだ。そのときに春樹に説教されてしまった。

「あの……、束さんに怒ったこと、なんか気にしてるなら謝ります。もう俺は気にしてませんから……あははは……」

春樹はあの後、束がどうしていたのかを聞いた。

あの後、一夏は束と出くわして一緒に話をしたそうだ。一夏は全てを話してはくれていないだろうが、でも、俺に怒られた事で深く反省して、泣いていたそうだ。

その事について、まだ話が来ていない。一夏から聞いて、旅館を飛び出した方がいいが、そのときには会うことは叶わなかった。

次の日には無事会うことが出来たのだが、そのことについて話すことは出来ず、ここまで先延ばしにしまった。だから、この夕イミングで話す。

すると、束が恥かしそうに春樹を見てこう言った。

「あのね、春樹。私……貴方に怒られてしまったとき、とても辛かったんだ。何故かは分からないけど、胸が絞めつかられるようになって……。でも、そのとき決意したんだ」

「何を……ですか？」

春樹が聞き返す。すると、束はより一層顔を赤くして春樹を見つめながら、

「こんなところで言うのもおかしいけど、今しかないから言うね。

私、貴方の――」

そのとき、車は急ブレーキをかけた。路面とタイヤが擦れて、ゴム臭い匂いで周りが包み込まれた。

そして、その目の前に、道路のど真ん中には黒いISが立っていた。

「……レイブリック……!!」

春樹はそう呟いて車から降りた。そして、束にここでじっとして様に指示をすると、束は一言、うん、と頷いた。

春樹はレイブリックを目の前にして、話しかける。

「お前……やはり束さんの命を奪わないと気が済まないみたいだな」
春樹は『熾天使^{セラフィム}』を身に着けた。金属とは思えないしなやかな白い翼が現れる。

「ああ、そうだな。それが俺たちの任務だからな。失敗なんてしてたまるか」

「任務か……お前らの組織は反束派ってやつか？」
すると、レイブリックは鼻で笑い、

「一部ではそう言うらしいな。確かにその言い方は間違っちゃいない」

「で、IS学園を襲ったのはお前らではないと……それは別の組織なんだな？」

「恐らくそうだろうな。まあ、俺たちにとっちゃそんなことは関係ない。篠ノ之束さえ、殺せば俺たちの目的は達成される」

そんな発言に春樹は手をキック握り締めて、

「おい、レイブリック。束さんを殺すのだったら、いかなる犠牲もしょうがないもの……、そう言いたいのか？」

レイブリックは高笑いをして、

「とんだ甘ちゃんだな、葵春樹。そんなことでは束を守り切れないぞ。全てを守れると思うなよ、俺は……、いや、やめところ。まあ、そういうことだ。犠牲なしでは守りたいものも守れないんだよ!!」

春樹は唇を噛み締めた。

確かにそうだった。あのドイツ軍基地のこと……。春樹は束を守るべく動いていた。その目的は達成されたのだが、そのときの同じ部隊だった人たちは数人死んだ。それを犠牲と言わずなんと言うだろう。そう、犠牲である事は紛れも無い事実。春樹はそのことから目を背けていた。

良い所だけを見て、悪いところからは目を背けて。それで犠牲な

しで束を守りきっていたつもりでいたのだ。

いままで何人の犠牲を出してきたのだろうか、束と共に行動するようになってから……、改めて思い返して、その事実を見つめると数え切れないほどの犠牲があった。

「くそッ!! ああ、確かにそうだな。犠牲なしでは何も守れないかもしれない。でもな、それでも出来る限りの犠牲は減らしたいだろう! ? もっと言うなら、犠牲となるものが無い方がずっと良いだろう? だから、俺はもがき続けるさ、犠牲を誰一人出さないようにするために」

「それが出来たら今この状況にはなっていないんだよ! だからお前は甘いと言っているんだよ、葵春樹。……………どうやら、俺たちはここで戦わなくちゃいけないみたいだな」

「どうやらそのようだ。さあ、かかって来いよ、レイブリック!!」

二つのISの剣が交差する。オレンジ色の火花を撒き散らし、この二人はお互いの思想をもかけた戦いを開始する。

「一夏、そっちへ行っただぞ!!」

千冬がそう叫ぶ。

『銀の福音』は第二形態移行し、機動力・攻撃力・防御力、どれをとっても格段にその能力は高くなっていた。

金属で出来ていた翼の形をしたスラスタは青白く輝き、前の形態とは比にならない程のビームを発射できるようになっている。

一夏はこちらに向かってくる福音から逃げる。まともに目の前から立ち向かって今の状態の『白式』^{びやくしき}では太刀打ちできないからだ。(くそっ!! 白式が完全ならこんな無様に逃げ回らなくても済んだのに!!)

絶対に『零落白夜』でケリをつけられると判断するまで一夏は動けない。そのため、ドッグファイトは一夏の代わりに千冬と鈴音が引き受けている。

だが、その千冬と鈴音のドッグファイトから一夏の方へ向かった『銀の福音』。どうやら、一夏を何よりも先に潰した方が良いと判断したのでろう。

五〇発をも上回るビームを一夏に向かって発射する福音。

しかし、そのビームはシャルルの『ビームシールド』とラウラのビームを無効化する装備である『CPC』で一夏を無数のビームから守る。もちろん、シャルルの『ビームシールド』とラウラの『CPC』はお互いに干渉しないように気をつけて運用している。

「すまねえ、シャルル、ラウラ」

一夏が二人にそう言うと、二人とも微笑んで返してくれた。一夏はこういう信頼できる仲間が出来て本当に良かったと思っている。本当はここに春樹も居て欲しかったのだが、彼には彼の仕事がある

ので仕方が無い。なんたって、篠ノ之束の命がかかっているのだから。

しかし、こうまでも『零落白夜』を与えるチャンスが出来ないと不安になってくる。本当にこの進化した『銀の福音』を倒せるのだろうか。

だが、倒さなければこの近くに居る旅館の皆に危険が及ぶかも分からないので、ここで倒す他に選択肢は無いのだ。

（このままだとジリ貧だ……。早くアイツを倒さなくちゃならない……。もうこの際、俺の『零落白夜』にこだわらなくてもいいんじゃないのか？）

そう思った一夏は山田先生に連絡を取る。

「織斑一夏から山田先生へ、山田先生、ちょっといいですか？」
すると、網膜投影されているモニタに山田先生が現れた。

『なんですか？ 織斑君』

「銀の福音は、俺の零落白夜に頼らなくちゃいけないんですか？
なんなんだったら、皆で一斉攻撃で——」

しかし、一夏の言葉は山田先生の言葉で遮られる。

『織斑君、残念ですがそれは出来ません。今の我々の装備は所詮競技用の物。軍用のISである「銀の福音」に対してはほとんど使い物になりません。しかし、織斑君の「零落白夜」は違います。競技用とはいえ、その特製ゆえに一撃でシールドエネルギーを削れる能力を持っている。だから、織斑君にその役割を頼んだんですよ？
その自覚をしっかりと持ってください！！』

「……すみません、山田先生……。俺、この戦いに本当に勝てるのか不安でしょうがないんですよ……」

『安心してください。貴方たちに素敵な人をそちらに送りましたから』

素敵な人とは誰なのかと思う。この現状からして春樹なのだろうか、それとも……。

一夏はそんな期待をしてしまうが、そんな過度な期待はしない方

がいいと思い、その考えを振り払う。

『それでは、織斑君。戦いに集中してください。素敵な人が必ず織斑君たちを助けに来てくれますから』

そう言って、山田先生は通信を切った。

「素敵な人……か……。一体誰なんだろう、もしかして……」

一夏はある人物を思い浮かべて、激しい戦いの中へと再び戻る。だが、一夏には今すぐに出来る事はなかった。チャンスを見逃さないように注意を払うだけしか出来ない。

（今の俺って……、どれだけ役立たずなんだろうな……）

零落白夜で『銀の福音』を叩き斬るだけ、それがどれだけ難しい事だろうと、今、この現状で何も出来ないのは事実だ。そんな自分の無力さに一夏は腹が立っていた。

（こんなとき、春樹なら簡単に『銀の福音』を倒してしまうんだろうな……）

一夏は自分自身と葵春樹のことを比較してしまう。誰よりも強くて周りを圧倒するそんな姿が思い出されていく。

今まで、共に身体を鍛えてきたこの二人。まるで兄弟のように育ってきた彼らはお互いに競い合って、それによって自分を磨いていく。それが一つの生きがいのようなものだった。

だが、気がつけば春樹は自分の届かないところにいたのだ。

ドイツ軍から帰ってきた春樹はとてつもなく心身ともに鍛えられていたのだ。だから、それに自分も負けないように、春樹に追いつけるように一夏も頑張っていた。

身体的には確かに追いつけた。追いつく為に努力を沢山してきた。だが、追いつけないものもある。それがISだった。

一夏の知らないところで、ISの操縦を学んできたのだろう。だから、春樹は物凄く強かったのだ。だから、一夏もそれに追いつこうと努力した。

春樹が考えてくれた練習プログラム。それで確かにISの操縦は初めて乗ったときよりも格段にISの操縦は上達していた。

だけど、それでも追いつけない。

だから、春樹が居る組織でISの操縦について学んで鍛えていけば、いずれ春樹に追いつけるだろうと思ったから束の組織に入った。もちろん、理由はそれだけではないが、それが理由の一つであることは変わりなかった。

「だから、俺は……、春樹を超えるんだあああああああああああああ
あああ！」

一夏は目の色を変えた。自分の中で何かが弾けたようなものを感じた。

すると、視界がさっきよりも明瞭になり、さらに『白式』との一体感も増している。本当に『白式』と一つになったように一夏は感じている。

（なんだこれ……これが……春樹たちが言っていた『因子の力』ってやつなのか……？）

一夏は感じている。『白式』の気持ちを。『白式』の思いを。『白式』の願いを。

ISには意識と似たようなものがある、と山田先生は言っていた。もちろん、このことは教科書にも載っている。

ISとここまで意識を通わせているIS操縦者というのはそういないだろう。こうまでも『白式』の「気持ち」を理解している人物は世界を探しても織斑一夏ただ一人だ。

（白式……お前……。そうか……。お前も、もっと強くなりたいのか……）

現在の織斑一夏と『白式』のコアとのシンクロ率を見れば95%オーバーで、現実的に見てありえない数値を叩き出している。

一般のIS操縦者のISのコアとのシンクロ率を見ても、訓練を二年続けた代表候補生で50%程度。各国代表選手さえ、70%台に入ればそれだけで賞賛に値するほどのものだ。

それなのに、ISとふれあって四ヶ月程度の一般の生徒が、ISとのシンクロ率が90%を超える事など、普通に考えてありえない

のだ。

そう、「普通」に考えたらありえないのだ。

つまり、織斑一夏は普通の人ではない。または、「偶然」に『白式』のコアが一夏と相性が抜群のものを使用していたとしたら……、ありえない話ではないのかもしれない。

『銀の福音』と戦っている千冬と鈴音も、これ以上の長期戦は流石にキツイ。ジリジリと押されているのが一目瞭然だ。

だから、一夏は立ち上がり、皆を助けるために『銀の福音』に立ち向かう。白式と分かり合えている今なら、福音を倒せると思えてくる。

さっきまでの役立たずだ、と思っていた一夏はもうここにはいない。これで、後ろで構えているだけじゃなくて、皆と一緒に戦える。そう思えてくるからだ。

ただ、『白式』の修復が完全に終わっていないことはしつかりと意識しなくてはならないが、一夏と白式はもはや一心同体と同じような状態に居るのだ。

何処までが限界なのか、それは一夏自身が一番よく分かっている。

「織斑先生、鈴、俺も参加する！」

一夏は福音と近距離戦闘を行っている二人の下へと向かう。

「な、何言ってるのよ、アンタは！？」 一夏、アンタは一回でも攻撃を喰らったら——」

「そんなことは分かっている。だけど、今の俺なら大丈夫……だと思ふんだ。この、白式も頑張ってくれる……」

「一夏、アンタ何言ってる——」

すると、『銀の福音』は最優先で倒すべき対象が近くに現れた為か、一夏の方へと一直線に向かってくるが、一夏は『白式』の自慢のスピードを使い、福音を翻弄する。

「織斑先生、俺たちどちらかの『零落白夜』を当てれば勝ちなんです。だから、一緒に——」

「それに、私も混ぜてくれないか？」

後ろから聞こえてきた声。

それは、本来ならここにいないはずの声。

そして、聞きなれた声だ。

ここに居る六人は声のした方向へと視点を持っていくと、そこには赤いI Sが宙を舞っていた。

その名も、『紅椿』

そう、彼女が来てくれたのだ。篠ノ之箒が。

「箒!!」

一夏は思わず叫んでしまう。先ほど、山田先生に言われた助けに来る「素敵な人」に一夏は箒の事を当てはめていた。

こんなときに、箒が来てくれれば、という願いが少なからずあったのだ。彼女は倒れて寝ている。そんな事実を前にその願いを振り捨てたのだが、来てくれたのだ。一夏が望む大切な人が。

「一夏!!」

箒も一夏につられて思わず叫んでしまった。

しかし、二人の感動の再会のようなものをしてる暇は無く、目の前に福音が放った無数のビームが飛んでくる。それを一夏と箒が二人で全てを斬り落とす。一発たりとも残すことなく。

「一夏、倒すぞ。福音を止めるんだ」

「ああ! お前が来てくれて本当に嬉しいぞ!!」

「へ……? そうか……。うん……」

箒は突然の言葉に少し戸惑ってしまいが、一夏はそんなことを気にもせずに言葉を続ける。

「箒、いくぞ。俺たち皆でアイツを止めるんだ」

「あ、ああ。そうだな。織斑先生、鈴!!」

千冬と鈴音は頷く。

「セシリア、シャルル、ラウラ、お前たちも援護頼む!!」

一夏は遠くに居る三人に通信で伝えると、各人から返事か返って

くる。

「よし、いくぞ皆！」

一夏と箒が叫ぶと、各々は改めて自分のポジションに付き、作戦を再スタートする。

『銀の福音』は無数のビームを撃つ拡散射撃と、高威力のビームをピンポイントで撃つものがある。それを上手く使い分けて、一夏を懐へ中々入らせてくれない。千冬も危険人物を察してきているのか、千冬まで接近を許したりはしなくなった。

懐に入りやすいのは箒と鈴音だ。だが、この二人では決定的な打点は入れられない。何とかして、一夏か千冬の二人を福音に接近させなくてはいけない。

それは、箒や鈴音。そして、援護射撃をするセシリアとラウラ。そして、二人を守るシャルルの活躍にかかっている。

一夏はひたすら福音に接近戦を挑む。もう、逃げていても罅が明かないと思ったからだ。

一撃でもくらったらアウトな仕様の『白式』だが、それでビビッて後ろで待機していても本領を発揮できない。何故なら、『白式』は元々接近戦に特化しており、そのために全IS中ナンバー1のスピードを持たせているのだから、敵に近づいて、逃げて、というヒット&アウェイを繰り返すのが『白式』というISなのだから。

二度目だが、一夏と白式のシンクロ率は95%を超えている。

だからこそ、躊躇なくこういった大胆な行動を取れるのであって、『普通』のIS操縦者ならとてもじゃないが、真似できるような事ではないことを言っておこう。

一夏は左腕に取り付けられている『ビームガン』で『銀の福音』を牽制しながら、斬りかかるチャンスを探う。

それに千冬と箒も加わり、三人でランダムに攻撃をする。そして、鈴音が見えない弾丸で『銀の福音』を混乱させ、セシリアとラウラの支援砲撃によって福音の行動範囲は狭められていく。

それは言うなれば弾幕を張るのような攻撃の嵐だ。一度『銀の福音』のリズムを崩し、そこにつけ入るように一夏は攻撃を与えようとする。

これが起爆剤となり、この任務に参加した全員が『銀の福音』に隙を与えまいと、攻撃の手を緩めることはない。ひたすら現状に合った有効な攻撃を繰り返す。

攻撃に移れなくなった『銀の福音』は、急に動きが変わった。

急加速で上昇し、この戦線から抜けるかのごとく一直線に逃げていったのだ。

一体どうしたのか、一夏はそう思う。

一夏は不安に駆られる。とても、まずいことになっているような気がする。

その不安は見事的中してしまった。セシリアの通信によって。

『皆さん聞いてください!!』『銀の福音』は……。そんな!?

私たちが泊まっている旅館の方向へと向かっています!!』

そう、『銀の福音』は先ほどの戦いに勝利する事は不能と判断した為か、本来の任務を果たす為だけに動き出したのだ。

本来の目標は……IS学園の生徒そのもの。

「くそっ!!」アイツは、最初っから旅館を狙ってたんだ!!」

一夏は叫ぶ。このままではいけない。こうなれば、絶対にアイツが旅館を攻撃する前に無力化しなくてはいけない。

「旅館には……この状況を何も知らない生徒しかいない……。急ぐぞ皆!!」アイツを止めるんだ」

千冬が叫び、一夏と箒に指示を送る。

「一夏、箒、アイツに追いつくには、全IS中で一位二位を争うお前らの機体でないと駄目だ。だから、私たちに気にせず先に行ってくれ、いいな?」

一夏と箒の二人は真剣な眼差しで、はい、と返事をする。

「よし、行け!!」一夏! 篠ノ之!」

二人は限界まで加速して福音を追う。旅館の皆を守る為に。

5 (前書き)

やっぱり、春樹の話は短くなっちゃもう……。では、どうぞ。

葵春樹はレイブリックと対峙している。

レイブリックはビームの剣である『ビームブレード』を使い、春樹は実体剣と銃が一緒になっている『ブレイドガン』を使い、戦っている。

お互いに一步も譲らない戦いを繰り広げており、どちらが勝つかも予測不可能な状態。

春樹は車で待機させている束のことも気にして戦わなくてはいけないので、春樹の方が不利なのだが、それでも互角の戦いが出来るというのは春樹の信念があるからだろう。束をなんとしてでも助きたい、という信念が。

それでも正面对決を避けられないのは春樹の使命なのだろうか。

「いい加減諦めろ、葵春樹。束をこっちに渡せば俺は引く」

「ふざけるなよ。それをやるってことは、今までの俺を否定する事になる」

「そうかい、それじゃ——こういうのはどうかな？」

レイブリックは『ビームブレード』を持っている手とは逆の手。

つまり、左手に新たな武器を展開させる。筒のようなものからロケットが発射され、それが束の乗っている車へと向かっていく。

「なっ!？」

春樹は焦りながらもロケットだけを正確に狙い、撃ち落とす。ロケットは爆発し、爆風が束の乗っている車を襲うが、車はこういうときの為に特殊な素材で出来ている為、爆風程度ではびくともしなかった。

「てめえ、本当に束さんを殺す気でいるみたいだな」

「だから言っただろ、俺たちは篠ノ之束を殺す事が任務だからな」

「そうだな。じゃあ、俺は束さんを守ることが任務。どちらかが倒れるまで続けるしかないみたいだな」

「その通り。俺たちは戦い続ける……どっちかが消し飛ぶまでな！」

レイブリックは春樹に接近し、『ビームブレード』を振るう。

春樹も負けじと日本刀を模している『シャープネス・ブレード』で立ち向かう。

お互いに一步も譲らない戦いが繰り広げられており、お互いに、その刃が身体まで届くのを許さなかった。

お互いの剣が交差し合い、激しく火花を散らす。オレンジ色の細かい閃光が無数に飛び散り、お互いに刃を放すとその閃光は残像となって残る。

春樹は右手に『シャープネス・ブレード』を、左手に『ブレイドガン』を持ち、中距離から遠距離まで一度に対応しようとする。

レイブリックは『ビームブレード』と、『サブマシンガン』を持ち、お互いに牽制をしながらその戦いは続いていく。

春樹は『サブマシンガン』の無数の弾をかわし、『ビームブレード』の斬撃を避け、攻撃をやり返す。『ブレイドガン』で射撃をしながら接近し、そして二本の刃でレイブリックを攻撃する。

それを、レイブリックは『ビームブレード』で受け止め、そして一旦距離をおいた。

二人は動きを止めて見つめ合う。お互いの動きをよく見て、先読みし、反撃するために。

「どうやら……決断のときが来たようだ……」

レイブリックは呟く。

春樹はどういうことなのか少し戸惑ったが、その答えはすぐに分かった。

そう、一夏たちが撃墜する対象だった『銀の福音』がこちらに近づいてきている。だが、目的は束などではなかった。正確に言えば、福音が近づいているルートから見て、ターゲットは旅館。

「おい、どういうことだ？」

「どうもこうも、旅館の生徒たちを死なせなくなかったら、束をこちらに渡してくれないか？」

「なるほど、人質ってわけかい」

「そうだ。ヒト一人で、何十人という人間が生きる事ができるんだ。どうだい、良い取引じゃないかな？」

「良い取引って、本気で言ってるのか？」

「何？」

「『銀の福音』は俺の仲間達が止めるよ、何があってもな」

今回春樹は勝つためにチームを作った。元々は関係ないヒトまで巻き込んで、それで勝てない作戦のなら、まず出撃はさせない。春樹は何処かしらの勝算があって、この指示を出した。決して無理な事ではない。

（箒さえ、覚醒してくれば、この戦いは決着するんだ。箒……一夏と一緒にがんばれよ）

箒が目覚まして『銀の福音』の撃墜作戦に向かった情報は山田先生が連絡をくれたため、既に春樹の耳に入っている。

その連絡を聞いたときには、もう、この『銀の福音撃墜作戦』は成功に終わると確信していた。

その理由とは――？

急に物静かになったかと思うと、レイブリックは春樹に問う。

「ほう。それじゃあ、この取引は受けないと……？」

「ああ、当たり前だ」

すると、レイブリックは感情も何も感じない冷たい言葉でこう言った。

「なら、ここで死ね」

そう言った瞬間、春樹に向かってきたかと思うと、気がつけば目の前にいた。

その動きはまるで見えなかった。

『因子の力』を行使している春樹でさえ、この動きは見えなかった。気がつけば目の前に居たのだ。動く素振りも見せなければ、移動した形跡も無い。まるでテレポートしたかのように、いきなり春樹の目の前に現れたのだ。

「え……？」

春樹は呟くしかなかった。

（アイツ……今、何をした！？）

目の前のこの現状を把握し、動きに移ろうとしたときにはもう遅かった。容赦なく振りかざされる『ビームブレード』は春樹に直撃。普通ではありえない衝撃が春樹を襲う。

『熾天使』^{セラフィム}は砕け散り、動く事さえ困難な状態まで追い込まれた。装甲が薄い春樹のISのシールドエネルギーは勿論ゼロを示している。

これが普通の競技の試合ならこれで終わりだ。これ以上の攻撃は、操縦者に命を危険に晒すようなダメージを受ける事になる。

だが、これは公正なルールの下での試合ではない。命を懸けた戦いだ。つまり、負けは、イコール、死、なのだ。

このままでは死んでしまう。人間の生存本能が春樹を駆り立てた。シールドエネルギーがゼロであっても関係ない。生きている限り、篠ノ之束を守るのだと、自分で決めた目的がある。

だから、春樹は立ち上がる。束を守る為に。

「こんちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

春樹はレイブリックへと突っ込む。

そして、強い光に視界を奪われた。周りは何も見えなくなる。

そして――。

一夏と箒は必死に『銀の福音』を追いかける。

後ろから他の皆が追いかけてくるが、この三機のISのスピードには流石に追いつけなかった。新しいスラスター装備を手に入れたセシリアの『ブルー・ティアーズ』でさえもだ。

後ろの皆との距離はどんどん開き、やがては見えなくなっていく。それとは逆に『銀の福音』との距離はどんどん縮まっていき、二人の視界には『銀の福音』がだんだん大きく映っていく。

だが、旅館にだいたい近づいてきている。今すぐにでも『銀の福音』と戦闘を再開して、その動きを止めなくてはならないというのに、二人は限界ギリギリの速度で飛行している。

ISの計算によると、最大加速で得たこのスピードを維持したとして、『銀の福音』との予想接触時間は三分代後半、旅館に辿り着く予想時間は四分後。接触後の戦闘空域から考えて、そこから旅館までの距離は3kmもない。

これはあくまで予想なので、下手をすれば旅館を目の前にして戦わなくてはならないかもしれないし、追いつく前に旅館を攻撃されてしまうかもしれない。

だが、二人は諦めない。いや、後ろの皆も諦めたりなんかはしない。僅かでも希望があれば、その僅かな希望を信じてやれる事をやるだけだ。

徐々に『銀の福音』との距離が縮む。それと同時に旅館との距離も縮んでいく。

二人は黙り込む。この状況で話している余裕は無かった。それがどれだけ真剣な内容だとしても、会話なんてものしたら緊張の糸が切れてしまいそうで怖いのだ。

それほど二人は追い込まれている。何故なら、そこには何十人というIS学園の一年生の命がかかっているのだから。

しかし、この二人には会話などしなくても、以心伝心とでも言うべきか、目を合わせただけで何が言いたいのかが分かる。分かってくる。その目に偽りなんてものは無く、気持ちの一つだ。

皆を助ける。お互いそれだけを考えている。

旅館まで残り4 km。

目の前には200 m先に『銀の福音』がいる。

二人は限界ギリギリのスピードで飛行し続ける。最高速度では二人の機体の方が僅かに速いため、じりじりとその差を詰めていく。

福音まで残り100 m少し、旅館まで残り3.5 km。

予測通り、旅館までの距離は3 km程度で接触するはずだ。

二人はそのまま飛行する。

だが、『銀の福音』はいきなり進行経路を変更。急に左へと曲がりだす。

「「!?!」」

二人は予測していなかった動きに対応しきれなかった。まさか旅館まで残り3 km少しで進路を変更するとは……。

福音は左へ曲がるが、一夏と箒の二人はそのまま直進してしまう。二人は慌てて左へ旋回するが、大回りになってしまった為、福音との距離は再び開いてしまった。

二人の額には汗が流れる。これは焦りの汗だ。

一夏と箒は再び最高速度まで加速する。

(ヤバイ……ヤバイ……ヤバイ……ヤバイ……ヤバイ……)

一夏は心臓が嫌になるほどバクバクしており、額には汗が流れる。それは、箒も一夏と同じ状況であり、絶望で気持ちを支配される。

(このままじゃ……皆が死ぬ……)

一夏はそう思ったとき、ある事を考えついた。

「白式……いけるか? 行けるよなあ!?!」

一夏は急にそんなことを言い出した。

箒は急に何かを言い出した彼を見る。そこには不気味な笑みがあり、なにか良からぬ事をしでかすような顔をしていた。

「一夏……なに……を？」

箒がそう呟いたときには既に一夏は目の前から居なくなっていた。一夏が更なる加速をしたからだ。

しかし、この加速は既に限界を超えたものだ。機体がどうなるかも分からないぐらいの加速をしている。

（いけるよな？ 大丈夫だよな白式！！ お前も、皆を守りたいだろ！？）

一夏は『白式』と会話をする。ISには意識と似たようなものがあるらしいが、人間と会話できるようなものなのか、それは未だ不明だ。

『因子の力』を行使したときに、一夏と白式のシンクロ率は95%を超えている。それによりISとの会話が可能になっているのか。それはこの現象を身を持って体験している一夏にしか分からないが、彼は確かに『白式』と会話しているようだった。

一夏は加速し続ける。機体が軋み、嫌な音が『白式』から聞こえてくる。だが、それでも加速をやめない。物凄い勢いで『銀の福音』を追いかける。

（もう少し……もう少しだ……！！）

一夏は『雪片・式型』を握り締め、剣を構える。『銀の福音』は目と鼻の先。

「止まれよオオオおおおおお！！」

福音に対し、剣が振られた。それはクリーンヒットではなかったものの、動きを止めるには十分なものだった。

旅館はここから見てかすかに見える程度なのだが、それでも物凄く近いことには変わりない。ここがとても危険な場所だという事は明らかな事だった。

動きが止まった『銀の福音』。この隙を利用して一夏は福音の前に立ちはだかる。

「おい、お前の狙いが旅館の皆なら、ここでお前を止めなくちゃな……。さあ、もう一度だ、福音。旅館の皆に攻撃したいならこの俺を倒してから行け!!」

一夏は瞬間的に最高速度に達する事ができる『瞬間加速』イグニッション・ブーストで福音の目の前に立ち、『雪片・弐型』を振る。

『銀の福音』が動く事を許さない。攻撃の隙を与えないように、『雪片・弐型』と左腕に付けられた『ビームガン』で動きを制限して、戦う。

福音が射撃のモーションに入った瞬間に『瞬間加速』イグニッション・ブーストで接近して斬り、射撃を中止して避けざるを得ない状態まで持っていく。

出来るだけ一夏は『銀の福音』から離れようとはしない。福音は射撃に特化された機体なのだから、接近戦となれば不利だ。しかも、一対一のドッグファイトでは『銀の福音』の装備は、その全性能を引き出せない。

確かに、『銀の福音』は第二形態移行により、より強大な力を手に入れたが、このような戦況においては全力を出し切れないのが正直なところである。

こんなにも接近されては、自慢の射撃武器も、そのほとんどが使い物にならなくなってしまふ。かろうじて、接近されたときの為に装備されている刀身が短いビームブレードがある程度の『銀の福音』は、接近戦特化型である一夏の『白式』とは相性が悪いと言えるだろう。

これは筈の『紅椿』も言えることで、若干接近戦型寄りになっているものの、全距離を対応させた第四世代ISは戦闘距離という課題は全て帳消しになったと言えるよう。

「どうした、福音？ お前の力はこれだけなのか？ これほどまでに俺たちを苦しめたお前は、この程度なのかよ!？」

一夏は『因子の力』を使用し、身体能力、判断能力、視力、聴力、そして、ISの性能自体も格段にアップしていた。

この力の正体は一夏自身も分からない。だが、ISとの繋がりが

深くなっているのは強く感じている。ISからの言葉も聞こえてくる。何かを通じ合うのだ。

——織斑一夏……私は、ここにいるよ。だから、一緒に……。

「そうだ、一緒に皆を救うんだ!!」

一夏は『白式』からの言葉を受けて言葉を発した。

そして、もう一人。

「私も忘れてくれるなよ、一夏」

篠ノ之箒もそこにいた。一夏に追いついたのだ。

これで、『銀の福音』に勝てる「鍵」が揃った。織斑一夏の『白式』と篠ノ之箒の『紅椿』この二機が揃ったとき……、何かが起こるはずなのだ。

春樹は事前に箒には話しておいていた。箒の下に『紅椿』が届いて、その最初の訓練の時だ。

——箒、お前の『紅椿』はな、一夏の『白式』と揃った時に、はじめてその全能力が発揮されるんだ。だけど、それはまだやらせないけどな。

そんなことを言っていたのだ。やらせない、とは言っていたが、それはきつとやりたくてもやれない状態にしてあったのだろう。いや、やりたくてもまだできなかった可能性もある。

仮にできたのなら、最初に『銀の福音』と戦うことになった時に、それについて話が無いのはおかしいのだ。

ということから、後者の予測の方が正しい可能性がある。もちろん、それが正しいと断言するわけではない。あくまでその可能性があるだけだ。

「箒……お前は『紅椿』の声は聞こえるか？」
「なに？」

「聞こえないのなら聞いてやれよ、『紅椿』の声を……。さあ、箒！！」

一夏が福音と交戦しながら箒に対して叫ぶ。これは、『白式』と心が通っている彼からの心からの叫びだ。

『白式』の言葉を聞いた一夏は、その『白式』の心も理解することができた。だから、一刻も早く箒にも『紅椿』の心を理解して欲しかった。

箒は一夏の言葉を受け止めて、『紅椿』の声を聞こうとする。一体どうすればいいのかはわからない。だが、必ず『紅椿』の声を聞ける自信は何故があったのだ。

箒は目を閉じる。

だが、何にも感じられない。何かを感じようとするが、それでも駄目なのだ。

「駄目だ、一夏！ 何も……。感じられない……。！！」

一夏は福音に反撃のチャンスを作らせないように奮闘しているが、それももうそろそろ限界に近かった。たった一人の力では、『銀の福音』を撃墜するに至らない。

「箒！！ お前は何の為に戦う？ その力は何の為に？ その『紅椿』は箒にとってなんなんだ！？」

限界に近い一夏が振り絞った言葉は、箒に『紅椿』とは何なのか、という事を再確認させる問い。一夏が『白式』と心を通わせる事ができるようになったのも、『白式』が自分にとってどんな存在なのか、ということを理解したのがキッカだった。

ISは決して道具ではない。ただの兵器ではない。ISのコアは感情を持った生命体なのだと、一夏は理解したのだ。

そう、となりに「白式^{きみ}」がいてくれる。それだけで――。

（私の『紅椿』は……）

箒は自分にとって『紅椿』とは何なのか、改めて考え直していた。

最初にこの『紅椿』と出会ったのは、ラウラとの問題があったときだ。

力とはどうあるべきなのか、自分なりの考えをぶつける為に、箒は『紅椿』を受け取って、そして、一生懸命に練習して強くなった。この『紅椿』と共に。

その後、数日間この『紅椿』と共に訓練を続けた。更に強くなる為に。

そして、今日だ。

今度は皆を守る為にこの『紅椿』を身に着けている。

では、このことから『紅椿』とは何なのか……。

（『紅椿』……お前は、私の、大切に、最高のパートナーだ……！
！）

その瞬間、箒は『紅椿』のを感じた。

——どんな事があっても、絶対に、諦めたりしないから。君を守り続けるよ……篠ノ之箒。

『紅椿』の声が聞こえてくる。心が通い合ったのだ。

箒の視界は明瞭になり、頭の中はクリアになっていく。身体がものすごく軽く感じ、どんな動きでも出来そうな気がしてくる。

「『紅椿』……そうか、君なのか……。では、いくぞ、紅椿！」

箒と紅椿は共に『銀の福音』へと接近する。

一夏と箒がついに本当の意味で揃ったのだ。『銀の福音』では二人を止められないだろう。『因子の力』を行使し、覚醒状態に至った二人は強大な力となる。

一夏の白式と箒の紅椿は元々、二機揃ったときに、その全性能を開放させる仕様となっていた。

これは、箒が事前に春樹から聞いていたことである。だが、具体的にどのような状態になるのだろうか。それは……。

「これは……！？」

箒は網膜投影されたモニタを見て驚愕した。

ワンオフアビリティ
単一能力仕様が発動可能となっていたのだ。

けんらんぶどう
その名も『絢爛舞踏』

その能力の詳細は今の状態では分からない。だが、悪いことは絶対に起きないはずだ。何故なら、自分を守ってくれると言った紅椿が示す能力なのだから。

ワンオフアビリティ
「いくぞ、一夏。単一能力仕様を使う!!」

「ああ。やれ、箒!!」

「『絢爛舞踏』、発動!!」

その瞬間、箒の紅椿は装甲が展開して謎の粒子が発生した。

それに伴い、白式と紅椿のコアの運転が一気に臨界点を突破し、ISの何もかもを覆すほどの力を手に入れたのだ。スピードは通常時の白式の最高速度と加速力を遥かに凌駕し、パワーも今まで得た事も無いような領域にまで達している。

「なんなんだ……これは……」

この『絢爛舞踏』発動した本人でさえ、これほどまでの力は予想できなかった。

「紅椿……お前はいったい? とりあえず、これを利用してアイツをブッ倒すぞ!!」

一夏もこの異常な力に戸惑いながらも、目の前の問題を忘れる事は無かった。この力を利用して、『銀の福音』を倒す。今こそがチャンスなのだ。

一夏と箒は絶妙なコンビネーションで『銀の福音』を追い込んでいく。

『銀の福音』も反応仕切れない程のスピードで翻弄し、一定のリズムを作ることなく攻撃を繰り返す。

福音は何とかバランスを保とうと必死だった。それしかできないでいた。攻撃とか、回避とか、戦線離脱だとかをする余裕すら生まれない。

「もう少しだ、このままいくぞ箒!!」

二人は意気投合して、四方八方から斬撃やら砲撃やらを飛ばしている。

そして、白式の『雪片・式型』による強烈な斬撃は何よりも福音のバランスを崩していた。

[illegible]

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

だが、一夏の勢いは止まらない。力づくで刃を押し込み、この戦いを終わらせようとする。

刃はジリジリと福音へと近づいていく。

「届け！！
届けよオオオ！！
うわあああああああああ！！」

稼動エネルギー切れの警告が発されるが、そんなものは無視した。確かな勝利が目の前にある。それに向かって、自分の限界を超えようと立ち向かわなくては行けなかった。

「白式イイイ!! もっとだ、もっと!! もう少しなんだよオオオ!!」

稼動エネルギーはもう少しでその容量がゼロになろうとしている。

一夏の筋肉も限界だ。

だが、ここで力尽きるわけにはいかない。

「夏！」

ここで箒が助けに入った。

箒は『雪片・式型』を手に取り、一夏と共に福音へと押し込んでいく。

[illegible]

二人はありったけの声で叫ぶ。体中からアドレナリンが分泌され、それでもか、という程に力を込める。

だが、福音もここでやられるわけにはいかない、最後の力を振り絞って抵抗するが、刃は着実に福音に近づいていた。

「これで、最後だアアアああああああああああああああ！！！」

二人がそう叫んだ瞬間。ついに、刃が福音へと届いた。

最高出力の『零落白夜』が『銀の福音』へと届いた為に、ISの『絶対防御』という機能が発動。全シールドエネルギーを使い、パイロットの生命を守る。

それに伴い、全シールドエネルギーを失った『銀の福音』はその活動を停止させた。

白式の稼動エネルギーも底をついており、これ以上動かす事は不可能だった為、一夏は白式を解除して生身の状態へと戻った。

そして、最後の任務へと移る。

この『銀の福音』のパイロットである。ナスターシャ・ファイリスの保護である。

一夏は動きを停止させた『銀の福音』の緊急解除ボタンを押すと、そこからは金髪の美しい女性が現れた。

しかし、その女性は意識を失っており、旅館までは背負っていく

しかなかった。

ナスターシャを背負おうとしたそのとき、他の仲間が現れたのだ。セシリア・オルコットに、鳳鈴音。シャルル・デュノアに、ラウラ・ボーデヴィツヒ。そして、織斑千冬が。

「一夏、全て、終わったようだな」

「ああ、千冬姉。終わったよ、何もかもな……」

すると、他の皆が一夏と箒の事を見てくる。そして……四人は一斉にこう言った。

「「「おかえりなさい」」」

その言葉は、旅館で待つことしかできなかった四人が、一夏と箒に言おうとしていた言葉。無事に帰ってくることを願って、帰ってきたら言おうとしていた言葉だ。

そんな皆に対して、一夏と箒も言葉を返した。

「「ありがとう、皆！」」

そして、千冬がナスターシャを抱え、静かに旅館へとこの七名は帰っていった。皆に、安全な事を知らせる為に。

6 (後書き)

とりあえず、『絢爛舞踏』の仕様を変更しました。
内容については、書いてあるとおりです。この粒子が、一夏の白式。
箒の紅椿を強化させたのです。

では、次の「7」の投稿までお待ちください。

7 (前書き)

今回は物凄く短め。
では、どうぞ。

作戦に出た七名の操縦者はブリーフィングを行った部屋へと戻って、現在は皆、休養を取っている。

ナスターシャ・ファイルスは、布団に寝かせており、一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルル、ラウラ、千冬の七人は疲れきっている為か、全員が横になっている。

特に、一夏と箒は異常なまでの疲労で、恐らくあの粒子による急激な力の上昇も関係しているのだろう。ISだけでなく、その操縦者もボロボロであった。

「皆さん、お疲れ様です。後の事はこちらに任せて、ゆっくり休んでください」

山田先生は、疲れも吹く飛ぶような笑顔で言ってくる。それが、なによりの癒しだった。

「織斑先生もお疲れ様です」

「ああ、山田先生。無事に、皆をここに帰らせたぞ」

「はい。本当にお疲れ様でした。後は……」

「ああ、春樹から連絡が来るのを待つだけだな……」

春樹は未だ逃走中なのだろうか。しかし、あれから随分な時間が経過している。束の組織の施設へと逃げるだけなら十分な時間だ。

しかし、一向に連絡が来る様子が無い。と、いうことは……。

「織斑先生。考えたくないと思いますが……」

「ああ、おそらく例の謎の男と接触してしまったんだろう」

それを聞いた一夏は、身体を勢い良く起こして千冬と向かい合った。

「ちふ……織斑先生。春樹は……そいつと戦って、勝てると思いますか？」

「わからん。だが、嫌な予感がしているのは、私だけじゃあるまい？」

そう、嫌な予感がするのは千冬だけじゃなかった。ここにいる皆が嫌な予感がしていた。それを言葉にしなかった。いや、気のせいなのだと思うっていたのだが、それは千冬の言葉で認めざるを得なくなってしまうた。

「大丈夫だ。大丈夫だよ。春樹は……俺なんかよりもずっと強いんだから……。な、そうだろ、箒……？」

しかし、箒はその問いに答えようとしない。大丈夫だと、そう答えたいのだが、その言葉が口から出てくれない。見えない何かが悪魔をしているようだった。

「……………そうだよな。連絡が一切無いってのは……つまりそういうことだよな。俺たちが福音を倒しに行った時からもう三時間以上が経過してる……」

つまり、これだけ時間があつて連絡がないと言うことは……春樹と束の身に何かがあったということだ。

すると、セシリアもこの会話の中に参加してくる。

「春樹さんが……春樹さんが死ぬなんてこと、ありませんわ。そうでしょう、一夏さん？」

「……………そうだな。今は、春樹なら大丈夫だ。アイツのことを信じて連絡を待つしかない」

その言葉ですら、上辺だけの言葉だ。本当は、春樹と束は死んだかもしれない、と思ってしまうているのだが、それを見ようとしな

い。

「セシリア、一夏、いい加減にしろッ!!」

と、一喝を入れたのはラウラであった。

「現実から目を背けるな。春樹なら大丈夫だと? そう信じたいのはわかる。だが、だが、私たちにできることは何だ? 私たちができる最良の事はなんだ!？」

現在、一夏のISは完全に動かす事ができない状態だ。だが、そ

のほかの I S は動かす事ができるし、一夏も量産型の I S 位は乗れるはずだ。

「連絡が来るのを待つだけだ？ 私たちはまだ動ける。そうだろう！？」

シャルルが今にも飛びかかろうとするラウラを必死に止める。

すると、一夏が目の色を変えて、

「現実から目を背けてるのはお前の方だぞ、ラウラ。私たちはまだ動ける？ ふざけんな！！ 俺たちは春樹たちが何処へ向かったのかも分からないんだぞ。しかも、俺たちの身体はボロボロだ。そんな状況で春樹の搜索に出てみる、束さんを狙っているヤツに出くわして、無事でいられると思ってんのか？ 春樹が、何で一人で束さんを送ったのか、わかってんのかよ！？」

「いい加減にしろ貴様ら！！」

ここでもようやく、千冬の怒号が飛んだ。

「そんな大声で議論するなら表へ出ろ。ここにはナスターシャだって寝ているんだ。お前らも疲れ切っているんだから静かに寝ている、この馬鹿どもが」

そう言った千冬こそ、今でも外に飛び出して春樹を探しに行きたかったのだ。春樹は血は違えど、小さい頃から一緒に過ごしてきた大切な弟であり、家族だ。それが危険な状態かもしれないと分かって、何もできないのが悔しいのだ。

「ねえ、一夏」

そう話しかけてきたのはシャルルだ。

「春樹と束さんについては、もういいよ。僕たちにできることはないんだ。今は一夏の身体の方が心配だよ、僕は」

すると、鈴音も箒に向かって、

「そうよ。箒だってあの状態でまた福音と戦ったんだから、安静にきなさいよね。まったく」

そう言われてしまった箒は、

「そうだな。一夏、私たちも少し寝ようじゃないか」

「あ、ああ、そうだな。それと、ありがとうシャルル。心配してくれて……」

と、急に感謝されてしまったシャルルは、少し恥かしがりながら、「う、うん……。一夏には、元気でいて欲しいから……。ハハハ……。最後に少し笑って照れを隠していたが、照れているのがバレバレだった。そのごまかしは少々無理があったと言えよう。」

「じゃあ、俺たちは休んでくるよ」

一夏がそう言って、別の部屋へと移動しようと思ったそのときだった。この部屋の出入り口となる襖が開かれたのだ。

そこに立っていたのは、篠ノ之束。

彼女の服は少々ボロボロで、顔等にはちよつとした傷もあり、出血している箇所もあった。

「みんな……。みんな……」

束はとても苦しそうな顔で何かを言おうとしたときに、バランスを崩して倒れそうになったところを、箒が支える。

「姉さん……。いったい、どうしたのですか？」

束はかすんだ声でこう言った。

「春樹が……。いなくなっちゃった……。……」

終章『最初の終わりと新たなる始まり』 — prologue —

『銀の福音』撃墜成功、葵春樹が行方不明になってから一夜明け今日は、臨海学校の研修も終わり、IS学園へと戻る日だ。

本来なら、楽しかったね、終わっちゃったね、などと笑顔で帰っていく場面なのだが、そのような明るさは一切無かった。

一応、この臨海学校に来ていた一年生の生徒全員に、葵春樹が行方不明になった事は伝わっている。だが、詳細な情報は生徒には与えていない。

ただ、行方不明になった、としか伝えていないのだ。真実を知っているのは、このIS学園の一部の教師と六名の生徒のみ。

織斑一夏。篠ノ之箒。セシリア・オルコット。鳳鈴音。シャルル・デュノア。ラウラ・ボーデヴィツヒだけだ。

この六名には、葵春樹に関する情報は一切外に漏らしてはいけないと言われている。

そして現在、一夏達は帰りのバスを待って、旅館で待機しているところだ。

そこに篠ノ之束が現れ、一夏と箒は人がいない場所へと移動する。「一夏、箒ちゃん。私の組織施設の場所のデータを送るよ。これは絶対に他人には見られてはいけないからね。流出させても駄目。これから夏休みに入るけど、そのときに」

束は決心を決めたように、一夏と箒の事を見つめて、そして、座標データを送信する。

一夏の『白式』^{びやくしき}と箒の『紅椿』^{あかつばき}に束の組織施設のデータが送られてくる。

それを確認し、一夏は束にこう言った。

「束さん。春樹のことは……」

「大丈夫、きっと生きてるよ、春ちゃん。確証は無いけど、なんとなくそう思うんだ」

「俺は、裏の組織に手を出すことになるんですよね？」

「そうだよ」

「そうすれば、春樹にも会えるかもしれないですよ？」

「そうかもしれない。何もかも仮定の話でしかないけど、生きている可能性はあるからね」

束の話を聞くと、春樹とレイブリックなる男が戦い、激しい光に視界が支配されたと思うと、気を失っていたそうだ。

そして、気がつけば、二人が戦っていた場所には誰もいなかった。そのときには逃げてきてから既に三時間ほど過ぎており、それから全身が痛むのを我慢して旅館へと歩いて帰ってきたという話だ。

春樹の姿もなく、レイブリックの姿も無く、そして自分が無事である。という事から、おそらく春樹が何かをしているかもしれないという仮説ができた。

「だから、きつと生きていると思うんだ」

ここにいる三人は、決意した。絶対に、春樹のことを見つけ出して、また一緒に過ごすことを。

「ごめんね、引き止めちゃって。じゃあ、私も帰るよ。ちーちゃんに送ってもらうから安心してね」

そう言って、束は千冬ともに何処かへと行ってしまった。

ここに残された一夏と箒はお互いに見つめあう。

そして、何かを思い出したかのように箒は、

「一夏……私……、言いたいことがあるって言ったろう。聞いてくれるか？」

「あ、俺も箒に用があったんだよ」

「え……？」

「どうする？ 俺の話を先に聞くか？ それともお前から話すか？」

「えっとだな……その……お、お前から話せ！」

「わかった」

一夏はそう言うと、かばんの中からプレゼント包装されたものを取出し、箒に手渡す。

「誕生日、おめでとう。……こんなときに言うのもなんだがな、アハハ……」

箒はそのプレゼントを開けてもいいのか、と聞く。いいよ、と帰ってきたので、その包みを開けるとそこから出てきたのは赤いリボン。

「ほら、早速使ってみろよ。いつもみたいにポニーテールにしてさ……」

箒は黙りながら、長くストレートになっている髪を、赤いリボンでポニーテールにする。

「どう……だろうか……?」

「うん、似合ってるぞ、箒。やっぱ赤が似合うよな」

一夏は笑顔で返してあげる。いつまでも暗い雰囲気にいるわけにはいかない。まだこれからやらなくてはいけない事が沢山あるのだ。気持ちを入れ替えて次に進む。それが、この二人に課せられた責務だ。

「そうか、似合っているのか、ふふ……」

箒も嬉しそうな顔をする。つい笑い声も出てしまう。

「で、次は箒の番だな。話って……なんだ?」

「あ……それはだな……えっと、つまりその……あ……その………
…お前の事が……」

「一夏! 箒! バスが来たわよ!」

そのとき、鈴音が来てしまった。タイミングが非常に悪かった。彼女は箒の事を応援しているというのに、まさかの邪魔をしてしまったのだ。

「あ………。ご、ごめんね箒いいいい!!」

そう言って、走ってその場を立ち去る。

「あはは……じゃあ、もう一回だ。箒、なんだって?」

「え、あ……いや、もういい……」

「なんでだよ?」

「もういいんだ、本当に」

恥かしさを振り絞って、勢いに任せて言おうとしたのだが、その勢いも無くなってしまった。もう、言える気がしなくなってしまったのだ。

だが、一夏は言う。

「嘘だ!! そっちが言わないなら、男らしく俺から言ってやる!!」

「え……?」

時間が止まったかのように感じる。一夏が言ったその言葉、それは、つまり……。

一夏は箒の肩を取り、真剣な眼差しで言った。

「箒……。俺は、福音と戦っていたとき、お前がいればと思っていたんだ。俺があんな失態を起こしてしまったというのに、図々しいやつだよな。でも、お前は俺たちの前に現れてくれた。本当に嬉しかったんだ。俺の願いが叶ったと思ったよ。そのとき、俺は思ったんだ……」

「え? えっと……へえ!?!」

箒が戸惑っている中、一夏は意を決して宣言した。

「俺は、お前の事が好きなんだ、って……そう思ったんだ。箒……俺はお前の事が好きだ」

一夏はついに箒に告白した。

さらっと言ったように見えるが、これでも一夏の心臓はバクバク高鳴り、恥かしさで目を背けたくなかったのだが、それでも箒の目を見つめる。

「箒……お前はどうかんだ?」

「……………え!?!」

突然の一夏からの告白で放心状態になっていた箒はその言葉で我に返る。

「わ、わ、わ、私は……その……私も……す、す、好きだぞ。一夏の事が好きだ!」

お互いに気持ちを伝える。人を好きになる。それはとても素敵な

事なのだ。

「そうか……よかったあ……。……………箒」

他のみんなはロビーに集まっており、少し離れているこちら周辺には人がいない。つまり、ここでやることは……。

一夏はゆっくりと箒に顔を近づける。キスをしようとしているのだ。

箒は焦っていてそのことに気付くまで少し時間をかけてしまったが、こうなればもう後には引けない。目を閉じて一夏の事を待つ。

段々と、二人の唇は近づき、やがて……………。

今は帰りのバスの中だ。

一夏と箒は隣り合って座っている。

箒の髪には、赤いリボンがあり、それが目立っていた。

箒はぐっすりと寝てしまっているが、一夏はただ外を見ていた。

（春樹……お前は、何処に行っちゃったんだよ……）

そのとき、空に何かが物凄いスピードで飛んでいた。白い翼が一瞬見えたが、すぐに見えなくなってしまった。

（今のは!?!）

一夏はすぐに窓を開けて、外を確かめる。だが、やはりその白い翼は見えなくなっており、確認する事はできなかった。

（今のが、春樹だとしたら……）

春樹が生きている。だから、いつか会えるかもしれない。

希望を持った一夏は次のステージへと進んでいく。次のステージのために、強くなるのだと、誓って……。

一夏の物語は、まだ始まったばかりなのだから。

『第一部 完』

終章『最初の終わりと新たな始まり — prologue —』（後書き）

終わったアアアアアアアアああああああああああ！！
ついに、第一部が終了しました。

まず、この物語のテーマは……

「恋愛」「責務」「入り口」「W主人公」
でした。

「恋愛」については、良く分かったと思います。

次に「責務」ですが、これは一夏が船を守るところと、福音を倒すところ、それを選ばなくてはいけなくなったときに、どうすれば良いのか。

などと、今、自分のするべきことはなんなのか、ということでしたね。

そして、「入り口」

これは、一夏が新たな入り口に入ったことですね。

裏の組織に手を出す事になり、新たなステージへの入り口に立つ。それですね。

最後に「W主人公」

この二次創作の最初からのテーマであったW主人公。

一夏と春樹の二人がお互いにやらなくてはいけなかったがあり、そして、お互いに違う物語へと進んで行き、その物語の主人公になった。

という事を示しています。

まあ、詳しい事は。

次の「全編を通してのあとがき」で語りますので、どうかそちらも読んでください。
なんか、この後書きがすごいテキトウなものになってしまい、すみません。
では。

全編を通しての後書き

みなさま、どうもこんにちは、こんばんは、おはようございます。
この『IS <インフィニット・ストラトス>を改変して別の物語
を作ってみた。』の作者の渉です。

この度、この二次創作を読んで下さってありがとうございました。
これにて、第一部は終了となります。

春樹について最後はほとんど語られず、「なんだよ、しっかり書け
よ!!」と思っている下さっている方はご安心ください。

それについては『第二部』でしっかりと書かせてもらいます。

では、自分で感想を書かせてもらいますか。

この『第一部』を終了した時点で……

全114部

文字数…258,529文字

感想…11件

レビュー数…0

総合評価…258pt

文章評価…平均…5pt 合計…37pt

ストーリー評価…平均…5pt 合計…37pt

お気に入り登録数…92

と、駄文で無名な私にしたら、とてもいい結果じゃないでしょうか？
それなり（笑）に人気ということでしょうw

この二次創作を始めた切っ掛けは……

「ISかぁ、面白そうだなあ。よし、アニメ見てみるか」（主題歌

『episode 1』

先ほども書かせてもらった通り、最初は目的が曖昧な気軽に作ったものでした。

ですから、鈴音が登場してから雰囲気ガラリと変わったと思います。

この辺は、後々に書き直そうかな、と思っていますので「たぶん」書き直します。

原作では残念なヒロインとなってる「鳳鈴音」ですが、この二次創作ではそれなりに活躍していると思います。

確かに、『episode 2』では怪我により一時退場していますが、序章にてお見舞いのシーンを書いたので、一夏たちとは仲がよい事を書けたかな？ と思います。

おっと、これでは『episode 2』のお話になってしまいましたね。お話を元に戻しましょう。

原作と同じ流れで、黒い謎のISと戦う事になった一夏と鈴音ですが、鈴音さんには犠牲になってもらいました。

一夏さんには友達が傷つくところを見せておく必要があったので。

頑張ろうとする一夏さんだけど、まだ強くなかったので負けそうになってしまいます。

そこで、登場したのは春樹君ですね。あえて春樹君には「オリ主TUEEEEEEEEE」をやってもらいました。

これも伏線……ということになるんでしょうかねw

そして、春樹君は突然東さんの組織へと向かわせて、路線を定めました。

これで、作ったレールにはしっかり乗せた……と思われそうですが、どうでしょうねw

問題点とすれば、セシリアが弱すぎた事。春樹が強いように見えな
いところは直さなければならぬと思いました。

『episode 2』

お見舞いのシーンから始まるこの『episode 2』はシャルとラウラが登場するお話です。

原作とほぼ同じ展開ですが、大きな変更点といえば、「ラウラ vs 箒」をやらせた事ででしょうか？

あえて言わせて貰えば、原作ではラウラと箒の違いをあれだけ見せておいて何故二人を戦わせなかったしw

と思ったのがこの展開にした切っ掛けでした。

同じ意見を持った人が、とある掲示板にいました。まったくもって禿同ですねw

それに伴って、『紅椿』にもフライングして登場させてもらいました。

『episode 1』を書き始めた当初は『紅椿』は箒に誕生日プレゼント、ということであげるつもりでした。

ですが、こういう展開にしたために箒には早く『紅椿』に乗っていただく事になりました。

箒が考える「力の使い方」とラウラの「力の使い方」の考えがぶつかり合うこのエピソード。

ラウラとフラグを立てたのは春樹さんでしたが、これは、まあ話の流れ上仕方が無いと言っちゃあ仕方が無い。

この二次創作を書き始めたときの春樹のカップリングはラウラだったんだもんw

その流れで書いてしまったw

初期プロットではラウラは春樹にキスしてたもんw これは今後の展開に響くのでやめました。

そしてあいかわらず、俺の二次創作はシャルルが空気になるw 絶対に色んな人を敵に回していると思うんだw

『episode 3』

私が挑戦した初めての完全オリジナルエピソードでした。

前半は原作ではあまり語られていなかったところをリスペクトして

良すぎだろw って思われてしまうからです。

（原作の第二形態移行後の『白式』のデザインが好きではない、というのも理由。もっと色々考えて全く違う『白式』にする予定です）『紅椿』の単一能力仕様『絢爛舞踏』も仕様変更。

まあ、燃費が悪い設定をなくしたから、こっちも仕様変更しないからね。

それから、ISの意思が出てきたところですが、白式と紅椿の言葉は……なにも言わなくてもわかるでしょうw（ヒント…主題歌）原作でも、ISには意識に似たようなものがあると言っていたので、意思を持たせることにしました。

この声は『因子の力』を持った人間しか聞くことができません。

さあ、ではこの『因子の力』とは何なのか。フロム脳を持った人などはイメージできるかな、と思いますw

真面目な話、『因子の力』は見て分かるとおり、この物語でもっとも重要なファクターになります。

『第一部』では伏線を回収しないままにいるものがいくつかありますね。『因子の力』もその一つです。

それから、何故一夏や箒、春樹。そしてレイブリックがこの『因子の力』を持っているのかも謎だと思います。

ですが、こちらの手元にはその因子が何なのかという設定が存在していますのでご安心を。

しつかり、この話については決着を着けますので。

まあ、これはガンダムで言う『ニュータイプ』や『SEED』みたいなものだと思っていただいて結構です。

最後に、一夏と箒をくつつけました。もう恋愛について書くのは辛いのでここで決着。

というより、ここで二人がくつつく他に無かったと思います。

これから、一夏と箒は命がけの任務に赴く事になるのですから、お互いに気持ちを一緒におかないと不安でしかありません。

第二部ではこの二人をラブラブあまあまな状態にはしないので、期

待していた方はごめんなさい。

そもそも、私の二次創作でそういうものは期待しない方がいいと思います。

さて、こんな感じでしょうか。

駄文ですみませんが、以上、各エピソードについての後書きでした。

最後に、感謝の言葉を綴らせていただきます。

この二次創作を最後まで読んでいただきありがとうございました。

この物語はまだ完結してはいません。この物語は『第二部』へと続きます。

この『第二部』はISのアニメの第二期の製作が発表されたときに投稿していかうと考えております。

もし仮に第二期の製作が発表されなくても、少なくとも来年には第二部を開始したいと思います。

そのときまで、この二次創作を忘れないでいただきたいです。

あまり面白くなかったかもしれませんが、ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

『第二部』で会いましょう。
では。

Episode 4 After 1 『一夏とシャルロットと……』 (前書き)

今回は、エピソード4のその後のお話です。

臨海学校の事件を無事解決して帰ってきた一夏はとある問題を考えることになります。

では、どうぞ。

Episode 4 After 1『一夏とシャルロットと……』

一夏たちは臨海学校の研修から無事にIS学園へと戻ってきた。ただ、葵春樹だけは無事にIS学園には戻ってこれなかったのが……、それでも一夏たちは無事に帰ってくることが出来た。

それは、誇っていいものだと思う。何故なら、あれだけの事件を解決させてそれでもって無事に帰ってきたのだから。

一夏は寮の方に帰ってくるなり、また新たな問題に直面していた。そう、シャルル・デュノアの事である。

シャルルは女だということを隠して、男としてこのIS学園で過ごしている。これは彼女の父親の会社であるデュノア社に関連することで、男性としてIS学園に行き、そしてISを動かすことのできる一夏と春樹に近づき、彼らのISについて調べてこい、という命令を受けている。

もちろん、そういう状況から女性であることはバレてはいけないのだが、一夏には偶然にもバレてしまったのである。

それからというもの、そのことは一夏とシャルルの二人の間だけの秘密となっている。

だが、いささか年頃の男と女が同室で寝泊まりするのも、あまりよろしいことではない。

現に一夏は箒に告白し、見事結ばれている。

このことがバレたら箒はどう思うのだろうか……、様々なパターンが考えられるが、良い展開にならないのは確かである。

だから一夏はこうして悩んでいる。このことをシャルルに相談するか否かで……。

一夏が難しい顔をして部屋で悩んでいると、ふと声をかけられる。それこそ悩みの元であるシャルルのものだった。

「どうしたの一夏？ そんなに難しい顔して……」

彼女は心配そうな顔で一夏の顔を覗き込む。

やはりあれだけの事があったのだ。疲れているし、何処か体の調子が悪いのかもしれない。彼女が心配してしまうのはしょうがないことだった。

しかし、一夏の体はピンピンしており、そのことについては心配はいらなかった。ただ、シャルルの事についてだけがこんな表情をしてしまう原因だった。

するとシャルルが更に声をかけてくる。

「一夏、もし……、何か悩んでいることがあったら相談してね？
いつも一夏にはお世話になってるから、僕も一夏の為に何かしたいんだ」

それが彼女の優しさだ。すぐに何かに気づき、それにすかさず対応してくれる。どこもない事で気を使ってくれるのは彼女らしくかった。

「ああ………、シャルル、いや、シャルロット。相談が、あるんだ……」

一夏は言葉を吐いている間も本当に相談するのか迷っていたが、最終的には彼女に相談を頼むことにした。

「うん……。何、かな？」

彼女は少し戸惑ってしまった。一夏が何やら難しい顔をしているのは、春樹の事が関係しているのではないか、と思っていたのだが、シャルルのことをシャルロットとわざわざ言い直したのだ。そこから予測する事は……自分の本当の性別についてのことだと思ってしまうだろう。

それを悟ったシャルルは顔を引き締めた。

「あの……さ、シャルロット。俺さ、箒と、付き合うことになったんだけど……」

彼から放たれた言葉は、彼女の予想していたものとはほぼ同じだった。帰りのバスの雰囲気からして、箒と一夏との間に何かがあったのではないか、と思っていたのだ。

心のどこかではこの二人は付き合うことになったのではないのか、

と思いながらも、表面上はそれを認めようとしなかった。そこから導き出される彼女の気持ちとは……？

一夏の突然の話に動揺を隠せない彼女。だが、決して泣くことはなかった。

「シャルロットのこと……箒たちにちゃんと説明しないといけないなと思ったんだ。だけど、このことはお前と俺の二人の間だけの秘密だし……。だからそのことについて相談したいんだ」

それが彼の正直な気持ちだった。

「……………そっか。篠ノ之さんと一夏がね……、おめでとう、一夏」
彼女は若干声を震わせながら言った。自分の動揺を隠しきれなかったのだ。

それに一夏は気づいた。シャルロットの様子がおかしい。この瞬間、一夏はシャルルの気持ちをなんとなくだが悟った。つまり、そういうことだと……。

「無理するなよシャルロット。お前の気持ち、なんとなくわかった。そういうことだろ……？」

彼女は無言で頷いた。つまり、彼女は一夏の事が好きだったのだ。少しでも自分の事を考えてくれて、楽にしてくれた彼の事を。

それから自分が一夏の事が好きになったんだ、ということに気づくまではそう時間はかからなかった。

一夏には箒という存在があることに気づきながらも、彼女は一夏を好きで居続けた。もしかしたら、その二人はそう時間が経たずして結ばれるのではないのか、と思いながらも。

「シャルロット……。俺の事を好きになってくれたその気持ちは本当に嬉しいよ。……でもな。俺は箒を好きになっちまったんだよ。これが俺の選択なんだ。わかってくれ……」

一夏も苦しそうに言った。

彼女の気持ちには今まで気づいていないわけではなかった。薄々には気が付いていたのだ。

だが、見て見ぬふりをしていた……いや、もっと自分が気になる

人がいただけなのかもしれない。だから、シャルロットの事を気にかけてあげなかったのだ。

それほどまで、一夏にとって箒は大きな存在だった。

「うん、わかったよ一夏。でも、僕もうダメみたい……アハハ……」
シャルロットは辛そうに声を震わせ、かすれた声で笑う。

そして、彼女は声を震わせながらも言葉を続けた。

「ねえ一夏……。最後に、甘えてもいいかな……？ ゴメンね、一夏は篠ノ之さんの事が好きなのに、僕って汚い女だよ……」

彼女は声を殺しながら泣き出してしまった。こうなったら一夏も放っておくわけにはいかない。何があったって彼女は一夏の大切な友達であり、先日の事件で共に戦った戦友でもある。

だから、一夏もシャルロットの事を受け止めてあげることにした。つくづく自分が甘い人間だということを自覚して。

「いいよ、シャルロット。思いつきり泣いたって……」

優しい口調で発したその言葉は、シャルロットが我慢していた感情を爆発させた。気が付けば一夏の胸元に飛び込み、声を出して泣いていた。

一夏も、シャルロットのことを今だけは温かく包み込んであげた。しばらくして……、彼女は一夏の胸元から離れた。

「落ち着いたか？」

一夏が聞くと、彼女は落ち着いた顔で返す。

「うん。……ありがとう一夏、いきなり抱きついちゃったりしてゴメンね……」

「いいや、大丈夫だよ。で……どうするか……」

ひとまず落ち着いたのはいいのだが、根本的な問題は解決していない。一夏とシャルロットの関係。それを仲間に打ち明けるかどうか。

シャルルも家の事があるので、そう安直に私は実は女だったんです、などと言えるはずがなかった。

本来ならば、一夏がシャルルの正体が実は女性でシャルロットと

いう名前、一夏や春樹のＩＳについて探ろうとしていたことがバレル時点で、そのことが明るみに出て実家に引き戻された後に酷い仕打ちに合うのは覚悟していたことだった。

しかし、一夏が黙っていてくれたおかげで今は無事にＩＳ学園に通い続けることができている。

だが、それを他の人に打ち明けることは些か気が引けてしまう。

だけど、彼女たちなら……、と何処かで思っているのも事実だった。

「一夏……、ひとつ聞きたいんだけど、いいかな？」

「なんだ？」

「篠ノ之さんや、セシリア、鈴にラウラ。みんな信用できる人たちだと思う？」

シャルロットが何をしようとしているのか、一夏はすぐに分かった。きっと、仲間たちに自分の秘密を打ち明かそうかと思っているのだ。

「お前……。ああ、アイツらは俺と一緒に戦ってくれた大切な仲間なんだ。信用してあげなくてどうするんだよ」

一夏は自分の仲間の事を信じていた。自分の知っているアイツらはどんなことでも受けとめてくれるし、秘密は守ってくれる奴らだと。

シャルロットも皆のことは信じたいが、もしこのことで自分が本当は女だということを広まってしまうたら、本当に困ったことになる。いや、困ったどころではなくなる。

それが怖くて打ち上げのことを戸惑っている。

「うん……それはそうなんだけど。でも、怖いんだ。皆を信じていないわけではないけど、だけど皆を信じ切れていないと言うか、その情報が何処かで漏れたりしないのかとか。あんまりこういうことは拡散すべき情報じゃないから……」

シャルロットの言うことはもっともであった為に一夏は何も言えなかった。

こういう情報は無駄に拡散すべきものではないことは分かっている。

る。だが、箒たちにそのことを打ち明けるのは果たして無駄なのだろうか。

仮にも命をかけて共に戦った仲間たちなのだ。あまり隠し事はしたくないのも事実。しかし、あまりこういった情報を多くの人に流すべきではないことも事実。

どっちが正解で、どちらが不正解なのか……。それはとても難しい問題であった。

正直な話、どちらが正解とも言えないのだ。

固く考えれば、このことは彼女の家の事情から隠しておいた方が良いに決まっている。

だが、感情論を考えてしまうと、共に戦った一番の仲間たちに隠し事ということも気持ちが良いものではないし、一夏と箒の関係の事もある。

今この状況が、この二人の人間関係を壊しかねない要因でもあるのだ。

だからこそ、彼女は悩んでいる。自分が好きになった男性が、確かな幸せを掴もうとしているというのに、自分が原因でその関係を壊してしまうのではないのかと思うからだ。

確かに、好きになった男性が自分の友達にとられてしまったことは確かに悔しいことである。

だが、そのこともその男性が選んだ道だ。自分がどうこう言うことではないと、彼女はしっかりと理解しているのだ。

一夏も大切な仲間の一人である。だからこそ、この関係をどうにかしなくてはいけなかった。

だから、彼女は行動を取る。

「一夏……私、皆に話してみようかな……。本当の事……。僕、皆の事を信じようと思うんだ」

彼女は決心した。自分の事を、真実を仲間に打ち明けることを。

一夏も、彼女が決めたことを尊重して行動を取った。

「ああ。わかった。じゃあ、皆をこの部屋に呼ぶか……」

「う、うん。わかった」

一夏はメールを打ち、箒、鈴音、セシリア、ラウラの四人に送信した。

シャルロットはしっかりとどう言おうかと考える。変な誤解を与えないように気を付けながら話すために、言葉を選びながら。

これからの事はあまり語らないでおうと思う。

何故なら、結果はわかりきった事だろうから……。

最高の仲間が、友達を裏切るはずなんて無いのだから――。

「ありがとう。みんな……！」

そのときのシャルロット・デュノアは笑顔だった。

Episode 4 After 1『一夏とシャルロットと……』 **(後書き)**

以上、一夏とシャルルのお話でした。

本編で足りなかったシャルル分を補えたかなあ……これで……。

特に言うことは無いかなw

ぶっちゃけて言えば、頭の中のプロットだけで書きましたからねw
どこかしらおかしいところがあるかもしれませんが。

その時は、何か言ってもらえば嬉しいと思います。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9584q/>

IS <インフィニット・ストラトス>を改変して別の物語を作ってみた。【第一

2011年11月16日02時57分発行